
One For Four Traveler

春秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

iJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

One For Four Traveler

【Zコード】

N4327D

【作者名】

春秋

【あらすじ】

意気揚々と冒険の旅へと出発した5人のひよっこ冒険者たち。口も悪いが態度も悪いシーフのジン。赤髪がトレードマーク、メイジのリベルが使える魔法は未だ無し。フードで顔を隠し口数も少ないレミ。なんとも頼りのないファイター志望の少年クラッセ。決して格好よくもない、つい先日まで”普通の人”だったディールは、個性的でくせのある仲間たちと出会い、共に成長していく先に、やがて大きな岐路に立つ。はじめは簡単な依頼のはずだった

1・新米なる冒険者たち

「どわーっ、やめっやめー！」

「ちよつ、なによこれー？！」

俺は正眼にソードを構えた。

心臓はどくんどくんと高らかに鳴り響き、せわしなく全身の血液を隅々まで行つたり来たりさせている。

ソードの柄を握る両手だつて震えているのがわかる。

田の前の2人は、普段なら笑つてしまつほどに慌てふためき、ともかくその”触手”から逃れようと右往左往している。

”触手”はそれぞれが自由意志を持つているかのように2人を追い回していた。

とは言え、誰がどう見ても、本当に恐ろしいのは”触手”ではなく、その本体。つまり、”触手”の生えている先を田で追つていけば、すぐにたどり着くことができるであろう、その田体だ。

こんなとんでもないモンスターを俺はまだ見たことがない。

まだ見たことがないと言つても駆け出しあいといとい、つい先田に晴れて冒険者になつたばかりなのだから当然だ。

だが、そんな”ペーペー”としてもわかる。これは俺達の手に余る相手なのだと。

そうだな。

例えるのならば、そこに3階立ての塔があるとするだらう? 細くて長いやつだ。

さすがに雲に届くなんてことはないが、階段を勢いよく上がつていったのなら、しばらくは肩で息をつかざるを得ないくらいこの高さだ。

できることなら、そんな疲れる階段はゆつくつと登つていいくに限る。

そんな階段を全速力で駆け上がつていって、最上階まで一息で登

りきつたところで、ふと窓から地上を見下ろすとしたところに、

”やつ”の丸くて大きい目があつたらどうだ？

2つの田玉がぎょろりと見つめているのだ。ぞつとしない話だ。

残念なことに、そのぞつとしないやつが俺たちの目の前で、体から無数に伸ばした触手を存分に振るつてたりする。まるで食後の運動でもしているかのように。

震える両腕をなんとか鎮めようと、ソードを構えたままに首を動かして辺りを見る。

すると、フードをかぶった少女と目が合ひ、しかしは何を考えているのか、微動だにせず俺を見つめ返す。

無言で佇んでいる。

そのローブは上から下まで真っ黒で、一見すると魔法使いかなにかだと思つてしまふのだが、実はそうではない。その証拠に、暴れ回る脅威の前にただじっと傍観を決め込んでいるのみだ。

彼女はこういった類のものには、なんらの対抗手段も持ちえていない。

「うとー、おい、これなんとかしろよー！」

なおも迫る触手を必死の形相でかわしながら青年が叫ぶ。

彼を追い回す触手には人間と同じサイズの鉤爪がついていて、今もなお土が剥き出しの大地にせつせと田畠をこさえている。

あんなものを避け損なつてしまつては、上半身と下半身を繋ぎ留めるのも実に困難を極めるだろう。

案の定、追い回される彼のクセツ毛の黒髪も、主人の心情に呼応して逆立つてているかのようだ。”ちゃんと避けてくれよ”主人様”つてところか。

「おめーがなんとかしなきゃ、誰がどーにかすんだよー、『るあつ！』

「そーよ、そーよー、あんたがリーダーなんじょ、ディールつたらー！」

ディール。それは俺の名だ。

少女が真っ赤な髪を揺らして便乗するよに叫ぶ。彼女もまた必死の形相だ。

「ほんのまんまじやあ、リベルもろとも全員、リベルの髪の色に染まつちまうぜ！」

「ばか！ ほんたきになに言つてんのよつー、ばかジンー！」

ジンと呼ばれた青年を赤髪のリベルが肘でどづく。

「うおっと」とよろけたジンの真後ろに人間大サイズの鉤爪が、ずどん、と突き刺さる。びくんっ、と飛び上がる2人。

瞬間、2人は同時に顔を見合させたかと思うと、一目散に俺の後ろに回り込む。

「ほらほら、ファイター様の出番でやんしょ」

「い、こら……ジン、押すな！」

「あ……あはは、あいつ退治してくれたら尊敬しちゃうー、もうあたし、ディールと結婚する！」

「リベル！ 「冗談でもそんな事言つなー、そして一緒に押すな！」

「うなるともうすつたもんだの大騒ぎだ。

さすがにファイターである俺としては、ジンとリベルの2人がかりでかかるれたとしても、押されて前につんのめることなんて、さすがにない。

とは言え、目の前の自然災害（？）をどうにかしないことには、どうともならない。

「落ち着け！ ちょっと待つてろ、今心の準備を……」

パニックに陥っている口の悪い青年とじゃじゃ馬な少女の2人組を努めて冷静になだめると、改めてソードを構える。

（うう……大きい……）

どんなに前向きな性格のやつだつて、これを目の前にしては悲惨な己の死に様しか想像できないに違いない。

でっぷりと丸まつた巨躯にはどんな武器だって通用しそうにない。まるで巨大なサボテンかなにかに大きなまんまるおめめが2つ付いて、針の代わりに数え切れない触手が生えているようなものだ。

唯一の救いといえば、鉤爪付きの触手以外には、その本体の動きが鈍いということだけだ。

なんといっても、短い2本の足だけで体を支えているのだ。

これでネズミのように素早く動けるとしたら、一国を挙げての討伐隊を組まねばならないほどの脅威となるのではないだろうか。

「巣に、近づいた、私たちが、悪いよ、ディール」

黒フードの少女が呟く。

とても小さな声だ。聞き取れたのはおそらく俺だけだと思つ。

「それはそうだがつ……」

「こん的小娘が不用意にうろつくから!」

「きいいい! ばかジンが”あの林檎うまそり”って言つてあいつの朝ご飯を盗むからでしょお?!

「う……う……うわあああああああ!」

ジンとリベルの罵り合い押し付け合いに混じつた、悲鳴にも似たボーケンプラノな叫び声に、俺たちは一斉に振り返った。

まさに千鳥足だった。か細い両腕で、どう見ても不釣合いな戦斧を振り上げた少年が、なんとも重そうによたよたと走り出し……と

いつか、がくがくとした足で歩き出し、

どべすぽいっ!

盛大に足元の小石につけられ、両手からは斧がすっぽ抜ける。数秒の間。

俺たちは状況も忘れてあっけに取られた。

”巨大サボテン”みたいなモンスターすら、触手をうねらせて、転んだまま動かない金髪の少年を観察しているようにみえる。

地面に突き立つた斧と合わせて眺めると、情けなさが相乗効果を上げているようだった。

「ど、どんまい」

「まあ、こんなこともあるわよ

ジンとリベルが慰めの言葉をかける。

少年は動かない。

俺はため息をついた。

ともあれ、あの”巨大サボテン”をなんとかしないことには、俺たちに未来はない。

「つーか、逃げたほうがよくね？」

口を開いたのはジンだ。

「そういえばさあ、あの子つて足遅いわよね」

リベルがそれに続く。

それにしても”巨大サボテン”を「あの子」「呼ばわりする」とは。確かに逃げたほうがよさそうだった。

リベルの言う通り、よくよく考えるとやつの足は鈍い。突然襲われたものだからパニックに陥ってしまっていたが、現にこじして相談をする余裕があるくらいだ。触手の届く範囲にいなければ、至つてどつてこともないようだ。

「そうだな……逃げよう」

2人にそう言つて、倒れたままの金髪の少年を見る。

すると、黒フードの少女が足首を掴んでひっぱりつとしてこるところだった。

「レ!! クラッセは俺が担いでいく。おいジン、先導を頼む」
そう言つて振り返るとジンは「ほいよ。とつとと逃げるぜ」と辺りを見渡す。

そして、ほんの前に俺たちが通つてきた小道を見つけると「こつちだ！ 遅れんなよ」と叫ぶ。

俺は金髪のクラッセの肩をゆすつてみる。

だめだ、完全に気を失っている。打ち所が悪かつたのだろうか。とりあえずクラッセが持つていた戦斧はさすがに邪魔になるので置いていくことにした。

後でほどぼりが冷めた頃にでも取りにくればいいだらう。持つてもクラッセには扱うことのできない代物だ。

とてもすぐに田覚めそつにないクラッセの体を起こす。
すく軽い。

意外とずつしづぐるのかと思つていたが、見た目通りの軽さだった。15、6歳といえばそろそろ体も出来てきてそれなりに筋肉もついているはずだと思つただが。

「よし行こう」

俺の言葉に黒フードのレミは少々頷く。やうこそジンとリベルのいる方へと駆け出す。

「おひひ、ひつちだひつちだ！」

ジンが手招きをする。

だがすぐに、その表情がみるみるひたに歪んだ。

「うげ！ なんだありやあ！」

ジンの後を走っていたリベルも「さやあ！ やだもつー」と悲鳴を上げた。

「追いかける気、まんまん、だね」

すぐ前を走るレミが振り返つて言つた。

レミの言葉に俺は嫌な予感を覚えた。

クラッセの頭がもたれている肩とは反対の方に首を曲げて後ろを見る。俺は開いた口が塞がらなくなつた。

”巨大サボテン”の無数にあつた触手が、ちょうど縄を作るときのように交差しはじめ、またたく間にそれは2本の”前足”へと変化を遂げていくではないか！

その代わりというか、本体は最初の半分ほどの大きさになつていて、”前足”がその分大きく、もともとあつた足もすっかりと立派な”後足”になつていった。

「でたらめだぜありやあ！ なーにが『手頃な仕事がある』だよ、酒場のくそ親父がっ！」

ジンは「けー！」と毒づく。

「帰つたらぎつたんぎつたんにしてやらあ！」

「その前にあんたをぎつたんぎつたんにしたいわよー。ばかジンのせいだ、あたしの華々しい冒険者デビューが台無じじゃないー！」

「どこが華々しいんだよー。なんにもできねえお荷物のくせしやが

つて！」

リベルの文句に、ジンが即座に言い返す。

「うつさいわね！　だいたい誰もお金がないなんて、ビラービラ」と
なのよ！　ばかジンのせいでなんにもできないのよー。」

逃げながらもよく喧嘩できるものだと呆れてしまつ。

ジンのせいといつ訳ではないが、リベルの気持ちも理解できなく
はない。

俺を始め、ジンもリベルもレミも、そして氣を失つてゐるクラッセも、全員が冒険者なりたてほやほやの新米も新米なのだ。当然、冒険にかかる費用、とりわけ武器や防具の値段といったものなんかは一般の人間には関わりあいのないものだから、どれくらい値が張るものだなんて冒険者になつてみるまで考えたこともなかつた。俺のソードなどは比較的値段が高いものではなかつたのだが、リベルにとつての必要なものは大変高価だと聞く。

もとは普通の村娘だというリベルにはすぐに手を出せるものではなかつたのだろう。

残念なことに俺たちにもなんとか寝泊りするくらいしか手持ちがなかつたので、全員でお金を出し合つて購入するということすら出来なかつた。

リベルは状況も手伝つて、つい鬱憤をジンにぶつけてしまつたのだ。

ジンとリベルの口喧嘩にうんざりしながらもひたすら走る。

とにかく来た道を引き返せば街に辿り着くわけなのだが、

「ジン！　どこに向かうつもりなんだ？！」

粗い呼吸ができるだけ整えながらジンに向かつて叫ぶ。

リベルと口喧嘩をしていたジンは唐突に問い合わせられて「はあ？」
と間の抜けた声をもらす。

「どこつて街に戻るに決まつてんだろ。さすがにあのとつあんも
街までは追つてこねーだろ」

なにを当たり前の事を、といつよつてジンが答える。それにしても

も”とつつかん”はないだろ?”とつつかん”は。

「それはだめだ！　あいつが街まで追つてこないなんて保障はないだろ。俺たちで別の場所に誘導してからまくんだ！」

「別の場所つつつてもよ、どこに行きやーいいんだよ。俺ら、この森に来たの初めてなんだぜ？」

それもそうだ。

誘導すると言つても、これといつていい場所などは思いつかない。「とにかく、森の中に入つてみよう。このまま走つたら街にやつを連れていってしまう」

俺の提案にリベルが嫌そうな顔になる。

「森のなかあ？！　もうつ、冒険者つてそんなことまでしなきゃなんないの？　街に行つて他の冒険者に退治してもうえればいいじゃない？」

全く無責任な言いようだ。

だが、あんなモンスターを退治できるような人間なんているのか？　そんな人間がいるなんて全く想像できない。それに、「街に連れていつたりなんかしたら、下手すると冒険者の資格を剥奪されてしまうぞ」

俺は少々強めにリベルに言い聞かせる。

その言葉にリベルは、うつ、と言葉をつまらせん。そうなのだ。

一口に冒険者といつても、その資格を得るにはそれなりの条件があつたりするのだ。それが”冒険者規定”といつやつである。

冒険者規定を守れない者は冒険者ギルドから冒険者として認めてもらえなくなるだけでなく、場合によつては重い罪に問われることもある。

冒険者規定の説明のために、まずは冒険者ギルドといつものについて語らねばなるまい。

そもそも冒険者ギルドが正式に設立されたのはおよそ50年ほど前の事だ。

それまではそれぞれの自治体が腕に自信のある者を自由に雇つてモンスターの退治などに充てさせていたらしい。

古い話では、現在の冒険者の前身たる当時の戦士たちの扱いは、今と比べればあまり良いものではなかつたそうだ。

もちろん依頼を一度受けてしまえば、その報酬はやはり高いものだつたそうだが、依頼がなければそもそも食べていくことすら叶わない。

もともと戦う術に長けた者はそれ以外の仕事ではからつきしだつたことが多かつたようで、モンスターが現れなければ、その腕力を生かして短期の土木作業などでなんとか食い繋いでいたようだ。そうなると、いざ凶悪なモンスターが襲ってきたときにはあまり具合が良くない。

田ごろから大した訓練をしていない者が多くなつていったものだから、今の冒険者に比べると、当時の戦士たちの質は決して高いものではない。

あえて厳しい言い方をするのならば、そこらの村人に毛の生えた程度だつたのだろう。

そうなると彼らを雇う村や町としては、1匹のモンスターに数人がかりで対処させなければならなくなる。

質よりも数で、となると1人の戦士にそれほど多くの報酬を支払うことはできなくなつてくる。

凶悪なモンスターが年々増加の一途を辿るのは裏腹に戦士たちの質は下がる一方になるわけだ。

それでは困るどばかりにいくつかの町村が協賛して設立されたのが、現在の冒険者ギルドの前身たる自警戦士団であった。

当時としては異例の登録制度の形を取り、各医療施設や宿泊施設を格安で利用できることを条件に、有能な戦士たちを募つたのだ。

格安で諸々の施設を利用できるとなると、それを田當てに入団しておいて、いざモンスターが現れるとなると逃げ出すような不届き者も当然現れてくる。

その防止の為に立案されたのが今で言つ、『冒険者規定』である。

冒険者規定には細部にわたつて、冒険者として成さなければならぬことが記されているが、今の俺たちにとって重要なのは『冒険者たるもの、冒険者ギルドに加入している町村及びその周辺における立地またはそれ以外の町村であつても重大な被害を与えるような事があつてはならない。そうならぬように尽力すべし』という文言である。

文言には『但し、やむを得ない場合に限り、刑罰の縮小は検討されるものとする』と続いているが、どちらにせよ、なんらかの罪には問われることは免れないのだ。

もちろん冒険者の資格を剥奪されることは十分にありえる事だろう。

今の俺たちの状況を考えれば、街へと逃げてしまつて、運良く他の冒険者たちが”巨大サボテン”を退治してくれたとしても、他に方法がなかつたのかと問われる事になりかねない。

そうでなくとも、街にはモンスターの脅威に手も足も出せない人間が大勢いるのだ。

なんとしてもここで対処しなくてはならない。

そこまで考えると背後から、どしんどしん、と大きな音が聞こえてきた。

「げげっ、あのとつあん、もう追いかけてきやがつたぜ！ 少し準備体操でもしてればいいのによ！」

ジンが走りながら後ろを仰ぎ見る。

俺もつられて振り返ると、道を挟んで左右に分かれ立つている木々の間からその姿が見える。うまいこと”追走形態”へと移行し終わつた”巨大サボテン”が大股で歩き始めたところだつた。

歩いているといつてもその歩幅は俺たちの1歩よりも遥かに距離を稼ぐ。

ゆっくり歩いているようでもどんどんと俺たちとの距離が詰まつてきていた。

「冒険者規定とか関係なく、こんのまんまじゃ追いつかれちまうぜ！　どつちにしても横道に逸れたほうが得策つてもんだ」

ジンは言うなり後方の俺たちから確認の合図を待つ。

「わかったわ。こうなつたら贅沢は言つてられないしね！」
リベルが言い、レミが頷く。俺も「そつじよう」と言つて大きく頷いた。

ジンの「1、2の3！」の掛け声で左手の木々の中へと飛び込む。丈の低い木々の頭を垂れた枝が頬をひつかぐ、かまつている暇はない。

一拍おいて”巨大サボテン”の元は触手だった前足がさっきまで俺たちのいた場所の地面を揺らした。

「おいおい、もう追いついてきたのかよ！」
先頭でジンが叫ぶ。

「しつ！　静かに！」

思わず叫んでしまったジンにリベルが釘を刺す。

ジンを先頭に、リベル、レミの順で、しんがりにクラッセを背負つた俺が続く。

クラッセの着ている服の袖が枝かなにかに引っかかって、びりびり、と音を立てる。彼には気の毒だが、この状況では仕方がない。少しの間は全員が無言で、粗い息遣いと雑草や枝から伸びる葉の擦れ合う音だけが続いた。

皮鎧の中がじつとりと汗ばんでいるのがわかる。

足元の石や木の根を避けるためにジャンプする度、クラッセの足のつま先がふくらはぎに何度もぶつかった。

そろそろ目を覚ましてもいいような気もするが、今の状況で起きてられても説明をするのが面倒なので、それはそれで今ま静かに気を失つてくれた方がいい。

「ねえ……足音聞こえなくなつたんぢやない?」

しばらぐしてリベルが立ち止まると、ジンが「せついやそだな」と振り返った。

逃げるのに夢中だつたせいで今頃気がついたが、あの巨体だ、森の中に隠れてしまえば俺たちの姿を見失うのも当然かもしれない。

「なんだよ! びびることなかつたんぢやねーか!」

近くの木にもたれかかってジンが軽口を叩く。

「なによ、一番怖がつてたの、もしかしてジンだつたんぢやないの?」

こじぞとばかりにリベルがジンを攻撃する。

もしかしたら”リベルの髪の色に染まる”をまだ根に持つているのだろうか。

「もう、気配は、ないね」

ひとり慎重に辺りの気配を窺っていたレミが小声で漏らす。

その言葉に俺たちは、はあ~、と息を吐いた。

リベルはその場に座り込むと「なんなのよ、もう。なんなのよ」とぐちぐち言つていた。

「とにかくいいぢやないか。みんな無事でなによりだ」

そう言つて笑いかける。

そうだ、突然現れた”巨大サボテン”の前に俺はなにひとつできなかつたが、誰一人として欠けることなく逃げ切れたことが一番大事なことなのだ。

「リベルじゃねーけどよ、なんのよアレ、って感じだよな」

木にもたれたままにジンが唇をとがらせる。

「確かに。街からそう遠くないこんな森の中にあんな恐ろしいモンスターがいるなんて……。世界にはあんなのがごろごろしているんだろ? うか」

最後の方は独白氣味に言つと、ジンは人差し指をチツチツと振つて、

「そーじゅねーよトイール。おめーも聞いてたら、酒場の親父の話。

あのあつさん、この森にはそう恐ろしいモンスターなんていねーから俺らみたいな新米冒険者にほつてつけだつて言つてたじやねーか

「

ジンはその時のことを思い出したのか「けつ」と吐き捨てる。

言われてみれば、そんなことを言つていた。

レミも横で「そうだね」と頷いた。

俺はクラッセをゆづくりと背中から下ろすと、木の根元にもたれかからせてやつた。

「とにかくよ、ほれ。こいつでも食つて今後の事でも考えようぜ」ジンは背負つていたリュックサックの口を開けて、おもむろに中の荷物をこちらへと放つた。

「えー?! これ、わつきの林檎じゃない! なんで持つてんのよ!

!」

林檎を受け取つたリベルが驚いた声を上げる。

俺は放られた林檎を右手でキャッチする。

それはリベルの言う通り、ジンが”巨大サボテン”から横取りした赤々しい大玉の林檎だった。

「俺様の手際の良さをなめちゃいけねーよ? どうせ襲われるんな
ら貰えるもんも貰つとかねーとな

ジンは白い歯をさせて林檎にかぶりついた。

レミはどうやつて食べようか思案していたようだが、すぐに諦めたらしく小さな口を開いて林檎を力アリとやつていた。

フードに隠れて口元しか見えなかつたが、思つていたより良い味だつたらしく、続けて二口三口と口をつけていた。

「シーフって手際だけはいいのね。ばかジンでも意外なところで役に立つたわ

むくれながらリベルも林檎を口に運ぶ。

もとはといえばジンが林檎を取つたことで散々な目に遭つたものだから、素直には美味しいと言えないのだろう。

そんなりベルの心情を察したか、ジンが「可愛くねーやつ」と笑

つ
て
い
た。

「こんなところでみんなして林檎をほおばつている冒険者たちなんているのだろうか……。

少なくともこの辺りでは俺たちだけだろうと苦笑する。

俺の林檎が芯だけになる場合を見計らって、ジンが「ちらも見ずにまた林檎を放る。

それを受け取ると、ジンはおもむろに話し出した。

「まあ食つてる今までいいから聞けよ。さっきも言ったけどよ、この森にはこええモンスターなんていねーって酒場の親父も言つてたよな。んだけど、森に入つてほんの20分足らずしか経つてねえのに、あんなへんてこりんなモンスターがいるときたもんだ。

んなでな、俺は思つただけどよ、実は今この森ではとんでもねーことが起きているとか、そんなことつてねえかな？　あのおっさんが嘘をついて俺たちを危険な場所に案内したつてか？　そんなわけねーよな。だつてよ、酒場の親父がなんでそんな嘘をつくんだよ。わざわざ嘘をつく理由なんてねーだろ？」

俺たちは話を黙つて聞く。

ジンはさらりと続けた。

「これって俺の考え方か？　ただな、シーフってのはどんな時でもあらゆる可能性を考えろつてよ、短い講習だつたけど教わつてな。ああ、講習つてのはあれだ。シーフつて職業は冒険者の資格を得る前に、ちょっとした話を聞かなきゃならねーんだと。

そんで3日程度だけど色んな話を聞かされてな。例えば罠とかよ、隠れ潜んでいるようなモンスターから仲間を守るのもシーフの大重要な仕事なんだとよ。とにかくあれだ、考え方だとしても用心しくここしたこたあねーつてことだ」

いい終えるとジンは水筒を傾けて一気に水を飲む。

「ま、そんだけだ。一応、最悪の事態も視野に入れとけ」

そしてそっぽを向いて再び林檎にかじりつく。

俺はリベルを見る。さっきまでの喧嘩相手が真剣な顔をして囁つものだから、少し面食らつているようだつた。

ジンは初めてパーティを組んだときからいつもふざけた事ばかりを口にしていたが、本当はすぐ真面目な男なのかもしれない。俺はそんなジンにどことない心強さを感じた。

俺たち5人は全員が冒険者になりたてだ。

それゆえなのだろう、リベルも実のところ、少しでもジンと軽口を叩き合つて緊張をほぐそうとしていたのではないか。

そしてジンも同じ気持ちだつただろうし、俺もそんな彼らに少なからず救われていたと思う。

きつとジンは、そうした心の甘えに気がつき、"冒険"というものに潜む危険を改めて認識させようとしたのかもしれない。

「そう、だね」

レミが呟く。

フードを指でほんのわずかだけ押し上げる。青い瞳がしつかりと他の3人を見つめる。

「あんなのは、少し、異常」

「確かにね」

リベルがレミの言葉を引き継ぐ。

「普通……って言つたら変だけど、あたしたちまだなんにも知らないから、でも、普通に考えてあんなモンスターが現れたつてことになつたら街でもきっと噂になるわよね。それで討伐隊とか組んだりしてさ。酒場のマスターだつてあたしたちみたいな駆け出しに行かせるなんてことないと思つ。ジンはばかジンだけど、きつと見てることは正しいと思うわ」

真剣な表情で囁つリベルに、ジンはもたれていた木から、ずるつ、と滑る。

「おめーなあー。」——話のときこ、"ばかジン"は余計だら一がよ

呆れたような声を上げる。

「あははっ、珍しくまともなことを言つからよ！」

口元に手の平をあてがつてリベルが笑う。

ジンは座り込んだまま「けつ」と吐き捨てる。

「とにかく！　この話はこれでおしまい！　それよりこれからすべき事を考えましょ。仕事をこなさないとお金はもらえないんだから！　だいたいさあ、こんな寄り道をする羽目になつたのはジンのせいなんだからね！　そこんとこわかつてゐの？！」

いきなり話題を転換され「わーった、わーってゐひて」ビジンは投げやりに返事をする。

”話を蒸し返しやがつて”と、それ以上に物言わぬジンの表情が代わりに語つていた。

「起きない、ね」

元のようにフードを田深にかぶつたレミがクラッセに顔を向ける。

「王子様はキスしてあげないと田間めないんじやない？」

クスクスと笑うのはリベルだ。

「なら、してやりやーいいじゃねーか

「ばかね！　もう男つて本当にスケベ！」

ニヤニヤしながらジンは言つてリベルの背中に手を回す。クラッセの方に押そうとするつもりだったようだ。その手をリベルにぴしゃりとはたき落とされる。

「なんだよ、自分からふつといとよ」

そう言いつつもリベルの反応を楽しんでいるようだつた。

「2人ともそこまでにしておいて。クラッセが気が付いたらまた出発することにしよう。ジン、その前にもう一度地図を確認しておこう。レミ、田舎への薬草はどんな感じのやつだつたかな？」

またも言い争いを始めそうな2人に先手を打つて切り出す。

そうそつ、俺たちはなにも、田的もなしにこんな森に出向いてきているわけじゃない。

冒険者としての経験を積むために酒場のマスターに手頃なモンス

ターのいる場所を教えてもらつたわけでもない。

当然だが、仕事としてこの森に来たのだ。

「ヒガエリグサ」ね

1人だけすることのないリベルが言う。

正確に言つのであれば、することがないのはクラッセと2人だが。

「そう、『陽還り草』」

それにレミが返事を返す。

「教会からの依頼なんだつけ？」

ジンが地図の用意をしているのでちょっとだけ退屈そうだ。

「ああ、なにかの材料にするって言つていたな。俺たちみたいなまだ冒険に慣れていないような冒険者が経験を積むためには手頃な仕事をなんだとさ。教会側もあまりお金をかけたくないから、『早く冒険に出たい、だけどまずは手堅くいきたい』ってあたりの新米冒険者によく紹介しているらしい」

マスターの話を聞く限りでは、冒険というよりは“おつかい”だ。だが、俺たちの財布の中身を考えたら、受けられる仕事は受けておこうとこう事になつたのだった。

どのみち俺たちのような新米に難易度の高い仕事など任せるわけにはいかないだろう。

それに、少しでも経験を稼げれば、金銭以外にも手に入るものは大きいはずだ。

「俺たちはとにかく場数を踏んでいかないとな」

リベルは「うんうん」と頷き、

「1人100Gつてのは少なすぎだけどねえ。でも材料採取じゃ仕方ないかあ

リベルはやはり残念そうだった。

100G程度の報酬では2~3日は少し贅沢な食事ができるといふくらいだ。あとは宿代に消えゆくのみだろつ。

一応、冒険者の資格を使つことで宿も割引はしてもらえるのだが、このあたりが困ったところで、成り立てる冒険者では割引率も決し

て良いものではないのだ。

それもそうだ、冒険者になつてすぐになんでも安くなるのなら、しばらくはモンスター退治や酒場で依頼を請け負つてこなぐとも、ちょっとした旅の間に利用することもできてしまうからだ。必要なのは冒険者ギルドでの簡単な手続きと適正検査くらいだけなのだから。

そういうこともあって、俺たちは今、とてもなく金欠なのである。

「レベルが上がるまでは辛いわねえ」「しみじみとリベルが呟く。まったくだ。

「それで、その陽還り草つていうのは、どんな特徴をしてるんだ？　葉の形は？　なにか香りでもあるのか？」

俺はレミに尋ねる。

実のところ、レミ以外の4人は依頼の品である薬草について深くは教えてもらつてはいない。

酒場のマスターからその薬草の話を聞いて、レミがそれを知っているというので、あくまで大まかな話しか聞いていないのだ。
「香りは、ないね。無味無臭だよ。丸い葉、で、色は冬から秋、にかけてが黄。春から、夏までが橙になるよ。今は春、だから……」
「橙ね！」

リベルが言うと、レミは数秒だけおいて「そつとは、限らない」と言つて続ける。

「気候や、その地域にも左右、される草だから。特に日が照つて、いない時、見つけるのは、大変だよ」

レミはそう言つと懐から手帳を出して羽ペンを握りだした。スラスラと絵を描いているようだ。

その様子を俺とリベルは固唾を呑んで見守る。

すぐに描き終えて俺たちの前に差し出された手帳をリベルと2人で覗き込む。

さつと描いたわりによく描けている。なるほど確かにまんまるの

葉だ。

ようく見てみると、輪郭がギザギザになつていて。この形に黄か
橙の色になつていて草を探せばいいといつことか。

ただレミが言つには、陽還り草は太陽の光を浴びていないとま
普通の緑色になるんだそうだ。表面が太陽の光を返して色が変わる
特殊な層で覆われているらしい。

「うーん……ちょっと曇つてているわね」

リベルが天を仰ぐ。

「でもそのうち晴れるかもしないし、きっと大丈夫よ。それより
そんな草を教会は何の材料にするのかしら?」

楽観して俺たちに笑いかけると、思に出したように疑問を投げか
ける。

俺もレミを見た。

「ああ、変わつた薬草だつていうことはわかつたが、どんなものな
のかは俺も知りたい。何かの薬になるのか? まあ薬草つていうく
らいだからな」

「ディール、そりやそうだる。んじゃなきゃ誰も採取の依頼なんて
しねーつて」

地図とにらめっこしていたジンが離れたところから口を挟む。

「いいから黙つて地図の確認でもしてなさいよ。だいたいあんたが
最初から地図をちゃんと見ていればこんなことにはならなかつたの
よ!」

全くの言いがかりだが、ジンはリベルに「へいへい」とだけ答え
た。

「おいおい、ちよつと言ひすぎだぞリベル。俺たちだつてもつとし
つかり確認するべきだつたらう? 今さら言つても仕方のないこと
はやめておこう。それよりレミ、どうなんだ?」

俺の弁護に「そりやそりだけども」とふくれつ面になる。

だが、さすがに今のところなんの役にも立つていないのを申し訳
なく思つてはいるよつて、リベルは「ごめん」とだけ小さな声で謝る。

リベル本人はジンに聞こえないような声で言つたつもりだつたの
だろうが、ジンの耳に届いていたようで、彼は地図から目を離さず
にひらひらと片手を挙げて振つていた。

「主に聖水、の材料だね」

レミはさらにその詳しい説明を続けた。

「聖水にはモンスター、を退ける効果があるよ。よく大きな街の周辺、に撒かれているね」

「そういえば戦士風の人たちと神父さんが街の周りを一緒に歩いているのを見たことがあるわ。あつ！ なんか瓶から水みたいなのが振りまいていたかも」

リベルがその時の光景を思い出して声をあげる。

「でもそんな物の材料に使われるんなら、結構値が張るものなんじやないか？」

俺はレミに聞く。

それを振りまくだけでモンスターが近寄らなくなるというのなら、いい値段がしそうだ。同時に、そんな貴重なものを一介の新米冒険者に知られてしまつてもいいのだろうかという疑問も湧いてくる。そもそも冒険者の存在意義自体が危うくなるのではないか？ モンスターという脅威から街を守ることが我々の仕事なのだから。もちろんそれだけではなく、旅の道中の護衛などの依頼もあることがあるが。

「ううん。そんなにたいした、効果はないね。太陽の光、を浴びて、色が変わったり、するから、古来より神聖なもの、として伝えられている、だけだよ。いわゆる縁起物、だね」

レミの説明に俺とリベルは納得した顔になる。

彼女が言うにはこうだった。

聖水というものは陽還り草だけが材料ではなく、それ以外の材料と合わせて精製しているのだそうだ。

陽還り草自体には全くといってモンスターを退ける効果などはない、聖水を神格化させるための、いわば聖水の精製がうまく成功こ

とを祝う儀式というものがあり、その儀式用として使うだけらしい。そして聖水というものに至っても、多少はモンスターが嫌うような匂いがある材料が含まれているようだが、それほど大きな効果は期待できないらしい。精製の過程において特に退魔の魔法を施すといったこともない。

さらに言えば、そもそも退魔のような高度な魔法を使える者すらもそういうものではないのだそうだ。

「けつ。金持ちの道楽みたいなもんかよ」

地図とにらめっこしていたジンが顔をあげて憎まれ口を叩く。

「道楽つてあんた……」

リベルが呆れて言つ。

俺はリベルに次いで口を開く。

「そういうものは大事だと思うぞジン。縁起を担ぐというのは意外と大事なことだ。そんな事を言つてバチが当たつても知らないぞ」「その通り、だよ」

3人から同時に非難の視線を浴びて、ジンは氣まずくなつたように地図へと顔を戻す。

「はいはい、あつしが悪う！」ざんした。それよりこれを見ろよ。なんか、お宝の匂いがしねーか？」

口元に笑みを浮かべてジンは俺たちを手招きする。

「え、なになに？ お宝？！」

リベルが真っ先に地図を覗き込む。

俺はレミと顔を見合させてからリベルに続いた。

ジンの人差し指の部分には「つすら」と”×”と印がつけられていた。

それは後でかき消そうとしたようで、よくよく注視しなければ気が付くことがないような印だ。

目的地である大きな印が目を引いて俺なら気付きそうにない。ジンはよく見つけたものだ。

「なにか知りたくないようなもんでも埋まつてんじゃねーか？」集まつた3人の顔を覗き込んで、ジンは「へつへつへ」とにやつく。

「こんなのがよく見つけたな」

俺は感心してジンを見た。ジンは「おうよー」と意氣込んで、地図をなぞるように指を動かす。

「街を出発してあんま進んでねーから、俺たちがいるのは多分このへんだる。きっとこれがさつきまでいた小道だな、そんで、ほれここに岩山みたいな記号があんただろ。こいつをぐる~っと回り込んでだな」

俺たちの現在地と、街までの距離とその印のつけられた場所を比較すると、道のりにして2時間くらいはかかりそうだ。

「結構遠い場所にあるな」

思わず漏らす。

「でもさ、もしこれが財宝だつたりしたら、もうあたしたちウハウハよ?！」

リベルは興奮して、地図を食い入つたように見つめる。

「だろ？ 昔の偉人が遺した金貨でも埋まつていたりしてな」

ジンは言しながら想像して、よだれをジュルリと垂らしそうな口元を袖で拭う。

「でもそれはさすがに出来すぎじゃないか？ だいたい偉人ってなんだよ」

確かに財宝が埋まつているのだとしたら、それはすごく魅力的だが、現実にそんなことなんてそつあるもんじゃない。

俺の反論にジンとリベルの2人は一齊に噛み付く。

「おめーつてよ、夢がねえな夢が。せつかく冒険者になつたんだから、それくらいの夢は見てみよウゼディールよお！」

「そーよ、そーよー ああもうっ、財宝を掘り当てたらあれもこれ

も買えるわ！ おととい街で見つけた可愛い服があつたのよねえ」「リベルはうつとりとした表情だ。

年頃の女の子だからそれは仕方のない欲求なのかもしない。だが、これでいいのか？

「危険区域、だつたりしてね」

レミの発言に2人はまたも同時にぴたつと止まる。

彼女の言つことが、この場合は一番ありえそうだ。

教会といえば、人々が懺悔をしに来る場所というだけではなく、冒険者ギルドとも密接な関係にあるのだ。だからこそ今回の仕事を酒場を通じて俺たちの元に転がり込んできたのだ。

その教会から支給された地図ともなれば、危険なモンスターが出るがゆえに記されたという理由だつてあり得る。

ただ、酒場のマスターが言つには、”手頃で危険の少ない仕事”だそうだから、ジンの推測だつてあながち見当はずれではないのかもしれない。

だがマスターがこの場所が”危険区域”だということを教会関係者から聞いていても、それを俺たちに伝え忘れたといつことも十分に考えられるのだ。

「さつき自分で言つていたらうジン。少し慎重に物事を考えよう。それに、まずは依頼にある薬草入手することが先決だ」
レミに続いて2人に釘をさすと、ジンは「いけねーなあ、ロマンつてもんがねえよティールは」とリベルに愚痴つっていた。

なんとでも言え！

「ところで今さらだけどよお、あんなモンスターがこの先も出んのか？ いきなり巨大化するなんて並じゃねーゼ

あんな、とは”巨大サボテン”のことだ。

「林檎を食おうとしてる時は、こーんなにちっこかったのによ」
両方の手の平をこじんまり田の前に出して噛噛しげにジンは言つ。最初に見たときはあんなサイズになるとは思つてもみなかつた。

「ほんと、可愛らしかったのにね

「ちょっとからかってやる」としただけなのにな。短気なやつだつたぜ」

ジンだって、なにも最初からあんな巨大化するとわかっているモンスターにちょっとかいを出したわけではなかった。

本当に小さかったのだ。ある種の愛好家ならペットとして愛玩用に連れて歩きたいと思うかもしれないくらいに。

俺たちが街を出たのはまだ朝の霞も引いていないくらいの時間だ。前日に酒場でマスターから依頼をもらつた俺たちは、時間も時間だといふことで、翌日の早朝に出かけようとなつたのだった。

それまでは安宿に拠を構え、短期のアルバイトをしながらちょこちょこと酒場に顔を出していたのだが、5人で食事を取つているところに、マスターから鶴の声がかかつたというわけだ。

前にも言つたとおり、俺たちのような新米にはなかなか依頼などくるものではない。

めぼしい仕事はのほとんどは、熟練の冒険者たちにかつさわれていつてしまう。

一も二もなく飛びついた俺たちは、その日は出かける支度に追われ、今朝早くに意氣揚々と出発したのだった。

冒険者になつて初めての仕事だということで、始めは辺りを警戒しながら無言で歩みを進めているだけだったのだが、モンスターの類なども現れず次第に緊張感が薄れつつある時に、森の中に少し開けた場所に行き当たつた。

そうそう、酒場のマスターからは小道を真っ直ぐに進んで、地図は突き当たつたところまで行つてから開けばいいのだと言われていたのだ。

だから、あまり深いことは考えていなかつた。

まだ冒険者になりたてで未熟なこともあって、俺たちは地図をしつかりと確認することもなかつた。

それが仇になつたといふこともないが、今にして思えば軽率だつたと言わざるを得ない。

そこには林檎の木が一本だけ立っていて、冒険者たるもの朝食はしっかりと取らなければならないというのに、朝食もろくに取つていなかつたジンは、「美味そうだ」と言つが早いかその林檎の木に登り出してしまつたのだ。

「おめーらにも取つてやるから安心しろつて」
するとすると木に登つて、太い枝の上に腰をかけたジンが俺たちに叫んだ。

すると巨大化する前の”巨大サボテン”が小さな触手を伸ばして、鉤爪で大玉の林檎をがりがりとやつていた。

それを見つけたジンは何を思ったか、林檎を取り上げると”巨大サボテン”の目の前で一気に芯だけを残して食べきつてしまつたのだ。

ジンにとつてはほんのいたずらの気持ちでやつたことだったのだろうが、当の被害に遭つた本人（？）はジンの所業で頭にきたのか、ぶるつ、と身を震わせると、あとは知つての通り、ぐんぐんと巨大化していき冒頭の場面に繋がつたというわけだ。

「ほんと、ばかジンね。少しほ反省してよね」

半眼でリベルが言つた。

「反省してるつづーの！ とにかくあのとつづあんにだけは遭遇しねーようにいかねーとな」

さして反省していないような仕草で頭をぽつと搔いたジンが言ったときだ。

「うわあああああ！ た、助けて！」

反射的に辺りを見回す。森は依然、しん、として何かが起こつたような様子はない。

それもそのはず、悲鳴の出処は氣絶していたはずの金髪少年だつた。

”巨大サボテン”の悪夢にでもうなされていただろうか、顔面

蒼白だ。

「ようやく王子様のお田覚めだぜ」

ジンがからかうように笑う。

「もうひ。いじわる言わないの。大丈夫？ もうさつきのモンスターはいないから安心していいわよ」

リベルがクラッセのもとに駆け寄る。

クラッセのだらだらと汗をかいすぎて、定まらない視線を宙に漂わせている。

「こ、ここは……？」

「ここいつつてもな。森ん中だつつの。おめー覚えてねーのかよ」

肩をすくめてジンが答える。

「僕、どうしてここに？」

「ええと、気絶してたのよクラッセ。ティールが背負つてくれたのもう少し休むから、落ち着いたら行きましょ」

リベルはクラッセの額の汗をぬぐつてやると、他の3人を振り返つて言う。

「へいへい、わかりましたよ」

ジンが仕方がないというように再び取り出した林檎をかじりだす。彼としてはもちろんクラッセの心配をしていないわけではないだろうが、さつさと仕事を片付けて、財宝が眠っているかもしれない地図に記された場所に行きたいのだろう。

「はあ。その林檎美味しそうですね」

起きたばかりだとこの間に田ぞとジンの持つ林檎を見つけて、クラッセは呟く。

「へつ！ とつとそれ食つたら出かけつぞ。随分とタイムロスしちまつたぜ」

クラッセに林檎を放る。

クラッセはそれを受け損なつて、落ちた林檎についた土を払つてから口をつけていた。

「てゆーかさ、あんた林檎をどれだけ採つてきたのよ？」

リベルが素朴な疑問を抱いたようで、なんとも重そうなリュックサックの中を覗き込む。

ジンのリュックサックから戻る「」となく出てくる林檎に怪訝な表情をしている。

それは俺も気になつていたところだ。

一体いくつの林檎があのリュックサックの中にこじろ狭しと入っているのだろう。

あれだけの数が入つていて、決して速度が落ちる「」ともなく”巨大サボテン”に追いつかれないように走ったジンは、意外とファイター向きなのかもしない。

「あん？ まだ食い足りねーのかよ。おめー、それ以上太つちまつたら見れたもんじゃねーぞ」

「な、な、な……なんですってええええ！ 誰が太つているのよ！ こんなに可憐な少女を捕まえて、どの口がそんなばかげたことを言つてるのよ！」

林檎を片手に走り回るジンをリベルが追いかけて、辺りをぐるぐると回る。

田覚めるなり賑やかに騒ぎ出した2人を見て、クラッセは不思議そうな表情を浮かべていた。

「さつきから、こう、だよ」

クラッセの横に腰をかけて傍観を決め込むことにしたレミがクラッセに説明する。

「そなんですか」

林檎をシャリッとかじるクラッセが「楽しいですね」とのんびり顔で返した。
その時だ。

くすくす……くすくすくす……

ふと俺は押し殺したような笑い声を聞いた気がして、4人をそれ

ぞれ見た。

ジンは相変わらずリベルをからかいながら走り回っているし、レ

ミやクラッセを見ても笑っているような様子はない。

きっと木の葉のこすれる音かなにかだつたのだろうと、その時は特に気に留めることはなかつた。

少しだけ強くなってきた風が、木々の枝を揺らしていた。

2・未知との邂逅

ピチュンピチュン…… クルックル……

俺たちは雑木林をかきわけながら歩いていた。

「やあ、木の香りがとてもいいですねえ」

一人寝起きのクラッセが呑気に背伸びをした。

「つたく、ガキはこれだからよ」

先頭をひた進むジンが肩に振り返って毒づく。

「本当、気楽でいいわ」

気付かれした感のある顔でリベルが相槌を打つた。

「まあいいじゃないか。みんな怪我ひとつなかつたんだしな」

努めて明るい声で俺が言う。ともすれば緊張感に暗くなりがちな仲間を鼓舞するためであり、そして自分のためでもある。

「怪我ひとつなかつたって、ねえ~」

リベルは振り返ると、俺をじとじと眺めて胡散臭そうな顔をする。

「ま、まあ外傷のある者は誰もいなかつたから良かったよ」

俺は取り繕いがちに付け足す。気絶をしたクラッセのことは不可抗力だ。

だいたい当の本人はよほど頭を強く打つたのか、モンスターのことがなど綺麗さっぱりに忘れている始末である。幸せなやつだ。

それについてもいい天気になつた。

強くなってきた風が雲を追いやつてくれたおかげで、太陽が少しずつ顔を出してきたようだ。

これなら陽還り草も見つけやすくなるだろう。

しかし、初っ端からあんなモンスターに出会ってしまったことでのみんな気を張りすぎて疲れているようだつた。

モンスターに出くわす心配をする必要などなければ、クラッセの言う通りに森林浴にぴったりの日和だつただろう。

「また、さつきの、が出てくるかもしれないけど、ね

周囲に気を配りながら田の前のレミが言つた。

結局のところ俺たちは遠回りしながら田的地区へと向かうことに決めたのだった。

ジンとリベルがやつていた追いかけっこによく気が済むと、俺たち4人は気を失っていたクラッセを含めてもう一度広げた地図の前に集まつた。

ともすればまた”巨大サボテン”に遭遇してしまいかねない小道に戻るのは危険だということで、あーだこーだ言いながら森をこのままつきつてしまおうという結論に達したのだ。

地図を5人で覗き込んでいる間に、クラッセは林檎を一気に3つもたいらげ、ジンは「生意気なやつだ」と言つていた。

どうやらジンは年下の男があまり好きではないらしいといつ事が、ここ数日でわかつた。

再び出発して、最初のうちば”巨大サボテン”的名前を決めようトリベルが言い出して盛り上がつた。

「ブータがいいわ！なんか可愛いじゃない？！」

そんなリベルに失笑を返したジンは、

「あのとつあんには”とつあん”で十分だつつの」
にべもなく言つ返す。

「俺は最初から思つていたんだが、サボテンに似ているから、巨大サボテンとかサボテンジャイアントでいいんじゃないかな？」

「それってダサイわよディール

「ひねりがねーな。ひねりが」

……おまえらには言われたくない。

「じゃあ、ひねりを加えて”ウォツカ”なんてどうです？僕の好きな物語に出てくるんですよ。丈の長いのコートを羽織つてすぐ格好いいんですけど、なんだか憎めないドジさがあつて。ジンさんの名前にも似ているところがありますし……」

『却下…』

ジンとリベルが同時に吼える。

「なーにが、ばかジンの名前と似ている、よー プータちゃんで決まりだわ！」

「てめつ、つーかプータつつのもいけ好かねえが、なんだそりやあウォッカつてよ。キザすぎんだよ！」

2人に手痛い攻撃を受けてクラッセはただ「あうあう」とたじろぐばかりだ。

そんなクラッセをレミは無言で見つめていた。よく見ると唇の端が少しばかり上がっていた。

「プータよ断然！ でもそれがダメならミィちゃんでもいいわ！」
「だーかーらー！ とつつかんで十分だつてのー！」

「グリーンドラゴン、とか」

「ドラゴンで感じじやないでしょお、レミつたらー！」
「どう見ても爬虫類つてより植物っぽいじゃねーか！ 確かにグリーンだけどよ！」

レミは「ちえ」と足元の小石を蹴つていた。

その仕草がそれまで彼女に抱いていたイメージと異なり、意外な茶目つけがあつた。

そんなレミの小さな変化に俺はなんとなく嬉しい気持ちになつた。レミといえば最初に出会つたときから常に言葉少なく、一緒にいたりベルの影に隠れて人見知りしているような印象だつた。

そのレミが小石を蹴るという、感情を表に出すよつた行動を取つたのには、少なからず驚きを覚える。

「では”リキユール”といつのはビーブです？ さる冒険記に出てくる勇者で」

「なんでまた酒繫がりなんだよー おめーの読んでる本を書いてるやつはどんだけ無類の酒好きなんだつーのー！」

「そーよそーよー プータに決まりよー」

「どやくさに紛れて決定してんじゃねー！」

ジンはクラッセに手厳しい。それは初めて顔を合わせた時からそ

うだった。

わいのわいの騒ぐ仲間たちを眺めながら、俺は4人と出会った時の事を思い出していた。

ジンとは冒険者ギルドで会つた。

思えば最初から馴れ馴れしく話しかけるやつだつた。

「よお、おめー1人か？ 俺はシーフやつてるジンつてんだ。暇なら付き合わねえか？」

俺はいきなり数年来の友人であるかのように話しかけてきた青年に戸惑つた。

見た目は引き締まつた体つきにややつり上がつた目じり。
ベルトにはダガーらしき鞘が2本装着されていた。背は俺よりや低いか。

年の頃は20代半ばだろうと検討をつけていたが、後で聞いたところによるとまだ21だということだった。

しばらく付き合つてみて気付いたことだが、その軽い話し口調に反してたまに大人びた表情を見せる時があるのだ。それゆえか。今まで苦労してきたのかもしれない。

その時の俺はといえば、無事ファイターとしての適正検査を終えて、冒険者の資格である”リング”を受け取つたばかりだつた。ひょつとして俺がリングを受け取るのを待つっていたのかもしれない。そうとしか思えないくらいのタイミングだつた。

「まあまあ変な顔すんなよ。実は俺もちょいと前に晴れて冒険者になつたばっかでよ。どーセなら、とつととパーティでも組みたいじゃねえか。だからよ、どうだ？ 悪いようにはしねーよ」

そう言つて青年は胸元に光る、鎖に通されたリングを手に取つて俺に見せた。

まるでアクセサリーかなにかのように扱つていて、冒険者たる証

をそんな扱いでいいのか？と思つたりしたものだ。

俺は気軽に過ぎるほど気軽にパーティを組もつと誘つてくる青年にいささか面食らつた。

なにせたつた今冒険者として認められたばかりなのだ。

それでも俺にとつても、冒険者になつたばかりで早速パーティを組めるというのは願つたり叶つたりだ。

ジンの「悪いようにはしない」という言葉を信じてみてもいいかもしねり。

そうして戸惑いがちに右手を差し出して、俺はこいつ言つたのだつた。

「俺はファイターのディールだ。よろしく頼む」

その後になつてからは照れて握手などしようとしなかつたジンが、この時ばかりは強く俺の右手を握り締めたのを、今でもはっきりと覚えている。

「こつちこそよろしく頼むぜ相棒」

そう言つてジンはにやりと笑つていた。

まずは依頼を受けるために酒場へ向かおうといつじんと町はずれへと足を運んだ。

そして俺は他の3人とも糺余曲折を経て出合つことになつたのだ。そこまで思い出していると、”巨大サボテン”的前を決める話し合いはいよいよジンとリベルの一騎打ちと化していた。

「だいたいなんで、とつあん、なのよ！ もしかしたら女の子かもしれないじゃない！」

「いーや、あれは男だね。俺のシーフとしての勘がそう言つてら」
「なーにが勘よ！ それなら林檎なんて取る前にもつちよつとなんかしなさいよ！」

「なんか、つておめーなあ」

この2人には譲り合つ心はないのか……。

「そもそもなあ、モンスターに名前なんてつけてどうすんだよ。一度と会いたくねえぜあんなもん。んだから、とつあんで十分だつ

「の」

「それならメルちゃんでいいじゃない！ それで決まりよー。」
いつの間にカリベルの提唱していた「パーテ」は「メルちゃん」へとすり変わっていた。

「2人ともそのへんでだな」

俺は取り成すように2人の間に割つて入る。

ジンは例によつて「けつ」と吐き捨てるど、

「とにかく俺は今まで通り、とつあんつて呼ばばせてもらひザゼー！」

「上等よー。あたしはあたしで自由にやらせてもらひわー。」

名前の呼び方ひとつで自由もなにもなこと思うが。

ジンもリベルも気が済むまで放つておけばいいだろ。ひとあるごとに口喧嘩をしているが、ああ見えて意外と仲が良かつたりするのだ。

喧嘩するほど仲がいい、といつことだらうか？ それとも夫婦喧嘩は犬も喰わない？

「きつと言つて争いの、ことなんて、10分もすれば忘れる、よ」

今度は一転して先頭を競つよつにずんずん進む2人を見ながらレミが言つた。

「仲がよくてうらやましいです」

2人して先を往く姿にクラッセが呟いた。

そうだな。

俺がそう返事をしようとしたときだ。

「どつへえー。川があるぜー。」

ジンの叫びが聞こえた。

「ちよつとお、こんなの地図に載つてたっ！」

リベルが誰にともなく抗議の声を上げる。

「ねーよねーよ。使えねー地図渡しやがつてよー」

ぶつくさと文句をたれるジンと肩をすくめるリベルが引き返していく。

「どいかに橋とかないのかしら。いやだわ、回り道なんて」

「そんなのあつたか？」
「見ても無駄だな」というか川 자체が載っていらないなら地図を

ジンに地図を覗くと、やがて机の上に置かれた紙に注目した。やむを得ない。

「渡れねー幅でもねえよ。ちゅーても足を滑りさせて落つ」
「でも困りもんだしな」

そう言つてなんとはなしにリベルの方へと視線を漂わせる。口元にはリベルの反応を待つ笑みが浮かんでいた。

リベルはその手には乗らないとばかりに軽く流す。

そう言つて頭の後ろに両腕を回すジン。とても残念そうだ。

「仕方なしてすから元の道に戻りますか？」
クラッセが遠慮がちに切り出す。

バツが悪そうだ。

「そりゃ まじいだろ」

ジンが言った。

「あのとつあんが俺らをまだ探しているかもしんねえ」「さすがにそこまでしつこくはないだろう」と思つたが、念のためと云つことは考えておいた方がいい。

俺はジンの言葉を肯定するようにクラッセを見て頷いた。

「大丈夫よ。あのくらいなら飛び越えられるわ。変に回り道もしたくないし、メルちゃんにも今は会いたい気分じゃないし」リベルはクラッセとノミに「どうへ・」といつよつな視線を送る。

「え？ は、はい」

「どうかな。ま、飛んで、みよつか」

2人は自信なさげに答える。

「つーかな、別に落っこちてもそんな困るじゃねえ。あの幅の川なんて十分に足が着く深さだらうしな。問題なのは、おめーらが落ちちまつたら、服を乾かす時間をとらなきゃなんねえってこいつた」水に濡れてしまうというのは冒険者にとつては結構面倒なことだ。衣服が水分を含んでしまうとそれだけで重くなるので、ここぞという場面での瞬発に欠ける。

また徐々に体温を奪われてしまい、下手をすると冒険が続けられなくなるくらいに体調が悪くなったりもする。

これは冒険者とか関係なく、普通に生活していくても同じよつに言えることだが、冒険者の場合はすぐに街に戻ることができないようなところへ冒険に出ていることが多い。だからこそ一般の人々よりも体調にはより気を遣わなくてはならないのだ。

「まずは川のところまで行こう」

俺は4人を促す。

ジンを先頭に少し進むと確かに川があつた。ジンの言う通り越え

られない幅ではない。

「いけるか？ 2人とも」

俺は聞くが、クラッセなどは不安な表情をしている。

「まーまー、俺がまず飛んでみるわ。一応向こうの安全も確認とかねーとな」

言うが早いかジンは2歩3歩退くと勢いをつけてジャンプした。

ザツ

危なげなく川の反対側へと着地したジンは、そのまま田の前の茂みに顔を突っ込む。

後ろ手で「ちょっと待ってる」というジェスチャーをする。

その途端、茂みからすぐに顔を抜いたジン。

慌てふためいたようにこちら側へ戻ろうとジャンプしかけて、ドボーン

足を滑らせて川へとダイブする。

「なにやつてるのよ！ もうばかね！」

盛大に水しぶきをあげるジンにリベルが叫ぶ。

すぐに水面から顔を出したジンが俺たちに叫びかえした。

「田の前にいやがつた！ ウォーラーだ！ 田が合つちまつたぜ、くそつ！」

ジンの言葉を聞いた俺たち4人の間に緊張が走る。

川から這い上がったジンが「ありえねえ話だぜ」と呻くと、それは茂みの中から姿を現した。

その双眸は値踏みでもするかのように俺たちをひとしきり舐めます。

薄茶色の毛並みはふさふさとしていて、とても肌触りが良さそうだが、その毛並みに隠れた鋼の肉体をもつているのを俺たちは知っている。

ウォーラー。

よく知られたモンスターのひとつだ。

こういった森の中に生息しているが、時折人里に出てきては、そ

の牙と鋭い爪を存分に奮つて暴れ狂う半人半獣のモンスターだ。

古い時代に魔法によって合成されたとも言われる負の遺産でもある。その数は大陸随一を誇り知らぬ者はいない。

狼の頭を持ち、がつしりとした体格をしている。

そして極めて凶暴だ。

「早くこっちへ来なさいよ！」

リベルがジンに叫ぶ。

俺はゆっくりと鞘からソードを抜いた。

びしょ濡れになつたジンが俺たちの後ろへと駆け込む。

「ちきしおう！ 今日は厄日だぜ！」

言いながらジンも腰のダガーを抜いて構えた。

「ああっ、そういうえば僕の斧がないです！」

思い出したようにクラッセが言った。

「ばつか、今頃気付いてんじゃねーよ！ だいたい使えねーもん持つてたつて仕方がねーだろ。これ使え！」

視線をウォーラーに固定したままでジンがクラッセにもう一本のダガーを鞘ごと放る。

「油断すんなよ坊主！」

クラッセは「あれは大事な斧で」といひしゃくしゃ言つていたが、ジンから放られたダガーを落としそうになりながら受け取る。

「僕の名前はクラッセです、坊主じゃありません！ ジンさんも氣をつけてくださいね！」

半ばムキになつて言い返すクラッセに当のジンは「へいへい」と心無しに答えた。

「リベルとレミは俺たちの後ろへ！」

攻撃手段のない2人は素直に俺とジン、クラッセの背後へと下がる。

「ぐるぞ！」

俺がそう言うが早いか、ひとつ飛びで川を越えてきた獣人は、唸り声をあげて俺たちに襲い掛かってくる。

狙いはジンだ！

「モンスターってのはどういつもりいつもいつにヤツばつかなのかねえ」

”巨大サボテン”といい、このウォーラーといい、どうも最初に狙つた獲物をつけまわすのが得意らしい。

ジンはうんざりとしたような顔でぼやく。

ウォーラーは彼のぼやきなど全く意に介した様子もなく、ジンへと飛びかかった。

「くそっ！」

その鋭い爪をかろうじてかわしたジンが舌打ちした。水気を吸つた衣服のせいで動きづらいやうだつた。

「うおおおおお！」

俺はソードを振りかぶつてウォーラーへと走る。

”巨大サボテン”のときは臆病風に吹かれてしまったが、背丈も俺とそう変わらないウォーラーが相手となれば話は別だ。

ファイターになつてからといつもの、日は浅くとも毎日鍛錬を続けてきたのだ。

倒す！

そう心で念じながら振り下ろしたソードは、しかしながら空を切る。俺の接近に気付いたウォーラーが、獣特有の身のこなしで体をひねつて避けたのだ。

「くつ！」

だがダメージを与えるなかつたことを悔いでいる暇はない。俺の攻撃を避けたウォーラーは、今度は俺を標的へと変えた。大きく開けた口から鋭い牙を剥ぐ。

俺はとっさにソードを目の前に水平にして突き出す。剣先を左手で支えると、ガキイ、とウォーラーの牙がそれを上下から挟み込む。

すごい力だ。

その勢いに倒れ込みそうになるのを両足でしつかりと踏ん張る。

ハアハア、と生臭い息に俺は思わず顔を背けてしまった。そつになつた。

「こんのもオカミ野郎が！」

ジンの声が聞こえるなり、ガツ、とウォーラーの後頭部になにかが当たつた。

……林檎？

それはジンがリュックサックにたくさん詰め込んでいた林檎だつた。

食べ物を粗末にするなどもつての他だが、今回ばかりはジンに感謝をしなければならない。

後頭部に衝撃を受けたウォーラーは、飛んできた先を確認しようとつい噛んでいたソードを離す。その口はジンの方へと向けられた。今だ！

俺は剣先に添えていた左手を離すと柄を握る手に加える。ドツ！

全体重をソードに預けてウォーラーの腹部を一突きする。ウォーラーは、びくんっ、とひとつ体をはねさせる。

一瞬虚ろな目をしていたが、その顔をだらりと俺の方へ向けたウォーラーはソードに貫かれながらも俺を引き裂こうとその鋭い爪をギラリと光らせた。

これはまずい。

俺は急ぎソードをその腹から引き抜こうとするが、ウォーラーの筋肉は絞まり、思うように引き抜くことができない。

その両腕に存分に力を溜めたウォーラーの爪が、今まさに俺に突き立てられようとした時、

「おつめえり、しつけーんだよ！」

いち早く駆け寄ってきたジンがトドメとばかり、その首にダガーをねじ込む。

俺はソードを手放してその場に尻餅をついた。つまり腰が抜けてしまったのだ。

首から赤い血を噴出すウォーラーは今度こそひとたまりもなかつた。

焦点が合わなくなつた田で立ち尽くすと、そのまま俺の前に倒れ込む。

「へつ、敵を目の前にして余所見するバカがいるかよ
粗い息をついてジンが言い捨てる。

「た、助かったよ、ジン」

「おうよ」

ジンはウォーラーがいよいよ絶命したことを確認すると、その死体をひと蹴りしてどかし、俺に右手を差し出す。

俺はなんとか胸の鼓動を静めるとジンの手を取つて立ち上がる。

「ぼ、僕……なにもできませんでした」

その声に振り返ると、ジンに借りたダガーを構えたままで震えているクラッセがいた。

「ガキはいーんだよ。誰もおめーには期待しちゃいねえ。最初のうちはな」

そう言つジンは本当に氣にも留めていなかつたようだ。

「そういう言い方はないだろ、ジン。クラッセ、大丈夫だ。無理することはないぞ。クラッセだってリベルやレミを守つてくれていただろ？」

ジンはああ言つたが彼も気付いているはずだらう。クラッセもただ震えたまま傍観していただけではない。

なにもできなかつたのは事実だが、ウォーラーと俺たちがやりあつてゐる間もリベルやレミの方へ行かせまいと、しつかりと立ちはだかつていたのが横目で見えていたのだ。

それをわかつてゐるからこそ、口悪くいいながらもジンはそれ以上を追求しない。ただ、彼の性分からして、讃めることができないだけなのだ。

「あ、危なかつたわね」

辛くもウォーラーをなんとか倒した俺たちにリベルが言いかけた。

「まあ待てよりベル。へへ、ピンチはこれからのがつだぜ」
引きつった笑顔でジンがリベルを制する。

その視線はすでに別の方へと向けられていた。

「逃げ、ようか」

ジンの視線に気付いたレミが提案する。

「そうしとくか。さすがに俺らのレベルじゃあ、1匹なんとかすんのがせいぜいだぜ」

とつさのことで俺は失念していた。

そうだ、ウォーラーの恐ろしさはなにも牙や鋭い爪を獣の身体能力を生かして奮つてくることだけではなかつたのだ。

それだけなら、ついこの間まで”普通の人”だつた俺たちにだつて力を合わせることで撃退することができる。

やつらは常に数匹の単位で群れて行動する。だからこそモンスターとしては比較的弱い部類に數えられているウォーラーが旅の脅威として恐れられているのだ。

グルルルル……

血の匂いに誘われたか、うなり声をあげた4匹のウォーラーたちの血走った眼が俺たちに向けられていた。

俺たちの前で肩を揺らす4匹のウォーラーから、うつむきと黒色の湯気が立ち昇っているかのように見えた。

もちろんそれは田の錯覚なのだが、そう見えてしまつほど俺たちにとって田の前の4匹のモンスターは脅威だった。

肩を大きく揺らしていくところからすると遠くから走ってきたのだろうか。まったくもつてこ苦労なことだ。

やつらは俺たちが倒した仲間に近づく。

さきほどウォーラーが1匹だけでいたといつては、さながら“ばぐれウォーラー”ともいったところか。

やつらにしてみれば、弔い合戦ということになるのかもしない。

「俺とジンとで足止めをする。3人はその間に逃げろ」

短く言つてソードを構える。

「げえ、俺も足止め役に入つてんのかよ」

ジンが嫌そうな顔をする。

「やつらとまともにやりあえそつのは俺とおまえしかいないんだ。当たり前だろ?」

俺はやつらを見据えたままでジンに言つた。

「仕方ねえな。やるだけやつてみつか。おい、聞いたろおめーら。俺らが仕掛けつから、その間にひとつと安全などこまで逃げるんだ

「ぜ

ジンは鼻の下を指で軽く撫でて言つた。

もう一方の手はダガーを固く握り締めている。

「シーフって戦闘要員じやないんだぜ本来」

ひとりじりみると田つきを厳しくして口を閉ざす。さすがのジンでもこれ以上は軽口を叩く余裕がないといった様子だった。

「あたしが

「あん?」

「あたしが魔法を使えたら……」こんなとき。役に立てなくてごめん
きっと脣をかみ締めているのだろう。リベルの悔しい気持ちが背
を向けていても伝わってくる。

「ないものねだり言つてもしゃーねーだろが。ほれ行つた行つた。
……とど

しつしつ、と手を振るついでにクラッセに貸していたダガーをぶ
ん取る。

「なにかあつたらおめーがリベルとレミを守んだぜ坊主」
相変わらずの”坊主”扱いだが、クラッセは「はい」とだけ言つ
た。

「よし、行くぞジン！」

俺が突撃しかけたとき、

「ちよいと待て！ いい手つづーのもおこがましいが、逃げ切れる
かもしけねえ策ならあつたぜ」

そう言つてジンはリュックサックの中身をクラッセに投げつける。
「ディールと2人で誘導すっからよ。うまくやれよ」
ジンが言い終えてクラッセが返事する間もなく1匹のウォーラー
がゆらりと揺れる。

「やられてくれるなよジン」

「誰に言つてんだ、おめーこそなつ！」

俺たち2人と4匹のウォーラーが動いたのはほぼ同時だった。
背後ではクラッセたちが走り出す音が聞こえた。

ガキイ！

跳躍してきた先頭のウォーラーの鋭い爪をソードで受ける。

すかさず続く2匹目を横つとびでかわす。

どうやら俺たち2人に對して2匹ずつのコンビで攻撃を仕掛けて
くる腹のようだ。

「まともにやりあおうとするなー 少しの間だけ凌いだら俺たちも
後に続くぞー！」

声をかけるとジンも別の2匹の攻撃をかわして体勢を整えるとこ

ろだった。

「わーってら！ くそつ、服が重くてきりーぜー。」

言つてびしょ濡れの上着を脱ぐ。

「こんなもん、くれてやらあ！」

それを田の前のやつの顔めがけて投げつける。

顔にまとわりつくジンの上着のせいで方向を失つたウォーラーが暴れるが、おかまいなしに牙を抜くもう1匹にジンは「うおつとーすんでのところでかわす。

俺は容赦なしに爪を奮つ2匹のウォーラーの攻撃を、ギリギリのところでソードで受け流した。

「よつしゃ、逃げつか！」

しばしウォーラーたちの猛攻が続いた後、ウォーラーにダガーを投げつけたジンが叫んだ。

「そうだな……もう、これ以上は無理だ

俺たちは頷き合つ。

さすがに1人で2匹も相手にするのは無謀だつた。

倒そうとするのではなく、攻撃を避けることに専念したからこそなんとか凌げただけだ。

「しつこい！」

なおも俺へ向かつて攻撃の手を加えようとすると2匹に思いつきりソードを薙ぎ払う。

全くといつていいほど危なげなく後ろへ跳んで俺の攻撃をかわす2匹のウォーラー。

だが、これでいい。

距離を取つてくれればそれだけ逃げ出す隙もできるといつものだ。

「おりあ！ 嘰らいやがれ！」

リュックサックを手に持つたジンが残りの林檎を投げつける。

「急げジン！」

「おうー！」

ウォーラーたちが怯んだ隙を縫つて俺たちは走り出した。

向かうはクラッセたちの逃げた方向だ。

不幸中の幸いとは今回の場合は、ウォーラーというモンスターがさほど足の速いモンスターではないことだろひ。

本来の四足獣が持ちうる素早さを犠牲にして、やつらは牙と2本の爪を自在に操って攻撃してくるのだ。

戦闘においてはそれが脅威となるのだが、こと獲物を追いかけることに関しては俺たちとさほど足の速さは変わらない。

といつても、やつらは獣が持つ並外れた体力で執拗に追いかけてくる。

すぐに距離は縮まらないにしても、息も絶え絶えな俺たちとウォーラーとでは、いつかは追いつかれてしまふのは目に見えている。

「あいつら、どこに、いやがんだ！」

短く息を吐きながらジンが怒鳴る。

「3人を信じて走ろー！」

俺はジンを励ますように叫び返した。きっとクラッセたちが待つていてくれるはずだ。

だが、いよいよウォーラーたちと俺たちとの距離は一歩もないとほどになつていつた。

「こちよー ディール！ ジン！」

俺はとつさに声のする方を見た。
赤毛が揺れる少女が田に入る。

「リベル！」

リベルが必死に手招きをしていた。

「うし！ スパートかけるぜ！」

走る速度を上げるジンに離されまいと俺は続いた。

リベルは数メートル先の木々の隙間から覗かせていた顔を引っ込める。

俺たちはリベルの隠れた木と向かい合わせの木の間を走り抜けた。4匹のウォーラーが続いて通り抜けようとしたとき、

ビンッ！

左手の視界に入ったクラッセが手に持つロープを力任せに引っ張った。

反対側の木に固く結わえつけられたロープは、ちょうどウォーラーたちの首の辺りにピンと張られる。

突然の出来事にウォーラーは走る勢いを緩めることなどできなかつた。

「うわあっ」

ウォーラーたちが衝突した勢いでクラッセは思わずロープを持つ手を離して盛大に倒れ込んだ。だが、ウォーラーたちもただでは済まない。

先頭の1匹はひっくり返り、後続の3匹と折り重なり合つようこ地面になだれ込む。すると、

バサッ

網の振ってきた辺りを見上げると、そこにはレミがいた。

網にかかつたウォーラーたちは血走った眼でじたばたともがく。

「よっしゃあ！」

「やつたわ！」

ジンとリベルが歎声を上げた。

木に登っていたレミがスルスルと降りてくる。意外と身軽だ。

「逃げましょう！」

したたかに地面へ打ち付けた肩をさすりながらクラッセが言った。

「ああ」

声を張り上げたクラッセに俺は頷く。
さつきまでの彼の弱弱しい面影はそこになく、仲間を守る、という確固たる意思だけがクラッセからは感じられた。

男子たるもの三日会わば……と言つが、こういった逆境の中で彼も少し成長したのかもしない。

「あんま丈夫な網じゃねーからな、やつらがもがいてこひもひも、とつととトンズラすつぜ」

「そうね！」

「うん」

リベルとレミが揃つて返事をする。

息も落ち着かぬまま再び走り出すジンに4人が続こうとした時だ。
厄介事とはどいつも輪をかけて、俺たちの行く手を阻もうとするのだった。

「普段……」

小さな半透明の球体が浮かんでいた。

まるで石鹼水でできたシャボン玉かなにかのようだった。

気がつくとそれは俺たちを囲むように、おびただしい数が浮かんでおり、「今度はなんなんだよ！」と立ち止まつたジンが思々しげに頭を搔いた。

俺は気にせず走り抜けようかと考えたが、レミの一言に思いとどりまつた。

「ブレス、かな」

「ブレス？」

聞きなれぬ名前に俺は聞き返す。

「そ、ひ。見たことが、あるよ。これは最もポピュラーな、ブレス、の仕業だね。他にも、炎を吐くのも、いれば、毒の霧を吐くのも、いるね。そのシャボン玉には触れない、方がいいよ」

“触れるな”といつレミの警告に、伸ばしかけた指先を引っ込むジン。

「それを先に言えつつ。思わずさわっちまつとこだつたぜ」

大袈裟によろけたジンが唇をとがらせる。

「破裂すると、酸、の液体が飛び散る」

ぞつとしないことをレミは坦々と語った。

レミが言つにはブレスというモンスターはその名の通り種々な種々な”ブレス”を吐く亞種も存在しているらしい。

あとで聞いたところによると、炎を吐くのはレッドブレス、毒の霧を吐くのはポイズンブレスと言つよつで、このシャボン玉のよつな球体はそのブレスの中でも”普通のブレス”と呼ばれるやつの特殊能力なのだそうだ。

「やだ！　すぐに網から脱出してくるわよー。ビリするのーーー！」

焦りを隠さずにリベルが振り返る。

俺もつられて振り返ると、そう遠くない場所に転がっているウオーラーの1匹と目が合つた。

やつらはまだ窮屈な網の中でもがいていた。知能が高くないのが幸いしたか、網を咬みやぶるという発想にすぐには至らず、狭い網の中で押し合いを繰り返していた。

「酸をかぶった獲物に、襲いかかってくるけど、なにもしなければ、なにも、ない」

「それならどうすればいいんだ？！」

煮え切らないレミの説明にまた皮鎧の中身がじつとうと汗ばんでくるのを感じた。

「なあ……ありやあ、浮かんだままなのか？」

じつと観察していたジンが呟く。

俺はハツとして、ジンに習ってよくよく観察してみると、するとシャ

ボン玉は数えきれないほどの数が浮いているが、どれを見ても地面に落ちてくる気配はなかった。

ジンの間にレミーが頭を縦に振る。

「そう、プレスといつても、あのシャボン玉は、実は蜘蛛の巣の、 ようなもの。だから」

レミーが言い終える前に唇の端を上げるジン。俺もすぐにレミーの言葉の意味に思い至る。

「そうとなりや行くぜ！」

こんな状況にあってもレミーが落ち着いている理由がようやくわかつた。

ふかふかと浮かんでいるように見えるそのシャボン玉のよつな球体だが、実は張り巡らされた目に見えない糸のせいで宙に浮かんでいるかのように見せてているのだ。だからそのシャボン玉が地に落ちることはない。

ジンはじっと観察していて、シャボン玉が落ちてこないことに気がついたのだ。

気がつかないうちに取り囲まれていたものだから、俺はジンが言わなければまさか宙に固定されているなどとは夢には思わなかつた。要は固定されているシャボン玉の下を潜り抜ければいいだけのことだ。

”プレス”と言いながら、吐いた糸を張り巡らせていくとは、まさに蜘蛛のようだと俺は思った。

だが、その蜘蛛の巣の秘密を知るもののがいなければ、はたまたジンのよとに気が付く者がいなければ、俺たちはとても無傷ではいられなかつたはずだ。

もし気に留めずに触つてしまつていたとしたら……最悪の結末を想像すると身の毛もよだつ気持ちになる。

「え？！ なになに？！」

まだよくわかつていのリベルに俺はかいつまんで説明する。

「あのシャボン玉みたいなのが下に落ちてくることはないんだ。 田

に見えない糸が張り巡らされている蜘蛛の巣のようになつてゐるらしい。だから這つてあの下を通り抜けられるぞ」

そうしてゐる間に素早く向ひの側へと抜けたジン、そしてレミが

振り返る。

「おうひ、とひとと来いよ！ げげ、きやがるぜー。」

ジンの声に慌てて球体の下へと滑り込む。

リベルも急ぐ。

「い、急いで！」

その間にシャボン玉の蜘蛛の巣を抜け終えたクラッセも叫ぶ。背後に獣の粗い息遣いが近づいてくるのがわかつた。

「きやあ、きやあ！」

悲鳴を上げながらリベルも球体の下を潜り抜けまる。

俺もほぼ同時だ。

ブレスの出現に肝を冷やしたが、どうやら俺たちはツイっていたようだ。

全員がシャボン玉の向こう側に逃げると、すぐに追いついてきたウォーラーはその球体に気が付くこともなくつっこんだ。

パチンパチン、と音はしなかつたが、ウォーラーたちが触れるなり割れたシャボン玉からは青白い液体が飛び散った。

レミから話を聞いていても、やつらの末路は想像だにしないものだった。

まともに酸を浴びたウォーラーたちは声にもならなくなつなおぞましい悲鳴を上げ、顔から手足からとまるみるうちに焼け爛れていった。

薄茶色の毛並みは見るも無残に失われていき、剥きだしになつた皮膚がそれを見る俺たちの目を手の平で覆わせた。

するとどこからともなく現れたのは、泡の塊のような人型のモンスターだった。

ウォーラーたちを焼いた酸と同じく青白い泡の塊で、それはのそりのそりとやつらに歩み寄ると、ゆっくりと広がり4足のウォーラ

ーを包み込んでいった。

その光景はスライムが小動物を捕食するときのようだった。

「え、えげつねえ」

ジンの顔が歪む。

一步間違えば俺たちもああなっていたのだ。ブレスのおかげで助かったとはいえ、生きた心地がしないのもまた事実だった。

「あのブレスというモンスターは、酸を浴びた獲物だけをああやつて捕まえるんだよな？」

「そう。でも、また同じことを、やられると、厄介だよ。早く、逃げよう」

「よし、逃げるぞ2人共」

レミの言つ通りだ。

俺は田の前で絶句しているリベルとクラッセに声をかける。

「あれって本来あたしたちみたいのが遭遇するようなモンスターなのかしら」「うう」とリベルが呟く。

酒場のマスターが言つていたことを俺も思い出す。
新米冒険者には手頃な仕事だと言つていたはずだ。もしかすると、本当にジンが言つていたように、この森では”なにか”が起つているのか？

だが、

「あーゆーのもいるひつた。普通じゃねー気もするけどよ、現実を見ていいこいつ。街の外は俺らが思つてるよりもずっと危険なんだよ」

ジンがリベルの肩をぽんと叩く。

「行こう」

リベルの気持ちもわかる。

わかるが、ジンの言つ通りに冒険者という稼業は俺たちが思つていたよりも過酷なだけということなのかもしれない。
つい言葉少なになってしまった俺に、4人ともが頷いた。

蝶が舞つた。俺の鼻先をくすぐつていく。

地面に突つ伏したジンが死にそうな顔をしている。

川に落ちてズブ濡れになつたままで、あれだけ動き回つたのだから当然かもしない。

「ぶえつくしょい！」

そう思つてゐるジンがくしゃみをした。

辺りには野の花がちらほらと咲いていた。日差しは一段と増したようだ。

すぐ傍の木の枝に止まつてゐる小鳥が、まるでなにかともなかつたかのようにピーチクパークやつていた。

「ここまで逃げればもう追つてこないですよね」

クラッセが不安氣な顔で尋ねる。

「だと、いいけどな」

俺も少々疲れた。どことなく体中が軋んでいる気がする。

ここがウォーラー や ブレスがいた場所から”だいぶ離れた場所”としかわからない。

方角を確認する余裕などあるわけもなく、やつとこも逃げてくるのが精一杯だつたからだ。

なんとも恐ろしい目に遭つた。

ウォーラーに関して言えば普通に隣町へ向かうときには襲つてくるときもあつた。

もちろんモンスターがほとんど生息していらない森だつてある。そ�でなければ狩猟という生業が成り立つこともない。

この辺りの街や村のことを言えば、ウォーラーが現れるといえ人里にはそう現れることも少なく、群れをなして現れたとしても大きな街道には冒険者がよく行き交つてゐるために、今まであまり脅威に感じたことはなかつた。通りがかりの冒険者がモンスター

ーを撃退してくれることもざらだ。

だが、一旦街を離れてしまえば助けてくれる人もいない。自分たちの身は自分たちで守るしかないのだ。

そして、ブレスというモンスター。

レミがその存在を知っていたからいいものの、そうでなければあらぬ場で全滅という事態もありえることだった。レミに感謝しなければならない。

そのレミだが、彼女は実に知識が豊富だつた。

依頼の品である薬草のことを知っていたのも驚きだが、他にも食べられる野草から薬用に用いられる物まで詳しかつた。

また、歴史やモンスターの性質にまで、幅広い知識を持つていた。これで俺たちと同じレベル1なのかと思うと頭が下がる思いだが、そんなレミが多くの知識を持ちえているのには彼女のパーティ内で位置する役割、つまり”クラス”というものにその理由がある。

ここで改めて冒険者というものについて詳しく説明しようと思つ。

冒険者には”クラス”というものがある。

簡単に言えば職業みたいなもので、数人の冒険者で結成される”パーティ”の中における役割分担を決めるひとつの中安みたいなものだ。

パーティとは冒険者の1グループを指して言い、要するにパーティを組んだ冒険者同士は”仲間”だということだ。

冒険者たちはそのクラスを中安にしてパーティを組むか否かを決定することも少なくない。

クラスは個人の素質や技能、そしてどういったクラスになりたいかという希望を踏まえた上で、冒険者ギルドのギルド員と相談して決めることとなる。

自警戦士団の頃にはそういう分類はなかつたのだが、時の経過と共に多様化する様々なモンスターへ対応するために制定されたのだ。

そのためギルドではクラス別に、新米冒険者向けの講習会や実践

形式の訓練を催していたりもする。

期間は短期のものから長期間に渡つて行われるものもあり、ほぼ無料で受けられるが一部有料のものもある。

その中で俺はファイターというクラスに当たる。

ギルドに登録された冒険者としては最もその数が多く、適正検査もたいして難易度は高くないため、比較的誰にでもなることができるのである。

突き詰めれば、それなりに体力があつて剣を振れるくらいの腕力があれば、たとえ女であろうとなんだろうとなることができるクラスだ。主にモンスターをその腕力でもつてねじ伏せることが役割と言える。

ジンの場合はシーフだが、こちらもその数はファイターに次ぐ比重を占める。

冒険を進めていく上で、危険を感じることのできるシーフは欠かすことのできないクラスでもあるため、1パーティに1人いるのが常道とされているクラスなのだ。

とはいって、ファイターほど簡単になれるわけではない。

冒険を円滑に進めるためのスキルを身につけられるくらいの資質はもつていなければならぬらしい。

だからシーフになるためには適正検査が一番ものを言う。それに資質があれば冒険を重ねることで自然に身につくようだが、素質のない者には全く向かないクラスであるとも言える。

その点ではジンには概ね素質があるようだった。

ジンは今回の依頼を受ける前には、酒場で依頼が舞い込むのを待ちながらカードマジックなどを披露しては俺たちを湧かせた。

手先の器用さという面ではなかなか良いものを持っているようで、ジンは自慢気に振舞つていた。

そしてレミのクラスはというと、これは耳慣れない単語だが、パーソンというクラスで、”博識な人”という意味らしい。

パーソンというクラスは少々特殊で、俺たちファイターやシーフ

のように経験がなくともなれるわけではない。このクラスに就くにはそれなりの知識を最初から持つていなければならない。

それはそうだ、博識な人、という意味のクラスなのに無知な者が就けるわけはない。

だからパーソンの冒険者に出会う確率は極めて低い。

俺たちとは違つて適正検査だけではなく、とても大変な試験も受けなければパーソンにはなれないそうだ。

パーソンになるためにギルドではパーソン希望者専用の講習も行つてているとのことだが、実はレミはその講習もまったく受けずに合格したらしく。

一体今までどんな経験を積んできたのだろうと思つてしまつ。

「ホオズリソウが、あるよ」

そのレミが雑草を指して言つた。

『ホオズリソウ?』

俺たちは声を揃えて聞き返す。

「うん。肉厚で……草なのに、肉厚というのも、おかしい、けど。昔の自警戦士団、時代には、よく酒のつまみにして、食べられて、いたね。燻製にして……草だから、燻製じゃない、けど。他にもいろんな、方法で調理、できるよ」

俺はそのホオズリソウとやらを眺めて「へえ~」と唸つた。陽還り草にも負けず劣らずの大きな葉だが、レミの言う通り分厚い。色は緑だが、彼女が言つには火を通すと肉と見た目がまったく変わらなくなるのだそうだ。

「ほんとにうめえのかよ? !」

半信半疑でジンがその草を摘む。

「どう見てもただの葉っぱよねえ」

その様子を眺めながらリベルが言つ。

俺もリベルに同感だ。これが焼いたら肉と変わらない味になるとは思えなかつた。

しかし、食感といい味といい肉そのものになるとのことだ。

「見つけたら、頬ずりしたくなるほど、嬉しく、なるからホオズリソウ」

不思議そうな顔をしている俺たちにレミが付け足して言った。

「とにかく食べてみたいですね、そのホオズリソウ」

「うーん、食べてみないことには、にわかに信じがたいな」と言うもののレミがそう言うのならそうなのだろう。

「ここならモンスターも襲つてこないんじゃない? なんかお花とか咲いてるし平和そのものって感じがするもの。うん、きっと大丈夫よ」

花が咲いているからといってモンスターが出てこない根拠にはならない。

だが俺は実を言つと腹の虫が今にも騒ぎ出しそうだった。
だからリベルに習つて楽観的に考えることにした。

「そーいや腹減つたぜ。俺つてよく考えたら今日はまだあの林檎しか食つてねーしょ」

ジンはホオズリソウを食べることに大賛成のようだ。

「なんか火を起こすもん持つてねーか?」

「あ、僕持つてますよ。火起こしセット。冒険者価格で、しかも特売だつたんですよ」

クラッセが嬉しそうに言つてバッグからそれを取り出す。

「それにジンさんも水に濡れたまま服を乾かしていないですね。火を起こしますから枝とか枯葉とか燃えるものを用意してきてもらえますか?」

「よしきた!」

ジンは早速立ち上がると腕を回す。

俺も「よし」と返事をして立ち上がった。

それを合図にして、リベルとレミは辺りにごじんまりと生えていた残りのホオズリソウの根元を、ナイフで丁寧に切りはじめる。太陽はもうそろそろ俺たちの真上に来ようとしていた。

花の香りに誘われたか、また蝶が俺たちの近くでひらひらと飛ん

でいた。

ジンが枯葉を拾い、俺が小枝を両手に抱えてやつてくると、ちょうど火が起きたばかりのようで、小さな灯りがクラッセたち3人が囲んでいる中から漏れて見えた。

火起こし用の道具といつても、すぐに火が起こせるわけではない。なにぶん携帯に適したサイズの単純な造りのものだ。それでも原始的に木と木をこすり合わせて火を着けるよりははるかにその作業は早い。

「あつ、いま火が着いたところですよ。早く枝を並べましょ」

「いいタイミングじゃねえか。よっしゃディール、急ぐぜ」

ジンは待ちきれないといった様子で俺を急かす。

リベルとレミはすでに準備を終えたようで、ホオズリソウは細い枝に串刺しになっていた。

焼くと肉のようになるといつても、今の状態ではただの草だ。ホオズリソウを知らない者が見たら変な顔をされてしまうだろう。その状況を想像すると思わず笑えてしまう。

「なあに？ ディールつたらなにが可笑しいの？」

枝や枯葉を並べながらニヤついてしまったところをリベルに見咎められてしまった。

「い、いや。どこからどう見ても草だからさ。なんだか可笑しくって」

「そうよねえ、ジンが言ったことなら信じていないわあ

なるほど、という顔をしてからリベルはジンを見る。

「けつ、俺のどこが信じられねえつんだよ」

ジンは心外そうな顔でリベルを睨む。

「べつにい」

睨まれてもリベルはどう吹く風といったような表情だ。

「焼こう、か」

「そうですね」

「火も十分に枝に燃え移ってきたな」

ジンとリベルのやり取りに慣れっこになってしまった俺たち3人は、彼らを無視してホオズリソウが刺さっている枝の太い方を焼き火の周りに突き立てる。

するとみると、うちにその色が変わっていく。

「うつひょー！ マジで肉みてえじゃねーか！ こいつあすげえ」リベルとの言い合いを中断したジンが感嘆の声を上げる。

「ほんと。それになんだかい匂いもしてきたんじやない？」

「んだな」

「すごいですね。このホオズリソウって初めて聞きましたけど、珍しい草なんですか？」

クラッセがレミに聞く。

「ここのところ、見かけないね。昔は、どこにでもあった、そうだけど。肉食の、動物たちも好んで食べていた、らしいからね。絶滅危惧種、かな」

レミの説明にクラッセは「けつこうすう」という草なんですね」と分かつたような分からなかつたような顔で何度も頷いていた。

「そうそう、パンも出しましょ。少し早いけどランチね」リベルが取り出したパンを全員に配る。

「この匂いにつられてモンスターがきたりしてな」

白い歯を見せてなにげなく言ったジンが4人から非難の視線を浴びる。

「もうー！ これから食事にするつてときに不吉なこと言わないでよ！」

「ばかジン！」

「空氣、読めないん、だね」

「そうなつたらわづなつたで逃げるだけですよ。全く、野暮ですよジンさん」

「モンスターも焚き火は苦手だろ？ いたずらに不安にさせむよなこと言つなよ」

これが眞面目な顔で言つたのならば俺たちも眞剣に考えるところだが、ジンが笑いながらあつけらかんと言つたものだから、俺たちがムツとくるのも仕方のない」とだ。

「へへへい、失礼しゃーした」

そう言つジンは「もういい具合に仕上じじょうがつたんじゃね？」と俺たちの集中攻撃も気にせずホオズリソウにかぶりつく。

「うんめえ」

そんなジンの様子に怒つていたことなど忘れて俺たちも皿を手に取る。

「これは……肉そのものの味だな。食感も、うん」

「ほんと、うそみたい」

「だろ？！ すげーよなこれ」

「うんうん、こんなのがあるなんてね。レレ感謝だわ

「香辛料とかもあればなおさらなんですけどね」

「あるよ」

「まじまじ？！ それを先に言いえよーレレレやんよお」

「次、俺にも貸してくれジン」

こうして俺たちは予想外のご馳走に舌鼓を打つた。

人間とは不思議なもので、どんなに苦しいことがあつたとしても、腹が膨れるとなんとか頑張ろうという気になれる。

幸いなことにモンスターが匂いにつられてやつてくることもなく、俺たちはホオズリソウを食べ終えてしばしの満足感を味わっていた。ジンの服もすっかり乾いたようで、彼はすごぶる上機嫌だった。森の中は相変わらず鳥たちがさえずっている。

また蝶が舞つた。黒い蝶だつた。

「なんかさつきから黒いのばつかだよな

同じく蝶を見つめていたジンが俺に声をかける。

「そうだな。なんていう蝶なんだろつ。レミ、知つてているか？」

「……知らない」

少し考えていたレミが首を捻る。

「レミにも知らないことがあるのねえ」

しみじみと言つリベルに、そりやそつだつと心の中でつっこむ。いくらパーソンだといつても知らないこともあるだろひ。世界は広いのだ。

「それよりこれからどうすんだよ。地図も見れないこたあねーが、俺らが今どこにいんのかがわからんきやー意味がねーしな」

乾いてカピカピになつた地図を指でつまんで見せる。

「でもまあ、だいたいの方角ならわかるぜ。太陽が出てるからな」日差しを手で遮りながらジンは太陽を仰いだ。

「ねえ、陽還り草って地図に印がついていた場所にしか生えてないの？ 近くにあつたらパパッと採つておしまいにできるのにわ」

リベルは素朴な疑問を口にする。

美味しいものも食べて、依頼の品を入手、じゃあ帰ります。と、いけたらどんなに良いだろうか。

きつとりベルはそんなことを考えてしまつたのではないだろうか。それはリベルだけでなく俺も同じ気分だ。

「ばつか、そんな簡単にゲットできんなら俺らに依頼なんて回つてこねーんだよ」

ジンはそんなリベルの言葉を一蹴した。

「あとはレミ頼りかな。といつても、きつともうそんなに遠い場所じゃないんだろうから、すぐに見つかる」

ようやく再び活氣付いてきたパーテイだ。暗い話題は持ち込まないようになに言葉を選んで俺は言った。

それにウォーラーたちと遭遇するまでにそこそこ距離は稼いだはずだ。俺が言つたこともあながち間違いではないだろう。

「そろそろ出発しましょうか。まさか日が暮れるまで陽還り草を探し回ることもないでしちうけれど、早めに見つけておきたいですよね」

クラッセが切り出す。

「なにがあるかわからないしな。よし、火の後始末をしてから出發しよう。山火事にでもなつたら大変だ」

俺はそう言って立ち上がる。

一人だるそうな表情のジンを残してリベルとレミ、クラッセも片付けを始めた。

「俺、風邪ひいちつたみたい

「なに？ 大丈夫か？」

ジンはひとつ咳払いをした。

冒険者にとって体調不良は大敵だ。

体の具合が悪いからといってモンスターは襲うのを待ってくれるわけがない。いざというときに力が出せずにやられてしまつては笑い話にもならない。

「どうせ仮病でしょ。ちゃきちゃき働きなさいよ

「いでで！ この鬼女！」

心配していた俺は、リベルに耳をひっぱられて立ち上がるジンにため息をつく。

まったくこいつって男は……。

モンスターが現れたときなどでは頼りになるといつのに、どうしてこういう場面では手を抜きたがるのか。

それにしてリベルはジンのことをよくわかつていよいようだ。伊達にいつも喧嘩をしていないなと俺は感心した。

「よし、準備はできたな。出発しよう

焚き火の始末を終え身支度を完了した3人に声をかける。

ジンはリュックサックを背負つと「あいよ」と仏頂面で返事をした。

「ふふ」

そのジンの様子にレミは唇の端を上げる。

「笑つてゐる場合じゃないぞ」

俺が腰に手を当てて眉根を寄せると、

「こいつのも、楽しい、ね。ティールたちと出合えて、よかつたよ」

なおもクスクスと笑うレミ。なにじとか返事をしようとするが、

「おら！ 行くんだる、とつとと出発しようぜ」

すでに先頭を歩き出していたジンが怒鳴った。

俺はレミと顔を見合わせる。なんだか笑いが込み上げてきた。

そうだ、こういうのも悪くはない。

他人からみれば取るに足らない仕事かもしれないが、俺たちにとってはせつかくの大冒険だ。楽しまなければ損ではないか？

またウォーラーやブレス、”巨大サポート”のようなモンスターにも遭遇するだろう。

だが、俺たちが力を合わせればどんな困難でも乗り越えられそうな気がする。

「なに？ またティールつたら意味深な笑顔になつたりして」

先を行ぐりベルが振り返つて言った。

「なんでもないさ！ 行こう、レミ」

クラッセもジンの後ろから笑みを返す。

どこから取り出したか林檎を片手に、口をもぐもぐと動かしてい るジンも笑っていた。

「ちょっとお、その林檎どうしたのよー ずるいじゃない！」

「あとあと考えて手は打つもんだ」

しれっとジンが答える。

あのときウォーラーに投げつけた林檎だったが、ジンは全ては投げずに取つておいたようだ。

「もう残つてないんですか？ 僕も食べたいですよ」「ねーよ。これ、最後の1個。つか、おめー散々食つたらうが」ジンは手を振つて邪険に返す。

どべつ

その途端、クラッセが前のめりに転んだ。

「おいおい、足元には気をつけろよクラッセ」

3人に追いついたレミと俺が駆け寄る。

「問題、ないね」

泥まみれのクラッセの顔を見てレミが言つた。ちょうど泥濘まりになつていたらしい。

クラッセが泣きそうな顔になつた。

「つたく、これだから坊主はよ」

「人のこと言えないでしょ！ ばかジンだつて川に落ちたくせに」

「ありやー不可抗力だつつの。ぐだんねーこと蒸し返すな！」

「はじまつた、ね」

「無視しておこう。付き合つだけ体力の無駄だ」

前言撤回。こんな調子で大丈夫なのだろうか？

だが、俺たちの冒険は始まつたばかりだ。

苦しいことがこの先もあるだろうが、前だけを向いて進もう。俺たちにはそれしかできることがないのだから。

決意も新たに誓つ俺の目の前をさつきの黒い蝶がひらりと舞つた。

シーフであるジンの方向感覚を信じて俺たちは森の中を進んだ。さつきまでのモンスターの猛攻が嘘のように、ぱつたりと何も出てこなくなつた。

ジンは太陽の位置を確認しながら、記憶にある地図に記された印の場所へと俺たちを導いた。

レミの指示を受けながらリベルとクラッセは依頼の品である陽還

り草を探す。

俺はモンスターが現れたらすくに対処できるよつこと周囲の警戒に努めた。

地図は地形などは確認できるものの、目的地の印は川の水で滲んで消えてしまっていた。そうすると頼りはジンの記憶と方向感覚によつて検討付けられた道を進むのみだったが、レミによると「近い」のだそうだ。

日陰草という草がある。

それは陽還り草のある付近に群生しており、近くへ向かうにつれてその数が増していくとレミは言った。

だから日陰草の多くなる方へ向かえばおのずと陽還り草を発見できるといつわけだ。それはまさに太陽と影の関係に似ている。

リベルは日陰草を見つけて「もうすぐねつ」とはしゃいだ。

日陰草自体はただの雑草で、表面が黄緑色のギザギザにとがつた葉を裏返すと濃い緑になつていた。

「ブユッフェに戻つたら美味しいものでも食べに行きたいわねえ」リベルが言った。

少し気が早いとは思うが気持ちはわかる。

初の依頼で大変な目に遭つたのだから、依頼を終えた暁には羽でも伸ばしたいところだ。

「そーだなー。ホオヅエソウも美味かつたけどよ、やつぱちゃんとと調理されたもんも食いてえわな」

辺りを見渡していた顔をこちらへ向けてジンが言つた。

「ホオズリソウ、だよ」

「あ、そうだつけな。へへ、似てるからよ。ホオズリソウな」レミに指摘され言い直したジンは「ブユッフェつたらやつぱパスタだよな」と言いながら唾を飲み込んだ。

「それも捨てがたいけど、あたしはやつぱり“まほろば亭”的キノコと彩り野菜のリゾットがいいわ。すこく有名だもの」

リベルが言つと、「あれは有名ですよね」とクラッセも話に加わ

つた。

俺はリベルたちの話を小耳に入れながらもぬかりなく隅々まで視線を這わせた。

ブュッフェとは俺たちが依頼を受けた酒場のある街だ。そう大きくはないが、一通りの施設は揃つており、また食の街としても有名だ。

冒険者ギルドの支店があるのもブュッフェであり、俺たちが出会ったのもそこだ。

リベルの言う“まほろば亭”はブュッフェでは1、2を争うほど有名店であり、いわば食の街ブュッフェの顔として有名だ。ただ、有名であるがゆえにどの料理もいい値段がするので、リベルはつねづね「行きたい行きたい」と言っていたものの行けずに今に至っているわけだ。

「報酬は少ないがこの仕事を終えて戻ったら、祝杯を上げる場所はそこにしようか」

「そうしようぜ。なかなか行ける機会なんてねーもんな」

「賛成、賛成！」

「いいですね、それでいきましょう！」

飛び跳ねて喜ぶリベル。ジンもクラッセも行く気満々だ。俺はそこで1人だけ返事がないことに気付きレミを見た。

「あ

レミが小さく漏らす。

どうやら日陰草が集まっている先を田で追つていたようだ、俺たちの視線に気がつくと離れた場所を指さす。

「お、みつけた？」

ジンがレミの指の先を覗き込む。

「多分、ね」

“多分”と言いながらも自信ありげにレミが言った。

「幸先いいですね」

クラッセが言った。

散々モンスターに追いかけ回されて幸先もなにもないと思つが、ともかくレミが見つけたものが陽還り草であれば依頼はほぼ成功したようなものだ。

真っ先にジンが駆ける。それにリベルが続いた。

俺も逸る気持ちを落ち着かせて走った。

「うおおおおおお！」

「見つけたあーー！」

ジンとリベルの声が森に響く。

「あー、本当に橙なんですね」

クラッセが言つよつて、そこには鮮やかな橙色で葉の大きな草があつた。

田をこらしてよく見ると、輪郭がギザギザになつておつ、レミの説明と一致していた。

「確かにこれでいいんだな？」レミ

「ビンゴ、だね」

俺が念を押すとレミは頷く。

「どれくらい必要なんでしたつけ？」

「適当でいいんじゃね。むしろ摘めるだけ摘んじまえって。記念だ

記念

初の依頼を成功させたことができそつて、興奮気味のジンはクラッセを煽る。

「じゃ、たくさん摘んじゃいましょう」

そう言つクラッセ。

レミはすでに黙々と摘んでいた。

「もうそのくらいでいいんじゃないか？」

しばらくして俺は言つた。

ジンに煽られたクラッセはびつ見ても過剰なくらい摘もうとしていたからだ。

これを素直というのか愚直というのか、俺には判断しかねる。

「つていうか、ジンったら手伝いなさいよね

「さほるの、ずるこよ」

リベルとレミが草を摘む手を止める。

俺は引き続き辺りを警戒しつつもジンを見る。

また面倒なことをクラッセたちに押し付けて、自分は休んでいるだけなのかと思つたが、ジンは真剣な表情だった。

「なんか妙じやねえか？」

なおも文句を言おうと口を開きかけるリベルを手で制してジンが言う。

「はい？」

「なにがだ？」

クラッセと俺は同時に聞き返す。

ジンは睨みつけるような表情のままで言つ。

「妙つつか……氣持ち悪いぜ。なんだか監視されてるみてえでよ。なんなんだ、あいつら。ずっと氣になつてみてりやあ、だんだんと数が増えてきてるじゃねーか。早く取るもん取つたら街に戻った方がいいぜ」

俺たちは辺りを見た。

「なに？！」

同じく見渡したリベルが絶句する。

「前に、なにかが起こってるかもしんねえって話をしたよな？自分で言つたことだけに田を疑つちまうような光景だが、マジでなんかが起こってるかもしんねえ。いや、なにかが起こりつつある気がしてなんねえ」

そして口をつぐむジン。

俺も自分の目を疑つた。

さきほどから俺たちの周りをひらひらと舞つていた黒い蝶。俺たちが陽遣り草を見つける前まではちらほらと見かける程度の数だったものが、気がつくと俺たちの周りを取り囲むくらいにその数を増していた。

一体どこからこんなに集まってきたのか。

いや、それ以上になぜこんなとこにこんなにも得体の知れない黒く不気味な蝶が潜んでいたのか。

黒い蝶は俺たちが呆然として立ち尽くしている間にもどりからともなく次々とやってきては、不気味に羽ばたいていた。

なんて不吉な光景なんだろつ。

「俺たちに……集まってきたのか……？」

クアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

つい口をついて出た俺の言葉に怪鳥の悲鳴ともつかない奇声が重なる。

リベルの体がビクンと跳ねる。

途端にそれまで穏やかな音色を奏でていたはずの鳥たちが一斉に騒ぎ出す。

鳥たちはまるで発狂でもしたかのようにバサバサと翼を振り乱していた。

一羽の鳥が枝を思い切り蹴るように飛び立った。

それに続くように次々と鳥たちが飛び立つ。

鳥たちは先頭の鳥の後を末広がりに形作って飛んでいき、それを見上げた俺たちの顔に影が落ちた。

一面を覆いつくす黒い蝶、蝶、蝶！

それはまるで悪い夢でも見てているような光景だった。

なおも遠くからは鳥たちがギャアギャアと耳障りな鳴き声で騒いでいた。

さんさんと照りつけていた日差しが空を覆いつくさんとする黒い蝶の漆黒の羽に遮られて、隙間から漏れる細い光の筋は鳥たちが飛び去り際に散らしていった真っ白な羽をキラキラと輝かせている。

黒い蝶の群れは森を昼から夜へと変貌させてしまい、その中で漏れた光によつて煌く鳥の羽が風を受けて舞い踊つていた。

（テハジメニ）

無機質な声が響いた。

その声はまつたくといつていいほど抑揚もなく俺の脳に直接語りかかるよつに入り込んできた。

無機質。

全く感情のないよつに思える声だが、それはなぜだか説明できないが、とても強い悪意をはらんでいるのがわかつた。

そして俺は自分の心の中を狂氣じみた闇が蝕んでいくよつな感覚にとらわれた。

憎い、憎い、憎い。

世の中の全てが憎い。

幸せそうに笑っている連中が憎い。自分を見下した人間が憎い。なぜ自分がこんな扱いを受けるのだ。

そうだ殺してしまえ。全てを無に還してしまえ。

殺せ、殺せ、口口セ。

俺は自分がどうにかなりそうだった。心の奥の奥になにかが渦を巻いているようだ。

脳が揺さぶられるよつで、ひどく吐き氣と眩暈がする。

他のみんなはどうなのか、俺と同じよつになつていいのだろうか、そつは思つてもまともにものを見ることすらできない。

ああ、胸が苦しい、心臓をわしづかみにされたよつにざきざきと痛む。

なんで俺はこんなに苦しい思いをしているのか、なんで俺はこんなところにいるのだろう。

意識が朦朧とする。

血の臭い、辺りにすすり泣く声、咬み殺された両親、俺の両親を殺した奴らが憎い、憎い、殺してしまいたい、なぜ俺はこんなところで苦しんでいるのか。

こんなところに来たのはジンに誘われたからだ、そうだジンに誘われなければ俺はこんな苦しみを味あわずに済んだ、全てはジンのせいだ、いつのこと殺してしまえばいいのだ、殺してしまえばい

い、全てを殺してしまえばラクニナル……。

「だめよ！ いけない！」

俺は弾かれたように顔を上げた。

急激に空気が肺へ送られて俺は大きく咳き込んだ。

目を開けて辺りを見る。

すぐ傍のクラッセが頭を抱え込んで下を向いていた顔を上げる。

大粒の涙が頬を伝っていた。

レミはその場で横たわっていた体を起こし頭をさする。

ジンはダガーを抜き払ったままの格好で硬直していた。

「だめ……逃げなくてはだめよ……。このままじゃ……」「

顔面蒼白のリベルがうわ言のように繰り返す。

その姿は今にも倒れこんでしまいそうだったが、気力だけで持ちこたえているようだつた。

俺は慌ててリベルのもとへ駆け寄つた。

するとリベルは崩れるように俺に体を預ける。

「リベル」

静かに声をかけるが返事がない。氣を失つてしまつたようだ。

リベルを抱きしめた俺の体は小刻みに震えだす。

さつきまでの闇に蝕まれていくような感覚が忘れられない。

俺の心を支配した狂気がまだ残つていそうで、俺は自分の手の平を見つめて握つたり開いたりしてそれが自分の意思によるものであることを確認した。

俺たちは極めて危険な状態だったに違いない。リベルの声がなければ、あのまま心の闇が命令する通りに狂気に身を任せていたらう。

リベルは俺たちの中で唯一魔力を持っている。

それが関係しているのかどうかはわからないが、そのおかげで彼女だけは心の闇に打ち克つことができたのかもしれない。
(心の闇？ さっきのは俺の本心だったのか……?)

「大丈夫……かよ、ディール」

ふいに湧き上がる疑問をジンの声が拵つた。

俺はすぐに「しつかりしのクラッセ！ ハハ、立てるか？！ ジ

ンも！ 物騒なものは早くしまつて逃げるぞー！」

3人に叫ぶとリベルを背負つ。

「やばかつた……な」

ジンもまた俺と同じように抗いがたい殺意の衝動に囚われていたのだろうか。その表情は苦しそうに短く息を吐いていた。

そして固く握り締めた右手にダガーがあるのに気付くと、自分が闇に囚われかけていたであることを察して鞘にしまった。

「うわあああああああ！ なんでっ、なんでなんだよおー・ちく

ちゅう！」

俺とジンは同時に振り向く。

するとクラッセが泣き叫びながら拳を地面に叩きつける。その拳が鮮やかな血の色に滲んだ。

「どわつ！ おい、クラッセは俺が運んでいくわ！ ビツやらまだ悪夢から覚めてねーらしい」

そう言つてジンは今もなお泣き叫んでいるクラッセの首に強烈な手刀をくらわせた。

「あッ……！」

途切れた叫び声と共に、大きく見開いていた目を閉じるクラッセを抱ぐと、ジンはレミを見る。

レミはゆらりと立ち上がり「大丈夫」とだけ答えた。

気丈なレミに俺が胸を撫で下ろして安心していくと、

(ニガシテタマルモノ力)

再び悪夢の声が脳に流れてくる。

「黙れ！ 一度も操られてたまるか！」

なおも入り込もうとする無機質な声を振り払うように俺は叫んだ。そうだ、もう一度と闇に飲み込まれてたまるか。あんな途方もない苦痛を味わうのもまっぴらごめんだが、仲間であるジンのことを殺したいなどと絶対に考えたくはない！

「逃げるぞ！」

俺たちは同時に駆け出した。

逃げるアテなんかない。だけど逃げなければ、俺たちはどうにかなってしまう。

ジンがクラッセを担いだまま、行く手を阻む黒い蝶を手で払いながら走る。

「あれは、なに……？」

ジンの横を走るレミが振り返つて言った。

思わず俺も振り返る。

空を覆っていた黒い蝶の群れは、宙のある一点に集まつていった。それはすぐに俺の倍ほどの大きさになると、魔力のない俺たちにでも感じ取れるほど禍々しいオーラを放ち始めた。

「気に留めるな！ 走れ、走れ！」

俺はレミに叫んで走った。

背後に迫り来る気配につい腕の力が緩みそうになりながらもリベルを背負つたまま走つた。するとどうか。

あまりに唐突で思考が一旦停止した。

すぐ目の前を走つていたクラッセを担いだジン、それとレミがいきなり姿を消したのだ。

「ジン……クラッセ！ レミー！」

頭の中はパニックだった。

一体どうすれば、たった今日の前にいた人間が消えるというのだろうか。俺の頭の中を恐ろしい想像がよぎる。

(いそいで。はやく)

声が聞こえた。

「だ、誰だ！」

俺は声を張り上げて叫ぶ。

(はやくしないと、おいつかれちゃう)

俺の中でなにかが弾けた。

考えていっても仕方のないことはこれ以上考えない。

俺に”いそげ”と言ひ声が一体何者かはわからないが、少なくともここで立ち止まっているよつは従うほつがマシに思えた。

「えーーー！ ままよ！」

ぐつと唇をかみ締めて走り出す。

体が浮かんだ……ような気がした。

目の前の景色が反転する。

そうして意識が薄れゆくのを感じながら俺は仲間たちの無事を祈った。

3・深淵の魔女

冒険者ギルドはいくつかの街に支部をもつてゐる。

この街にも、ギルドの支部があつた。

俺は坦いだ荷物を床に下ろすと部屋を見渡した。

内部は簡素な造りで無駄なものではなく、受付のギルド員が坦々と業務をこなしていた。

「はい、ファイター志望ですねー」

俺がファイターになりたいと告げると、彼はいたつて平坦な表情のまま書類を手渡す。

「では、ここに名前と年齢と本籍、それと今までの経歴や志望の動機を記入してお待ちくださいね」

言われた通りに書類の空白を埋めて提出し、待つことしばし。「ティールさん、ティールさん。奥の部屋へどうぞ」

椅子から立ち上がる。

俺は若干拍子抜けしていた。

こんなにも事務的な手続きで冒険者になるものなのか。冒険者たちの集う場所というからには剣や甲冑を纏つた像などが飾られているかと勝手に想像していたのだが。

「これではまるでただの事務所だな」

苦笑まじりに漏らす。

通された部屋にはギルド員が3人ほどいて、俺はいくつかの質問に答えた。

すぐに適正検査だといつことどおりに部屋を出ると、そこには俺の生まれ故郷の村があった。

俺はソードを構えると指示されるままに素振りをする。

「よし止め」

ぴたりとソードを振る腕を止めるがギルド員の顔を見上げる。

「肩に力が入りすぎている。闇に心を惑わされたか? そんなこと

ではこの先、生き抜いていくことは難しいぞ

「しかし父さん、俺は仲間たちを守れなかつたのかもしれないんです。とても憎くて仕方がありますでした。きっと俺は自分が許せなかつたんです。あの時、どうして俺は村にいなかつたのか……」

俺はソードを持つ手をじっと見つめる。

もし俺がもつと強い力を持つていれば、ジンやリベル、クラッセにレミ、4人の仲間を危険にさらすことにはならなかつたのかもしない。

そう考えると自分が情けなくなつてしまつ。

「強さとは敵を倒す力のことではない。本物の強さならおまえはすでに持つているはずだ」

肩を落とす俺に父は力強く言った。

その声はどこか懐かしく、滲んだ涙を俺は袖で拭つた。

不思議だ。

なぜいつもの日常がこんなにも懐かしく、また感傷的になつてしまつのだろうか。

俺は畠仕事の合間によく父に稽古をつけてもらつてゐる。大きな街から離れたこの村ではモンスターが出没することも少くないのだ。

そういうたモンスターの襲撃に備えて村の若い者は折りを見て鍛錬を行つてゐる。

この日もいつも通りに稽古をつけでもらつてゐるだけなのに、なぜか今日はおかしい。

「忘れるな。大切なものを守らうとする心こそが本当の強さだ」

そうして俺はその場を後にした。

長い通路を抜けると待合室に戻る。

「デイールさん、ファイター、レベルーです。おめでとうございます」

俺は頭を下げてリングを受け取つた。

次は早速依頼を受けるために酒場へと向かわなくてはならない。

冒険者ギルドでも依頼を受けることができるのだが、酒場には多くの冒険者が集うのでギルド経由ではない依頼も酒場の方に頻繁に入ってくるらしい。

それになによりパーティを組むためには手始めに寄つておかなければならぬのだ。

リングを受け取るやいなや、待合室を後にしようとする。すると不意に背後からかかつた聞き覚えのある声に俺は振り向いた。

「やあ、ディールじゃないか。きみも冒険者に？」

「ペスタ」

そこには幼馴染の顔があつた。

彼はにこやかな顔を向けて立つていた。

およそこれから冒険者になろうとするには似つかわしくない普段着で笑顔を浮かべて俺を見るペスタは、村で最も親しかつた友人であり、彼の2つ年下だった俺の兄のような存在でもあつた。

「ああ、ペスタこそどうしてここにいるんだ？」

普通に考えれば彼も冒険者としての登録をしに来たのだろうとうことがわかるものだが、俺はなぜかそんな質問をした。

「ディールを送りにきたんだよ。これからきみにはとても険しい道が待つてゐるだろうからね。でも安心したよ。きみにはいい仲間がいるからね。ディール、きみはその仲間たちをしつかりと守つていかなければならぬよ。それがファイターとしての勤めなんだろう？」

？

ペスタは俺の反応を待ちながら笑つた。

よく笑う人だつた。

俺とは違つて畠仕事には向かず、読書を楽しむ人だつた。

小さい頃は、いずれ大きな街に出て学者になるという彼に、俺は大きな城で騎士団に入ると冗談まじりで夢を語りあつたものだ。

「わかっているさ。今度こそはきっと守つてみせるから」

俺はそう言って一体なにが“今度こそ”なのだろうと心の奥で思

つた。

「そういえばなんだか奇妙な違和感がある。

「なあペスター……」

「ずいぶん背が伸びたね。もう抜かされてしまったな。本当に早いものだよ」

俺の言葉を遮り、ペスターは俺の背中を押した。

「ジンは口調は悪いけど根はいいやつだよね、機転も利くし、きつときみの旅路を助けてくれる良き友になつてくれると思うよ

俺は「ああ、わかつているさ」と答えた。

「クラッセは少しおつちよこちよいで弱虫などもあるけど、いつか強くなるよ。その転機は意外とすぐに訪れるかもしれないな。レミは美人だよ。顔をよく見たかい？ それにあの子は大きな秘密を持っているね。その時になつたらディールが助けてあげるんだよ。リベルは……」

そう言つてペスターは言葉を区切つた。

俺は何も言わずにペスターの言葉を待つた。

彼の優しげな表情が揺れた。

「きっとすぐにわかるね。さあその扉をくぐつたらもう時間は待つてはくれないよ。もうお行き」

ペスターが言うと扉の向こう側から光が漏れる。

俺はあまりの眩しさに手で皿を覆つた。

背中が、ぐい、と押される。

「ペ、ペスター？！」

振り向こうとする俺に彼は微笑む。

「ディール、きみはどうして冒険者になつたんだい？」

「待つてくれ！ もつと話したいことがたくさんあるんだ！」

声を張り上げるが抗えない力に押されてしまつ。

扉の先へと押し出された俺は空中にいた。

空に浮かんでいる俺の眼下には村が一望できた。

そこには豆粒のような村人がたくさんいて、何人か見知った顔が

いた。

パン屋のメグおばさん」、長老のトム爺、走り回っている子供たちも見えた。

俺がそれらを眺めていると、突如として現れた炎が膨れ上がり村を飲み込んでいった。

「！」

声にならない声を上げる。逃げ惑っている人々が見えた。炎は容赦なく人を焼き、木々や田畠までも喰らい尽くす。モンスターの軍勢がそこへ押し寄せて死を撒き散らしていった。ウォーラー、ブレス、さらには”巨大サボテン”までもがその中にいて、おおいに暴れまわっていた。

瞼の反対側が赤い。

すでに俺はこれが夢なのだと気が付いている。
けれども辛い。

手も足も出ない俺は早く覚めて欲しいと願った。

「ディール、あたしたちがいるわ！」

「ディールさん、早く逃げましょう！」

「ディール、大丈夫、だよ」

遙か上空から声がした。

白い手が俺の前に4つ差し伸べられていた。
俺は無我夢中でその手を掴む。

4つの手がしっかりと握り返す。

「おい！起きろよ！おい、ディール！」

深い霧が晴れたような気がした。

「つたくよー。坊主もとつと起きやがれ！」ほんと呑気な連中だ

「ぜ

俺は瞼を開ける。

そこには仮面のジンがいた。

「おいおいおい、ようやくお目覚めかよ」

俺が目覚めるなり口をとがらせたジンが言った。

痛む頭をさすりながらジンを見る。

「なあジン、ここはどこなんだ？」

「知るかよ！俺の方が聞きてえくらいだぜ。気がついたらここ

いたんだからなつ」

辺りの景色は一変していた。

鳥たちが騒々しく鳴いていた森はそこになく、静けさが漂う池のほとりに俺たちはいた。

実は気がつかない間にあの雑木林を抜けていたのだろうか。

一瞬だけそう考えるも全くその記憶はない。

どうやら無我夢中だつたから覚えていないわけではないようだ。もし俺が覚えていないだけならばジンは覚えているかもしだれないが、彼は「知らない」と言う。

それに辺りをいくら見渡そうが俺たちが森を抜けすぐにこんなところに行き着けるとは思えない。

木々と俺たちとの間には灰色の重厚感ある垣がひしめき、隣にある森とこの池とは隔絶されていた。

高く積み上げられたその岩の数々を無意識に越えてこられたとは考えられない。

俺は視線を池の方へ戻す。

池は、しん、として波紋ひとつ広がっていない。

それを見ていると、ひしめきあつ岩たちが単に森と池とを隔てているだけではなく、まるでその垣をして人界との境界を線引きしているかのように思える。

そのたたずまいは人が決して訪れる事のないある種の秘境めいた幻想的な雰囲気をかもしだしていた。

ふと気がつくと、ちょこんと座つたレミが池を眺めていた。

「あとはリベルとこの坊主だけだ。リベルはともかくとして、おらつ、坊主はとつと起きやがれ！」

クラッセに手厳しいジンは彼の頬をピシピシと叩く。

俺はジンの言ひようにひつかかりを覚えてリベルを探す。すると少し離れたところに仰向けで寝ているリベルがいた。額に

は濡れタオルが乗っている。

「そつとしといてやれよ。なんだか熱があるみてーなんだ。多分さつきのが原因なんだろうな。今、レミが熱に効く薬草を探してるぜ」「セツキの”とは、あの得体の知れない黒い蝶の群れ、そして俺たちの中へ無断で入り込んできた狂氣じみた”闇”のことを指しているのだろう。

リベルのおかげで俺たちは正氣を取り戻すことができたが、その代わりにリベルはひどく困憊してしまったようだ。

ジンに言われてレミをよく見ると、ただ座っているように見えていたのだが、手元を探っているようだった。

「リベルに効く薬草なんて見つけたのか？」

俺はまだ意識が朦朧としたままで尋ねると、ジンは「さてな」と気のない返事をした。

薬草があるかどうかはレミ次第か。

ジンもなんと言つていいかわからないのだろう。俺も同じように聞かれたなら返答につまつてしまつに違いない。

ただ風邪を引いて熱を出してしまつたのならどれだけマシか知れない。

だが、リベルの熱の原因是他にあるのだと思つ。

その原因是容易に想像がつく。このタイミングでただの風邪であるわけがないからだ。

もしかしたら俺たちと同じように、いや俺たち以上にあの”闇”に心を蝕まれてしまつたのかもしない。

これは想像するしかないが、リベルは俺たちに正氣を取り戻すため、自分の魔力を犠牲にして精魂尽き果ててしまつたのではないだろうか。

もちろんあれが魔力で防ぎ得るものなのかどうかは俺にはわからぬことなのだが、現実に魔力を持っているのが俺たちの中ではリベルだけで、唯一”闇”に抵抗することができたのがリベルだけであることからしてそう考えるのが妥当だと思う。

「うう……ジン、なん？」

クラッセが呻き声と友に瞼を開く。

「ショーもねー坊主だ。顔でも洗つて田舎覚ましてこー」

「うわっ、うわわわ

起きるなりジンに首根っこを掴まれポイッと投げられたクラッセは、ふらつく足取りでレミのいる池のほとりまで歩いていった。

「ジン、おまえ本当にクラッセには手厳しいな」

一連のやりとりに俺は呆れ口調で言つた。

「はんっ、ガキにやああれくらいが調度いーんだよ。甘やかすと口クなことになりやしねえ」

ジンはクラッセの背中を眺めながら言つた。

「弟でもいるのか？」

彼の様子が出来の悪い弟でも見ていの時のよひに思えて俺は尋ねた。

「なんだよ急に」

「いないのか？」

「いねーよ

つるさい蝇でも追い払つかのように手を振つたジンは、ふいにその手を止めて「似たようなもんはいた」とだけ言つた。

「へえ、その人は元氣でやつているのか？」

俺はつい咄嗟に聞いてしまつた。

すぐにこれが失言だと俺は気付いたが、

「死んだ」

ジンは短く答えた。

浅はかだった。

ジンの表情や彼の言つた言葉の意味をよく考えていれば気が付くことだった。

誰にも話したくないことはあるだらうに、俺は不用意にジンの心に土足で踏み込んでしまつたのだ。

「すまん、聞いてはいけないことだった。許してくれ

俺はとても申し訳ない気持ちになつて深く頭を下げた。これくらいで許してくれるとは思つてはいない。

俺だつて思い出したくないほど辛いことがあるのだ。

すでに記憶が薄れつつあるが、やつさまで観ていた夢の中での出来事……とても懐かしく、そして悲しい物語だつたような気がする。「別に気にすることないよ。昔のことだしな。それより王子様が起きたと思ったらお姫様が一向に起きる気配がねーぜ。おーい、レミちゃんよお！ まだ薬草は見つかんねーのかー！ ……まったくどうなつてんだかな？」

ジンは遠くのレミに手を振つて叫ぶと小さな笑顔を作つた。

そんなジンに俺は頭が下がる思いだつた。

きつと辛いことを思い出してしまうだろに、俺の失言を咎めることもなく、逆に俺を元気付けるように笑いかけるなんて。年上の俺よりもずっと大変な思いをしてきたのかもしれないだろう。

俺がジンの横顔を見つめているとクラッセが走ってきた。

「どうした？ クラッセ」

息をつくクラッセに聞く。

「なにか、水を入れる容器物なんてないですか？」

「あん？ なにに使うんだ、んなもん。あつ、薬を作るのに使うのいるからな」

か？」

「そうです、そうです。レミさんに言われて。ありますか？」

なるほど、という表情のジンにクラッセが頷く。

「よし、それなら俺の水筒を使え。取っ手の部分にコップがついて

そう言つて俺は水筒を取り出してクラッセに渡す。

「ありがとうござります！」

言つなりレミの元へ駆けていく。俺は一安心した。

「薬草が見つかったみたいだな」

だがジンは反対に神妙な顔つきになる。

「どうだかな。まあ普通の風邪みたいなもんだとここナビが
そう言わると俺も黙るしかない。

結局のところレミ次第なのだ。

しばらぐすると今度はレミがクラッシュと一緒に足早にやつてくる。
「一応、熱に効く薬草は、あつたよ。ただ、これが効くかとこりど、
ね……」

レミは水筒の口ヒップに入つた液体を見せる。
彼女は自信なさげだが、ドロドロじている緑色に濁つた液体がなんとも苦やうで、良薬口に苦い、ところから期待は持てそうだ。

「とにかく飲ませてみよう

そう言つて俺はリベルにレミの作った薬を飲ませた。
だが俺の期待とは裏腹にリベルの熱は依然として引くこともなく、

なおも苦しそうに顔を紅潮させていた。

「どうやらただの風邪じゃなさうだぜ」

ジンが苦虫を噛み潰したような顔で言ひ。

「まいったな、レミの薬が効かないんじゃどうしようもないわ」
俺はほとほと困り果てて呟く。

「リベルさん、どうなつてしまつんですか?...」

「知るかよ! てめえで考えやがれ!」

ジンは不機嫌そうに吐き捨てた。

いまにもクラッセを殴りつけそうな勢いだ。

「うん、よ

すまなそうにレミが言ひ。

「レミが謝ることじゃないわ。飯にするな

「うん」

「バアバに見せてみようか?」

「ああつ、見せられるもんなら誰にでも診てもらいたいもんだぜー...」
ジンはなかばヤケになつて叫んだ。

「えつ? お医者さんでもいるんですか?」

「こんなところに医者がいるのか？」

クラッセの言葉を受けて俺も聞く。

もしいるなら是非ともリベルを診でもらいたい。

「ちょっと待て！」

「ん？」

「はい？」

ジンは髪を振り乱して辺りを見回す。

「どうかしたのか？」

この取り乱し様、一体どうしたのか。

「僕、なんかおかしな事でも言いました？」

クラッセが不思議な顔をする。

「それより医者つてどこにいるんだクラッセ」

「え？ 僕はいるなんて言つてませんよ。『さんじやないんです

か？』

するとレミは「ううん」とかぶりを振った。

「お、おい！ ジャあ今の誰が言つたんだ？！」

ジンが慌てて叫ぶ。

「ねえ、バアバって、誰？」

レミがポツリと呟く。

『……えつ？！』

俺たちは顔を見合せた。

ここには俺たち5人しかいないはずだ。

もよやリベルがそんなことを言える状態でないであつことは確認せずとも明らかだつたし、レミもポカんとしている。

俺たちが聞いた……よつた気がする声は女の声だった。リベルかレミでないとすると一体誰なのか。

「おい、誰かいんのかよ！ 隠れてねーで出てきやがれ！」

ジンがわめき散らす。

クラッセは落ち着かない様子で視線を転々とさせている。

「もうひ、こんな近くで大声出さないでよ！ 別に隠れているわけ

じゃないんだからっ」

その声は意外と近い。

レミが俺の袖をギュッと握った。

「どこにいる？ なぜ姿が見えないんだ？」

俺は努めて冷静に問いかける。

「そーだそーだ！ とつとと出でこねーとえらい目に合わすつぞー！」

あくまでジンは喧嘩腰だ。

「やだつ、ジンジンつたら野蛮だし。でもそういうのまんまじや魔力を持たない人間には見えないんだつた。あははっ」

「じ、ジンジン？！」

ジンが目を丸くする。

なんだそれは？！

いや、呼び方なんてどうでもいい。それよりもなぜジンの名前を知っているんだ？！

くすくす……くすくすくす……

忍び笑いが聞こえた。

俺は、はつ、とした。

この声はいつぞや俺が風の音だと思っていた声ではなかつたか。あの時は気に留めることがなかつたが、もしやこの声の主がある時の声なのか。

「てめえっ、いい加減に」

そうジンが言いかけたときだ。

パツと姿を現した”それ”はそのジンの頭の上にいた。

「女の子……？ 小さな……」

俺は思わず漏らす。

急に現れたその女の子はまるで人形のようだつた。

俺の手の平くらいの大きさしかない。

くりつとしたつぶらな瞳で俺たちを見ているその女の子は、きらきらと光る水色の長い後ろ髪をポーテールにしてジンの頭の上で笑っていた。

髪の色と同じに水色の布地に銀ピカの刺繡が施されている半そでシャツから生えていく両腕はさらに細い。軽くつまんだけで折れてしまいそうなほどだ。

その小さな女の子がぶかぶかの橙色のズボンであぐらをかいて、ジンの頭の上から俺たちを見下ろしていた。

気がつくと俺はあんぐりと口を開けていた。

それを見てまた小さな女の子が笑う。

レミが息を飲んだ。

これは、まるで、おどぞ話の世界だ。俺は目の前にいる存在がにわかに信じられない。

人形に見えるその女の子は、しかし人形とは異なり生きて動いていた。

誰かがそれを操っているように見えない。

これは夢の続きなのかと一瞬考えたりもしたが、クラッセが自分の頬をつねつて「いてっ」と言つているので現実だと考えてまず間違いなさそうだ。

ジンは俺たちの表情を見比べて「おこつ、どうしたんだよー、なあ！」と叫んでおり、自分の頭の上にいる不可思議な生き物には全く気付いていない。

「つかぬ事をお聞きしますが……」

クラッセがおずおずと口を開いた。

「なになに？ なんでも聞いて聞いて！」

女の子はジンの頭の上でえらく上機嫌だった。

「あの、ひょっとして、ですね。もしかすると……妖精さん、ですか？」

俺とレミはジンの頭の上を凝視する。

ジンはこままだに「なんだなんだ？」と言つてゐる。

すると女の子は小さな胸を大きく反らして、
「うとうん、『名答』。あたしリンリンって言つのー。 可愛い名前
でしょ？ よろしくね！」

ガツンと頭を殴られたような衝撃だった。
妖精。

そんなものが本当にいるとは。

ましてや俺たちのよしなりたてもなりたて、新米冒険者が遭遇
してしまうとは。

クラッセじゃないが俺も自分の頬をつねりたい衝動にかられる。
すると、俺たちの集中する視線の先が自分の頭の上だとジンもよ
うやく気付いたらしい。

田線を上にしてそろりと両手を広げたかと思つと、一気に自分の
頭の上を手の平でパチンとやつた。

「あ……」

「あ！」

「あつ！」

「//」俺、クラッセの3人は揃つて声を上げる。

「、こんなことがあっていいのか？！」

ジンの行動はあまりに突然で予想もしていなくて、俺は絶句してしまった。

呆然とする俺たちの前でジンは、してやつたりな顔をしている。ばかな！

妖精だぞ妖精、ジンはそれがなんなのかわかつていなかっただけだ。ジンはそれがなんなのかわかつていなかっただけだ。妖精といえば世界各地の民話や伝承に頻繁に登場し、今も歴史に残る勇者たちの伝記を綴つた大冒険の代名詞といえばドラゴンか魔法使いか妖精と相場は決まっている。

自警戦士団以前でいうと、かの有名なデュランドー・シギルもまたお供に妖精を連れていたという話だ。

彼が豪華な全身鎧や大剣も持たず、突如として街に現れた強大で邪悪なドラゴンと互角に渡り合つたというのは、冒険者であらずとも皆が知っている話であるが、それを陰で支えていたと言われているのが供に旅をしていた妖精だというくらいだ。

妖精たちの持つ不思議な力がデュランドー・シギルや他の話にも登場する勇者たちを支えていたという。

それが本当のことなのかどうかは誰にも確かめることはできないし、俺だって話半分に聞いていたが、俺たちの目の前に現れたリンリンと名乗つた妖精を見ればその存在を信じざるを得ない。

それが、その妖精をことあろうにバカシーフのジンが叩き潰してしまったのだ！

それも頭の上のうるさいに蠅でも片付けるかのよう！

「な、な、な……なんてことしているんですかジンさん！」

クラッセがジンに詰め寄る。

「よおよよ妖精ですよ？！　僕たちが一生かけても出会えないような伝説の生き物ですよ？！　どうしてそんなすごい生き物をあなた

つて人は × ——」

ものすごい形相でジンに詰め寄つたクラッセの言葉はもはや言葉になつていない。その上、半泣きである。

「この……人で、なし！」

いつもは物静かなレミでさえジンの胸をポカポカ叩いている。

「だつてよお～」

なおもへラへラと笑つてゐるジンに俺もさすがにカチンときた。この男は、この期に及んでまだ笑つて済まそうと考へてゐるのか！「おつまつえー！ 自分がなにをしたのかわかつてゐるのか？！ 滅多に出会えない妖精だからってことだけじゃない、おまえはひとつ命を殺したんだぞ！」

俺はジンの胸倉を掴む。

いきなり掴まれたジンは「うげっ」と声を詰まらせると、そんなこと構つていられるか！

「うぐぐっ、ちょっと待つ……まずは話をじょひげっ、ディ……ディール！ あ、あれっ！」

ジタバタともがいて腕を動かすジンには取り合わずに右拳を後ろに引く。

「黙れ！ 見苦しいぞ！」

俺は拳に力を込めた。思いつきりぶん殴つてやるつもりだ。

だが、

「うおい！ リンリンつつたかおめー！ んなとこに浮いてねーで早くこいつをなだめすかしてくれよー わわつ、ディール！ 悪かつたつて、後ろを見ろつて！」

反射的にジンが話しかけた方を見る。

そこにはジンに潰されたかと思われた妖精の女の子が羽もないのにふわりと浮かんでいた。

「よ、よかつたあ～」

クラッセがへなへなと座り込む。

「いきなり手で潰そうとするなんて、もつとしぼられていればよか

つたのに

さつきとは打って変わつてご機嫌ナナメな妖精の女子リンリンは言つた。

「悪かつたつつの。でもほら、無事そうでなによりじゃねーか」

「ハ、の！」

「いであー！」

レミがジンの脛を蹴飛ばす。

ジンが悲鳴を上げた。

「きやはっ、いい氣味！」

リンリンが手を叩いて喜ぶ。

「潰した手ごたえがなかつたから大丈夫だつて知つてたんだよつ」

ぴょんぴょんと脛を抱えて跳ね回るジンに俺は怒る氣も失せる。

「はあ。身から出た鎧だぞジン。それにしてもリンリンと言つたね。きみは本当に”あの”妖精なのか？信じるもなにも田の前にきみがいるからそうなんだろうが。めまぐるしく色んなことがありすぎて……なにがなんだか」

森に入るなりジンのいらぬイタズラのせいで”巨大サボテン”に追いかけられ、次はウォーラー、ブレスときて、極めつけは何者かわからない無機質な声に心を侵される恐怖。

氣を失つて目が覚めたら知らない場所にいて妖精に出会うという。ハラハラドキドキの連続で俺は相当まいつているようだ。

「ほんとにほんと。ほらつー！」

そう言つてリンリンは俺たちの周りをクルッと一周する。きらきらとした粉の光がリンリンを追いかける。

「納得した？」

ひとしきり回つてからレミの頭の上に腰を落ち着けたリンリンが

聞く。

「あ、ああ

やはり妖精なのか！

なんて奇跡なんだ、こんなところで本物の妖精に出会えるとは！

「こんなところに俺らが移動させられたのもおめーの仕業かよチビスケ」

俺が妖精との出会いに感動していると、脛の痛みから立ち直ったジンが懲りもせずに憎まれ口を叩く。

少しは懲りてくれ。

「チビスケじゃなくてリンリン！ そつそう、あたしつたらよく迷子になるからバアバが戻つてこれるよう空間移動のアイテムをくれたの。でもあたしがいてよかったよねえ、あのまんまじやデイールたち危なかつたし」

リンリンがしみじみと言つ。確かに危なかつた。
もしかしなくともリンリンが助けてくれなければ俺たちはあの場でどうにかなつていただろう。

「その、”バアバ”って誰なんですか？」

ようやく落ち着いたクラッセが尋ねる。

そうだ、それは俺も聞きたかった。

リンリンはその人がリベルを診てくれると言つたが、一体どんな人なのだろう。

空間移動ができるアイテム？ そんなとんでもない物を持つているなんて。

「つーかチビスケ、おめー一体いつから俺らのそばにいたんだよ」「そんなことより”バアバ”って人のことを先に聞くべきだろ」話に割り込むジンに言つ。

今はその人がリベルを救つてくれるのかどうかをはつきり確認するほうが先決だろう。

俺はそう思ったのだがジンはそんな俺を制する。

「いや、その空間移動とやらが早くできてりや俺らは被害に遭わなくてすんだる。それにおめー、さつきの黒い蝶の群れのことかもなんか知つてんじやねーのかチビスケ」

疑いの眼差しでリンリンを見るジン。

さきほどまでのふざけた様子はすでにはない。

「なにせ、そんなのあたしだって知らないし。ジンジンつたらあたしがやつたって思ってるわけ？ 空間移動だつて何回も使えるわけじゃないし、あんなチョウチョだつて見たのは初めてなんだからあたしだつてびっくりしたもん！」

あらぬ疑いをかけられて心外そうな顔でリンリンが反論する。

「それとチビスケじゃないつてば、ばかジンジン…」

「けつ、そうかよ。チビスケ」

腑に落ちないようだが一応は納得したように吐き捨てる。

「ディールたちが森に入ってきたときから木陰に隠れてみていたんだあ。なんか面白そうな人たちがいるなあ～って。でも初対面でもジンジンつて口悪いんだね、リベルがかわいそう。ジンジンにいじめられてばっかだし」

リンリンは同情するようにリベルを見下ろす。

するとそのリンリンが腰をかけている頭の持ち主、それまで黙つて話を聞いていたレミが口を開く。

「ねえ、リンリン。リベルが、苦しそうにうなされているリベルを揃つて見つめる。額の上の濡れていたはずのタオルは乾いている。

「そうだ、そのバアバって人がどんな人なのか知らないが早くリベルを診せてやつてくれないか？　どこに行けばその人に会えるんだ？」

「タオル濡らしてきます」

クラッセが池に向かう。

「医者かなにかなのか？」

俺が続けて聞くと、

「バアバ？　ううん、お医者さんじゃなくてすごく偉い魔法使いなのに。いろんなことを知ってるし、怒ると怖いけどとても優しいんだ！」。だけどね、ちょっとこの頃は気になることがあるんだって見てあたしに森の様子を見てくるように言ったの。ほんとは自分で見たいんだけど、三ウツウがひどいんだって。

そしたらティールたちを見つけてさ、なんか怖いのに追いかけられているじゃない？　あたしもずっとこの森にいるけど、あんなの見たことないしさ、ほんとびっくりしちゃった」

リンリンはなおも「それでさ、それで」と関をきつたように話しが始めた。

妖精だといつてもやはり女の子だといふことなのか、よくしゃべる。

俺は適度に相槌を打ちながらリンリンの話に合わせる。これでリベルの目が覚めたならいいコンビになるかもしない。

「あー、うつせー！　結局そのババアはどこにいんだよー！」

堪えきれずにジンがリンリンの話に割つて入る。

いつの間にかクラッセが戻ってきていてリベルの額に濡れタオル

をセットしなおしていた。

「そうですよ、いつまでもこんな状態のリベルさんを放つておけません。そろそろ案内してくれませんか？」

「いけない、あたしつたらすぐ長話をはじめちゃって。てへ」

「うつかり、といった感じでリンリンは舌をペロッと出す。

「ほら、あそこに小屋があるでしょ？ あそこからバアバのところに行けるの」

池を挟んで反対側には木でできた小屋があった。見るからに相当年季が入っており、今にも崩れ落ちそうなくらいだ。

池もそんなに大きくないので、ぐるっと回りこんでいけそうだが、人が住んでいるような気配は遠田で見ている限りでは感じられない。

「なかなか、その……趣のある家ですね」

「うすうす予想はしてたけどよ、あのぼれえ小屋かよ」

不安そうなクラッセとうんざり顔のジンが言う。

すでに小屋があることに気付いていたらしいジンは「やれやれ」と肩をすくめていた。

「とにかく、行こう」

ユリが促す。

「やうだな、ここで話しかんでもリベルの具合が良くなるわけじゃない。まずは行動を起こしてみよつ。考えるのはそれからだ」

そう言つと俺はリベルをそつと背負う。体はかなり熱を持っているようで背負つた背中が熱い。

「ところで、ひとつ気になることがあるんですが」

歩きながらクラッセがおずおずと言つ。

「ん、なに？」

リンリンは軽い返事でクラッセを見る。

「あそこから行ける、って言いましたよね？ それはどうい」

ジンと俺も「ん？」と言いながらクラッセの話を聞いていた。だがクラッセが言い終える前に、突然俺たちの前へ現れたものによつて彼の言葉は遮られた。

高く積み上げられた岩のひとつが振動したかと思うと、生命を吹き込まれたかのように瞬く間にそれは四肢を伸ばし、きちんと頭までも形成し人の形になつたのだ。

その傍らには黒い蝶がひらりと舞う。

「うわあ！ なんで岩が動きだすんですか！」

「あの手この手を使つてきやがつて。つーか、なんでそんなに俺らをつけ狙うんだよ！」

「やー！ 早くバアバのところへいこうよー」

岩人形は俺たちの行く手を阻むように立ちはだかる。

「さつきのやつか？！ くそっ、今はこんなのと戦つてる場合じゃない」というのに

反射的にソードを鞘から引き抜こうとするがリベルを背負つていたことに気付く。

「ジン、リベルを頼む

「お、おづ」

リベルをジンに預けると鞘からソードを抜き放つ。

「俺がやつを引き付ける。その間にリベルを連れていくんだ」

言つなり俺は岩人形に突撃する。

「つおおおおおお！」

岩人形に向かっていくが、狙いは黒い蝶だ。

見た目がごつぐ、強そうに見える岩人形だが、黒い蝶こそがそれを操つているのではないか。ただの憶測に過ぎないがそう思えた。

岩人形の手前で方向を急転換させて黒い蝶にソードを振る。

ぱすっ、と案外簡単に黒い蝶は2つに裂けると、搖らめいてからその場で消滅する。

(よしつ)

黒い蝶を片付けると、次は岩人形にソードを向ける。

ジンたちが横を通りすぎるのがちらりと見えた。

ひとつ残念だったのは黒い蝶を倒しても岩人形の動きが止まらないかつたことだ。黒い蝶が操つていてるわけではないのか。

さてどうしたものか。岩人形を睨みつつ思案する。

岩でできているということはソードでの攻撃は当然効かないだろう。

う。

だから今一番有効なのは、こいつを引きつけられるだけ引きつけてから逃げるのが良さそうだ。見た目から判断すると動きは鈍そうだ。

そう思ったのだが甘かった。

岩人形は思いがけない速さで殴りかかってくる。

それを避ける余裕はなく、俺は咄嗟にソードで岩の拳を受けた。

ソードが悲鳴を上げる。

俺は岩人形の殴る力の強さに吹っ飛ばされた。

「ぐつ！」

俺が後ろに倒れこむと、

「ディール！」

振り返ったリンリンが叫んだ。

岩人形が俺に迫る。

（やばい！）

俺を吹っ飛ばすほどの力だ。まともに喰らってしまってはただでは済まない。

岩人形が腕を振り上げる。俺は固く目をつむった。

パアアアアアアアアアアア

瞼ごしの光に俺は目を見開いた。

背後からの眩い光を感じ振り返ると池が光り輝いていた。

岩人形の動きが止まる。

「いそいでっ、ディール！」

遠くからリンリンが急かす。

俺は立ち上がって手招きするリンリンの方へ走った。

動きを止めた岩人形を尻目に小屋へと辿りつくと、池の周りで1

本の光の筋が立ち昇る。その光は弧を描いて走り、大きな円になる
と一層輝きを強めた。

「きつとバアバよ」

リンリンが言った。

「偉い魔法使いねえ……。まんざら嘘でもなさそつだがよ、おつと
！　さつきのやつが崩れていぐぜ！」

ジンの声に俺も岩人形を見る。

ボロボロと崩れていた岩人形はついに人の形を留めることがで
きずにただの岩の塊へと変わつていった。

「着いたのはいいけどよ、じんの中のビニにその魔法使いのババア
がいんだよ」

小屋の中に入るなりジンがリンリンを睨んだ。

外から見ても人の気配がないとわかるように、小屋の中には誰も
いなかつた。

人が生活していればそれなりに生活するのに必要なものがあるは
ずだが、どう見てもただの廃墟だ。

「冗談はよしてくださいよ、こんなのが困ります！」

クラッセも抗議の声を上げる。

「ジンジンも坊主くんも想像力が貧困だなあ。ちよつと見ててつて
再びレミの頭の上を陣取つたリンリンが言つて

どうやら彼女の上が氣に入つたようだ。ユミは何も言わない。

リーン

どこからか取り出したのかリンリンは鈴をひとつ鳴らした。

「鈴を持つてつからリンリンってかチビスケ。ビッグが貧困なん…
うおお！」

軽口を開きかけたジンがよろめく。

床を見ると部屋いっぱいに円陣が輝いていた。ちゅうじい池の周りに描かれていたのと同じようなやつだ。

「魔法陣？」

レミが呟く。その途端、景色が変わった。

俺はリベルを背負い直す。

身軽になつたジンは辺りを調べていた。

足元の魔法陣は同じだが廃墟じみた小屋の中ではなく、儀式かなにかを行うために用意されたかのように円状の小広い空間が田の前に広がつた。

その空間の中で俺たちは中心の一段盛り上がつた場所におり、そこからまつすぐ前にひとつだけ扉が見下ろせた。

「なんだここ？ タツキの小屋の地下にでも移動したつて感じかよ」ジンが言つた。

その声が反響して俺たちの耳に届く。

「まあ、そんな感じみたい。あたしもよく知らないんだけどねえ」と、あはは

リンリンが無邪気に笑う。

クラシセも「すいですね」と呆気に取られていた。

「こには、何かの、儀式でもするところ、なのかな？」

興味津々にレミが尋ねる。

パーソンのレミとしては知識欲を刺激されるところなのだろうか。

俺としては一刻も早くリベルを診てもらいたいところだ。

「うーん。よくわかんない。あたしもそんなに長くここにいるわけじゃないしね。でもこここの全ての魔力を司るチュウスウブだつてバアバが言つてたかな？」

首を捻りながらリンリンが答える。

「中枢部ねえ。ま、んなことビーダつていいつつの。それよりとつ

とと案内しろよチビスケ」

リンリンが一の口を開く前にジンが割り込む。これ以上長話をされてたまるかといった表情だ。

「まーいつか。じゃあ案内するからついてきて。ゆうとくけど、はぐれたら絶対迷うから離れないでよ？ すつじく広いんだから『』人差し指を立てて真剣な顔のリンリンにジンが「わーたつつの」と急かすと、彼女は小さな頬を膨らましながらも扉の前へと進んだ。すると扉は、ぎいい、とひとつずつ開く。

「わっ！」

驚いたクラッセは尻餅をついた。

それを見たジンは不敵な笑みを浮かべる。

「こんくれーでびびつてんじゃねーよ。これから会つのはかくも恐ろしい大魔法使いのババアだぜ？ 年がら年中、不気味な薬を作つてるようなババアだかんな。

おい、どんな恐ろしい目に遭わされるかわかつたもんじゃねえ。もしかすっと、おめーなんかはヒキガエルに姿を変えられちまうかもな？ へへ」

ジンは指で自分の目尻を吊り上げてクラッセを脅かしてみせる。さも恐ろしげに声をかすれさせて唇の端を上げるジンにクラッセの顔は引きつる。

ぱかんっ

「んでっ！ あにすんだよティール」

ソードの収められている鞘をベルトに装着し直す。

「意味もなくクラッセを脅かしてくれるなよジン。あることない」と語つたりして

「俺はだなあ、緊張した空氣を和ませよつとだなあ
頭を押されたままジンが言い訳するが、

「全然、和まない」

「てゆーか笑えないし。バアバのことを悪く言わないでくれる?
ほんとにヒキガエルにしてもうつからつ、ジンジンのこと…」

女の子2人からの鬱鬱を貰い、「冗談の通じねえやつら」「ほやこ」といって、扉をぐぐると真っ暗な通路がどこまでも伸びていた。

と思ったのだが、暗闇の中から2つ、3つと灯りが現れるとゆらゆら揺れながらこちらへ近づいてくる。

それは近づくにつれ揺れているといつよりも小さく飛び跳ねているように見える。

やがて真っ暗だった通路の床が照らされて見えたと、灯りが闇のカーテンをめくるようにその正体を俺たちの前に現した。

小さな口ウソクだつた。

ただ、それが普通でないのは手足が生えていることだ。

ぴょんぴょんと小走りジャンプする彼ら（？）は俺たちの目の前までくると、ぴたつと止まって整列し、ひとつお辞儀をした。

「出迎え、『苦労さま！』

レミの頭から立ち上がったリンリンが言つと、口ウソクが1つだけ遅れて走つてくる。

手にはとても小さなクシを持つており、頭の炎を髪でもとかすよう仕草をしながら俺たちの前に着いたその口ウソクは、よほど流れていたのか何もない足元に躊躇して立つた。

転びそうになり手をバタバタさせてバランスを取ると、なんとか立ち直ることができたが、頭の炎が今にも消えそうだ。

これは危ないとばかり、先にきていた他の3つの口ウソクから炎を灯してもうつと、よつやくその口ウソクは胸を撫で下ろすような仕草をした。

「なんだこいつら、生意気じゃねーか？」

ジンが同意を求めるように俺を見る。

おまえがそれを言つつか？

「おいら、いつまでもかしこまつてねーで、それだと行きやがれ」

踏み潰さんとばかりに足を上げるジンに、口ウソクたちは蜘蛛の子を散らすかのように闇雲に逃げ回る。

「ちょっとおー、いじめないでよねっ、ばかジンジンー！」

逃げるロウソクを追いかけるジンに、リンリンは両手を振り上げて追いすがる。

そうなると灯りが遠ざかっていつてしまつので、俺たちも仕方なく小走りで追いかけた。

ジンに追いかけられているロウソクたちはジグザグの道をちょこまかと走り抜ける。灯りに照らされていくつもの枝道が生えているのがわかつたが、必死で追いすがる俺たちはそれを気に留める余裕はない。

しばらく走つていると道の先で灯りがぴたつと止まつた。

「ぐわ！」

なにかにぶつかつたジンが声を上げる。

ロウソクたちは間一髪ジンに捕まらずに左右に身をかわしていた。その灯りが微かにジンがぶつかつた”なにか”を照らした。そこにはまた扉があつた。

真正面から思い切り扉にぶつかつたジンが前のめりに倒れる。勢いよく扉が開かれると、眩い光が俺たちの視力を数秒ばかり奪つた。

すぐに目が慣れると、光の向こうには煌々と炎が燈る暖炉が見えた。

「なんだい、騒がしいねえ……。あんたたち、よく来たね。まあ入つておいで」

しわがれた声が聞こえた。

ロウソクたちはジンが立ち上がる前に逃げよつとばかりに、ぴゅー、と走つてその声の元へと急ぐ。

暖炉からは柔らかい炎が部屋いっぱいに広がっている。

その前には背を向けたまま赤茶色の椅子に深々と座る人物がいた。

振り返ったその人物は老婆だった。

人の良さそうなしわくちゃの顔で黒くつぶらな瞳が俺たちを見つめている。

紺色のローブの袖からは顔と同じようにしわがいくつも刻まれた細い腕が見えた。

橙色の灯りに照らされた部屋は俺が想像していた魔法使いがいるような場所とは違っていた。

魔法使いといえばグツグツと煮立った釜をかき混ぜている傍らには、魔法の本やらがたくさん積み上げられていて、棚には怪しげな薬が並べられているものだと思っていたのだが、俺たちの目の前にはやけに整頓されてチリひとつ落ちておらず、老婆の座っている椅子の隣にあるテーブルには紅茶が入っているのだろうか、カップが6つ置かれていて、いい香りが部屋中に広がっている。

「ただいまバアバ！」

レミの頭の上からふわりと飛んだリンリンが老婆に元気よく手を上げる。

「つてーなあ！　おい、ばあさん！　なんなんだよそのロウソクはよ！」

顔を押さえながらジンが立ち上がる。

「落ち着けジン。それより、はじめまして。俺は『ディール』といいます。リンリンに案内してもらいましたお邪魔させていただきました。こいつはジン、あとクラッセとレミです。あと俺が背負っているこの子はリベルというんですが」

一步前に出て会釈する。

ジンは何か言いたそうだが口をつぐむ。

「そうそう、リベルが大変なの！　バアバ、診てあげて？」

レミの頭の上からふわりと浮かんだリンリンが俺の前にきて言った。

「おこ、とりあえず中に入ろうぜ。ばあさん、座らせてもううぜ」

言つが早いが、老婆の返事を待たずにジンは近くにあった椅子に

座る。

「ジンセニ……少しば遠慮したまうが」クラッセが困ったよつて言つたが、ジンは物ともせずに足を組むなり俺たちを促した。

「そこの坊やの言ひ通りにねえ、まずは全員中に入つたら話を聞こうかね」

ジンは一瞬頷きかけるが、自分のことを言つたのだとわかると「

坊やつて俺のことかよ！」と不満をうつて口をとがらせる。

まあ、田の前の老婆からすれば俺たちなび子供同然だろ？

俺は促されるままに部屋の中へ入る。すると老婆は指をパチンと鳴らした。

するとどうだ、部屋の中には老婆とジンが座つていて椅子はなかつたのだが、いきなり何もないうこうから椅子が3つ現れたではないか。

さらに長椅子までも現れると、老婆は「そのお嬢ちゃんを寝かしておやり」と言った。

「あ、ありがとうございます」

俺は恐縮しながらベルをそこに寝かせる。

「便利、なものだね。魔法、って」

レミがポツリと漏らす。それは俺も大いに頷くところだ。「こんなに便利なことができるなんて、リベルもいざれこんな魔法が使えるようになるのだろうか。

「魔法なんてものじゃないよ。これはあたしが魔法を使つたわけじゃないからねえ。なんとも大それた遺産さ」
気のない様子で老婆が言った。

「遺産、ですか？」

クラッセが、よくわからない、といった表情になる。

俺にしても魔法というものの自体すらどういつもののかわからぬのだから、なんとも言いようがない。

呪文を唱えると炎や竜巻を生み出すことができるのだと聞いたことがあるが、なにぶん俺は誰かが魔法を使つているところを見たことがない。

そんな俺とクラッセにとっては、今のが魔法ではなく遺産と言わ
れても、田の前に椅子が突然現れるなんてことは魔法としか思え
いのだ。

「遺産でもなんでもいいからよ、ばあさん、ひとつとリベルを診てやつてくれーか？ 今にもおっちゃんじまいそーでまいつてんだ俺ら。ばあさんならなんとかできんだろ？」のチビスケがそう言つてつからきたんだよ」「

リンリンを見てジンが言つた。

すると老婆はジンを見て口の端を上げる。

「口の聞き方を知らない坊やだねえ。ヒキガエルになりたいつていのはあんただね？」「

「えつ？」

思いもよらないことを言われてジンは組んでいた足を下ろす。

それもそうだ、ヒキガエルにされる、だなんてジンが言つたのをリンリンが教えたのかと思つたが、リンリンにはそんな素振りなんてなかつたからだ。

「冗談だよ。ヒキガエルにはしないけどね、あんたには少しばかり付き合つてもらおうかねえ。ま、お嬢ちゃんのためさ、あんたみたいな坊やが適任でねえ」「

俺はこの老婆が何を言つているのかわからなかつた。わからなかつたが、ジンになんらかの災難が降りかかるだらつことは、老婆の不気味な笑みを見ていれば誰の目にも明らかだ。

「ど、どーゆーことだよ！」「

身の危険を感じてジンが立ち上がる。

老婆はぶつぶつと呪文を唱えたかと思つとコベルの体がうつすらと光つた。

「リンリン、先導しておやり。魔法陣の部屋までだよ

「えつ、なになに？！」

楽しそうにリンリンが部屋中を飛び回る。

「ちょつ、なんだそりや！　おい、待てつて！」「

驚いて後ずさるジンの前に現れたものに、俺たちも田を見開いた。これこそが本物の魔法というものなのか。

老婆がさらに呪文を唱えると、リベルの全身が赤みを帯び始めた。

赤みを帯びた光がだんだん炎のようになづらめき始めたかと思つと、それは思いもよらない姿へと変貌を遂げていった。

真つ赤なドラゴン！

それはまさか「ドラゴン」の形をしていた。

リベルの全身を纏つていた炎のような光が収束すると、一気に紅蓮の炎となり見る見るうちに真紅に染まるドラゴンの姿を模り始めた。

「これってドラゴン……ですよね？！」

腰が抜けたようにへなへなと座り込んでクラッセが言つた。

「あ、ああ。これが魔法の力なのか……？」

狭い部屋いっぱいに長い尾を揺らすドラゴンに圧倒されて、俺も言葉を失つた。

どう見ても生きた本物のドラゴンではないようだが、実在するとしたらこんな感じなのだろうか。

しかし、こんな魔法を使えるこの老婆は一体何者なのか。真つ赤なドラゴンが老婆の前で宙からジンを見下ろす。

「さあ、逃げるんだよ坊や

老婆はいつの間にか杖を持つており、その杖がジンの方へ向けられるべく、ドラゴンはジンへと大きく口を開けた。

「ジン！」

俺は思わずジンの身を察して叫んだ。

「なんで俺なんだよー！」

椅子を倒したジンが背を向けて走り出す。

「早く逃げてください、ジンさん！」

「言わねなくてもわかってるつーのー！」

「じつちこつち～

リンリンが手招きをする。

ドラゴンに追いかけられ、足を滑らしそうになりながらもジンが扉から飛び出す。

リンリンの足元でわざのロウソクたちが道を照らし、走るジン、

次いでドリゴンが飛んでいく後を俺たちも追いかける。

魔法陣のある広間に辿りつくと、ジンが悲鳴を上げながら走り、

ドリゴンがその後を追つてぐるぐると広間を追いかけっこしていた。

「一体どうなっているんだ?」

誰にともなく俺は呟く。

「それに……」

「なにか変なこともあつたんですか?」

俺の呟きにクラッセが気付いて言つた。

「いや、リベルの体が光つていたこととなにか関係があるのか、つてさ」

そういえばあの老婆はリベルのためだと言つた。

リベルの具合が悪くなつたことと、田の前で繰り広げられているジンの災難とはどんな関係があるのか。

ただの風邪ではないとは思つていたが、俺の理解の範疇はんとうを越えることばかりが起きる。

冒険者とは皆こんな不思議な体験ばかりしているのだろうか。

「そういえばリベルさんはメイジでしたつけ。魔力があることとにかく関係があるのかもしませんね」

神妙な顔つきでクラッセが言つた。

「あれ? そういえばレミは?」

黒いローブ姿が見当たらぬことに気付いてクラッセに聞く。

「え? 一緒にこなかつたんでしょうか?」

クラッセと顔を見合わせていると、頭の中に声が響いた。

『その坊やは平氣さ。別に取つて食われるわけじゃないよ。説明するから戻つておいで』

老婆の声だった。

『この声はあんたたちにしか聞こえないよ。あのドリゴンは一見、炎でできているように見えるけどね、触れても燃やされるなんてことはないんだよ。やつも近くにいても熱くなかつたりう?』

老婆の声に俺は思い出す。

確かに驚きの方が先行していく気が付かなかつたが、あれだけの炎なのに熱気が一切感じられなかつた。

そうなると、今はパニックに陥つてゐるジンも追いかけられるうちにこすれ気が付くかもしれない。

「よくわからないが戻ろ。どうやら悪い人ではなさそうだ」

俺が言つと、

「そうですね。ジンさんには氣の毒ですけど、たまにはいいんじゃないですかね、少しくらいお灸を据えられても」

クラッセは淡々ときつじことを言つ。

初めて出会つた時と比べると随分あかぬけてきたようだ。

俺は苦笑しながら頷く。

「早くバアバのここにもどる」

ジンが逃げ回る様子を楽しげに眺めていたリンリンが広間から扉をぐぐつて廊下へと入る。

俺とクラッセも後に続くと、扉がバタンッと閉まつた。

「てつ、てめーら、覚えてろよーー！」

ジンの情けない叫び声が扉の向こうから聞こえた。

部屋に戻るとティーカップ片手にちょこんと椅子に座るレミがいた。

「遅い、よ」

レミは小さく手を上げる。

「紅茶をごちそうになつてたのか」

俺とクラッセも椅子に腰をかける。

あんな状況でこれほど冷静でいらっしゃるレミは案外シーフに向いているのかもしれない。

シーフはどんな時でも落ち着いて周囲を見渡せるようでなければならぬらしい。

とはいえジンが不向きといつわけではないとは思つ。

いきなり炎のドラゴンに追いかけられたとあっては、彼が取り乱してしまつも無理からぬことだろう。

「紅茶でも飲んで落ち着いたら話をしようかねえ」

老婆に言われてティーカップを見る。

湯気が立っている。

「あ、いただきます」

クラシセがカップを手に取る。俺もカップを口の前に運ぶ。

(いい香りだ)

気が休まるような優しい香りが俺の鼻をくすぐる。

口をつけてひと飲みする。俺たちが最初にこの部屋へ訪れてから、炎のドラゴンと共にジンを追いかけたりしてだいぶ時間をくつたはずだったが、まるで煎れたてのように紅茶は熱かった。

「これも魔法、ですか？」

思い切って聞いてみると、

「そうだねえ、魔法でできたカップでね、煎れた飲み物の熱が逃げないようにする永続魔法がかかっているのさ。まず市場ではお目にかかるない品物だろうね。あたしだってこんな魔法をどうやればできるのかさっぱりだしねえ。魔力をひとつの場合に留めるといふのは本来あつてはならないことなのだからね」

老婆はまるで人事のように語った。

俺はそれがどういう意味なのか聞こつかと少しだけ考えたが、魔法に疎い俺が聞いてもさっぱりだし、まずはリベルのことを聞いておく方がいいだろう。

そう思い紅茶を飲み干すと、俺が聞くより前に老婆が口を開いた。「あたしの自己紹介がまだだったね。あたしはゼンさ。ゼンばあさんとでも呼んどくれ。見ての通り、森の奥で細々と暮らしているだけの年寄りさ。ただ、魔法は少しだけかじっていたことがあってね、俗世との関わりを断つてからあんたたちのような若者に会うのも久しいことだし、力になつてやらんこともないね」

俺たちは簡単なおつかいの依頼を受けただけのはずだった。

だが意に反して俺たちに降りかかる非日常的な数々の出来事。妖精に出会い、ゼンと名乗る魔法使いの老婆に出会い、いつしか

俺たちは大きなうねりの中に巻き込まれていようとは、この時は思
いもよらなかつた。

4・幻影と目覚める太陽

パチパチと薪のはぜる音が聞こえる。すでに春先とはいえ疲れた体に暖炉の暖かさは嬉しい。なんとも気の休まる思いだ。

「なるほどね、だいたいの話はわかつたよ」

目を閉じて聞いていたゼンさんが静かに頷く。

まずは俺たちの話を聞きたいというゼンさんに俺たちが今日体験したことを話していたのだ。

巨大なサボテンみたいなモンスターに遭遇したことに始まり、ウォーラーと戦つたこと、そのウォーラーとの戦いをブレスが現れることでなんとか乗り切ることができたということ。

そして黒い蝶がいつの間にか集まってきたかと思うと無機質な声と共に強烈な悪意に心を蝕まれていったこと。池に突如として現れた岩人形の傍らにはその黒い蝶がいたこと。

よくしゃべるジンとリベルがないので、ほとんどは俺が話してたまにクラッセが相槌を打つた。レミはゼンさんと同じように黙つて話しを聞いていた。

「ところでリベルは本当に大丈夫なんでしょうか。一体さつきの魔法はなんなんですか？ ジンが魔法でできたドラゴンに追いかかれることどどんな関係があるんですか？」

話し終えるとゼンさんに聞いてみる。

この森でなにが起こっているのかはさっぱりわからないが、俺たちにひとつはリベルの方方が気がかりだ。レミも「どう、なの？」と催促するよう聞いた。

「あのお嬢ちゃんは問題ないさ。じきに良くなるよ。あんたたちの話を聞いて合点がいったね。精神に直接攻撃をされて、それに抵抗するために眠っていた魔力が目覚めたんだね。だけど、あの子はまだ魔力をうまく制御できないんだろう？ 眠っていたところを無理矢理起こされた魔力が張り裂けんばかりに内に籠っているんだから

ね、体調を崩すのも無理ないね

ゼンさんは淡々と言つた。

「もう少し細かいことを言えばちょっと違うけどねえ。知つていてもそつでなくとも問題ないけど、魔力というものについて聞きたいかい？」

俺たちは揃つて頷く。とくにレミは興味深げに視線を向けていた。

「そもそも魔力というのはね」

俺たちを見渡しながらゼンさんは説明を続けた。

彼女が言うには魔力というものは持つてゐるかどうか、ということではないのだそうだ。よく「魔法使いの素養がある」と言われるのは魔力を受け入れる器の大小のことを指して言つてゐるらしい。

少し難しい話になるのだが、この世界には魔力が絶えず流れ漂つていて、浮いたり沈んだり循環していく、”沈んでいる状態”では俺たちの目には見えず辺りを漂つてゐる場合で、”浮いている状態”というのがレベルやゼンさんたちの体に入つてゐる状態らしい。

その魔力を受け入れる器が大きい者ほど魔力が強いということになる。

器に注ぎ込まれた魔力を水だと例えると、その器から魔力をくみ上げて魔法を使うのだが、魔法を使わずに留めておくといずれ溢れてしまう。それが今のレベルの状態だ。

ただ、今までリベルがそうならなかつたのは、魔力を受け入れる器の蓋が閉じていたのだという。蓋を開いたままでは魔力が溢れてしまつので、今のレベルのようになりたくなければ、時折魔力を発散させてやらなければならない。それが魔力をコントロールするということだ。

ゼンさんが言つには、大きな器を持ちながらもそれを知らずに生涯を終える者も少なくないということだつた。

俺たちのように冒険者の登録をした人たちは適正検査の中でも魔法の素養があるということが判明したりする。だからこそリベルはメイジになれたのだ。

ここでリベルのクラスであるメイジというものを説明することにするが、メイジというのは至って簡単、魔法を扱える者がなれるクラスだ。もちろんリベルのように魔法の素養を持ちながらも冒険者登録の時点では扱えない者もメイジになることができる。

メイジについて俺はあまり詳しくないのだが、魔法を使うにはちょっとした道具が必要で、だからリベルはメイジでありながらも魔法が使えない。それに魔法を使うにはある程度の修練が必要とのことだった。

まずは道具がなければ魔法を使えないので、リベルは魔力をコントロールする練習などもしていなし。ギルドの講習を受けるにしてもお金がかかるので、そのうち、ということになったのだ。

魔法を使えないことに彼女は負い目を感じていたけれど、俺はそんなの気にする必要はないと思つ。

経験を積んでいけばいずれは魔法使えるようになるだろうし、それまでは俺たち4人でフオローしていけばいいだけの話だ。たとえパーティを組んだばかりだと俺たち5人は仲間なのだから。話を戻すが、魔法の素養があるかどうかは、魔力を受け入れる器が大きければ素養があるということになる。

ゼンさんの話を聞いていて俺が思ったのは、その器が大きいのがリベルとして、それなら俺たちにも僅かながらでも素養があるのだろうか、ということだ。

その質問に彼女は、

「あるよ」

と、あっさり答えた。

「でも魔法を使えるほどの魔力を受け入れるにはそれなりのものがないとね。だから断言しておくと、あんたたちが魔法を使うというのはほとんど有り得ないことを」

少し期待していただけに俺は肩を落とした。

「とにかくリベルさんの具合は良くなるんですね？」

念を押すようにクラッセが尋ねる。頭を抱えているところを見る

と、ゼンさんの説明をよく理解できなかつたようだ。

「どうにじてひきの彼にとつて重要なのはリベルの無事だけだろ。それは俺も同じだ。

「かいつまんで言つとやうだね。内に籠つていた魔力をお嬢ちゃんに代わつてあたしが解放したからね、しばらく魔力を消費していればすぐに良くなるさ。あとはさつきの生意氣な坊やに頑張つてもらうだけだよ」

そう言つとゼンさんはにやりと笑つた。

「ドリゴンが消える頃にはジンジンもきっと疲れて倒れちゃうね。あははっ、リベルも少し休んでいたほうがいいし、今日は泊まつていつたら?」

リンリンが俺の頭の上に腰を下ろして言つた。

「うーん、そうさせてもらおうか?」

レミとクラッセに問い合わせる。

「そりしましようか? でも泊まつていつてもいいんですか?」

クラッセが遠慮がちに聞く。

「ああ、いいよ。部屋なんていろいろもあるからね。あとドリンリンに案内してもううといいわ」

ゼンさんが言つた。

それならそりませぬ。実際かなりの疲労が溜まつているのだ。

依頼の品を早く届けたいところだが、酒場のマスターはあまり急がなくともいいだろ?と言つていたのを思い出す。

「では、お言葉に甘えさせていただきます。じゃ、あとで案内頼むよリンリン」

「おつけ~」

リンリンは親指と人差し指で輪を作つた。

「リベルの魔力、すごい、たくさんある、の?」

顔を上げたレミが聞く。リベルの魔力を蓄える器がかなり大きいものならば、やはり魔力を消費するまでには時間がかかるのだろう。

ユリの言葉に俺とクラッセも興味を持つてゼンさんを見た。

「……それなりにね。でもそんなにからないだろ？ そりや
頃合じやないかねえ？」

バタンッ

ゼンさんが言い終えるやいなや扉が開く。

「きやはつ、ジンジンが戻ってきたよ」

汗だくなつたジンが部屋へと入る。

「てつめえ……ババア、熱くもなんともねーじゃねーか！ よくも

騙しやがつたな！」

息を切らしながらも部屋へ入つたジンがうめく。

しばらく逃げ回つていたが、疲れで足がもつれて転んだときドラゴンが消えたの

ラゴンに触れたらしい。すると霧散するよひドライドラゴンが消えたの

だ。

「いい運動になつただろう？」

なおも口を開いて文句を言ひおつしするジンは、ゼンをこせ飄々とし

て返す。

「てめーらー！ ディール、坊主、知つてやがつたな？！ 後で覚え

てやがれつ！ あーつ、疲れた！ 今日は逃げ回つてばつかだぜ」

「悪い悪い。でも俺たちだつて知らなかつたんだ。いやあ、ジンが

無事でなによりだよ

とぼけたふりして答える。

「うそこけー！」

ジンは心底だるそうに床に座り込む。

「怪我もなくてよかつたじゃないですか。リベルさんもジンさんのおかげでほら、顔色も良くなつてきましたよ」

ジンは「けつ」と毒づくが、確かに言われる通りリベルの表情が
だいぶ楽になつてきたようだつた。これもゼンさんが言つ通り、魔
力を解放したおかげなのだろうか。

「あんたみたいに逃げ足が速いのを追いかけさせると、魔力を消費
させやすいからねえ。ともあれ」「苦労さんだつたよ

「最初から説明しろってんだ」

ジンは不満顔だ。

「アリババジラ立てるなよジン。それより今日アリババで泊まらせて
アリババになつたんだ。リベルの体調が回復するまでな。それと
……お世話になっていて、さらにお願いをするのはおこがましいん
ですが、リベルに魔力の扱い方を教えてやつてもらえませんか？
今回はゼンさんに会えて助かりましたけど、魔力をコントロールで
きないとこれからも同じようなことが起きるんじゃないかと思つん
です」

「アリババに泊まるだあ？！」「…

信じられないといつよつな声が上がる。とんだアリババにあつたジンと
してはすぐにもここを離れたいらしい。

「リベルの、ため、だよ」

レミが言つた。俺とクラッセは深く頷く。

本来ならギルドでお金を払つたりして魔力のコントロールを学ぶ
のだろうが、コントロールできないと体調を崩してしまうのだと知
つた今となつては、すぐに魔力をコントロールできるようになつて
もらわなくてはリベルの体が持たないのではないか。

「おいおいおい、つーかよ、もう依頼の陽還り草とかいうのは採つ
たんだしょ、こんなとこに用はねーんじゃねーのか？ 魔力のコン
トロールってなんのことだよ、リベルのためつて？！」「

「あ、実はですね」

怪訝な表情を浮かべるジンにクラッセが説明を始める。

「ふーん、つてこたあ、リベルが魔力をコントロールできるようにな
らなけりや、またぶつ倒れるかもしんねーつてことか」

一通り話しへ聞いたジンが腕を組んで唸る。

「ダメでしょうか？ 代わりにお礼できるよつなものはないんですけど……」「

「そうだねえ……」

ゼンさんは何事が思案するよつに虚空を見つめる。すると、

「あ

言葉を待っていたレミが小さく声を上げる。俺はその視線の先を追つた。

「リベル、大丈夫か？！」

長椅子に寝たまま焦点が定まらないまま瞳を向けているリベルがいた。

「おっ、もう起きても大丈夫なのかよ。しつかし気絶するやつの多いパーティだぜ。世話が焼けらあ」

リベルが起きるなりの軽口だ。だが口調はいつもより柔らかい。

「よかつた、でも、もう少し寝ていたほうが、いいよ」

「熱はだいぶ引いたんじゃないですか？ 一時はどうなることかと思いましたよ」

氣遣うレミとクラッセにリベルは弱弱しい笑顔を向ける。

「ありがと……なんか夢を見てたみたい」

言いながらもリベルはまだ夢の中にいるような様子だ。

ただ、クラッセが言う通り、もう熱はほとんど引いたようだつた。紅潮していた顔がほんのりと赤みがかっている程度までに落ちている。

「ここは……？」

自分が見知らぬ場所にいることに気付いてリベルが呟く。

俺は「ゼンさんという方の家だ。危ないとこをこのリンリンに助けてもらつてな、リベルを診てくれたのもゼンさんなんだ」と説明する。

「え、なに……？」

寝ているリベルの上でキラキラと光が舞う。

力なくそれを見ているリベルに光が舞い落ちたかと思つと空中で浮かんだまま止まつたリンリンにリベルはぽかんと小むく口を開けて言葉を詰まらせる。

「はじましてリベル！ あたしリンリン。あーん、よかつたあー。やつぱりバアバに見てもらつてよかつたあー」

胸の前で両手を握り合わせてつむつむとした瞳を向けているリン
リンに、リベルは小さく「妖精……？」と驚きを隠せないようだ。
「やじやびつしますよねえ、僕だつて今まで信じられません
よ」

リベルが驚くのも無理ないといつぱりクラッシュセが言つ。
「その妖精、をいきなり、潰そつとする、のも、信じられない、よ
ね」

こちらもいまだに根に持つてゐるがジンをフードの奥
から睨む。

「わーつた、わーつたって！ 僕が全面的に悪かつたつーの！
今は、んなこと言つてる場合じやねーだろつ」

バツが悪そうにジンが頭を搔く。

リベルとの口喧嘩のようになんぽんぽんと文句を言ひ合つ時は全く動
じないジンだが、レミのように口少なに咎められるのはビリも苦手

のようだ。彼の新たな一面に俺は思わず笑いそうになつた。
「気持ちわりーな。なに笑つてんだよティール」

半眼でジンが俺を見る。

「ははっ、ジンさんの仕草が面白くつてですよ。なかなか見られる
ものじゃないですからね、ジンさんの困つた表情なんて」
笑うクラッセがジンにぽかりと殴られて涙目になる。

「そのへんでいいかい。話しが続けたいんだけどねえ。あんたらの
仲がいいのは、ようくわかつたよ。その真面目そうな坊やが言つて
たね、”お礼できるものはない”つてさ。でもね、あんたらに頼み
たいことがひとつだけあつたよ」

真つ直ぐに顔を見つめられて俺はどきつとした。ゼンさんの顔は
笑つていたが、目の奥は至つて真剣なのがわかつたからだ。

「ここ2、3日のことだよ。あたしが妙な気配を感じるよつになつ
たのはね」

「気配？」

「魔力と言つたほうが正しいだろうね。それでリンリンに見て回つてもらつてたのさ」

「ゼンさんが言つた。

「あんたらが見た黒い蝶つてのは間違いなく魔法によつて作られたものだよ。それが幻覚なのか実体を持つもののかはわからないけどね。強い魔力を持つ魔法使いつていうのはある種の媒体を介して遠く離れた場所にまで魔法をかけることもできるから、黒い蝶がたくさんいるように見えて実は1羽しかいなかつたっていうこともあるわけさ。まあ、あたしが感じた魔力の原因はおそらくその蝶を操つていた人物だろうねえ」

「強い魔力……ゼンさん、より？」

聞かれてゼンさんは左右に首を振る。

「さてね、そこまではわからないね。なんせあたしが実際に見聞きしたわけじゃなし、あんたらの話を聞いてる限りでそう考えられるというだけのことさ」

「なぜ俺たちが狙われたんでしょう？　どう見たつて冒険者になりたての俺たちなんかを襲つたところで、その黒い蝶を操つている人物に得することなどないと思うんですけど」

素朴な疑問を口にする。

この森に魔法使いらしき何者かがいることはわかつた。そしてその何者かが現れてここ2、3日くらいゼンさんが妙な魔力を感じているということも。だが、その目的がさっぱりわからない。

今言つた通り、俺たちなんかを襲つたところでその人物に得るものなどないようと思える。

あの”闇”に心を侵されそになつたとき、俺は強烈な悪意や憎悪に蝕まれていくを感じた。あの時、こともあろうに仲間である

ジンを殺したいとさえ思つっていたのだ。

あれは一体なんなのか、誰に向けられた感情なのだろう。

あの感情はほんの一時であつても深く俺の心に刻み込まれてしまつた。

自分の境遇を憎んで、誰かを殺したいくらいの憎悪。あれほど強い感情を持った何者かが、どうして俺たちを狙つていたというのだろう。

「それも含めてさ、調べてきてほしいんだよ。放つておいたらどうもうまくないような魔力だからね、なかなかに強い力を持つ魔法使いかなにかだらう、それに禍々しい魔力だよ。あたしは見ての通りの年寄りでね。あんたら若者みたいに体が言う事を聞いちゃくれないのさ。それにしてもギルドは何をしているんだか」

話しながらふと思いついたようにゼンさんは不機嫌さを露わにした。

彼女の口からギルドの名前が出て、不似合的な単語だと思ったのは俺だけだろうか。

こういった森の中の人知れず住んでいるような魔法使いの老婆が世事に通じて思えなかつたのだ。

そんな俺の心を知つてか知らずかゼンさんの話はだんだんとギルドへの不満へと変わる。

「だいたい、最近の冒険者ギルドの連中はどうなんだい、率先して事態を把握するべきはずなのに異変にも気付かないなんてねえ。廃れちまたもんだね、あたしの師匠が知つたらただじゃおかないとろうよ」

「あん？ ビーウー意味だよ。最近じゃギルドの施設とか講習だかも増えてるし、廃れてるなんてなんかの間違いだろ？」

「いいや、廃れてきてるね。いいのは見せかけだけさ。この頃じゃ魔力の強い人間もいないし、昔と比べたら質が落ちたもんだよ。師匠がいなくなつてからというもの、ろくに連絡もよこさなくなつたしねえ。ま、連絡よこされても相手なんかしやしないけどね」

ゼンさんは皮肉げに言った。「ひねくれてやがらあ」、ジンがそう言つたのを「人のことを言えるのか」と思わずつっこんでしまう。「連絡つて、冒険者ギルドに知り合いでもいたんですか?」

彼女の口ぶりからするとそう取れる。

クラッセが聞くと、ゼンさんは顔を歪める。

「あそこ上の上層部連中の半分くらいはあたしの兄弟弟子さ。この場所で師匠から魔法を習つていたやつらが今やギルドでふんぞり返つているんだからねえ、世も末だよ」

「マジかよ! バーサンの師匠ってなにもんなんだよ!..」

ジンに限らず驚いたのは俺もレミもクラッセも同じだ。長椅子から身を起こしたリベルも目を丸くしていた。

「ただの元冒険者さ。でも魔力は強かつたけどね」

面白くなさそうに言い捨てる。

魔法を知らない俺からすればゼンさんだけ大した魔法使いだと思うのだが、そのゼンさんが「魔力が強い」というその師匠とは一体どれだけ凄い人物なのだろう。

しかしゼンさんは思い出すのもつまらないといった表情だ。

「話を戻すけどね、あんたらも冒険者の端くれならちょっと手伝ってくれないかねえ」

とんだ話の腰を折つたとでも言つようにゼンさんが俺たちの顔を順に覗き込む。

「お言葉を返すようですが、それなら俺たちのような新米に頼むより冒険者ギルドからもっと腕の立つ者を呼び寄せた方がいいのではないか? ゼンさんの話を聞いた限りではとても俺たちの敵う相手ではないようと思えるんですけど……」

少しだけ迷つた末に率直な考えを投げかけてみる。

そこにまた心を侵されることへの畏れの気持ちがないとは決して言えない。現にまたあの感覚を味わうことになるかもしれないと思えるだけで胸も竦む思いだ。

それにジン、リベル、レミ、クラッセ、4人の仲間たちにもあん

な苦しい思いなどしてほしくはない。

大粒の涙を流しながら狂ったように叫んでいたクラッセの姿はとても見ていられたものではなかつたし、レミも何も言わなかつたがきつと辛かつただろう。

ダガーを抜いたまま硬直していたジンは、もしかするとすでに亡くなつているという弟のように思つていた人のことで苦しんでいたのかもしれない。レベルに至つては熱を出して倒れてしまつたほどだ。

その原因についてはわかつたから良かつたものの、ゼンさんに会わなければ最悪の事態になつていたかもしれないのだ。

「バーサンにはわりーけど、俺は反対だぜ！ ディールも言つたけどよ、俺らに何ができるつてんだよ。またのこのこと出かけていつたらあつという間に返り討ちに遭うのが関の山つてもんだろ。そこのチビスケをギルドにでも遣いに出してなんとかしてもらえつつの言い方は悪いがジンも俺と同じ気持ちだろ。」

「とても強い魔法使いなんですね？ 僕たちに魔法に対抗できる手段なんてありませんし、だいたい何をどうやって調べればいいんです？」

クラッセも困惑しているようだつた。

レベルに魔力があるとはいえ、さすがにまだその魔力をコントロールすることしかできのに、彼女に期待するというのも酷だらう。魔法を使う者相手にソードやダガーだけではどうにもならないと思う。

ゼンさんが少しだけ考えてから口を開いたとしたときだ。

「待つて」

俺たちは一斉にレベルを見た。

「なにを待つてんだよ。言つとくけどおめー、自分がメイジだからってなんとかできると思つてんじゃねーぞ？！ メイジはメイジでも、おめーはひょっこメイジだかんな！ ろくに魔法も使えねーんだぜ！」

険しい表情のリベルに詰め寄ったジンが言い放つ。彼なりに心配しているのだ。

また精神を攻撃されるような魔法を使われても、やはりリベルは俺たちを助けるために無理に魔力を呼び覚ましてしまうだろ？「わかつてゐるわよ……。あたしだつてどうにかできるなんて思つてないわ。でも……このまま放つておいたら、その魔法使いは次になにをするの？ もしかしたら一番近いブュッフェの街が狙われてしまふかもしないじゃない……。そんなの嫌よ。ねえ、あたしたちつてなに？ なんの為に冒険者になったの？ ただお金稼ぐためでも、恐ろしい魔法使いが怖いからって逃げる為でもないわ」

額に汗を浮かべながら言つリベルの言葉に俺は既視感を覚えた。つい最近誰かに同じようなことを言われた気がするのだ。それが誰なのかは思い出せないし、なにが同じようなことだつたのかもわからない。だけど、とても懐かしい気持ちだけが蘇つてくる。

『ディール、きみはどうして冒険者になつたんだい？』

心の奥で声が聞こえた、ような気がした。

脳裏にあの時の無力感が浮かぶ。

俺の故郷での出来事だ。なんのことはない、辺境の冒険者も立ち寄らないような村には起こつてもおかしくないことだつた。

ある日、1ヶ月に1度の大きな街への買出しから戻つた俺に見た光景は、モンスターの群れに襲われてほんの数時間で壊滅してしまつた村の姿だつた。

村から離れていたのは俺1人だけで、両親も親しい友人も俺は一瞬にして失つてしまつたのだ。

父も村の若者たちも剣をたしなんでいるにはいたが、モンスターの大群の前には無力に等しかつた。所詮は素人の剣では、弱いモンスター程度にしか通じない。

たまたま通りがかつた旅人から聞いた話では、村を襲つたモンスターはデビルフライという凶悪なモンスターだつたらしい。人里出てくることなど前例にないとその男性は青ざめた顔で言

つっていた。あまりに恐ろしくて助けられなかつたと嘆く彼を俺は責めるなどできない。きっと俺がその場にいたとしてもなにもできず殺されていたに違いないからだ。

身内を1日のうちに全員亡くした俺は途方に暮れながらも簡単に村のみんなを埋葬した。

旅人の彼も手伝ってくれた。これからどうするのか、と問う彼に、俺はある決意をしたのだ。

「俺の故郷はモンスターに襲われて俺以外が全員死んだよ」静かに言った。リベルと視線が合う。

他の3人に目を向けて俺は続ける。

「俺はその時、誓つたんだ。俺の村と同じような悲劇だけはもう繰り替えさせたくないって。だから俺は冒険者になつた。剣の腕をもつと磨いて、モンスターからみんなを守れるようになりたいんだ。村がモンスターに襲われた時、俺はその場にいなかつたけれど、いてもきっと同じだつたよ。でも今は違う、ファイターとしてみんなをきっと守つてみせる。そりや、レベルも1だけど、魔法をかけられたらどうにもできないかもしないけど、このまま黙つていたら誰も守れないよな。リベルに言われて思い出したよ」「ディール、おめーの気持ちはわかつたよ。つつてもさすがに無理あるだろって言つてんだよ。どうやって魔法使いなんかの相手をすんだよ」

ジンの言つことまひとつともなだけに俺は言葉をつまらせる。

「それなら心配いらないよ。あたしは体が悪いからここから動けないけどね、あんたらに魔法をかけてやるさね。直接的な、それこそ炎だの吹雪だのには効果はないけど、黒い蝶に囮まれたときみたいに精神攻撃は完全に防ぐことができる魔法さ。それにね」

ゼンさんは言葉を区切つて俺たちを見る。少しだけ表情が和らいだ気がした。

「本当の強さっていうのは、守りたいっていう気持ちなのさ。決して魔力や腕っぷしで測れるものじゃないんだよ。その点、あんたらならきっと大丈夫だとあたしは踏んでいるんだけどねえ」

「守りたい気持ち、ですか……」

クラッセが呟く。

「僕、だつて守りたい気持ちならあります。兄さんみたいにはすぐになれないけど、僕にもできることがあると思うんですけど」

「兄さん？」

「はい、勇敢な戦士でした。体の弱い僕をいつも守ってくれたんで

す。だから次は僕が誰かを守る番です」

か細い少年の声だが、そこには固い決意が秘められていた。

「私、も」

「だーつ！　おめーもかよ！」

レミが口を開きかけたのを見てジンがわめく。

「冒険者、を続けるなら、避けて、通れない、ことだと思ひ、よ。モンスターだつて、魔法を使う、のもいるしね。レベルの言つて」と、に同感。私もブコッフェ、が襲われる、と思う

たどたどしいながらもレミは言葉を選ぶよつに言つた。あの強い悪意を持つ者ならば、きっと俺たちだけでは飽き足らざるブコッフェの街へといずれその魔手を延ばすだろう、と。

ブコッフェには冒険者ギルドの支部があるが、俺たちが滞在している間に腕の立ちそうな冒険者、とりわけメイジやプリーストなど魔法を使えるような冒険者はいなかつただろうとレミは言つた。

冒険者ギルドの支部があると言つてもブコッフェは大陸全土に存在するギルドのある街と比べれば田舎の方だ。だからゼンさんがその魔力を測りかねるほどの強い魔法使いに襲われてしまつては、擊退できるような人材がいないのではないか、と。

「それなら俺らだつてそつだろーが！」

ジンはなおも食い下がつた。

一時のヒロイズムに酔いしれて自分たちの力量を考えずに自滅していくつた連中をたくさん知つていて、俺たちに言い聞かせた。

「一時の感情なんかじゃないさ。俺はそう心に決めたんだ。しばらくそれを忘れていたけど、もう忘れたりなんかしない。それにジン、俺はお前のこと信じていいからな。そうやって口ひのべてのり言つて俺たちを心配しているからなんだろ？」

「ばっかじやねーの！　あーあ、おめーみたいな正義感に溢れたやつなんかパーティに誘うんじゃなかつたぜ。おもしれーやつだと思つたからつい声かけちまつたんだよな」

そう言ってジンは俺が冒険者ギルドに向かっているときに見かけ

たことを話した。

ブユッフェに着いて食事をしているときに店の主人がゴロツキにからまれていてのを俺が間に入つて止めたのだと彼は言った。

そういうえばそんなこともあつたかもしれない。ジンが俺を誘つたことの理由など考えたこともない俺には寝耳に水の話だつた。

「どいつもこいつも黙つて見てんのに、おめーだけが席を立つたんだよな。ま、結果はボロクソにやられたわけだけど、見ていて少しばかりうらやましかつたぜ」

思い出した。

ようやくブユッフェに着いて一息つこうと食事を取りることにしたのだが、箸を口に運んでいると怒鳴るような声が聞こえたのだ。

その声の元を追うと3人のいかにもゴロツキ風の男が店主を取り囲んでいた。

どうしたものかと見ていると、彼らは食事に虫が入つていたのだ

と文句を言つていた。

俺はこつそりと彼らのテーブルを見ると、食事は綺麗にたいらげられていて、何枚も重ねられた皿がそこにあつた。どう考へても食事代をちよろまかそうとしているのが目に見て取れた。

席を立つたのはいいが、さすがに3対1では勝ち目はなかつた。相手は筋骨隆々の大男たちなのだ。案の定、俺は無様にやられて代金も踏み倒されてしまったのだが、店主は何度も「ありがとう」「頭を垂れてくるので困つてしまつたほどだ。

「そんなことがあつたのね。ディールらしげって言えばらしげけど「へえ、というようにリベルが俺とジンを見る。

「リーダーはディールさんですから、ディールさんに決めてもらいましょうよ。ジンさんもそれでいいですよね?」

ふてくされ顔のジンにクラッセが念を押す。ジンは諦めたように「もうどーにでもしやがれ」と投げやりに答える。

それを見てリベルとクラッセ、それに宙に浮かんでいたリンリンが俺の頭の上に降りて笑つた。

「無理しなくていいんだぞジン。俺は俺の信念に従つて行動する。だからジンもわざわざ危険だとわかっていることに従わなくていいと俺は思つてる」

「おいおい、ここまできて俺だけ除け者にするつーのかよ。へんつ、おいバーサン、それで俺らはビースリやいいんだよ」

「ともでない、というよりにジンは大げさに拳を握り締めて宙を叩く仕草をみせる。

「話はまとまったようだねえ。実はね、この～～3日魔力の出でこを探つていって、魔力が特に強く感じられる場所がわかつたんだよ。とはいっても、大まかなあたりしかわからないんだけどね。そこに行つてもらおうと思つてゐるさ。だけど、守りたい気持ちが本当の強さだと言つたけどね、このまま行かせたんじゃあ、さすがに目覚めの悪いことになりそうだからね」

そう言つとジンさんは「リンリン」と俺の頭の上に視線を向ける。「なあに？」

首をかしげてリンリンが返事をする。

「宝物庫に案内しておやり。あそこには魔法のかかった装備もいくつかはあるだろ？よ。あたしはそんなものは嫌いだけどね、魔力を道具の中に留めておくなんて不自然過ぎるつたらありやしない代物だしね。でもそんなこと言つてもいられないだろ？」

「魔法の武器だと？！そりゃすぐえ！」

宝の山を田の前にしたかのようにジンが飛び上がる。

「そんなにすごいものはないよ。せいぜいが切れ味の良くなつた剣だとか、防御の魔法が付与された防具程度だね。ないよりはマシつて程度さ」

浮かれたジンは釘を刺されて「つまんねえ」、その言葉通りの顔になつた。

「でも防御の魔法がかかつた防具だつたらもうついていた方がいいわ、きっと。そうでしょう？ おばあちゃん」

「そうだね。それに、それらをあんたらに持たせるのは、あたしの

魔法の効果を上げるのが目的のようなもんさ。魔法の効果をさらに持続させる指輪が宝物庫にあつたはずだからね、それを取りにいておいで。それ以外にも欲しいものがあつたら自由に持つてお行き。あたしには必要のないものばかりだから

「ちょうどダガーが1本なくなつちまつたんだよ。そりゃ助かるぜ

！」

自由に持つていつていいと言われ、ジンは、しめしめ、といつた表情になる。

「ちょっと！ もううのは必要最低限のものだけよ！ あなた、持てるだけ持つていこうとか思つていろでしょ？！ もうう、ばかジンね」

ジンの考えを見透かすようにリベルがたしなめる。

そういえば、随分と顔色も良くなつたようだ。欲望丸出しのジンと口喧嘩を始めた。

「これでようやくいつもの調子になりましたね、ははは……」

苦笑するクラッセに俺も苦笑を返す。

「そつと決まつたらさつさと行こうぜ。リベルはまだ本調子じゅうねーんだからここで待つて休んでいてもいいんだぜ。ぶつちやけ、半病人がついてきても邪魔だしな。おら、チビスケ、とつとと案内しやがれ」

リベルを気遣つているのだろうが、その横柄な言い方に言われた本人はカチンときたようだ。

「半病人つてなによ！ あたしも行くわ、あなたを放つておいたらおばあちゃんの物が全部持つていかれちゃうもの！」

「ばかジンジン！ バアバの物はあたしが守るの！ それにチビスケじやないつて何度も言つてるでしょ…」

まるでリベルが2人になつたようだ。2人同時に怒鳴られてさすがのジンも耳を塞ぐ。

ジンに文句を言つたりベルとリンリンは顔を見合わせると、一瞬キヨトンとした表情になるが、すぐに意氣投合してジンを攻撃する

ことに決めたようだ。立ち上がり腰に手を当てて「王立ちするリベルの上でリンリンも同じように立ち、顔をしかめるジンへと交互に文句を言っていた。

「女人って怖いですね……」

齎えた様子でクラッセが呟く。

「そ、そうだな……そんなつもりはないが、彼女たちをからかうのはよしておこうなクラッセ」

俺の背後で震えるクラッセにではなく自分に言い聞かせるように返事をした。

「みんな、ばか、だね」

一人離れたところにいるレミの独り言が聞こえて、俺はただ苦笑するしかなかつた。

「あっ！」

頭に火のついた口ウソクとその上を飛ぶリンリンに先導されながら俺たちは廊下を歩いていた。

「どうしたの？」

隣を歩くりベルが俺の手元を覗き込む。

「ソードがあしゃかになつていたよ」

俺は刀身の半ばほどから折れているソードをリベルに見せた。

魔法陣のある広間に移動する前に俺たちの前に立ちはだかった岩人形の攻撃をソードで受けたので大丈夫だろうかと見たところ、やはり折れていたのだ。

ちなみにその岩人形は”ゴーレム”という魔法で作られた生命体なのだと。作り手の命令を忠実に聞き、岩でできた体には生半可な攻撃など効かないらしい。

ゼンさんが説明してくれ、レミも「話に聞いたことは、ある、けど」と感心していた。

「あの時、けつこう鈍い音がしたからな。くそー、買ってからあまり経っていないのに」

意識せずに肩を落としてしまつ。

なんの変哲もないソードだが、田舎の村育ちの俺に取つては大枚をはたいて買ったソードなのだ。それがたいして使ってもいないうちに折れてしまうとは。

「代わりの武器が宝物庫にあるといいですね。僕も斧をなくしましたし……大事なものだったんですね」

俺が持つ折れたソードに気付いたクラッセが自分も戦斧をなくしたことを見出しそうな顔をした。

「そーいえば前にも言つてたよな。なんだ、使えない斧なんか持つても仕方ねーだろうに、不思議に思つてたんだよ。大事なもんつて、ありやーなんかいわくつきの斧なのかよ坊主」

「兄さんの形見でして。でもっ、確かにジンさんの言つ通りですね。僕には重すぎて扱うことなんてできませんし。だから諦めることしますよ」

沈んだ表情を無理矢理払つように顔を上げたクラッセがぎこちない表情で笑う。

「そいつあーわりいことしちまつたな

ジンも、俺だって、そうと知つていれば引き返していたのに、なぜ言つてくれなかつたのだろう。

形見なら今からでも取りにいった方がいいのではないか。俺がそう言つと、

「いいんですよ、皆さんのお荷物になることを兄さんだつて望んでいないはずです。それよりもリベルさん、よかつたですよね。すごいです、それ。大きな宝石がついていて

「さすが魔法使いのバーサンだよな。それがありやー魔法が使えんだろう? いいもん貰つたじやねーか。それってなんてえ代物なんだ?

言われてリベルは両手でしっかりと握り締めていた杖を俺たちに

?

見せる。先端には握りこぶし大の丸い碧の宝玉がついていた。

「これが事象石^{じじょうせき}つて言うの。魔法の媒体として使われるんだけど、でもこれだけじゃ使えないわ。だって呪文^{じゆもん}だって知らなきゃいけないし、契約^{けいやく}だつてしていないもの」

残念そうにリベルは言つ。

そうなのだ。

俺たちが宝物庫へと行きかけたとき、ゼンさんは「ちょっと待ちな」、そう言ってゆっくりと立ち上ると部屋の奥から戻ってきたときに、今リベルが手にしている杖を持つてくると彼女に手渡したのだった。

「あんたにはこれが必要だろ? 見たところ持つていないうだからね」

それはメイジであるリベルにとっては必須アイテムである事象石のついた杖だつた。

とても高価な為に購入するのを先延ばしにしていたのだが、思わずここで手に入り俺たちは喜んでいた。しかし、リベルが言うにはそれだけではどうにもならないらしい。

「魔法を使うには3つ必要なものがあるわ。ひとつはこの事象石。魔力を注ぎ込んだこれを媒体にして魔法を使うんだけど、魔法を使うには呪文を覚えなきゃいけないのよ。でも、まだまだ買えるわけないって思つてたから魔術書だつて買っていないし、契約だつて全くしていないわ」

魔法に関して無知な俺たちにリベルはそう切り出して説明した。

魔法を使うためには万物の事象を司る精霊たちと契約をしなければならないのだそうだ。その契約はどこでもできるわけではなく、通常は冒険者ギルド内にある魔法使い専門の別塔の契約の間というところで契約をするのだという。

そうして契約した精霊と呪文の取り決めをする。それは契約者本人が提示するのだが、あまりに荒唐無稽な呪文にしようとする契約 자체も拒否されてしまうらしい。

それに魔法を使つたびに呪文を唱えるわけなので、適切な呪文を選ばなければならぬのだ。だからリベルはまだ魔法を使えないと言つた。

「便利そうで色々と大変なんだな、メイジってやつも。んだけどよお、あのバーサン、呪文も言わないで椅子を出したりしてたじゅねーか。ありやービーいうことなんだ?」

ジンの疑問ももつともだ。

首をひねる彼にリンリンが俺の頭から言つた。

「あのね、ここってバアバのシシヨウって人が造つたところなんだつて。なんかあたしにはむつかしくてよくわからないけど、この中にいるビアバは呪文を唱えなくても簡単な魔法なら使えるって言つてたよ。マドウキコウが働いているんだって」

リンリンは「すごいでしょ?」と胸を張つたが、当のジンは「よくわからんねえ~」と興味をなくしたようになつぐ。

「ゼンさん」

再び歩きだそととしたとき、レミーが呟いた。

「ん? なにか気になることでもあるのか?」

俺が聞くと、しばりへ考へていたレミーが「もしかして……」、そう言いかけた時だ。

「ちょっと! なに?!

慌てたりベルの声に俺は彼女の方を見た。

「今度はなんだ?! おじチビスケ、一体俺らはどうに向かつてんだよ!」

たまらずジンが叫ぶ。俺はめまいのような感覚を覚えた。

「なんですかこれつ、通路が増えましたよ! みつつ、よつつ……どんどん増えていきます!」

視界が歪み、よつけてになる。ジンが何度も首を振つて辺りを見ている。

俺が後ろを振り返ると通つてきた通路を確認すると、そこにも3つに分かれた通路があつた。

さらに霧のようなものが次第にたちこめてきて、俺たちはリンリンを見る。

「あたしも知らないし！ こんなこと今までなかつたもん！」

リンリンが慌てて手を振る。

みるみるうちに白い霧でお互いの顔がやつと見える程度になつた通路は、9方向に分かれて分裂が收まる。

俺たちは途方に暮れた。道案内のリンリンがわからないと言つたなら俺たちにどうにかできるわけもない。

足元で慌てふためいているロウソクたちは頭の火が消えないように時折互いに火をつけ直し合っていた。

深い霧^イにみんなを見る。

クラッセは「どうしましょ」ひつひたえながら元の口ウソクたちと右往左往している。

「これだけの霧だ、はぐれてしまつと大変なことになるぞ」俺が言つとクラッセはびたりと止まって「は、はい」と姿勢を正した。

「それにしても、どうしたものだらうな。リンロンもこんなことは初めてだと言つ。なあ、どの通路に進んだほうがいいと思つ?」誰にともなく尋ねる。

「やいチビスケ、おめー妖精だらうが。なんかすげー能力とかってねーのかよ」

口論をやめたジンが言つた。「テュランダー・シギルの伝記などでは妖精は不思議な力を持つているとされているのだ。俺もそこに淡い期待を抱いたのだが、

「そんなのないつて。人間で勝手にそんなでたらめをお話にしちゃうんだもん、困っちゃう」

リンリンの憤慨した声が聞こえた。

「でもそーゆーもんだつて色々な話に出てくんぜ? なんだよ、全部嘘なのかよ」

「僕たち嘘を聞かされて育つてきたんですね」

騙されたような口調のジンとうなだれるクラッセが口を揃える。「あたしにできるのは姿を消すのと、空を飛ぶくらいかな。だから期待しないでよね」

困つたように言つリンリン。少し期待していただけに残念ではある。だが、そんなことを言つても何も事態は好転するわけもない。さて、どうするべきかと俺たちは霧でよく見えない互いの顔を見合わせたる。

「これってやっぱ、やつの仕業なのか？」

ジンの言ひ、やつ、とは黒い蝶を操っていたであろう魔法使いのことだ。

「多分そうだね。しかしあかしいな。ゼンさんが結界かなにか知らないけど、魔法を使って守ってくれているんじゃなかつたのだろうか」

後半は面白に近い形で呟く。

「あの時の、あれだね」

レミが相槌を打つ。

リンリンにこにく案内してもらつたとき、俺たちの前に現れて行く手を遮つたゴーレム。そのゴーレムを打ち滅ぼした巨大な魔法陣を思い出す。あれには破魔の力もあるかと思つていたのだ。

「きっとおばあちゃんが言つていたよりも強い魔法使いかもしけないわ。だから魔法陣も効かないんじゃないかしら」

リベルは不安げに言つた。そんなに強い魔法使い相手に俺たちはどうにかできるのだろうか、リベルでなくとも不安を感じずにはいられない。するとリンリンが首を左右に振つてからリベルの言葉を否定した。

「ううん、バアバが前に言つてた。ここもそつ長くないだろ、って。本来の持ち主がいなくなつてから少しすつホウカイが始まつているつて。長くないつていつてもまだバアバがいるうちは大丈夫だつて言つてたけど、ケツカイの力が弱くなつてきているんだって」

「本来の持ち主？ ゼンさんじゃないのか？」

疑問を顔に浮かべてリンリンを見る。

「そういう遺産とかなんとか言つてたよな。ふーん、廃れていくようなもんもらつても嬉しくもなんともないやな、あのバーサンがつまらなさそにしてんのもそのせいかもな」

なるほど、と俺は納得したが、だとすると安全に思えたこの場所も安全ではないということだ。ソードが折れて心もとないが、思わず柄に手を伸ばしてしまつ。

「これの意図がみえねえ。とにかくどれでもいいから進もうぜ。悩んでたつていいことなんかありやしねーんだからよ」

口の前に手をやつてじつと考えこんでいたジンが言った。

「意図？」

思わずオウム返しに聞き返す。

「ああ、なんのための霧と九差路なんだ？ 霧なんてあっても邪魔なだけじゃねーか」

「邪魔つて……そりゃそうですよ。きっとその魔法使いは僕たちの邪魔をしたいんじゃないですか？ ジンさんでもたまに変なこと言うんですね」

クラッセの呆れた口調が聞こえる。

「ばっか！ だからなんのために邪魔すんだよ。あのな、ただでさえいきなり通路が9つに分かれた上に霧なんて立ち込めたら、誰だつてどうするか悩むもんだろーが。先の見えない道ほど不安なもんなんてねーからな。だけどよ、邪魔なんてしてどーすんだよ。あの野郎はとにかく、殺したい殺したい、なんて考へてるあぶねーやつなんだよ。そんなやつがこんな回りくどいことなんてすつかつつの！」

ジンの言いたいことは「うだ。あんな強烈な殺意を持つ者ならば、わざわざ通路を増やしてみたり、霧で目をくらましたりしないでもっと直接的に攻撃していくほうが納得がいくということだ。それがなぜわざわざ俺たちを足止めするような方法を取ったのか。

「それって、まるで魔法を使うまでの時間稼ぎしているみたいじゃない？ あたしもよく知らないんだけど、強い魔法を使うには長い呪文を唱える時間と精神の集中が必要だつて聞いたことがあるわ。もしかするとこの霧とかつてそのため？！」

「それだとこのままここにいたら危ないってことじゃないですか？」

「早くここから離れましょうよ！」

霧で遮られた周囲を見渡してリベルとクラッセの2人が叫ぶ。

その時だ、弾かれたようにジンが顔を上げる。

「なんの音だ、これ」

じつと耳を澄ますジンを俺たちが凝視する。

「音、ですか？」

「ああ、これは……金属の音か？ ガシャンガシャンてよ、おい、なにかが歩いてるような音がすんぜ！」

ジンの確信をもつた言葉に俺はいやな予感がした。

「音なんて……するわね。それにこっちに向かってきてる？」

「ねえ、こっち、からも、音がするよ」

レミが逆の方を指して言った。

ガシャン……ガシャン……

確かに彼らの言つ通り、金属の擦れ合つのような音がする。

「これって鎧の音じゃないか？ 城の兵士たちが着てるような全身甲冑の。それもどの方向つてわけじゃない、全ての通路の先から聞こえてきてる！」

俺の言葉を合図に全員がそれぞれ通路を見渡す。

「どう考えたってこの状況じゃ 友好的な相手つてわけにもいかねーだろうな。このまま来られても分が悪いぜ。ファイターはティールしかし一いつつてのに、ソードが折れちまってるんだからよ」

「この通路を行こう。囮まれる前に突破するんだ」

そう言つて目の前の通路を指す。どこに進んでも一緒なら決断は早い方がいい。敵が1人だけならば今の俺たちでもなんとかできる可能性はある。

「一本道とは限らねーかんな、はぐれんじゃねーぞ、おまえら」

「わかつてますよ」

「ジンこそね」

互いに確認し合つ様子を宙に浮かんで見ていたリンリンが、レミ

の頭に腰を下ろす。

「近づいて、くる。急げ！」

話をまとめるようにレミが言った。

頷き合い、俺たちは9つに分かれた通路のうちのひとつを進む。走ることなどできない、互いを見失わないようによつくりと確実に歩みを進める。いつどこで通路が増えるかわからない、はぐれてしまえば、やつ、の思つっぽだ。なにせ、数歩も先を見れば深い霧で視界が遮られているのだ、焦つて走ろうものなら俺たちはたちまち離ればなれになりかねない。

ガシャンッ……ガシャッ……

金属音が近づく。俺は役に立ちそともない折れたソードの柄を強く握り締める。誰もが無言で霧の向こうの気配を窺っていた。と、

……！

妙な感じがしたかと思うと体の方が先に反応していた。とっさに近くにいたレミを抱き寄せて通路の端へと身をかわす。ジンが自分とは反対側へクラッセを蹴り飛ばすのが見えた。

ガツ！

霧を裂くよにして現れた巨大な斧が左右に分かれた俺たちの間の地面をえぐつた。ジンは俺と同じようにリベルの手を引いて逃れていたようで、2人して壁に背をつけていた。

「な、なんだ？！ いつの間にこんな近くに来ていやがったんだ！」
わけもわからずにジンが叫ぶ。霧のせいで感覚がおかしくなつてもいたのだろうか。きっと誰もがこんなに接近されていたとは思つていなかつただろう。金属音はまだ離れていたはずだ。

信じられない気分で地面をえぐつた斧に目をやる。長い柄が白い霧の先へと伸びていた。

「ハルバード……」

斧を見たレミがつぶやく。

斧だと思ったのだが、これはハルバードという武器だった。突き刺すのに充分な槍の穂先と、断ち切るための斧の刃、そして相手を殴

るための鉄状の柄と、用途に合わせて戦法を変えられる武器だ。だが、その長さと重量のために素早い攻撃は難しい代物だ。

「うわっ、見てください！」

クラッセが甲高い声を柄の伸びる霧の向こうへ向ける。そこには2メートル半はありそうな大男のようなシルエットが浮かんでいた。ガシャン

そのシルエットが揺れたかと思うと、振り上げられたハルバードが再び田の前に吊きつけられる。

「くつ！」

レミを背後に逃がして俺は折れたソードを構える。攻撃するにはなんの役にも立たなさそうだが、いざというときにはこれで攻撃を受けるしかない。とはいっても、重量のあるハルバードの一撃を受けようものならゾッとしたことになりそうだ。

「うおつと！ な、なんだこいつの動き！」

後ろに跳んだジンが悲鳴を上げた。彼の田の前をかすめたハルバードが横の壁に突き刺さる。

「動作は鈍いんだよつ、それなのに気が付いたときにはすぐ田の前に武器が迫ってきていやがる！」

すぐにジンの叫んだことの意味がわかった。壁に突き刺さっていたはずのハルバードなのだが、そこから抜けたかと思うと次の瞬間、気配を感じてかわした俺のいた場所の地面にハルバードの刃がめりこんでいた。

ジンは隙をついて後ろに回りこもうと考えていたようだが、全く出どころの見えない攻撃に動きあぐねているようだ。

「このまま戻つたら追い詰められかけやつわ！ ビーブするの？…」
リベルが悲痛の声を上げる。

「くつ」

出どころの見えない攻撃をなんとかかわす。少しずつだがジリジリと追い詰められていくのがわかつた。

「リンリン、ゼンさんと話はできないか？」

後ろに下がると、レミの頭の上で黙つているリンリンに尋ねる。魔法陣のある広間では離れた場所にいるゼンさんの声が聞こえたのだ。そういう魔法なのだろうが、今の状況でゼンさんと話ができるば突破の手立てになるかもしない。

「今やつてる。だけどね、ダメみたい。この中でバアバと話ができるなんて、今までなかつたのに……」

目を閉じたままリンリンが何度も首を横に振る。

「やべーゼ、もつさつきんとここまで戻つてきちまつた」

刃の短いダガーでは攻撃をかわしつつ反撃するのは難しい。どこから来るかわからぬハルバードを間一髪かわしたジンが叫んだ。

「うわあ！」

振り向くとクラッセが悲鳴を上げて尻餅をついた。後ろに下がっていたクラッセは九差路のところまで戻つていたようだつた。霧の先には目の前にいるのと同じような大男のシルエットが見えた。

「もう逃げ場がねーぜ！ ちっくしょお！」

ハルバードの一撃を後ろに跳んでかわす。横に並んだジンの顔が歪む。

「もう無理よ！」

リベルがその場にうずくまる。固く握り締めている杖は、うんともすんとも言わない。主人の命令がなければ強力な魔法を生み出す杖もただの棒きれだ。魔法も使えずにただ涙を拭う少女は今ほど自分が無力さを痛感することはないだろう。

ぐるっと周りを見渡すとすでにどの通路にも大男のシルエットが

仁王立ちしているのが見えた。クラッセが尻餅をついた体勢のまま後ろに退いていた。じとりと頬を汗が流れ落ちる。

「こりなりややけだ

俺はソードの納まっていた鞘を左手に握り締める。

「お、おいつ！ そいつでどーしょーってんだよティール」

俺の様子に気付いたジンが叫ぶ。

「俺が囮になる！ その隙にみんなを連れて逃げろ！」

覚悟を決めるしかない。俺やジンはともかく、リベルとクラッセ、レミは武器すらもつていないので、ファイターの自分が行かずしてどうするのか。

「いくら攻撃の出どころが見えないといつても、何人も同時には攻撃できないはずだ！ ジン！ みんなを頼むぞ！」

「そりや無茶だぜ！ おめーはどうすんだよつ、おい！」

背中からジンの叫び声が届いたが、もう止まるわけにはいかない。制止する声を振り切るように走りながら鞘を大きく振りかぶる。ハルバードの間合いの外にいたときには見えなかつた大男の姿が見えた。思つた通りの全身甲冑で立つてゐる大男、その兜の隙間からはまるで生気が感じられず、真つ暗闇だった。

（人間ですらない？！ やはり魔法で造られた兵士か！）

だからこそその不可解な動きなのか。人間ではあり得ない動きだとは思ったが、そのせいなのか？ そうだとしてもそれが攻撃の出どころが見えない理由になるのだろうか。もっと別の理由が……。

だが、そんな事を考へてゐる場合ではない。目前に迫つた鎧の兵士がハルバードを振り上げる。俺は鞘を振り下ろそうと腕に力を込めた。

ザシユツ

霧が朱に染まつた。遠くからなにごとか叫ぶ声が聞こえた。俺は振りかぶつた格好のままだつた。なにが起きたのか一瞬わからなかつたが、後ろに倒れ込んでしまつた自分になにが起きたかすぐに理解できた。来ていた皮鎧は真ん中を鋭くえぐられてゐる。鎧の兵士

が持つハルバードは俺の血を吸い、刃先からは赤い血がしたたり落ちていた。

「いやああああああああ！」

悲鳴がやけに頭に響いた。それにしてもどうしたことなのか。すでに鞘を振り上げていて振り下ろすだけの俺より、鎧の兵士の方が遅れてハルバードを振りかぶっていたはずだ。鞘で一太刀浴びせたから後ろに跳ぶ余裕くらいはあったはずなのだ。それがなぜ、俺はここで倒れているんだ？　湧き上がる疑問にかぶせるように肩をぐつと掴まれた。

「言わんこつちやねえ！　ディール、しつかりしろ！　死ぬんじゃねえぞ！」

「うわああああ！　ぼ、僕が相手だ！」

俺の肩をゆさぶるジン、その俺の手からこぼれ落ちた鞘を握り締めたクラッセが俺たちをかばうよつて立ちはだかる。

「すぐに、薬草の、用意する、から」
傍にしゃがみこんだレミが言った。

(俺のことはいいから逃げてくれ！)

そう言おうとしたが声が出ない。鎧の兵士が無言でハルバードを振り上げる。このままではクラッセも同じよつてやられてしまう…。固く瞼をつむったその時だ。

「えつ、なに？！　誰よ！」

リベルの戸惑ったような声につつすらと瞼を開ける。

「わかったわ！　続けて呪文を唱えればいいのね？！　やつてみる！」

誰と話しているのか、リベルはひとつ頷くとなにか呟きはじめた。

「ばかっ、どけ！」

ジンがクラッセの襟首を掴んで引っ張る。そのままの前を強烈なハルバードの一撃がかすめる。

「なに『じちや』じちや言つてんだよリベル！　おいレミ、薬草はまだかよ！　うろちょろすんな坊主、おめーが敵う相手じやねえ！」

3人に叫ぶジンの表情には焦りが見てとれた。キラキラと光を舞い散らせながらリンリンは鎧の兵士の周りを飛び回っている。陽動のつもりなのだろうが、鎧の兵士は全く意に介した様子がない。

「ちょっとやめてよ！ ディールの近くに行かないでつたら…」

懸命に気を引こうとしてリンリンがわめく。

ガシャン、ガシャン、ガシャン

「囮まれた！ くそつ」

「リベルさん、そこで突つ立つていたら危険です！ 逃げてください！」

クラッセが目を開じてぶつぶつ言つてゐるリベルに叫ぶ。

「……暁より黄昏へ向かいしもの、万物を照らせしものよ」リベルの声が徐々に大きくなる。うつすらと彼女の全身を赤いオーラのようなものが包み込みはじめた。

「えっ？ リベル……」

宙に浮かんだままリンリンが呟く。俺たちを囮んだ鎧の兵士たちが一斉にハルバードを振り上げた。

「おいつ！ 逃げろリベル！」

ジンが叫ぶ。その時、一陣の風が吹いた。熱風が俺たちの顔を撫でていく。

「邪悪なる意思を焼き払え！」

力強くリベルが杖を掲げる。その先端が彼女の言葉に応えるように真つ赤な光輪を描いて光輝いた。

突き出した杖から炎が噴き出す。熱気に押されて霧がさつと引いていった。リベルが生み出した炎は、まるで意思でも持つてゐるかのように霧から姿を現した鎧の兵士へと向かうとその身を焼いた。ぐにやりと飴細工のように鎧が溶ける。次々と鎧の兵士を炎が飲み込み、そのたびに鎧の兵士たちは悲鳴すら上げずに溶けていった。

「魔法はまだ使えねーんじやなかつたのかよ？！ いや、にしてもすげえ！」

ジンが感嘆の声を上げる。

「炎が敵をやっつけていきますよ！ あのが最後の一體です！」

クラッセが叫ぶのと、炎が鎧の兵士を飲み込むのは同時だった。

「よつしゃあ！」

「リベル、えらい！」

ガッシュポーズをとるジン。リンリンはリベルの周りをぐるぐると飛び回る。

「魔法使えたのかよ！ それならそりゃ、さつやくせつてくれよな。ディールなんて死にかけて……つて、おいディール！」

「あつ……」

4・7（後書き）

現在多忙のため、更新が遅れがちになつております。連載当初のペースでいけば6ヶ月で終わらせられると思っていたのですが……。暇が出来次第、遅れを取り戻すつもりで書いていきます。（春秋）

傍らのレミが小さく驚きの声を上げる。

「あ、れ？ 傷が、ない」

見るとレミの言う通りに傷がなかった。治ったといつよりも、むしろ最初から存在していなかつたように皮鎧にはえぐられた跡すらなかつた。

「わけがわからんねえ」

「痛みも全くない。いや、そもそも痛みの感覚すら麻痺していたのか、よくわからなかつたんだが……。しかし、これは一体

怪訝な顔をするジンと顔を見合わせる。

「でも無事でよかつたですよ。リ、リベルさん！ 大丈夫ですか？」

！」

その声でリベルの方へ振り返ると、頭を抱えてふらつと揺れたりベルがその場に膝をつく。

「大丈夫よ。ちょっとめまいがしただけ」

そうは言つが本当に大丈夫なのだろうか。なにしろリベルは病み上りだ。どうやって魔法を使えるようになつたのかはわからないが、めまいの原因はそのせいかもしれないのだ。

「これ以上無理すんじゃねーぞ、あとは俺らに任せろ。それにしたってすげえもんだぜ魔法つてやつあ」

「いつの間に使えるようになつたんですか？」

白い歯を見せるのはジン。不思議そうな顔をしたのはクラッセだ。今までは魔法が使えないと言つたのは他でもない、リベル自身なのだ。それが急にどうしたのか、クラッセでなくとも疑問に思うところだろう。

問われたリベルは軽く頭を振つた。

「声が聞こえたの」

心ここにあらずな様子でリベルが答える。

「声？」

レミの黒いフードがピクリと動いた。そんなレミになにか心当た
りでもあるのかと僅かに期待したが、彼女はそのまま黙り込む。
「ええ、女人の声。とても優しい声だったわ。言われたとおりに
呪文を唱えたらだんだん体が熱くなつてきて……」

その時の感覚を思い出したのリベルは目を閉じて静かに言った。
「よくわからないが、自由に魔法が使えるようになつたつてことな
のか？」

俺は尋ねてみる。もしそうなら、これから戦闘が随分と楽にな
る。別にさつきみたいなすごい魔法じゃなくてもいい、魔法で援護
してもらえるだけでも結構な戦力になるというものだ。

「ううん、きっと無理よ。あの声が誰なのかわからないけど、あた
しの意思で魔法を使つたわけじゃないもの。きっと、おばあちゃん
がくれたこの杖のせいじゃないかしら」

そういうてリベルはもらつたばかりの杖に目をやる。彼女はなに
か問い合わせるような視線を注いだが、杖の先端に鎮座している碧の
宝石はなにも語らない。はあ、とリベルはため息をつく。
「ちえー。まあいいや、先を急ごうぜ。ディールの怪我が無しにな
つてんのも、リベルが聞いた声つてーのも、わけわかんねーことば
つかだけど、考へても仕方ねーことは考へねーに限るつてもんだ
が」

楽天的に言つるのはジンだが、確かにそのとおりだ。冒険者になつ
たばかりの俺たちが推測できるようなことなんて、たかがしれてい
る。幸いにも俺たちにはゼンさんという味方がいる。わからないこ
とは彼女に聞いたほうが確実というものだ。それに、

「そうだな、またいつ邪魔が入るかわかつたものじやない。リンリ
ンがゼンさんと話ができなかつたつてことも気になるしな。早く宝
物庫に行つて目当てのものを見つけたら戻ろつ」

そう言つ俺に4人が頷く。

「バアバ、どうしたんだろ……」

リンリンだけが浮かない顔でクラッセの肩に腰を下ろした。

「宝物庫つてのはどこにあんだよ」

再び通路を歩きはじめて10分ほど経ったとき、ジンがぼやいた。

「もうすぐだつて。ジンジンつたら堪え症がないなあ」

ふわりと飛んだリンリンがジンの頭に乗るとポカリと叩く。

「つて！ なにすんだこのチビスケが！」

怒ったジンがリンリンを掴もつと手を伸ばすが、それをひりりとかわして彼女は笑う。

「あつはは、そんなに元氣があるなら文句言わないの。そんなことよりちゃんと周りを見張つてよね」

「けー！ わかつてらい！ ……ハアハア、余計な体力使つちまつたぜ」

空を飛べるリンリンとの追いかけっこはさすがに分が悪いと悟つたのか、すぐに諦めたジンが肩で息をつく。頬から一粒の汗が流れ落ちる。

「なんか暑くねーか？ いや、俺の気のせいかな？」

ジンが額を袖でぬぐいながら言った。

「いや、俺もそう思つていたところだ。これもやつのせいかな？」

強い悪意を持った未だ姿を見せない敵のことを想像しながらジンに顔を向ける。なぜかはわからないうが通路はだんだんと暖かくなつてきていた。それが何者かの魔法によるものなのか、どんな理由があるのか、とにかく皮鎧の内側がじつとりと汗ばんで気持ちが悪いことこの上ない。今度は一体どんな攻撃を俺たちに仕掛けようとうのか、一瞬たりとも気が抜けない。

「本当に暑いわね。もうつ、お風呂に入りたいわ！ ちょっと、こっち来ないでよね」

そう言ってリベルは一人端に寄る。

「どうしたんですか？ なにが起じるのかわからないですし、できるだけ固まつて歩いたほうがいいですよリベルさん」

クラッセが不思議そうな顔で端を歩くリベルに声をかける。

「へつへつへ、そつだぜ。坊主も心配すつだろ？ じつに来いつて」

なぜかにやけた顔でジンがリベルの方へ歩み寄る。一体なにが面白いんだ？

「来ないでよ、ばかジンー。ちょっと、リンちゃん、こいつなんとかしてよー！」

ジンから身をひるがえして避けるリベル。彼女がどうして俺たちから離れたがっているのかは俺にはわからないが、なぜかいやがっているようだ。

「ばかジンジンー。ほんとデリカシーないんだからつー！ リベルがいやがつていてるでしょ、離れなさい！」

リベルのピンチに気づいたリンリンがジンの髪をこれでもか、というくらいに引っ張った。

「いーでつー！ いーじやねーかよ、減るもんじやねーし。これから一緒に冒険してくんんだ、汗の臭いなんざ気にしてたらやつてけねーつて。それをわからせるための儀式みたいなもんなんだよ」

「ああ、そういうことだったんですね？」

クラッセは手のひらをポンと打つて感心している。俺もリベルの行動に合点がいった。つまり、俺たちに汗をかいた自分の近くに来てほしくなかつたというわけなのだ。クラッセもそうだが、つくづく自分が女心をわかっていないのだと思う。もしかして俺は鈍感な方なのだろうか？ その点、すぐにそれを察したジンはすごい、と思ってしまう。これで、あんなちやちやを入れなければ、話術も巧みだし女の子にモテそうなところだが、そこに気づいていないところがある意味損をしている所だと思つるのは俺だけだろうか。

「あの扉、かな？」

なおも下らない言い合いを始めるジンたちを尻目に、我関せずを

決め込んでいたレミが指をさして言った。これだけの暑さでの黒いローブを深々とかぶつているわりにレミは全くそれを感じさせない口調だ。そんな彼女を不思議に思いながらも通路の先に目をやる。「どうやらそのようですね。急ぎましょ、ほらジンさんもりベルさんも」

クラッセが言い争っている2人に声をかける。

「おっしゃ、とっとともうもん頂こつぜー！」

扉を見るならジンが走り出す。

「ちょ、ちょっとー 待ちなさいよー ほら、ディールたちも急ぐのよー」

リベルがジンの後を追い、リンリンも続いて飛んでいく。そこには先ほどまでの疲れは感じられなかつた。そんなリベルにひと安心しながらクラッセとレミに顔を向ける。

「やれやれだな。じゃ俺たちも行こうか

「そうですね。ディールさん、疲れた顔をしてますけど、大丈夫ですか？」

本気で心配そうな顔でクラッセが俺を見返す。

「はは、あの2人を見てたらな。だがまあ、連戦続きとはいえ、まだまだ元気さ。ほら、レミも行こう。きっとゼンさんが待つてる」クラッセに苦笑を返してからレミを見る。

「もしかすると……でも」

「どうしたんだ、レミ？」

俯いたままぶつぶつとレミに首をかしげる。俺の声に気づいたレミは顔を上げると、

「ううん、なんでも、ない。行こうか」

フードの奥から蒼い瞳が俺を見た。なにか気になることでもあるのだろうか。先ほどからのレミの態度には気にかかるところもあるが、今は先を急ぐことにする。だが、後でゆっくり話しきできる時間があれば聞いてみよう。出会ってそれほど時間は経っていないが俺たちはパーティーなのだ。仲間の力になれることがあれば惜しま

ず力になろう。先に扉をくぐる少女を見ながら俺は思った。

扉をくぐると剣や槍が所狭しと並んでおり、別の一角には魔法のアイテムと思しき品物が山積みにされていた。

「すごいな、この光景」

感嘆の声が同時にいくつか上がった。

「ゼンさんってやっぱりとんでもない人物なんじゃないでしょうか。いやす」「ですよ、これならディールさんにぴったりの剣がありそうですね」

クラッセがそわそわしながら言い、ジンは「ひやつほー！」、飛び上がりながら宝の山へと駆けていく。

「ぐげつ」

その襟首を掴んだのはリベルだ。

「もうつ、必要なものだけよ、持つていいくのは。なんでもかんでも持つていこうとしたら、あんた、本当にカエルにされちゃうわよ」「け、ケチくせえな。わかつてるつつの。んでもよ、シーフとしては一通り確認しておかなきゃ気がすまねーんだって」出鼻をくじかれたジンがしぶしぶと言い訳をする。

「そう言いながらリュックサックのチャックを開いてましたよね」

「まったく手が早いやつだ」

クラッセと2人で半眼になつてジンを見る。

「おっ、このダガーなんていいじゃねーか」

ジンにとつては俺たちが呆れて見ていることなど気にもならないことのようだ。さつそく並んでいる武器の中を物色しはじめた。

「僕たちも武器を探しましょよティールさん。ティールさんはやっぱり剣を探すんですか？」

呆れていても仕方がないとわかったのか、クラッセもジンに続く。

「そうだな。槍の扱いはわからなし、慣れている剣の方がいい。クラッセはどうするんだ？ やっぱり斧にするのか？」

クラッセといえば森に出てすぐにお兄さんの形見であるという戦斧をなくしたまま、今まで丸腰だったわけだが、せっかくこれだけ武器を選べるのだから使いやすいものを選んだほうがいいのではないかと、ついお節介ながら思つてしまつ。あとで斧を取りにくくしても彼にはあの重量のある戦斧は扱えないだろう。今までなんとか無事でこられたが、これから先もそうであるとはいえない。ずっと守つていてあげればいいが、彼一人でなんとかしなければならない局面もいつか必ずくる。その時に使えない武器を持つては……。

「安心してください。このショートソードなんか良さそうですね、うん。いつまでも皆さんのお荷物になつていたら天国にいる兄さんに叱られちゃいますから」

照れくさそうに頭をかきながらクラッセが言った。

「あら、装飾が凝つているわね。ちょっと素振りしてみたら？」

ショートソードを手にしたクラッセに気づいたリベルが声をかける。彼女自身はゼンさんから杖をもらつたので、特にすることがないらしい。ジンのリュックサックを取り上げたようで、大量に盗まれる心配がなくなつたので、のほほんとクラッセを見ている。

「いいじゃない。クラッセはそれにしたら？」

「ええ、僕もこれが気に入りましたよ。これで皆さんにはもう迷惑をかけませんよ」

クラッセがリベルと笑顔で笑い合つ。そんな彼を見て、俺は自分の心配が杞憂に終わつたと知り安心した。見た目はただの弱弱しい少年だが、芯はしっかりと強く持つているのだ。中には亡き肉親を想うがゆえに形見に似た品物を持つことにこだわる者もいるだろう。だが、クラッセは思い出の中に逃げこまことに、ちゃんと現在を見て、大事な道を選べる。外見だけでは計れない強さを持っているのだと。笑顔の2人を見ていると、自分もしつかりしなくてはと決意を新たにする。あの笑顔を生かすも殺すも、その一端を自分が担つていいのだ。ずらりと並べられている剣に視線を移すと、1本の剣に目が留まる。

何の変哲もないただの剣だった。年季の入つたような薄汚れた黒色の鞘に収まつた剣の握りの端には、小さな赤い宝石の玉がついていた。なんとはなしに拾い上げようと、剣に手を伸ばす。

「つつ！」

柄に指先が触れた瞬間、激しい痛みに手を引っ込める。まるで火で焼いた鉄の棒に触れたときのようだ。そこでやめにして別の剣を選べばいいようなものだったが、その剣がなぜか妙に気になり今度はおそるおそる鞘に触れてみる。

「なんともないな」

鞘を持って拾い上げると、意を決して柄に指先を当てる。……特に熱くはない。鞘から刀身を一気に引き抜くと、銀色の刃が灯りを受けてキラリと光つた。その広い刃は分類するならブロードソードに当たるだろうか。

そういえば不思議なことだが、鎧の兵士たちが襲つてきた9つに分かれた通路がなくなつてからというもの、ほのかな灯りが通路を照らしはじめたのだった。宝物庫に入ると、外の昼間と大差ない灯りが俺たちを出迎えた。お役御免となつたロウソクたちはどことなく元気がなくなり、今は宝物庫の隅でしょんぼりとしていた。

「よつ、どうかしたのかよ?」

掲げたブロードソードをまじまじと見ている俺にジンが意氣揚々と声をかける。お気に入りのダガーが見つかったようで、彼はホクホク顔だ。見れば手に持っているのとは別に、ベルトにも2本のダガーが差されている。

「いやなに、なんでもないわ。ジンもいいダガーが見つかったのか?」

問われてジンは唇の端を上げる。

「まーな。つつても使えるのはこの3本でとこだな。ここにはリベルには秘密だぜ? ほら、これなんてでっけー宝石がついてんだろ? きっと高く売れるぜえ!」

そういうでジンは懐に忍ばせたダガーをひとつそりと見せた。金銀をちりばめたような豪華な鞘に収まっているそのダガーにはジンの言うように大きな宝石がついており、戦いに使う武器というよりは儀礼用の品物といった風だ。

「おまえなあ」

リベルにリュックサックを取り上げられてもめげない男だ。転んでもただでは起きないとはこの男のためにある言葉だひつ。

「その台詞は本人に直接言つたらどうだ?」

「へつ?」

俺の言葉にジンはおどるおどる後ろを振り返る。そこには仁王立ちのリベルがいた。

「この……ばかジン!」

「待てつて! こんなくらいいいだろ? ! あのバーサンだつて勝手にもつてけつて言つてたじやねーかよ」

慌てて逃げようとするジンの顔にリュックサックが飛んできた。続いてリンリンがどこから見つけてきたのか小さなハンマーでジンを殴りはじめる。

「よく飽きませんね」

もはや達観したようにクラッセが言つ。

「まったくだ」

誰かお茶でも煎れてきてくれるのならば、2人してすやすいでいる
れるような気分である。

「リンリンが一緒になつてからとこいつもの、ジンはリベルに頭が上
がらなくなつてきてるなあ」

「やつぱり1対2じや分が悪いんじやないですかね」

2人してしみじみしてると、ふいに皮鎧の背中をトンと叩かれ
俺は振り向く。

「これ、かな」

レミが5つ指輪を乗せた手の平を俺に見せる。

「ああ、ゼンさんの言つてた魔法の効果を強くする指輪つてやつか
？」

俺が聞くとレミは頷く。

「あー、それそれ。確かそれだつたよー。」

俺たちに気付いたリンリンがふわりと飛んでくる。

「こいつがありやあ、俺らでもなんとかなんのか？」

リベルとリンリンの攻めからようやく解放されたジンが言つた。

すでに疲れ果てたような顔だ。

「どうだろうな。とにかくすぐにでもゼンさんの所へ戻った方がいい
んじゃないか？」

俺もジンもクラッセも戦うための武器は見つけることができた。
レミはレミで護身用なのか、小振りの杖のようなものを手にして
た。言いながら指輪を中指にはめてみる。その瞬間、体に精気がみ
なぎつてくるような感じがした。

『どうやら指輪を見つけたようだね』
するとすぐに頭の中で声が響いた。

「ゼンさん？！」

「バアバ？！ どうしてたの、心配したんだからー。」

リンリンが声を大にして叫ぶ。

『相手は思つていたよりも強い魔力のようですねえ、さつきまでこいつ

ちの魔力を遮断されていたのさ。だけどねえ、まさかこんなお嬢ちゃんがねえ……』

ゼンさんの中は言ことよどむよつこ小さくなつた。

「お嬢ちゃんつて、リベルのことか？」

キコトンとした顔でジンがリベルを見る。

「えつ。な、なによ？！」

全員の視線が集まつたリベルは両手で体を庇ひよつて一歩後ろに下がる。

「リベルがどうかしたんですか？」

俺は姿の見えない老婆に向かつて問いかける。もしかしたらリベルが聞いたという声となにか関係があるのかもしれない。数拍おいてゼンさんの声が響いた。

『もつ何十年も前に眠りについてしまつた魔道機構をそこのお嬢ちゃんが起じしたのさ』

俺たちゼンさんのこの部屋まで急ぎ足で戻った。つこわしきまでは黙つても知らずと汗が出てくるほどの暑さだったが、今はその暑さも引いている。

結局、俺はブロードソードを一本だけもらつていくことにした。皮鎧は冒険者になるために買つたばかりだつたし、折れたソードの代わりが見つかっただけでも十分だ。迷いながら選んだ鎧だけあって愛着もあるのだ。クラッセはシヨートソードの他に俺と同じような鎧を装着していた。お兄さんの形見であるという戦斧以外には何ももつていなかつた彼にとつては大きな収穫だらう。「冒険者になんに使えねー斧一本だけでよく来たもんだぜ」、ジンは呆れながらクラッセに言つていた。

レミは護身用に持つている杖が1本だけで、リベルはゼンさんから事象石のついた杖をもらつていたので、他には白いマントだけを羽織つていた。反対にジンはといえば、戦闘用のダガーが3本に、結局リベルとリンリンの攻撃を振り切つてもつてきた豪華な装飾が施された儀礼用のダガー、魔法の効果を上げる指輪の他にも10本の指の全てに異なる指輪がはめられていた。

「あんた……よくあたしたちの田を盗んでそんなに持つてきたわね」がつくりと肩を落としそうにリベルが言つたのはゼンさんの部屋についた頃だ。

「おめーみてーな小娘に氣付かれるようでシーフなんぢやつてられつかよ」

ニヤリとするジンの頭をリンリンの小さなハンマーがポカリと叩く。

「それもひとつのお能かねえ。まあそんなに田へじり立てなくともいいわ。誰にも使われずにひつそりと眠つているよりは、あんたみたいな坊やだとしても使ってもらえる方が幸せなのかも知れないか

「うね

その様子を見ていたゼンさんがしわがれた声で言った。

「だろー？ 話がわかるゼバーサン」

「調子にのらないの」

「ヤーヤと笑うジンをキッと睨んでリベルが言った。

「お嬢ちゃん、名前はなんと言ったかねえ」

唐突に聞かれてリベルはジンから視線をゼンさんへと移す。

「リベルよ、おばあちゃん」

「彼女がどうかしたんですか？ 魔道機構とかおっしゃいましたね、リベルが起こしたとかなんとか」

俺はリベルに代わってゼンさんに尋ねる。その魔道機構とかいうものを起こすとどうなるのかはさっぱりだが、ゼンさんの口ぶりからするとただ」とではなさそうだ。

「あたし、なにもしてないわ。なにかの間違いじゃないかしり

首を捻りながらリベルが言つ。メイジでありながらついさっきまで魔法を使えるようになるのはまだまだ先だと思つていた彼女にとっては、まさに寝耳に水の話だろう。

「いいや、お嬢ちゃん……リベルだね、あんたがやつたのさ。この感覚、懐かしいね。あたしの師匠がいなくなつて以来だからね」

ゼンさんは昔を懐かしむかのように手を細めて言つた。

「おいおいバーサン、一人で懐かしんでいねーで俺らにもわかるよう説明してくれよ」

じれつたそうにジンが言つた。

「気の短い坊やだねえ。まああまりのんびりとしてもいられないね。手短に話すと、ここはあたしの師匠が作った”ティダリア小さき太陽”と呼ばれていた場所なのさ」

「”小さき太陽”？ なんだそりや」

「まひとつピンとこないジンが言つた。それは俺も同じで、隣を見る」とクラッセも首を捻つてゐる。

「待つて……どこかで聞いたことがあるわ。どこだつたかしら、最近近聞いた名前だと思うんだけど」

リベルが必死に思い出そうとする。そんな彼女を俺たち三人がじつと見つめると、

「ちょっと! そんなに揃つて顔を見られたら思い出せるものも思い出せないわよ!」

仕方なくゼンさんの言葉を待つことにする。すると、

「メイローズ・ウルヴァン」

ポツリとレミが漏らす。

「え? なんですかレミさん」

聞き取れなかつたらしいクラッセがレミに尋ねる。

「こここの、本来の所有者。深紅の、魔道師。その弟子は、レンゼン・ファスター

「レミよお、俺らにもわかるように説明しろよ」

またも話が見えずにジンがぼやく。

「やつと、繫がつた、よ」

レミの視線はまっすぐゼンさんを見ている。

「その名前ならあたしも知つてるわ。あの『デュランダー・シギルと一緒に旅をしてたつていうメイジでしょ? デュランダーが有名になりすぎて知つてる人は少ないけど、メイジなら誰でも知つてるもの。えつ? もしかしてレンゼンって……ゼンおばあちゃんのことだつたの? !」

信じられないといつたような顔でリベルが言つた。

「ん~? そんな名前だつたかな、バアバ。なになに? バアバつてもしかして有名人? ! すごい人なの?」

リンリンがパツと顔を輝かせる。レミやリベルの口ぶりからするとそうなのだろう。だが、俺たちにはいまいちピンと来ない。確かにデュランダー・シギルは有名だが、妖精を連れているといふこと

の他には彼は常に一人で旅を続けていると伝記には書かれているのだ。

「すごい魔法使いに出会っていたのね、あたしたち……。深紅の魔道師つていつたら今でも最高峰に数えられている魔道師の一人だもの！ おばあちゃんだつてすごいのよ、デュランドーやメイローズと一緒にたくさんモンスターを倒して、デュランドーたちがいた時代はモンスターに脅える必要なんてなかつたそうだから！」

興奮するリベルにジンが「そいつあすげえ」と感嘆の声を上げる。モンスターのいない平和な時代があつただなんて、それもゼンさんがその平和に一役買つていたというのだ。そんな人物に俺たちが出会つたということではすごいことではないか？

“小さき太陽”は、深紅の魔道師、が造つた、魔力増大システムにして

「魔族を打ち滅ぼすための要塞さ。若いのにそんなことまで知っているなんて大したもんだねえ。だけど、主を失つてから眠りに入つたまま、今の今までこんなことなんてなかつたのにね。まさか今になつて眠りから覚めるなんてね」

レミに続けてゼンさんが言つた。その言い様は今でもこの要塞が目覚めたことが信じられないといった様子だった。

「それが目覚めるとどうなるんですか？」

クラッセが尋ねる。

「さてね」

短ぐゼンさんが返す。

「さてね、つてバーサンもメイローズつての一緒にモンスター退治してたんじやねーのかよ！ 知らねーつてこたねーだろが」

とぼけた表情のゼンさんにジンが言い返す。彼の言うことももつともだ。彼女が知らなくて誰が知つているというのだらう。だがゼンさんは大きくかぶりを振る。

「本当に知らないのさ。師匠やデュランたちがモンスター退治の旅に出ていて、それがあたしもついていったたというのは本当さ。だ

けど、あたしはその頃まだ子供でね。弟子といつても実際には何の役にも立たない小娘だったのさ。事実は大きく捻じ曲げられて伝わっているようだけどね。モンスターの少ない時代になつたというのは本当だけれど、全てが退治されたわけじゃないよ、影を潜めて隠れていただけなのさ、『デュランたちの脅威からね』

ゼンさんはそう説明すると、「ほら、その証拠に今でも街を出ればモンスターがいるじゃないか」と言つた。

「大勢いる弟子の中からあたしが選ばれてこの要塞を継いだのはいいけれど、師匠がいなくなつた途端に眠りについちまたのさ。デュランもいなくなつて、多くの戦士たちも散り散りとなつてね。今さら田代められても、あたしに”こいつ小さき太陽”を扱う術なんてないんだよ」

そう言つゼンさんの表情はなぜだか寂しげなように見えた。

「ちょっと待てって。なんか話が飛びすぎじゃねーか？ この要塞がどうとか俺にはなんのことやらわかんねーけどよ、今一番大事なのは、”あいつ”だろ、森で俺らを襲つたやつ。人に歴史あり、つてのもいいけど、このまんまじやーブュッフェが襲われるかもしんねーんだろ？」

思い出したようにジンが言つた。めまぐるしく事態が転々としてつい忘れてしまいそうになるが、こんなところでゆっくり昔話をしている場合ではなかつた。

「この要塞の扱いはわからないけどね、”小さき太陽”が田代めたつてことには特別な意味があるつてことだけは知つているよ」

「特別な意味？」

神妙な顔つきになつたゼンさん。俺は思わず聞き返す。

「あんたらを襲つたのは”バラサイトイビル闇に憑かれた者”だろうね」

そう言つたゼンさんの顔が曇る。

「どうかしたんですか？」

ゼンさんの様子にクラッセが尋ねる。

「思ったよりも早いね。禍々しい魔力がこのあたりから離れていつ

ているよ。向かう先は

「まさか、ブユッフェ？！」

危惧していたことがその通りになってしまった。脳裏には黒い蝶が街中を覆い尽くしている光景が広がる。ぞつとしない光景だ。

「バーサン、ここがどのへんなのか教えてくれよ」

素早く地図を開いたジンが言った。リンリンが俺たちを移動させた時のような魔法をゼンさんが使えば話は早かつたのだが、彼女はそんな魔法は使えないと言った。リンリンが持っている魔法のアイテムはゼンさんの師匠であるメイローズにしか作れない特別な代物らしく、他の誰にも作れないのだとゼンさんは言った。

「ここ、ここ！ あつ、印までついてる！」

リンリンが地図の一点を指して言った。

「げえ、なんだよー！ お宝の在り処じやなかつたのかよ！」

大仰な仕草で悔しがるジンの様子に横から地図を覗き込むと、リンリンが指しているのは、最初にジンが見つけて「宝が埋まつてると大騒ぎしていた場所だった。

「すぐには着かない距離ですよ」

困ったようにクラッセが言った。

「2時間はかかるな。しかし、行かないわけにはいかない」

とはいいうものの、ここに来るまでに遭遇したウォーラー やブレスなどのモンスターのことを考えるとげんなりする。あれだけ苦労してきたのにまた遭遇するかもしれないのだ。街にたどり着いたときにはヘトヘトになつて動けないのでは笑い話にもならない。

「それなら心配いらないよ。あたしには移動の魔法は使えないと言つたけどね、街の近くに移動する方法ならあるからね」

「それを早く言つてくれよ！」

鶴の一声がかかり俺たちはゼンさんを見る。ジンだけはムツリとした表情だ。よほど財宝の在り処でなかつたことが残念でならないらしい。

「ここには街へ行き来できる転送装置があるのでさ。それも”小

さき太陽”が目覚めたからこそ使えるようになつたわけだけじね。あたしも移動できる場所の全てを把握しているわけじゃないけど、5番の部屋から移動できたはずだつたかねえ」

ゼンさんはそう言つと一枚の古い地図のよつたものを取り出す。見てみるとこの要塞の見取り図のようだつた。「すごいわね……」この広さ。森の中にこんなに広い要塞があつたなんて」

リベルは驚きのあまり、一の句を繼げずに地図を眺める。

「ちよつとした街くらいのでかさはあるよな。ひと、その5番の部屋つてのはこれか?」

「それだな。よし行け!」

そう言つて立ち上がる。

「あつ、待つて」

リベルの制止に足を止める。

「魔法のこと、だね」

レミの言葉にリベルが頷く。

「こつけね、忘れてたぜ。なあバーサン、リベルのやつ、急に魔法を使えるようになつたんだけどよ、どうしてなんだ? 魔法つてやつあ、呪文とか覚えてないと使えないもんなんだろ?」

「それに契約だつて済ましていないわ。それなのに魔法が使えたのはどうして? この杖のおかげなの?」

リベルが杖を見せて言つた。そうだ、まだリベルが魔法を使ったことに関しては何も解決していない。ここではつきりせめておきたいところだ。

「それはあたしが昔使つていたものでね、師匠からもらつたものさ。必要なときに必要な魔法の呪文が脳裏に浮かんでくる。リベルもうだつたらう? そつやつて自分に扱える魔法のコントロールを覚えていくれる杖なのさ」

「必要な魔法、か。じゃあ、それだとリベルの意思で自由に魔法が使えるつてわけではないんですね」

少し残念に思いながら尋ねる。そうなると、さつきみたいにパンチにならなければ魔法が使えないということになるのだろうか。だが、魔法を使えなかつた時よりはずつといい。

「さて、話は終わりだよ。最後にあんたらに魔法をかけてやるよ。祝福の魔法さ」

そう言つてゼンさんは呪文を唱えた。一瞬だが俺たちの体が光つた気がした。

「これで精神攻撃は効かなくなるはずさ。ぐれぐれも氣をつけるんだよ」

俺たちはゼンさんに礼を言うと部屋を後にした。最後にゼンさんは急ぐ俺たちに”闇に憑かれた者”について語つた。

闇に憑かれた者、それは時代の節目に現れてはこうやって人々を襲う魔物だという。そんな魔物を冒険者になりたての俺たちにどうにかできるのだろうか、不安に駆られそうになる俺たちにゼンさんは「大丈夫」と言った。本当の強さとは腕力の強さや魔力の大きさではないのだと。守りたいと願つ心こそが本当の強さなのだと。今思えば、ゼンさん以外にも遠い昔に誰かに言われたような言葉だ。それが誰に言われた言葉なのかは思い出せないが、今はそれを信じるしかない。俺たちはブヨッフェにいる人々を守りたい。村がモンスターに襲われて、俺は何もできなかつた自分が悔しかつた。悔しくて悔しくて、今度こそは守れるようになろうと誓つた。だからこそ俺は冒険者になつたのだ。

「でもリベルさんが聞いた声って、一体なんだつたんでしょうね」「5番」の部屋に向かうための通路を歩いていると、ふいにクラッセが言った。

「そういう杖、だつてことなんですかね？」

そういうクラッセに、俺はジンと顔を見合せた。「ゼンさんが師匠のメイローズつて人からもらつた杖らしいから、きっとそななんじやないか？ これだけの要塞を作れる人だ、言葉を話す杖くらい作れてもおかしくないと思うけど」

「まー、そーゆーこつたろ。呪文が浮かんでくるとかなんとか言ってたけどよ、年寄りの記憶なんざあてになんねーしな」

2人に言われてクラッセは「そうですね」と軽く返事をする。当の杖をもつてているリベル本人は少しだけ考えるような表情だったが、「もうすぐ5番の部屋につくよ~」

リンリンが言い、俺たちが足早になつたのを見て、氣をとりなおすように「急ぎましょ」とだけ答えた。

部屋に入ると小さな魔法陣が床に描かれていた。リンリンが取り出した鈴をひとつ鳴らすと、ふつ、と体が浮き上がるような感覚になつた。そして、次の瞬間には辺りが一変していた。

目の前には石碑がぽつんと立つていた。文字が何行か刻まれていたが読むことはできない。魔法の呪文かなにかなのだろう。俺たちは森の少し開けた小高い丘のような場所に立つていて、木々の隙間からは遠目に街が見えた。急げばそんなに時間はかかるないだろう。「ここからじや状況がわからぬーな。さっさと行こうぜ」
さびすを返しながらジンが言った。彼の方を見ると山道がなだら

かな傾斜を描いて街へと続いているようだつた。

「なんだか今日は走つてばかりね、あたしたち」

街を手指して走つていると、隣を走るリベルが言つた。肩をすくめて苦笑を浮かべている。

「ほんとにな。冒険者つてのは実に大変な稼業だよ」

同じく笑い返しながらリベルを見るとジンが叫んだ。

「おいつ、見ろよ！ 黒い蝶だぜ！」

瞬間に緊張が走る。リベルと頷き合つと俺はプロードソードの柄にそつと右手をかけた。

木々が開けると、そこには外壁に囲まれたブュッフェの街と、その上空を覆い尽かさんばかりの黒い蝶の大群が群がつていた。

外壁をたどつて門へと急ぐと、普段は両脇に立つてゐるはずの兵士たちはそこにいなかつた。その代わりとでもいうように、門から覗く街の中からはいつもと違つた異様な雰囲気が漂つていた。

人々がざわめきながら天を仰いでいる。異常なほどの数の飛来してきた黒い蝶に不穏なものを感じずにはいられないのだろう。

「ど、どうすればいいんですかね僕たち」

街へ着いたものの事態を解決する方法がわからずクラシヤが言つた。

「どうつて……」バラサイトイビル闇に憑かれた者”つてやつを見つけ出してやつつけりやーいいんだろーがよ」

小さく舌打ちしながらジンが言つ。そういう彼もどうやって”闇に憑かれた者”を探し出せばいいのか見当もつかないのだろう。森にいたときには向こうから襲つてきたが、これだけ大勢の人人がいる中でわざわざ俺たちを狙つて襲つてくるとはわからない。なにしろ、俺たちを襲つたことに理由が見つけられないのだ、たまたま近くにいた俺たちを狙つただけかもしれない。

「あ、あんたたちつ、冒険者ギルドの人たちかい？なんだいありや、ちょっと前から見かけるようになったと思つたら、いつの間にか空を埋め尽くしてねえ……。気味が悪いたらないよ！」

「おばちゃん、ちょっと前つてこたあ、まだ誰も怪我とか襲われたりしてねーのかよ？」

俺たちの姿を見かけたのか、不安げな様子で話しかけられて、ジンは聞き返す。

「怪我なんて誰もしてないよ。あれはモンスターのかいやつぱり」「大丈夫、たとえモンスターでも冒険者の俺たちがなんとかしますから」

胸を張つて言えるほど自信もないが、余計に心配させないよう胸を張つて言ふ。

「そうかい。門番の人たちは見回りするつて他の人たちとどこかへ行つたよ」

俺は空を見上げる。黒い蝶が埋め尽くしているが、一向にそれが降りてくることはない。まるで様子でも窺つているかのよつだ。嵐の前の静けさとはこのことを言つのだろうか。

大通りを進むと、やはりどこもかしこも人々は空を眺めていた。

「その”闇に憑かれた者”ってやつの魔力を探り当てるひとつできねーのか？」

「ちょっと！ 魔法が使えるようになつたばかりなのに、そんなことできるわけないじやないのよ……熟練のメイジならできるかもしれないけど、あたしには無理よ」

悔しそうにリベルが言つた。彼女もできるひとならそうしたいだろ？ それができず一番はがゆい思いをしているのはリベル本人だ。

「これ、どう、思つ……？」

背後の小さな声に思わず振り向く。

「どう思つて……杖が光つてますね。なんですかそれは？」

クラッセがまじまじとレミの持つ杖を見つめる。杖の先端が淡く光つていて、それをレミは俺たちに見せる。

「魔法の武器だから、強い魔力に反応しているのかしら？」

レミから杖を受け取りながらリベルが言った。その途端、杖は大きく輝きだした。

「さやつ、なに？！」

いきなり輝きだした杖の先端を眩しそうに遠ざけるリベル。

「なんだ、光が収まつたな」

「一瞬よお、魔力を持つてているリベルが持つたから光つたと思ったけど、なんか意味……アツ」

「どうしたんだジン」

何を思いついたのかリベルから杖をひつたくるようにして奪つたジンが、杖を掲げながら一回しする。俺とクラッセ、リベルは何事だろうとその様子を見ていたが、レミは「そういう、こと」と納得したように言った。

「つまり、ほれ」

ジンが大通りのななめ向こうへと向けた。

「あ、光つてます。それってどういうことですか？」

「にぶいやつだな。これってきっとよお、敵さんのいる場所を指してんじやねーかつてこと」

「ジン、その敵つていうのは……」

「”闇に憑かれた者”……かも、ね」

そう言つてレミが続ける。

「ゼンさんは、時代の節目、に闇に憑かれた者”が現れると、言ったよね。そして、それは”小さな太陽”が、目覚める、とき。つまり、その時のために、用意、していたのが、宝物庫に、あつた……」

「魔法の武器つてことか」

ジンにレミは頷く。

「じゃあ、僕たちの武器にもなにかの能力があるんですか？」

俺はブロードソードを見てみる。だが、うんともすんとも言わない。初めて手を触れたときの熱した鉄の棒に触れたときのような激

痛は一体なんだったというのだろう。

「そう、かもしない、し、そうじゃない、かもしない」クラッセは俺を見る。もちろん俺にもわからないので首を振ると、「それより敵さんはあっちにこりつてこつた。話なら後でしようぜ、平和を取り戻した後でよ！」

大声で言つてジンがニヤリと笑う。平和を取り戻す、とは少し大きさだと今までなら思うだろ？ だが、リベルのふと眩いた声に俺たちは何かを感じずにはいられなかつた。

「時代の節目つて……なにかしら」

レミの持つ杖が光る方へと走る。先頭をジンが走り、続いて俺とクラッセ、リベルとレミが最後尾を走つた。

道を曲がると、ふいにジンが俺の前から横つ飛びでよけた。どうしたのかとジンを見ると、

「前！ まつえつ！」

ジンの声で振り返ると田の前になにかが吹つ飛んできた。

「うおっ」

とつそで受け止める。ずつしりとした重量がある。受け止めた手の平に冷たい感触があつた。ようけながらもしつかりと後ろ足でふんばると、それは人間だつた。

「わっ、兵士の方じやないですか？」

冷たい感触は兵士の着る鎧のものだつた。

「こらっ、ジン。避けるなよ！ 大丈夫ですか？」

ジンに毒づいてから兵士に声をかける。その時、悲鳴が辺りに響いた。

受け止めた兵士が「うめき声をもらす。見ると、鎧のない腕の部分がなにか刃物で切られたように血で染まっている。

「レミー、薬草はあるか」

「ある、よ。ちょっと、待つて」

薬草を取り出したレミーが兵士の手当をする。

「ウォーラーがいるぜ！」

ジンが叫ぶ。兵士をレミーに任せると俺はブロードソードを鞘から引き抜く。それを見たクラッセも慌ててショートソードを構える。悲鳴の上がった方を見ると、1匹のウォーラーが爪についた血を赤黒い舌でベロリとやっていた。その目が俺たちを捕らえると獰猛そうな光を帯びる。

俺はブロードソードを構えて走り出す。それに呼応するようにウォーラーも腕を振り上げて応戦しようとする。

「はあっ！」

腕に力を込めてブロードソードを振り下ろす。獣の反射神経を持つウォーラーは身をひねってそれをかわす。しかし、それも予想済みだ。

「クラッセ！」

「はい！」

体勢を崩した俺に鋭い爪を向けて襲いかかろうとしたウォーラーは、俺の後ろから現れたクラッセにギョッとした、よう見えた。クラッセの振るうショートソードがウォーラーの剛毛に覆われた腕を斬りつける。彼の技量では一刀両断というわけにはいかないが、それでも予想外の攻撃にウォーラーは一瞬だけたじろいだ。

その隙を逃すはずもない。俺は思い切り力を込めてブロードソードを振り上げる。

それで決着はついた。仰向けに倒れたウォーラーは息絶えたよう

だつた。

「腕上げたじやねーかよティール」

今回はなにもする必要のなかつたジンが駆け寄る。俺はクラッセを見て、「いや、クラッセもよくやつてくれたよ。それに……す”い切れ味だ」

手に持つブロードソードを見る。いかにウォーラー一匹だけで、そのうえ森の中ではなく有利な足場のある街中の戦闘だったとはいえ、ウォーラーの肉体は強靭である。首などの急所を狙つたわけではないただの一斬りで倒せる相手ではない。やはり魔法のかかつた武器だからとことなのだろう。

「これなら、いけるかもしね」

そう呟くと、レミたちの元へと駆け足で戻る。

「ねえ、他にもモンスターがいるかもしね」

「いきなりだ。いきなり現れたんだ」

辺りを見渡してリベルが言つと、レミに手当てをしてもらつていた兵士が青ざめた顔を上げて言つた。

「いきなりってどうゆー意味だよ。まさか何もないところから出てくるなんてこともねーだろ」

兵士の言葉に半信半疑な様子でジンが言つと、

「いや、そのまさかだ。空に集まつている黒い蝶がいるだらう？それがそこに集まつっていたから何かと思つて見ていたら、急にその中からウォーラーが現れたんだ。ああ！ 向こうからも悲鳴が聞こえるぞ。なんで俺たちの街に急にこんな……」

見るとその兵士は俺たちとそつ歳も変わらなさやつだつた。突然の事態にわけもわからないように身を震わせてくる。街からはずれた村ならまだしも、ブュッフェのような冒険者ギルドのある街の今までモンスターが入り込んでくることはそつそつあることではない。平和だと信じていた日常が突然崩れ去つたショックでうずくまつて震える彼の肩に俺は手を置いた。

「俺たちに任せてくれ。こう見えても冒険者なんだ」

笑顔を向ける。少し気が落ち着いたのか兵士の青年はようよると立ち上がる。怯えてしまつのは、きっと戦うことには向かないような優しい青年だからなのだろう。兵士になつたのは俺たちと同じように戸惑う。守りたい”ものがあつてのことなのかもしない。

「他にも襲われている人がいると思う。俺たちは助けに行く」

「もうでーじょーぶだろ？ なんたつて、クラッセの坊主ですら戦えたんだからな。こーんなヒヨツ子がよ」

ジンが憎まれ口を叩くと、

「どうせヒヨツ子ですよ！ でも坊主はよしてくれださ……あれ？」
ポカーンとしたクラッセに、ジンは背を向けてピーピーと口笛を鳴らす。

「今、僕の名前を言いましたよね？」

クラッセは隣のレミに聞いていた。パーティーを組んでからといふもの、ジンから「坊主」としか呼ばれなかつたクラッセだ。初めて名前で呼ばれたことが嬉しかつたのか、口の端が少しだけ上がつているのが見えた。

「みなさん、いい仲間ですね。さあ、他の人を助けに向かつてください。私も他の兵士たちと合流してモンスターの討伐に加わります」笑顔を取り戻した青年が言つた。口調も正して、この様子ならもう大丈夫そうだ。

「よし、行こう。みんなで協力して街をモンスターから守るんだ」4人と視線を交し合うと俺は走り出す。

「そういえばリンちゃんがいないわ」

リベルがキヨロキヨロしながら言つた。

「なんだあのチビスケ、迷子かよ」

「もしかしてついてこなかつたんですかね？」

ジンとクラッセも息を粗くしながら言つた。

「うーん、どうしたんだろう。しかし、探している余裕はないぞ。

またウォーラーだ！」

俺が指した先には黒と灰色のウォーラーがいた。

「ハツ！ 今度はブラックウォーラーにジャックウォーラーかよ。まああのチビスケなら姿も消せるようだし問題ねーだろ。しつかし、ウォーラーのオンパレードかよこりゃ」

唾を飛ばしてジンが言った。

灰色のウォーラーはジャックウォーラーといい、大柄で腕力も強い。黒いのはブラックウォーラーといって、普通のウォーラーよりも小さく俊敏な動きをする、ウォーラーの亞種として知られているモンスターだ。

そこで俺は首をひねった。ブラックウォーラーは夜行性のはずで、普通なら昼間に現れることなどないはずなのだ。

「ブラックウォーラーがそろそろ日も暮れてくる頃とはいえ、こんな日の出ている時間に現れることなんてあるのか？」

うつすらと赤い色を帯びてきた西の空を見てレミに問いかけると、「昼間だと、目が見えない、はずだよ。夜行性、というより、夜にしか、活動できない。それが、ブラックウォーラー、だけど」

レミは戸惑いがちに答える。

「それって自然なことじやないってことよね。誰かに操られているってことかしら？」

「多分、そう」

そうだとすると、その操っている何者かというのは、闇に憑かれ
た者^{ビル}に他ないだろう。あちらこちらから悲鳴が聞こえていることから考へると、かなりのモンスターを操ることができるのが相当の魔力をもつてているのだろうということは、魔法を使えない俺にだってわかる。そんな者が一体どんな恨みをもつてブヨッフェにいる人々を傷つけようとしているのだろう。

「ぐるぜ！」

ジンが叫ぶ。俺たちに気付いた2匹のウォーラーが咆哮を上げながら腕を振り上げる。

「こいつでも喰らいな！」

先手必勝、ジンがダガーを投げつける。それがジャックウォーラーの目に突き刺さる。そこへ続いて俺はブロードソードを振るつた。クラッセも必死にショートソードで援護する。

宝物庫で見つけたブロードソードの切れ味は絶大だつた。俺がブロードソードで斬りかかれば、ジンがウォーラーの気を逸らすべく動き、クラッセが手傷を負わせる。体勢が崩れたところに俺が最後のどじめを刺す。

多少はヒヤッとした反撃も受けたが、さほど時間もかけずに2匹のウォーラーを倒せたことに俺は驚きを覚えていた。

「またモンスターが現れたわ！ あつちよ！」

リベルが叫ぶ。

「あれは、ハグシェル。甲羅には、剣は効かない、けど、その隙間を狙えば、いいよ。ただ、近づきすぎると、甲羅にはさまれるから、気を、つけて」

茶色のふさふさとしている毛並みで一見すると熊のようだが、腕の部分に2枚の貝のような甲羅がついているモンスターだ。甲羅の内側には遅効性の毒がある針が仕込まれてあるのだとレミは言った。「ふん、とろいぜ！」

その動きはウォーラーと比べると鈍く、俺たちはレミのアドバイスもあって倒すのはさほど苦にならなかつた。

「次はどこだ！」

「あつちよ！」

「どんどん行きましょう！」

「あれは、シャドーバット」

「よしきた！ レミ、弱点はどこだ？！」

パーソンであるレミの知識を頼りに、俺とクラッセは刃を振るい、ジンがダガーを投げつけてはモンスターたちの気を引いてそれを倒していく。リベルだけはまだ魔法をうまく使えないのか戦闘には加わらなかつたが、新たに現れたモンスターの場所を俺たちに伝え、そこへと誘導した。

途中、さきほど助けた兵士の青年と遠田で田が合い、拳を上げてエールを送った。彼も兵士の仲間たちとウォーラーと戦っていた。

ようやく一息つけるようになったのは、西の空がすでに真っ赤に染まっていた頃だ。見上げれば、空を覆いつぶさんばかりにいた黒い蝶の群れは、跡形もなく消え去っていた。

「これで……全部ですかね」

全身泥まみれになつたクラッセが地面に座り込んで言った。

「そうだといいけどな。いや、しかし疲れた」

額の汗をぬぐつて答える。

「もう悲鳴も聞こえてこないわ。それに黒い蝶もいなくなつているみたい。これで打ち止めだといいわね」

戦闘に参加していないとはい、リベルも散々走り回つてようやく息をなでおろしたように地面に腰を下ろす。

「もう今日は動きたくないわね」

本当にそうだ。まさか冒険者になつて初めての依頼を受けたばかりだというのに、こんなにもモンスターの相手をしなければならなくなるとは思つてもみなかつた。

「ゆつくりと休みたいですよね」

「美味しいご飯も食べたいわ」

クラッセとリベルが笑い合つていると、ジンが「あつ、おめえ、ディール！」、俺の手元を指して声を上げた。

リベルが「あら？」と口元に手をあてがい、クラッセも「ああ、ディールさん、やりましたね！」と手を叩いた。

「やつたつて？ なにが？」

なにがそんなに喜ばしいことなのかわからず首を傾げると、レミが「レベルアップ、してるよ」と教えてくれた。

言われて急き指にはめてあるリングを見る。冒険者ギルドから冒険者になつたときに貰つたリングだ。それが微かに光つており、そこに刻まれていた文字が最初にあつたものとは変わつていた。そこには”2”を記す古代文字があり、それを見てようやく自分のレベ

ルが上がったのだと実感する。

「ちえー、ディールが一番乗りかよ」

残念そうな口ぶりだが、ジンは白い歯を見せて笑った。

「おめでとうー。」これで本当の冒険者の資格を得たことになるわね！」

リベルが自分のことのように手を叩いて喜んだ。

「宿も、半額。それに武器だって、安く、買えるように、なるね」

レミが言い、クラッセはうんうんと頷いた。

「まー、あんだけモンスター倒してりやーな。ヒドめはほとんびりイールだつたしょ」

「だけビジンたちにも経験値は入ってるんだろ？　俺たちはパーティー登録したんだから」

そう言って光が消えつつあるリングを見る。冒険者になつた時にもらったリングだ。これが与えられるのにはいくつか理由があつて、パーティーを組む際にも重要な役割を果たすのだ。

冒険者ギルドでは冒険者の登録をする他にも、俺たちが円滑に冒険をできるようにするための機能がある。

そのひとつが冒険者に与えられるこのリングを使って冒険者同士でパーティーとしての登録をすることだ。パーティーの登録を済ませた冒険者たちは、モンスターを倒して得られる経験値を全員で分配することができる。ただ、モンスターにとどめを刺した者が一番多く経験値をもらえるので、俺が最初にレベルアップできたというわけだ。

そして、そのレベルアップするための経験値を、モンスターを倒すたびに記録してくれるのがこのリングだ。モンスターを倒すと、カルマという目に見えないものが出てくるらしい。それを放つても特に害はないが、カルマを吸収して経験値という数値に置き換える方法を冒険者ギルドの前身たる自警戦士団が発見し、その発見が直接的ではないにしろ冒険者ギルド発足の理由のひとつになつたというわけだ。

「僕、あまり役に立つてないのに経験値をもらえるなんて、なんだか悪い気がしますけどね」

申し訳なさそうにクラッセが言った。

「それを言つならあたしが一番役に立つてないわよ……」

そんなクラッセに、ため息を吐きつリベル。

「魔法の呪文なんて、さっぱり浮かんでこないし」

そう言う彼女は持つていい杖をうらめしそうに見る。

「今は、まだ、必要な時じゃないから、じゃないかな？」

するとレミがぽつりとつぶやき、俺たちは彼女を見た。

「モンスターがうじゅうじゅしてんのに必要じゃねーなら、いつ必要だつてんだよ？」

不服そうに言つのはジンだ。

「でも、倒せた」

多少なり苦戦したモンスターがいたもののゼンさんからもひたブロードソードに助けられ、また協力して当たつたことで、この街に突如として現れたモンスターはおそらく全て片付けることができただろう。 ”闇に憑かれた者” 本体が現れていないことは気がかりだが。

「ま～、そうだけどよ。んでも、そりや結果論だろ。魔法がありやーもつと楽に戦えたつもんだぜ」

ジンの言つ通りだが、レミの言つ「必要な時」というのは少し違うようだ。

「これを見て」

そう言つてレミは手に持つ短い杖を見せる。モンスターに反応しているのだろうとジンが言つたその杖は、夕日を受けて真っ赤に染まる街の中において、微かな光を照らしていた。

「あんだ？ まだモンスターがいるつてのかよ？」

ジンの言葉にレミは「ううん」とかぶりを振る。

「モンスターには、反応、してなかつた、よ」

読みがはずれたジンは「じゃー、なんだつてんだよ」ドバツが悪そうな顔をする。

「リベルの杖が、この杖と同じ、意味をもつて、存在している、なら……魔法を使わないと倒せない、ような、なにか、と戦うために、魔力を温存、していふとしたら？」

俺たちの顔を見ながら、レミは言葉を選ぶよつこ一言ずつゆっくりと言つた。

「なるほど。今、俺たちはゼンさんの言つていた”闇に憑かれた者

”の近くにいる。普段ならリベルもモンスター相手に魔法を使えるかもしれないが、こと”闇に憑かれた者”をその杖が感知している場合に限っては、魔力を消費しないように温存している、と。そういう事だな？”

俺が聞くとレミは「そう」と頷く。

「それってまだどこかに敵が潜んでいるってことですか？ 僕もうへトへトですよ」

クラッセを見ると相當にまといつて居るようだ。

「できるならどこかで少しくらい休みたいな」

さすがにクラッセのことを考えると、これ以上は無理をさせたくない。

「んなこいつたからレベル0なんだよ」

「うう……」

ジンの毒舌を受けてクラッセが言葉を詰まらす。

「仕方がないじゃないの。適正検査に受からないとなりたいクラスになれないんだから。でもクラッセも自分に合つクラスになればよかつたのにねえ」

フォローをする気があるのかないのか、リベルにも言われてクラッセはさらに大きく肩を落とす。

「でも僕はファイターになりたかったんですよ。兄さんみたいなファイターになりたいんです。それ以外のクラスなんて考えられません」

彼は亡き兄を思い出しているのか、うつむいていた顔を上げて言った。俺はそんなクラッセを見ながら、彼とはじめて会った時のことと思い出していた。

「まずは腹ごしらえでもしながらパーティー組めそうなやつでも探そうぜ。おっ、あのねえちゃんなんかいいんじゃね？ たまんねー

なー

席に着くなりジンが言った。両手を胸のあたりを掴むような仕草で揺らしている。

「おいおい、そんな理由で選んでいいのか？ それにあの人は連れがいるみたいだぞ」

見ると仲間らしいファイター風の男が2人、ジンが目をつけた女性冒険者に近づいて話かけていた。

「ちえー、あんな野郎のどこがいいんだか」

テーブルに肘をついてジンが舌打ちをする。

「それに俺たちみたいな成りたての冒険者とパーティを組めそつなレベルじやないんじやないか？」

俺が言うとジンは「まーな」と気のない返事をする。

「とりあえず俺はファイターでジンはシーフだ。できることならメイジとかクレリックが仲間になってくれると心強いな」

「そんなん、こんな街にいるか？ でもまー、いたら即ゲットだよな」

頼んだ料理が運ばれてくると、骨付きの肉をがぶりとやりながらジンが言った。

「クレリックつたら怪我を治す魔法が使えるらしいかな」

ジンがそう言ってまた肉にかぶりつこうとした時だ。

「てめえ！ 俺の女を口説こうなんざ、なめた真似しやがつて！」

怒声が酒場を揺らした。

俺とジンが声のほうを見ると、ついさっきジンが仲間にしたいと言っていた女性冒険者に話しかけていたファイター風の男2人がギョッとした顔になっていた。

「あらら。あいつら連れじゃなかつたわけね。んで、あの大男が本物の連れってことかい」

面白そうだと言わんばかりの表情でジンが言った。大男は筋骨隆々の体を揺らし大股で詰め寄つていぐ。ファイター風の男たち2人がかりでも敵いそうには見えない。

「人が廁^{かわや}から帰つてきたと思つたら、調子くれてんじゃねーぞカスがつ！」

「その割にや、あのねえちゃんも楽しそうに話してたけどな」大男に聞こえないような小声でジンが言つ。当の女性冒険者は楽しげな表情だ。なんともタチの悪い……。

「ちよつ、ちよつと待つてくれ！ 知らなかつたんだ！」

ファイター風の男の1人が弁解しようと手の平を前に出す。だが、大男は聞く耳持たない。

「ギツタンギツタンにしてやらあ！」

叫ぶなり大男がファイター風の男冒険者たちに殴りかかった。慌てて身をかわす2人。酒場はざわめき席を立つものも出てきたが、多くは野次馬根性で見物している。娯楽とは無縁の生活をしている冒険者たちが多いのだ、こういったイベントは見逃せないらしい。

「ちよこまかと！」

大男がテーブルを盛大に蹴り上げる。上にあつた料理皿がずり落ち、飲み物の入ったコップが宙を舞つた。

「あうつ

「きやあ」

「コップが運悪く居合わせた少年の頭を直撃する。ズデンと後ろに倒れた少年を見て近くにいた女性の冒険者が声を上げる。俺はすぐさま立ち上がり少年に駆け寄つた。

「おい、大丈夫か？」

「は、はあ……。クラクラします」

大男は少年が倒れたことにも気がついていないようで、逃げ回る2人の冒険者を追い回している。

「あーらら。まったく迷惑なやつだな。ま、返事ができるようなら問題ねーだろ」

やれやれといった様子でジンも駆け寄る。

「いい加減にするんだ！ 他の人たちが迷惑しているのがわからぬのか！」

あまりの大暴れぶりにたまらず叫ぶ。ちらりとこちらを見る大男。

その一瞬の隙をついて2人の冒険者たちは一団散に外へと逃げ出す。
「あっ、てめーら！」、「このひ、てめーらのせいで逃がしちまつたじゃねーか！」

怒りのぶつけ場所を失った大男が叫ぶ。

「おっさんよおー、みつともねーと思わねーのかよ？　たかが女がナンパされたくらいでよ。おら、男ならこまけーことグチグチ言つてんじやねーよ」

そう言つて仁王立ちするジン。大男も言い返すが、そこは口から生まれたようなジンだ。口喧嘩で男相手には負けない。連れの女性冒険者もいい加減飽きてしまったのか、鶴の一聲がかかり大男はしぶしぶといった様子で騒ぎは収まることとなつた。

「本当に大丈夫なのか？　頭をぶつけたんだからな、無理はするなよ」

座り込んだままの少年に声をかける。幸い、割れたガラスの破片で目を切つたりといふこともなかつたようだが、念のために医者の元へ行こうかといふ俺に、

「いえ、本当に大丈夫ですから」

と、まだ痛そうな表情で少年が言った。

「おもしれー坊主だぜ」

近くの席に座りなおしたジンが言った。口元にはニヤニヤと笑いを貼り付けている。

「なにが面白いんだジン？」

彼の言つている意味がわからずじんを見る。

「おめー、わざと避けなかつただろ？　そこに女が座つてたからか？」

ジンと同じく椅子に座つた少年は驚いた顔をした。ジンの指した席にはもう誰も座つてはいなかつた。どうやら逃げ出してしまつたらしい。なんとも薄情な。

「女性を守るのが男の務めだと……兄さんから教わりましたから。

でも避けなかつたんじゃなくて避けなかつたんです。僕じゃ、さつきのは避けられませんよ」

「そう言つて少年ははにかんだ。ジンは「ふーん、まーいーや」とあぐびをひとつだけした。

「ところで、あなたたちも冒険者なんですね？ 僕はクラッセつて言います。実はどこかパーティーに入れてもえないかと思つてここに来てみたんです。おふたりはもうパーティーを組まれているんですね。僕を仲間にしていただけませんか？」

クラッセと名乗る少年の突然の申し出に、俺はジンと顔を見合わせる。

「おめー、クラスは？」

单刀直入に切り出したジンに、クラッセは言ひこくさうにもぐもぐと口を動かした後に、

「実は……トラベラーなんです」

俺とジンはもう一度顔を見合わせることになったのだった。

「そのためにはまずトラベラーを卒業しなきやね。シャンとしなさい」

クラッセの背中を叩いてリベルが笑つた。

「ファイターになれずにトラベラーのまんまつ一つやつがいるとはよ」

呆れ顔のジンが言つた。

「すぐにファイターになつてみせますよ」

決意を表すように拳を握つてクラッセが言つ。そんなクラッセをジンは冷やかしていたが、俺はクラッセならすぐになれるだろうと思つ。弱弱しく見える少年だが、芯は強く持つているのだ。彼を見ていれば、彼のお兄さんもきっと立派な人物だつたのだろうと思える。

クラッセのクラスであるトラベラーだが、実は俺もジンもリベルやレミだつて、元はトラベラーなのだ。といつのも、冒険者ギルドで受付をして適正検査を終えた時点でトラベラーというクラスがもれなく与えられるのだ。そこから検査の結果を受けて、なりたいクラスの要望と共に実技試験をパスすることができれば晴れて正規のクラスに就くことができる。いわば、冒険者の仮資格のようなものがトラベラーというクラスだ。

残念ながらクラッセでは適正検査のところでは適正がないと判断され、実技試験を受けることすらできなかつた。どうしてもファイターになりたいというクラッセはトラベラーからクラスを変えることができない。本来であればトラベラーのままでは冒険者としては名乗れないのだが、そこはクラッセの熱意に打たれて特例として認められたのだそうだ。その代わり、レベルが0からスタートというかなり変わった状況で冒険者となつたのがクラッセといつわけだつた。

”トラベラー（ファイター見習い）”といふことで、レベルが1に上がつた場合によつやくファイターとして認められるという運びになつたのだ。

「きみたちは冒険者か？」

クラッセと会つた時のことを思い出していた俺は、はつと顔を上げた。

いきなり声がかけられ、クラッセをからかっていたジンが振り返る。

「あ？ そうだけどなに？」

話しかけてきた男はこの街の兵士のようだつた。だが、モンスター掃討に加わつていた様子ではない。つけている鎧も真新しいものだ。

薄暗くなつた街に明かりの灯つたランタンを持つ兵士が3人、槍を持つ兵士が3人、その全員の腰にはロングソードくらいの剣が差されている。

「なるほど……。確かに5人の冒険者だな」「顎に手を当てて先頭に立つ兵士がつぶやく。

「あしたちに何の用かしら?」

首を傾げるリベルに俺は「さあ?」とだけ答える。ただ、彼の発言からは俺たちのことを知つていたように取れる。

「なあ、俺ら疲れてんだよ。手短かにしてくんねーか」「仮面でジンが言った。

「それに僕たちにはやらないといけないこともありますしね」「クラッセも続けて言うと、先頭の兵士は「ふむ」と一言だけ言ってから、「では单刀直入に言おつ」と俺たちを見渡す。

「きみたちがジグザール殿の言う5人の冒険者たちだと確認した。きみたちを拘束するように」という命令が出ている。済まないがご同行願おう」

はつきりと言つた彼の口調に俺は自分の耳を疑つた。わけのわからぬことは今日だけで数えてもたくさんあつたが、いきなり俺たちを拘束するとは何の冗談だろ?か。俺たちがこのブユツフェにて冒険者になつてから、まだほんの少しだ。もちろん犯罪に手を染めるようなことなんてあるはずもない。

「ふざけてんじゃねーよ! 拘束だあ?! 僕らがなにしたってんだよ!」「そうよ! ビうしてあしたちが捕まらないといけないの?!

あたし、何も悪いことなんてしてないわ!」

俺が抗議の声を上げるよりジンとリベルが叫んだ。2人とも全く腑に落ちないといった剣幕で叫ぶ。当然のことだろ?

「俺も納得がいかないのですが、理由を聞かせてもらえませんか？」

俺たちはついさっきこの街にきて、モンスターに襲われているのを見て撃退に加勢していただけです。俺たちのことを知っているかのような口ぶりですけど、それは一体なぜ？」

努めて冷静に訊ねる。兵士は俺の目をまっすぐ見つめる。

「我が國おかえ魔道師殿の命令なのだよ。男3人、女2人でパーティを組んでいる冒険者を連れてこい、とね。そちらの黒フードは女の子なのだろう？　あいにくと条件に合った冒険者たちはまだたちしかいないのだ」

さらにその兵士は俺たちの容姿や特徴までを言った。それはピタリとはいえないが、大体俺たちに合っているものだった。

「ご同行願えないというのならば、力づくで、と言われている。どうか、手荒な真似はさせないでくれないか？」

兵士は困ったような表情を浮かべて言った。

「そうまでして俺たちを拘束しようとする理由はなんなんですか？」

俺はそう訊ねる。すると兵士は、

「実はな、魔道師殿が神のお告げを聞いたんだそうだ」「神のお告げ？」

「そうだ。だが、きみたちにとつて良いお告げではないよつだな。

なにしろ連れてくるのに生死は問わず、ときている。穏やかじやないことは確かだ」

その言葉にクラッセがふらりと後ろに倒れそうになり、それを支える。

「そんな横暴な！」

俺は思わず叫んだ。抵抗するなら殺してもいいだつて？　そんなことがまかり通つていいのか。あまりの理不尽さに言葉を失つてしまう。

「て、てめつ」

カツとなつたジンが兵士に殴りかかると身構える。だが、抵抗した場合は力づくでと言われている兵士たちだ。今、殴りかかるの

はいたずらに寿命を縮めるだけだ。我に返つてジンを止めよつとした瞬間、

「落ち着きなさこよ、ばかジン！　ソレでこの人を殴つたって意味のないことだわ」

リベルがジンを右手で制して前へ出る。よく見るとソレもジンの服のすそをギュッと握っていた。

「そ、そうだジン。むやみに仕掛けたら俺たちの立場が悪くなるだけだ」

ヒヤリとした額を拭つてジンに言つ。

「ぐつ……。わーったよ。だけどよ、じゅーセめてそのお告げつてのがどんなことなのかだけでも教えてくれよ。でなきや、はいそうですか、なんてついていけるわけねーぜ」

自分を落ち着かせるためか、頬を軽く叩くと、ジンは腰に両手をあてて言い放つ。すると兵士は大きく首を振つて、

「残念ながら、我々にはその内容は知らされていない」

大きく息を吐き出しながら言つた。

「きみたちがモンスター退治に一役買つてくれていたのは我々だって知つてゐる、さつき見かけたからな。できることなら見逃してやりたい。しかし我々にも生活があるのだよ。ここで上に逆らつては路頭に迷いかねん。ジグザール殿は逆らう者には容赦のないお人なのだ。なに、後ろめたいことがないのならすぐに釈放されるだろうさ、ジグザール殿とは違い、陛下は話の分かる方だ。どうか穩便に我々についてきてもらえないか？」

そうまで言われてしまつてはさすがのジンも無碍に断るわけにもいかないようだつた。俺も、おそらくジンも故郷を失つたがゆえに冒險者としての道を選ばざるを得ない部分もあつたのだ。帰ることのできる場所を失うということの辛さは十分すぎるほど身に染みてゐる。何も言わないリベルやクラッセ、レミを見ると、彼らも同じような境遇にあるのかもしない。

「わかりました。ではあなたたちについて行きます。しかし、仲間

たちに危害が加えられることでもあれば、俺は黙つてはいませんよ

俺がそう念を押すと、

「かまわん。私とて、そこまで人道に背くようなことをするつもりはない。きみたちを連れていくまでは我々の仕事だからな」

兵士たちが俺たちをはさむように3人ずつ前と後ろにつき、俺たちは城へと向かうこととなつた。

「僕たち、どうなるんでしょうか……」

不安げなクラッセが全員の気持ちを代弁するようにつぶやいた。

冒険者ギルドのある街は国として認知される。これはブュッフェのような規模のさして大きくない街にも当てはまる。モンスターという脅威を考えれば、街ではなく国とした方が色々と都合が良いのだ。

モンスターの討伐を目的とする冒険者ギルドの元には多くの戦士や魔法使いが集まり、その結果としてギルドは次第に大きな力を持つようになる。そうなるとその土地を治めている領主からするととにかく都合が悪くなつてくる。そのゆえ冒険者ギルドに権力の座を脅かされないよう、国としたわけだ。

国王となつた元の領主たちが考えだした、冒険者ギルドに抗する手段のひとつとして挙げられるのが、冒険者ギルドやそれに属する魔術師、ギルドから優秀な人材を引き抜くということだった。そうすることによつて、常に冒険者ギルドには強大な力を持たせまいとしているのだ。さらに言えば富国強兵にも繋がることとなり、国としては一石二鳥というわけである。

それから考へると、実のところジグザールという魔道師が“神のお告げ”といつものも、そう簡単に無視できるものではないのだろう。なにせ、おそらく彼は魔術師ギルドから輩出された”優秀な”元メイジなのだろうから。その”神のお告げ”というものが、例え俺たちのような冒険者になりたての新米冒険者を捕らえるような内容であつたとしても。

「ま～なんだ、こうして城ん中に入れるつても、滅多にあるひつちゃねーぜ」

さきほどの怒りもどこやら、気楽そうにジンが言つた。もちろん何もしていなければ連行されるのは彼も不条理に感じるところだろうが、そこは表に出さない。

「言われてみればそうですね。僕たちみたいな一般人が城に招かれ

ることなんて、一生に一度あるかないかですから

沈んでいた顔をパッと上げてクラッセが言つた。

「そうだな。あんな理由で連れて行かれるのでもなければ貴重な体験なんだけどな」

あくまで俺の気は重い。”闇に憑かれた者”だつて、まだどこかに潜んでいるのかもしれないのだ。

「前の街でなにかやらかしたんじやないの?」

「あん?」

半眼でジンをじとじと見るリベル。

「どーゆー意味だよ」

「そのまんまの意味よ。ジンって手癖悪いし、ブュッフュの前の街でスリとかしていたんじやないでしょ? ね? もしそうだったら、これから付き合いを考えさせてもらひわよ」

リベルはからかい半分の口調でジンに言つた。

(また口喧嘩がはじまるのか……)

こんな時まで飽きないやつらだ。そう思い心の中でため息をつきかけたが、当のジンの反応はいつもとは少し違つていた。

「ばか言え、スリなんて、んな口つい真似すつかよ」

少しだけ目を動かして後ろのリベルを見たジンは、それ以上は何も言わずにスタスターと歩くのだった。

「ちよつ、ちよつとなによ、あの態度。もしかして図星だったわけ? !」

意外な反応に肩すかしをくらつたような形になり、リベルは数秒だけポカンとしていたが、ハツと我に返つてジンの後を追いかける。

「なんだか様子が変でしたね」

呆気にとられたようにクラッセがつぶやく。俺はクラッセに頷く。いつもなら言い合いで発展するはずのジンとリベルに呆れている俺たちだが、ジンがこうも簡単に引き下がるとさすがに調子が狂う。俺とクラッセは得体の知れない料理を食べたときのような気分で顔を見合す。

「私の、知つてゐるジン、なら」

2人してレミを見た。黒フードから青い瞳が俺たちを見上げる。

「そんな人間じゃ、ない」

その言葉に俺は、ジンの何を疑うことがあるので、と胸のつかえが取れた気がした。確かに口も素行も悪いジンだが、少なくとも他人から小銭を掠め取つて喜ぶような男ではない。リベルも軽い冗談のつもりで言ったのだ。それがあんな態度で返されるとは思つていなかつたのだろう、面喰らつたはずだ。それでもレミの言つように、ジンを信じていればいいのだ。きっとあの態度には、人に言ひづらいようになにかしら理由があるはずなのだ。

「そろそろ城に着きますので、申し訳ありませんがお手持ちの武器はお預かりします」

後ろについていた3人の兵士の中の1人が言つた。最初に話した兵士よりも若い感じだ。

「もちろん、お帰りの際にはお返ししますので、ご安心を」
果たして無事に帰ることができるのだろうか。そんな事を考えながらブロードソードの収まつた鞘を渡す。

門をくぐると城が見えた。灰色の石壁はあまり見栄えの良いものではなく、さすがに元は田舎領主だと言われそうな造りだったが、それでも一般の家屋とは比べるべくもない。

俺たちは寄り道せずまっすぐに広間まで通された。そこには1人の男が佇んでいた。

袖に濃緑の模様が入つた紺色の長着でじつと立つていたその男は、俺たちに気がつくと険しい顔を向ける。整えられている黒髪はもう少しで腰まで届きそうなほど長い。

「貴様たちだな、なるほど神のおつしゃられる通りの連中だ」

「ツツと足音を立てて俺たちの前にくる。

「すぐに地下牢へ閉じ込めておけ」

視界に入れるのも汚らわしいとでも言つように言つて捨てる、その男は背を向ける。

「ま、魔道師殿！」

「聞こえなかつたか？ 地下牢へと連れていけと言つたのだ」

「理由をお聞かせ願いたい！ この方たちは先のモンスター討伐に参加してくださつた冒険者の方々です。それを牢に入れるとは、どういったご見か！」

「神の命だ。それを邪魔するというのなら容赦はせんぞ」

「し、しかし」

ジグザールという魔道師は兵士の言つことなどはながら聞く氣はないようだつた。その様子に堪らずリベルが一步前に出る。

「ちよつと… 黙つて聞いていれば、神、神つて、あたしたちがなにか悪いことでもしたつていうの？！ いい加減にしてよ！」

「そうだぜ！ おい、王さんは一体なにしてんだよ… こんな馬鹿げたこと言つやつを止めることもできねーのかよ…」

ジンも揃つて叫ぶ。しかし、一国の王を「王さん」とは……。

「戯言を。モンスターを召喚したのも貴様らだと神も言つておられる。国王も貴様らが魔法でもかけたに違いない、つい先ほど床に伏してしまわれた。口を追つて貴様らを処刑する。これは決定事項だ」「そ、そんな！」

一気に目の前が真っ暗になつていくよつに感じた。きつとなにかの間違ひだらうと思つていただけに、突然の処刑宣告をされクラッセがその場に崩れ落ちる。俺も全身の力が抜けていくようだ。

「じ、ジグザール殿！」

「ぐどい…」

俺たちが半ば呆然としていると、ジグザールは口の中で何事かつぶやいた。次に手を掲げると、つづら緑色の霧のようなものが兵士たちを包んでいく。

「いけない…！」

レミが声を上げたのと同時だつた。いきなり肩をつかまれて振り返ると、さつきまで身を乗り出してジグザールに抗議していたはずの兵士の一人が虚ろな目を向けていた。

「ど、どうなつてんだよ！　おい、放せつて！」

ジンの声にみんなを見ると、他の兵士たちも同様に無言でジン、リベル、クラッセ、レミ、それぞれが兵士たちに後ろ手をつかまれているではないか。物言わぬその表情はまるで人形のように感情というもののが欠落しているようだった。

「連れていけ」

1人静かに言い放つジグザールの言葉に兵士たちは動きだした。全く抗うことができない。とても人間の力とは思えなかつた。

「いたつ、痛いってば！」

「俺たちは何もしていない、こんなことやめるんだ！」

「この野郎、覚えてやがれ！」

必死に抵抗したが、無駄なあがきだつた。こうして俺たちは身に覚えのない罪をさせられ、地下牢に入れられってしまったのだ。

物音ひとつしない地下牢はひどく不気味だつた。子供の頃に村の近くにあつた洞窟に探検しに行つたことがあつた。モンスターこそ出なかつたのだけれど、苔がびっしりと張り付いた岩肌に反響する声、口ウソクの光が届かない場所にはなにか恐ろしいモンスターがいるような気になつて、子供心にとても怖かつたものだ。だけど、この地下牢はその比ではない。なにしろ死刑宣告をされて閉じ込められているのだから。

それでもモンスターとの連戦をこなした俺たちは、その疲れもあつてかいつの間にか眠りについてしまつていた。どうにかしなくてはいけないとついていても、武器は全て取り上げられているし、大きな錠のかけられたこの牢屋から抜け出すなんてとても無理だ。

「あいつが闇に憑かれた者なんじゃねーのかよ」

牢に入れられた直後にジンが言つていた。なるほど、そうかもしれないとい俺は思ったのだが、あの”闇”に心を支配されかけたとき

に聞いた、世の中の全てを憎んでいるかのような声とは違うように思える。ジグザールという魔道師のやり方は乱暴だったけれど、とても狂気に憑かれた者は思えない声の張りがあった。そういうと、彼の聞いた”神のお告げ”というもののがどうにも怪しい。

不安と先が見えない恐ろしさと共に、俺はなにかが動く気配を感じて目を開けた。

「ジン……？」

「しつ、もう少しじつとしてるディール」

ジンは床に耳を当てて何かを探っているようだった。

「人の気配がしねえ、見張りがいなくなつたみてえだ

「ずっと起きてたのか？」

「まーな」

彼も疲れているだろうに、ジンは表情も変えずに言った。

「ディール、3人を起こしてくれ。俺は誰もこねーか見てつからよ

「もう、起きてる、よ」

その声にさすがのジンも大きく目を見開く。壁にもたれて寝ていると思っていたレミが静かに立ち上がる。ジンは起きているのが自分だけだと思っていたようだった。

「誰もいなくなつたからってどうするの？」

振り向くとリベルも身を起こした。

「眠りが浅かつたみたい。だつて、こんな場所だものね」

少しだけ笑みを浮かべたりベルがすぐに表情を引き締める。

「だつたら話ははええ。あとはそここのヒヨツ子を起こしてくれや」「ジンの指した先を見ると、瞼をうつすら濡らしたクラッセが横たわっていた。俺はそつと彼を搖り起こすと、クラッセは「待つてよ兄さん!」、飛び跳ねるように身を起こしたので、俺たちは同時に口元に人差し指を立てる。

「呑気なもんだぜ」

ジンが苦笑すると、

「兄さんの夢を見ました」

しょんぼりとしたクラッセが言った。

「それでどうするんだ？ 誰もいないからここから抜け出すなんて無理じゃないのか？」

俺が聞くと、ジンは髪の奥から一本の細い何かを取り出す。

「言つたら？ あとあと考えて手は打つもんだってよ」

ジンはニヤリと唇の端を上げる。

「こんなこともあるかもしんねーと思つて事前に忍ばせておいたんだよ」

そう言つてジンが取り出したのは針金にしては少し太めの針状の金属だつた。彼が言つにはシーフにとつては基本中の基本的な道具らしく、ちょっとやそっとじや折れ曲がつたりしない代物なのだそうだ。

「誰もこないか見張つてくれ」

小声で言つてジンは錠をはずしにかかりつた。

「開いたぜ」

そう言つてはずれた錠を見せる。安堵の空氣がどつと出る。

「誰も来なくてよかつたですね」

クラッセが胸を撫で下ろしながら言つた。

「それにしても、本当に泥棒でもやつてたんじゃないの？」

揃つて牢から出るとリベルが言つた。

そのリベルにこつものように喰つてかかると思こきや、ジンはそのままジンはそのままの場に立ち止まって、

「泥棒か……。似たようなもんでな、義賊つてやつをやつした」

そうしてジンはいつになく言葉少なに話しかけたのだった。

俺たちは誰も生まれる場所を選ぶことなどできない。ジンの生まれた街は稀に見る悪政を行う街で、街中に物乞いや浮浪者を見かけることなど、さして珍しくなかったという。

そんな街で孤児としてからうじて毎日を生きていくだけだったジンだつたが、ある日を境に世界が変わったそうだ。義賊を名乗る者たちがジンの街に現れたのだ。

それまでどうにもならないと思つていた日常が彼らの存在によつて、ジンの中で大きく変わつた。自分もなにかを始めることで、世界を変えられるかもしれない。いや、変えたい。

その気持ちがジンを義賊たちの仲間入りする動機となつた。そこでジンはシーフとしての技能を育んだ。

もちろん義賊というからには、悪政を敷くことで私腹を肥やしている者たちからしか奪うようなことはなかつた。そんな中で、ジンにも弟分のような存在ができた。

「だけどよ、物を奪うつてこたあ、俺らもなにかを奪われる覚悟をしなくちゃならねーんだ」

度重なる彼らの所業に、富豪たちはジンたちを一網打尽にする作戦を水面下で練つていたのだ。義賊たちは一様に捕らえられ処刑された。からくも難を逃れることのできたジンとその弟分、そして他の数人かは散り散りとなつた。

「思えばそこでやめときやよかつたんだ」

義賊が解散して数日後、義賊の1人がスリを働いて捕まつたと噂で聞いた。彼はそれが自分の弟分ではないことを願つた。

だが、ジンの願いも虚しく、それは彼の弟分だつた少年だつた。少年はまもなく処刑されることとなつたのだった。

「クラッセの坊主みたいなガキだつたよ。まつたく間抜けだよな。だから俺はまつとうに生きていくことにしたんだよ。ほら、まだまだ未開の地には大昔のえれえやつらが残した財宝が隠されてる遺跡なんかもあんだろ？ それなら頂いちまつても誰にも文句なんて言わねーもんな」

俺たちの位置からはジンの表情は見えなかつた。きっと彼も今の自分の顔を見られたくないだろ？

「それでスリつて言葉であんな態度になつたのね」

リベルがジンに聞こえたよつた小声でそつと耳打ちしてきた。

俺は小さく頷く。

「それより、とつととこんな陰気臭いところからおれがばしきつ
ぜ。今んとこ見張りはいねーみたいだからよ」

振り返ったジンが白い歯を見せる。他人の物を盗むところはあ
つてはならないことだが、彼の生い立ちを考えればどうしようもな
いことだつたのだろう。それに今では冒険者として人の役に立つこ
とのできるジンを責める氣もない。

「しかし、じうまで人の気配がないと逆に薄気味悪いな
地下牢から出て、まず湧いてきた感想だ。

俺たちを逃がさないよう厳重な警備が敷かれているかと思いま
や、さきほどの広間を覗いてみると兵士どころかジグザール本人す
らいないではないか。

「あたしたちが閉じ込められている間に何があつたのかしら
「とにかく武器がねーことにはどうにもなんねー。さっさと探そう

ぜ」

この状況を作り出したのが”闇に憑かれた者”なのか、それとも
ジグザールという魔道師なのかはわからないが、さすがに武器がな
くては戦うこともできない。

ジンに促されて俺たちは武器が保管されていそうな場所を探す。
すると、

「やべ！ 誰か来るぜ！」

廊下の曲がり角から聞こえる足音に緊張が走る。隠れられそうな
場所はない。

俺たちの脱走に気付いた者が探しにきたのかもしれない。俺は拳を握つて身構えた。

だが予想に反して現れたのは見たことのある顔だった。

「冒険者さんたち！ どうやって地下牢から？！」

驚きを隠せない様子で現れたのは、俺たちがブュッフェに辿り着いてすぐの時、ウォーラーに襲われていた兵士の青年だった。

「俺らを捕まえにきたのかあんた？」

気の抜けない表情でジンが青年を睨む。

「いえ。牢にいなかつたのでどうしたのかと思ったのですが……。違います、私はあなたたちを逃がしにきたんですよ。魔道師様に捕らえられたと聞いたので」

思いがけない言葉に今度は俺たちが疑問符を浮かべる。

「どういふことなんだ？ なにが起こっている？」

「起きるもなにも、街は大変な騒ぎです。説明はあとにしましょう、あなたの装備はこちらです」

案内されるままに俺たちは青年の後に続いた。武器は守衛室らしき場所に保管されており、それらを手にした俺たちは、そのまま促されるままに青年に続いて城を出た。

眠りに落ちていたため、相当時間が経つていただろうと思つていたが、まだ夜は明けていなかつた。

城を出て少し行つたところで兵士たちが倒れているのが見えた。

「兵士長もやられてしましました」

青年は悔しそうに唇を噛む。

「またモンスターが現れたんですか？」

クラッセが尋ねると青年は首を横に振る。

「あれはモンスターなんて生易しいものじゃありません。ああつ、思い出出すだけでも恐ろしい化け物です！ 今は魔道師様が応戦して

いますが、とても敵いそうにもない。せめてあなたたちだけでも逃がそうと、やられてしまつ前に兵士長が

青年は思い出すのもおぞましいとでもいうように身を震わせる。

「ついにおいでなすつたか、イビル野郎がよ

ダガーを鞘から抜いてジンが言つた。

「大丈夫よ。あたしたちにはジグザールなんて田じやないほど凄い魔法使いがついているんだもの」

ゼンさんからもらつた杖を握り締めてリベルが言つた。

「ええ、リベルさんの言つ通りですよ。僕のこの剣だつて、きっと凄い力を秘めていると思いますし」

クラッセもショートソードを手に持つて見つめる。

「すぐに、片付ける、よ」

レミは自分の杖が光り輝く方向を向いて言つた。

「私たちではとても役に立ちそうにありません。避難する人たちを誘導します。どうかご無事で戻つてきてください」

「ああ！ 必ず戻つてくるさー！」

俺たちは青年に別れを告げ、レミの杖の光が指示示す方へと走つた。

街にはいたる所に黒い蝶が飛び交い、さながら蝶の群れに占拠されてしまつてゐるようだつた。走つていくうちにレミの杖はますますその輝きを増し、あの悪意に満ちた存在の近くにきていくのだと知らせた。

「見て！」

リベルが空を指さして叫んだ。

「あれが”闇に憑かれた者”なの？！」

中空に浮かぶちょっとした屋敷ほどもある大きさの”それ”は兵士の青年が言つていた通りに見るもおぞましい姿だつた。

一見するとただの黒い巨大な球体に見えるが、目をこらすとそれが腐敗した死者たちの体で形作られているのがわかつた。中には人骨も埋まっているのが見え、隣を走るジンはたまらず「げげっ」と

息の呑んだ。

その球体からいくつもの大蛇が首を伸ばし、眼下の何者かと戦っている様子だ。しかし、電撃のようなものを下から浴びるも全くひるむ気配はない。

「ああっ、ジグザールさんです！」

クラッセが叫ぶと、長い黒髪を振り乱しながら魔道師が振り向く。その顔には濃い疲労がじみ出していた。

「貴様たち、どうしてここに！……そつか、兵どもの仕業だな。まったく使えんやつらだ」

俺たちが走り寄るとジグザールは吐き捨てるように言った。

「なんてえ有り様なんだあんた。神のお告げとやらほどーなったんだよ」

ジンの憎まれ口にジグザールは「ふん」と顔を背ける。

「……だ」

「ああ？」

「あれが神の名を語る者の正体だと言つたのだ！ 思い出しても恵々しい！ 命じられるまま貴様たちを地下牢を閉じ込めた私はここでこの街が救われるのだと信じていた！ しかし、やつはこの私を嘲笑うかのようにこう言つた！ 『アリガトウ、ワタシノチュウジツナル、オロカモノ』とな！」

怒り覚めやらぬ様子でジグザールが叫んだ。

「貴様たちは何者だ！ なぜあの化け物が貴様たちを閉じ込めたがるのだ！」

その言葉に俺は自分の持つブロードソードを見た。そして”闇に憑かれた者”は俺たちの持つ武器を恐れているのかもしれないと思つた。わざわざジグザールを騙してまで閉じ込めておこうとするくらいだ、俺はジグザールの話を聞いて心に希望の光が広がっていくのを感じた。それはジンも同じだつたらしい。ニヤニヤと笑みを貼り付けてジグザールの肩に腕を回す。

「へっへ、そりゃー秘密だぜ。まあ俺らがなんとかしてやつからよ、

上手くいった暁にはなんでも言つこと聞いてくれんだる？ 地下牢に閉じ込めたことは水に流してやつからよ、ジグザールのとつづん

「ぶ、無礼な！ ……貴様たちに殴りかかると思えんが、あの化け物を片付けることができるのならどつともしてやう。今はギルドに私より力のあるメイジはおらん。それに他の魔法使いどもも、ほとんぢやられてしまつたのだ」

ジンの腕を振りほどき、そう言いかけたジグザールは「はつ、来るぞ！」、叫ぶと口早に呪文を唱え始める。見上げると大蛇が口を広げて紫色の炎を吐き出したところだった。

「かあ！」

ジグザールの叫び声と共に紫色の炎は見えない壁に阻まれて霧散する。

「毒の炎だ！ あれにやられると、ああなる」

大蛇から視線をはずさずにジグザールが叫ぶ。そこには全身が炎と同じような色になつた兵士が倒れていた。すぐに治療しようと走り出しかけたレミにジグザールは「かまうな！ すでに死んでいる、言われてレミはその場に留まる。

「なんてことなの……」

悔しそうにリベルがうつむく。

「感傷に浸つてゐる時間はないぞ！ 私の魔法も全く効かん、一体どうなつてゐるのだ！」

わけがわからぬといつうにジグザールが長髪を振り乱して呪文を唱える。土煙を吸い上げるようにして風の刃が大蛇を斬りつけれるが、それもダメージを与えるにはほど遠い。

「許せ……ない」

「レミ？」

倒れている兵士を見つめていたレミが、ぐつと杖を握り締める。

「許せないつつてもよ、宙に浮かばれたまんまじや攻撃だつてリベルの魔法くらいしか」

ジンが言いかけたとき、レミの杖が一層輝きを増した。それを見たレミは、最初から杖の使い方を知っていたかのように、杖を大蛇へと向ける。

するとビリバカ、光が杖の先端に収束したかと思つと、瞬きをする間ほどの早さで大蛇の生えている屍でできた球体」と貫いた。まるで光の槍だ。

「すごい」

見上げながらリベルがつぶやく。光の槍が球体を貫くと、それをバチバチと音を立てながらいくつもの光の輪が覆つた。

「半端ねーぜ」

同じく見上げているジンが言った。横を見るとジグザールでさえも我を忘れて見入つてゐるようだつた。

「倒せたのかしら?」

「あれが効かないなんてことはありませんよ。ゼンさんのところにあつた武器なんですから」

リベルにクラッセが言い、俺も続けて口を開けたとしたときだ。

ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア・ア

金属と金属を擦り合わせたような耳障りな音に、俺は耳を両手で塞いだ。黒い球体から聞こえてくることからして、断末魔の叫びでもいうことなのだろうか。頭の中に直接響いてくるようで不快なことこの上ない。

顔を歪めながら中空に浮かぶ球体を見つめていると、それは突然弾けた。

「終わった……のか?」「誰にもなくつぶやく。

「あつけなかつたわね」
拍子抜けしたようにリベルが言つた。
どさつ。

音のした方を向くと、ジグザールが地面に腰をおろしていた。
「あんたみたいな人間も地べたに座るなんてことあんだな。座る場所は玉座じゃなくていいのかよ」

「うるさいー。ずっとあの化け物の相手をしていたのだ、仕方がないだろーー！」それに玉座に腰をかけたことなど一度もないわ！」
からかい口調のジンにジグザールが即座に言い返す。だが、さすがにその顔には疲れが濃く出ていて、それ以上は口を開こうとせずに粗い息をつく。

「ゼンさんにもあとで報告しておーい！」

独白してからレミに気がつくと、彼女もこちらを見む。

「レミ、大丈夫か？」

「うん。でも、怪我人が、たくさんいる、だろーから、ゆっくりして、いられない、ね」

言われて辺りを見渡すと、大蛇の化け物に気を取られていて気づかなかつたが、そこかしこに人が倒れているのが見えた。鎧を着た兵士が多くつたが、そうでない者もいる。逃げ遅れた街の人々だろー。まだ息のある者もいるらしく、うめき声がどこからともなく聞こえる。

「いづしてはいられないな。早く手当てをすれば助かるかもしけない」

俺が言うと、クラッセが「はいー」と言い、ジンも「あいよ」と首と右腕をひと回しした。

「あなたも手伝ってくれるんでしよう、ジグザールさん？」
リベルが座つたままのジグザールに声をかけると、ジグザールは

「当然だ」と言つて立ち上がる。

「すまなかつたな」

すぐに街の人たちを救出しようと身を乗り出しかけた俺たちは、その言葉に振り向く。ジグザールは怒ったよつた照れくさいようななんとも言えない表情で顔を背ける。

「なにがですか？」

ポカーンとしてクラッセが尋ね、ジンが「ばつかだなおめー」とクラッセを肘でつついた。

「あのような者に騙されてしまったとはいえ、無実の者を牢に入れてしまうとは……。この侘びはいつか必ずするつもりだ」

「いつかと言わば、今してくれてもいいんだぜ？ 土下座つづー素晴らしい方法があんじやねーか」

「だ、誰が貴様に土下座なぞするか！」

「ヤーヤと笑みを顔に貼り付けて言つジンにジグザールが叫ぶ。ジンも素直でない男なのだ、頭を下げられると、つい悪態が先をついて出でしまう。ジンらしい言いよつて俺はクラッセやリベルと顔を見合わせて苦笑した。

ジグザールも街のことを思えばこその行動だつたのだ。あやうく間違いで処刑されてしまふかもしぬなかつたとはいえ、頭を下げるこの男を憎む気にはなれない、結果として丸く収まつたのだから。「逆らうやつには容赦しねえつて兵士連中が言つてたけど、案外いいやつじやねーか

ジンが言つと、

「悪人には容赦しないのは当然であろう。情けをかけるばかりが良いといふことではない。ただ私のやりかたに批判的な者もいるということだ。……だが、今回のこと私は不本意ではある。あのやつの声を聞いていると、どこか正常な判断力が失われていつた節があつた。今になつて思い出してみれば、だがな」

ジグザールは腕を組んで顔をしかめる。

「しかし、その武器はどこで手に入れたのだ？ それに貴様たちは

何者だ？ 私でさえ手に持てる化け物をあとも簡単に倒してしまつとは

ジグザールはレミの杖を見て言った。

「歯が立たない、の間違いじゃねーの？」

相変わらずからかおうとするジンを無視して、ジグザールがレミの杖に手を伸ばす。

何気ない自身の行動にジグザールが一瞬、戸惑いの表情を浮かべる。レミはそのジグザールの様子に不穏なものを感じたのか、杖を遠ざけようと身を引いた。 が、ジグザールが杖を摑む方が早かつた。

杖を握る右手がふるふると震える。ジグザールは自分でもなにが起こっているのかわからぬように目を見開き、
ぱきつ！

なんとこうことが、杖を真つ一つに折ってしまったではないか！

「ジグザールさん、なにをしているんだ！」

「ど、どこうことだ、体の自由がきかん」

額には玉の汗が浮かんでいる。

「様子が変だわ！ もしかしてまだ？！」

リベルが顔を上げて辺りを見る。

「やつつけたはずじや？！ どこかに”闇に憑かれた者”がいることがありますか！」

「わかんねーけど氣を緩めるんじやねーぞ！」

揃つて身構えたときだ。強烈な突風が吹いた。

「きやあ！」

「うおっ」

「な、なんだ？！」

「い、いたい！」

「……！」

抗うことのできない強風に吹き飛ばされ、俺たちはしたたかに体を打ち付けて倒れる。

頭をさすりながらなんとか立ち上がろうとした時、俺は見た。闇
が蠢くのを。

真っ暗な路地に、その上からさらりと塗りつぶしたような深い闇。
俺は身を震わせた。ギョロリと血走ったような白目が瞼を開けた
のだ。その刹那、数本の影が伸びた。

俺が声を張り上げるよりも早く、影は横を通り過ぎ

「ぐああああああああああ」

ひきちぎれんばかりの絶叫が辺りにこだまする。

「ジグザールさんっ！」

影が身動きのできないジグザールに突き刺さる。

あつという間の出来事に俺たちは息をすることを忘れ、そして
悟つた。

街を襲い、多くの人々の命を奪い、ジグザールを操った者こそ、
たつた今俺たちに狂氣をはらんだ視線を向けている者に他ないとい
うこと。

6・終焉たる象徴の翼

俺たちが初めての依頼を受けてこの「ユッフ」の街を出発してから、まだ1日も経っていない。それなのに、ゼンという老婆を通じて勇者「ランダー・シギル」の伝説の片鱗に触れ、あまつさえ時代の節目に現れるといふ、闇に憑かれた者^{バラサイトビル}と呼ばれる邪悪とこうして対峙しているのだ。我ながらこれが夢であればいいとさえ思ってしまう。

それでも、時々かすかに聞こえるうめき声や地面に染み付いた血の跡、そして俺たちを睨みつけるような尋常でない狂氣をはらんだ視線に、それが現実なのだと知らされる。

(無能ハ、死ネ)

あの無機質な声だつた。

(「ノヨウナ連中ヲアシドメスルコトスラ」キナイトハ)

淡淡と語るような口調だが、あきらかな侮蔑が含まれているのが感じ取れた。

「あっ！ あれはジグザール様！ どうしたんだ、怪我をされているようだ！」

はつとして声のした方に振り向くと、遠くにいた2人の兵士が駆け寄ってくる。その時、ギヨロリとした白目が兵士たちを捉えた。

「あぶねえ！ 来るんじゃねーおまえら！」

我に返ったジンが叫ぶ。兵士たちはその場で足を止めかけるが、ジグザールの怪我を捨ておけないとでも思つたのだろうか、顔を見合わせてから再びこちらへ向かつてくる。それが彼らの命取りになつた。

続けて俺が制止の声を上げるよりも早く、闇が膨れ上がったかと思つと影がすばやく兵士たちへ伸びる。それは2人の兵士を貫くと彼らは声を上げる暇もなく倒れた。

「ばっかやろーが……」

「氣落ちしている暇はないようだぞジン」「

ジンに言つたとおり、すでに白田の視線は俺たちの方へと戻されていた。ドクンと脈打つように闇が揺れると、またも影が伸びる！標的は今度こそ俺たちだ！

5本の影が迫る。その速さは大したものだが、すでに2回も見ているのだ、反応できない速さではない。問題はどうやって防ぐかだが……。

ブロードソードを握る手の平が熱くなつていいくのを感じた。いけるかもしない。魔法がかかっているであろう、この剣を信じるしかない。とつやにそう考えた俺は、迫る影へブロードソードを抜き放つた。

ザシユツ。

まるで草でも切るかのように、ブロードソードは伸びてきた影をいとも簡単に斬つて落とす。ゅっくつと形を失う影。ジンがピューと口笛を鳴らした。

「レベル2のファイターにできる基準とは思えねーな」

まったくその通りだ。ゼンさんに会つ前にこの街に戻つていたらと思つとゾッとする。この剣がなければ手も足も出せずにやられていたに違いない。

「ジグザールさんは無事なんですかレミさん？！」

そこで金縛りから解けたようにクラッセが、ハッとした顔でレミに声をかけた。

「大丈夫みたい、だよ。急所ははずれてる」

すると倒れていたジグザールが額に汗を浮かべながら上体を起こす。

「あの程度の攻撃で……」の私がやられるわけ……」

強気な口調とは裏腹に痛みに顔が歪むジグザール。急所がはずれているといつても浅い傷ではないようだ。腹部に滲む血の色が傍目で見えていても痛々しい。

「ふんっ、大口を叩く元氣がありやー問題ねーつてもんだぜ。それ

よつびうしたもんかね。『ディールの剣で影を斬ることはできるみて
一だけ、近づかなきやイビル野郎を叩つ斬れもしねーかんな。ど
うだよディール』

ジグザールを一警して唇の端を上げてみせるジン。額には一粒の
汗が流れた。

強気を装つてはいるが、さすがに向こうの攻撃手段が影を伸ばし
てくるだけではないはずで、どんな攻撃を仕掛けてくるか図りかね
る相手にジンも不注意に動くことができないのだ。

「ああ、やつの攻撃があれだけならなんとかならないこともないが
……わざがにそういう訳にはいかないだろうな。できれば援護がほ
しい。リベル、そろそろ魔法は使えそうか？」

俺は振り返つてリベルを見る。彼女は目を開じていって、「待つて」
と言つた。

「体の中でなにかが渦巻いているのを感じるの。これがきっと魔力
というものなんだわ。もう少しだけ集中する時間を頂戴。そうした
らきっと……」

田を開じたまま必死に杖を握り締めているリベルに、俺はジンと
クラッセを見た。

「時間をかせぎましょー！」

「俺らここでまでできるかわかんねーけど、やれるだけやってみよ
うぜ！」

俺は「ああ！」、ブロードソードを握り直すと頷く。

「しかし、”闇に憑かれた者”って一体なんなんだ」

路地に佇む闇に向き直り呴ぐ。闇の中の白田は俺たちの出方をう
かがつているかのようにこちらを凝視したままだ。

初めは黒い蝶の群れに森で襲われたのを思い出す。心の中を侵さ
れていた俺たちは、リベルの声でなんとか我に返ることができた。
世の中の全てが憎くて、全ての人間を殺してしまいたい、あらゆる
ものを壊してしまいたい気持ちがふつふつと湧いてきて、その手前
で踏みとどまることができたのだった。

難を逃れた俺たちは次に、池のほとりで突如として現れたゴーレムに襲われた。その時はゼンさんが張つてくれた結界と共にゴーレムは消滅していったのだが、岩でできた体のゴーレムには俺のソードは全く効かなかつた。ゼンさんの助けがなければ、武器を失つた俺はどうなつていたか知れない。

ゼンさんと出会い、彼女は強い力を持つ何者かの存在を俺たちに伝えた。その存在の調査を頼まれた俺たちは戦うための武器を求めて宝物庫へと向かつたのだが、その途中で霧と鎧の兵士に囮まれてしまつたのだ。ただでさえ霧で視界を奪われている上に、鎧の兵士は俺やジンの攻撃をことごとくかわしてしまうのだ。

いよいよ追い詰められた俺は鎧の兵士が持つハルバードに斬りつけられて倒れてしまつた。万事休すかと思ったとき、リベルが魔法を使い、それを撃退することができたのだった。

なんとか武器を手に入れた俺たちは、強い力を持ち俺たちを襲つてくる者が、”闇に憑かれた者”^{バラサイトイビル}といふ名だということをゼンさんから告げられる。

その時にブュッフェの街が危険にさらされていることを知り、俺たちは大急ぎで街へ戻つたのだが、街では突然出現したモンスターの群れで、すでに恐慌状態に陥つていた。それでも宝物庫で得た武器の威力は絶大で、レミのモンスターに関する知識も手伝つて、誰も大きな怪我を負うこともなく一掃することに成功したのだった。無実の罪に牢へと繋がれた俺たちが、牢を出たときにはジグザールが宙に浮かぶ大蛇と戦闘を繰り広げている最中だった。 ”闇に憑かれた者”に操られたジグザールによつて折られてしまつたが、レミの持つていた杖によつて大蛇は跡形もなく消え去り、全ては終わつたかに見えた。しかし、突風の後に襲い掛かってきた影によつてジグザールは重傷を負つてしまつたのだ。

ひた、と一步踏み出したまま両手でブロードソードを構える。

そこまで考えて改めて湧き上がる疑問がひとつ。

”闇に憑かれた者”ってなんなんだ？」

俺たちの心を侵さんとする精神攻撃、召喚されたゴーレムに街を襲うモンスターたち。鎧の兵士たちが消えたあとに俺の怪我がなっていたことを考へると、宝物庫へ向かう通路での鎧の兵士たちは魔法かなにかが見せた幻覚なのだろう。そして死体が集まってできた球体から鎌首をもたげた大蛇は毒の炎を吐き、今日の前にいる闇から俺たちの様子を窺つている白目は幾本もの影を伸ばして攻撃していく。

時代の節目に現れるという”闇に憑かれた者”だが、まるでその攻撃の仕方に一貫性がない。モンスターの類にしてはどこか違和感がある。モンスターとは一線を画す存在なのだと言わればそれまでだが、少なくとも最初に俺の中に入り込んできた悪意と狂気じみた感覚はどことなく覚えがあるよつた感情にも思える。

「”闇に憑かれた者”……だと？」

はつ、として振り向くとジグザールがなんとかして立ち上がろうとしていた。

「まだ動いたら、出血が、ひどかった、から」

ジグザールの身を案じるレミの手を振り払った彼は、驚愕の表情を浮かべている。

「俺たちは、ある人から聞いたんだ。その人はとても優れた魔法使いで、あれを”闇に憑かれた者”なのだと言つていた。ジグザールさん、なにか知つているのか？」

「ふんっ、存在だけは聞いたことがある。道理で私の魔法が効かん訳だ、あれには普通の魔法は赤子がその手で撫でるほどにも効果がないと、古い文献で読んだことがある。その小娘がどんな魔法を使おうとしているのか知らんが、このままでは大したダメージも与えられんだろうよ」

「あんだと？！　じゃー、どうするってんだよ。このまま指を咥えたままやられろってーのかよ！」

「お、落ち着いてください、ジンさん」

なだめるクラッセに「これが落ち着いてられるかつてんだ！」、

ジンが唾を飛ばす。

「なにか手はないのかジグザールさん。あなたもあれが何か知っているのなら、倒す方法も知つてたりするんじゃないのか？」

手足をばたつかせているジンと、それを後ろから押さえているクラッセを横目に尋ねる。ジグザールは「ふむ」と言ってから、「あることにはある。が、私の魔力も底を尽きかけていてな、これが最後の魔法となるだろう。それに……」

そこで苦痛に顔を歪めるジグザール。

「普通のモンスターには効果のない魔法ゆえ、私も初歩の初歩しか扱えん、今まで使う機会などなかつたからな。致命傷を与えられる保障などない、だからどぎめは貴様たちが刺せ」

「どんな魔法なんだよ！」

ジンが叫ぶ。ジグザールは呼吸を整えながら手の平を掲げる。俺はその様子を黙つて見守る。一息ついてジグザールは言った。「破邪の魔法だ」

その言葉を合図にしたようにクラッセがショートソードを構えるのが見えた。

「き、きますよ！」

クラッセに習い身構えると、闇が膨らむのが遠目にわかった。「悠長に話をするあいだ待つてくれただけでも良しとしようぜ！ もうちつとのんびり屋さんだともつと助かつたんだけどな！」

「影は全て叩つ斬るぞクラッセ！」

「は、はい！」

ジグザールが呪文を唱え始める。

闇がさらに膨れた。

白目が膨れ上がる闇に飲まれて消える。狭い路地に収まりきらなりほど膨れ上がった闇は、やがて異形へと姿を変えていった。

闇の塊から左右に一本ずつ、新たに闇が伸びた。それは大きく広がり翼のような形状へと変えると、ひとつ羽ばたきをする。顔にあたる部分から胴体と思える部分までがでっぷりと太ったような形になると、顔の部分が上下に裂けて牙を剥き出して咆哮をあげた。

俺たちを見下ろすように翼を羽ばたかせているそのシルエットは一見するとドラゴンにも見える。しかし腕がない代わりに翼の生えたその姿は、ドラゴンの中でも知能は低いが郡を抜いた狂暴さで知られ、ワイバーンと呼ばれる翼竜のようだつた。熟練の冒険者でも倒すのは至難バラサイトイビルとされるワイバーン。本物のワイバーンと違うのは、それが”闇に憑かれた者”が生み出した闇の塊でできているということだ。ワイバーンの狂暴さに加え、散々俺たちを苦しめた魔法までも使ってこられたとしたら、本物以上にやっかいな相手に違いない。

「おめえの剣でもあれを叩つ斬るのは難しいんじゃねえか？」

ジンが引きつった笑みを浮かべる。

「やつてみなきやわからなーさ」

そう言いながらもさすがに自信はない。

「じ、ジグザールさんが呪文を唱え終わるまでの辛抱ですよー！」

自分を奮い立たせるように声を張り上げるクラッセ。その手に持つショートソードの剣先が小刻みに揺れている。

「へいへい、なんとかやってみやしょーかね。つっても俺にできるこたあ、さすがにねーな」

一応はダガーを両手に構えながらもジンが後ろに下がる。

「リベルたちに近づけさせるな！　俺がビリビリかして引きつけるから2人は援護を頼むぞ！」

「わかりました！」

「あいよ

掛け声に2人が返事をする。俺は走り出した。

と、漆黒のワイバーンが、ぶわっ、と羽ばたいた。

その動きは予想以上に早かつた。俺がワイバーンへと走り出すと同時に、口を大きく開いて突進してきたのだ。俺は反応しきれずブロードソードで受けるのが精一杯だった。

「うおおおおっ、ジン！　クラッセ！　俺から離れるんだ！」「かろうじてブロードソードをつつかえ棒のようににしてしのぐが、俺はワイバーンの口に挟まれたまま体ごと持ち上げられた。一瞬のうちにリベルやジグザールの位置から遠ざかっていく。ジンとクラッセが走ってくるのが見えた。

「ディールさんっ、今助けてます！」

「む、無理だ！　逃げるクラッセ！」

しかしクラッセは俺の制止を振り切ってショートソードを振り上げる。

「坊主！　あぶねえ！」

ジンの声に、クラッセのワイバーンを見上げる顔が信じられないものを見るような顔になった。ワイバーンの胴体からいきなり腕が生えてきたのだ。その腕は正確にクラッセを捉え、彼を地面へと叩きつける。

「世話のかかる坊主だ……ぜつ！」

ジンがダガーを投げつけるのが見えた。宝物庫から持ってきたダガーのうちの一本だ。ジンはレミの杖と同じような、なんらかの効果を期待していたのだろうが、

「なんだよ！　俺のダガーには魔法とかかけられてねーのかよ！」　ワイバーンの腕へと真っ直ぐ放られたダガーは、俺たちの期待とは裏腹に闇に吸い込まれるようにして消えていく。

ジンは「ちくしょう！」、もう1本のダガーも投げつけるが同じように闇に消えていくのを見て、成す術なくワイバーンを見上げる。

「ディール……！」

遠くからレミが叫びが聞こえた。俺は視線を目の前へ戻す。

（うつ……ま、まずい！）

ワイバーンの口の奥で闇が渦巻いていた。

全身の汗が引く。どんな攻撃のかはわからない。だが、これをくらつたらとてもまともではいられない、体が直感的にそう感じ取つて硬直するのがわかつた。

なんとか逃れようともがく。しかし、俺を咬みちぎろうとせんばかりのワイバーンの口をつつかえ棒代わりにして押さえているブロードソードをたとえ手放したとしても逃れられそうにない。ワイバーンの周囲の闇が、まるで獲物を捕らえる蜘蛛の巣の糸のように俺にまとわりついているようなのだ。

「ディ、ディールさん……！」

「ディール！ くそつ、ディールを離しやがれこのイビル野郎！」

闇が渦の中心に収束する。もはや逃れることはできないようと思えた。ブロードソードの柄を握る手の平から力が抜けた。

『もう諦めるのか？』

誰かが耳元で囁いた気がした。

『おまえはモンスターに襲われ、それがおまえの手に余るモンスターだったとき、勝ち目がないからといって諦めるのか？ 村にはまだおまえが守りたいと思う人たちがいるのではないか？』

亡き父の声だった。走馬灯のように昔の光景が浮かぶ。あれは剣の稽古をつけてもらつているときのことだつた。コテンパンに叩きのめされ剣を放り出そうとする俺に言った父の言葉が蘇る。

『いつかきっと私も他の大人たちもいなくなる。そのとき、守りたいたちを守ることができるのは、いつだって最後まで諦めない者だけなのだぞ。剣を手に取れ、最後まで踏ん張つてみせろ！ おまえが諦めてしまつて、誰が大切な人を守るというんだ！』

知らずに俺は瞼を閉じていた。時間が止まつたかのように眼前の闇も動きを止めていた。

『ディール！ 腹に力を込めて剣を手に取れ！ おまえの仲間たちを守ることができるのは常に自分だけなのだと思え！』

指先で柄の感触を確かめると、ブロードソードはほんのりと熱を帯びていた。柄を握り締めると、まだ腕にも力が入った。

そうだ、ここが俺の人生の終着点ではないはずだ。俺にはまだ守りたい仲間たちがいる。ジンモリベルもクラッセモレミモ、あの兵士の青年もジグザールもブュッフェの街の人たちだって、まだ死にたくないはずだ。

時代の節目に現れるという、『闇に憑かれた者』をここで倒すことができなければ、もっと多くの人たちが命を落とすかもしれない。

父の言葉を思い出す。

『おまえの仲間たちを守ることができるのは常に自分だけだと思え！』

この言葉の意味を小さかつたあの頃の自分ではわからなかつた。だけど今ならわかる。いつだって父や村の大人たちは、村を襲うモンスターから命がけで自分の大切なものを守つてきたんだ。それは決して誰かが守ってくれるのではない、大切なものを守りたいのなら自分自身が立ち上がらなければならないのだと、人に頼るばかりでは守ることができないのだと、そう教えてくれていたのだ。

俺は知らず知らずのうちに、この魔法がかかつた剣の威力、リベルやジグザールの魔法に頼つっていたのではないか？ それ自体は悪いことではないのだと思う。手と手を取り合わなければ乗り越えられないことだってたくさんあるはずだ。そうしたときに仲間がいてくれるのはとても心強い。だけど、助け合うのと、助けをあてにして頼り切ることでは全く違う。いつだって自分自身が最後まで諦めずに全力を尽くすからこそ、仲間たちだってそれに応えてくれるんだ。俺は仲間たちを守りたい。だからこそ今だけは最後の瞬間まで諦めてはいけないんだ！

ギュウッと柄を握り締める。カツと閉じていた目を見開く。止まっていた時間が動き出した。

「こんなところで……諦めてたまるかあああー！」

手の平が熱い。ブロードソードの刀身がうつすらと赤みを帯びているのが見えた。その時、

「大いなる大地神よ、その深縁と生命の輝きを以つて不浄なる闇を打ち滅ぼせえい！」

ジグザールの叫びがこだまする。

その叫びに呼応するように左右から緑色の光が幾本も地を裂いて立ち昇る。立ち昇った緑色の光はまるで薫のようにたちまち漆黒のワイバーンに巻き付くと、それを縛り上げた。

「私にできるのはここまでだ！ あとは頼む……ぞ」

息粗ぐジグザールが地面に膝をつくのが見えた。

ワイバーンの巨体が緑色の光に締め付けられて歪む。クラッセを押さえつける腕がちぎれて消えていった。それでも口の中で渦巻く闇はさらに収束し消えることはない。

「今だつ、ティール！」

わざかにワイバーンの口元が緩むのを見逃さなかつたジンが叫ぶ。俺は思いつきり右腕に力を込めた。

ブロードソードがワイバーンの口をまとわりつく闇」と斬り裂く。体が解放されて宙に投げ出される。その瞬間、渦巻いていた闇が一気に放出された。

「ぐうああああああああああ！」

左半身にひりつくような痛みが走る。直撃は免れたものの、漆黒のワイバーンが吐き出した漆黒のプレスは宙に投げ出された格好で避けることはできなかつた。

すぐに重力の手に引かれ、俺はそのまま地面へと全身を強く打ち付けた。鈍痛に顔が歪む。

「ま、まるで効いてませんよ…」

ワイバーンの腕から逃れることのできたクラッセが痛みを堪えた

表情で叫ぶ。クラッセの言うように、ワイバーンは緑色の光を打ち破り、一層大きく翼を羽ばたかせていた。

「いや……ダメージは確かにある！ 見るんだ、向こうの景色が透けて見えるほどになつていた。」

俺はなんとか上体だけ起き上がりつて指をさす。翼を羽ばたかせる勢いを増すワイバーンだが、先ほどまでの奈落の底を思わせるような漆黒の巨体は、それを維持できないのかうつすらと透けて向こう側が見えるほどになつていた。

「お、おいティール！ 大丈夫なのかよ……げつ！ 腕が焦げているみてえに真っ黒だぜ！」

駆け寄ってきたジンに言われて左腕を見たとたんに眩暈がした。続けて激痛がやってくる。あまりの痛みに気を失つてしまいそうになるが、ここで気を失うわけにはいかない。ワイバーンをまだ倒せたわけではないのだ。

「逃げてくださいティールさん、ジンさん！」

ワイバーンがさらに大きく口を広げる。「や、やべえ！」「ジンは慌てて俺を背に担ごうとするが、ワイバーンの動きが早い！

「間に合わない……ジンだけでも逃げろ」

痛みを堪えながらなんとか声を絞り出す。

「ばかやろう、そんなわけにいくかよ！」

ジンが怒鳴る。

「や、やめろおおおおおおお！」

クラッセの悲鳴が遠くに聞こえる。目の前が真っ暗になった。漆黒のワイバーンの影が俺とジンに覆いかぶさるほど近づいた。

（誰でもいい……俺に仲間を守る力を貸してくれ！）

俺は心の中で叫んだ。

その時、力強い声が聞こえた。それは俺の心の叫びと重なるようにして、まだ明けぬ夜を高らかに照らす光となつた。

星も見えないほどの闇夜の空に青白い光を放つ満月があった。いや、満月に見えるそれは似て非なる光の球体だった。

漆黒のワイバーンが俺とジンに覆いかぶさったまま固まる。ワイバーンの巨体に光が降り注ぎ、砂山の砂が風にさらわれていくように少しづつ闇の塊が崩れしていく。

「み、見ろよ。腕が……」

迫るワイバーンに、2人して倒れ込んでいた俺とジンだが、ジンに言われて腕を見ると、焦げたように真っ黒になっていた左腕からは少しづつ黒色が引いていくのがわかつた。しごれはまだ残っているが、黒色が引くのと同じで痛みも和らいでいく。

「リベルの魔法、か？」

眩いでふと手元を見ると、ブロードソードの刀身がまたもほんのり赤い光を帯びていた。

「おめ……その剣、どうしたってんだ？」

赤い光を帯びるブロードソードに気付いたジンが息を飲む。

「わからない。さっきからやけに熱いんだ」

ジンに答えて再び刀身の光に目をやると同時にリベルの声が聞こえた。

「聖なる月よ！ 蒼き清浄なる杯を受けて滅びなさい、闇！」

リベルの言葉に応えるように青白い満月からは青白い光の霊が溢れ、滴り落ちる霊が闇を溶かしていく。

漆黒のワイバーンが軋んだ悲鳴を上げる。俺たちはその光景をただただ見ていた。

「今度こそ終わりだつたらいいけどよ」

溶けゆくワイバーん眺めながらジンが言った。

「僕もそれには同感ですけど……」

足をひきづりながらやつてきてクラッセが言つ。ズボンは膝の部分が破けていて血が赤く滲んでいる。

「このまま終わるとは思えない」

俺は唇をきつく噛む。リベルの魔法によってワイバーンはその形をすでに留めていなかつたが、それまで以上に突き刺すような視線がどこからか感じるのだ。ジンとクラッセも感じているらしく固い表情で頷く。そうしていると青白い満月から滴り落ちる雫が漆黒のワイバーンをみると溶かしていき、ワイバーンはやがてほんの小さな闇の球体にまで縮小していく。

ワイバーンの体から溶けていった闇は霧散し、いよいよ闇の球体も消え入りそうになつた時、離れた場所にいるリベルの表情に陰りがよぎる。そして、はつゝとしたように俺たちの方を向いたリベルが口を開きかけた瞬間、

（殺ス……殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺ス殺スコロスコロスコロス！）

憎悪と怒りの入り混じつた声が頭の中に響き、消えかけていた闇の球体が突然膨れあがつた！

俺は急ぎブロードソードを杖代わりにして起き上がる。地面にしだたかに打ちつけた全身からはもう立ち上がりたくない抗議の声が上がるが、そんな非難になどまつてはいられない。

ふらつく体をなだめながらようやく立ち上がると、再び迫らんとする脅威に備えて中腰でブロードソードを構える。……と、背中の辺りから聞こえる妙な音に、俺は時間にしてほんの1秒ほどだろうか、眼前の脅威から視線をはずすべきか迷つた後に振り向いてしまつた。

力サカサカサ。

俺の背中をよじ登つて肩から顔を覗かせたそれに、俺はあるつひとかブロードソードを取り落としてしまった。

「……っは、うわあああああ！ な、なんだこいつは？！」

それは見るもおぞましい姿形をしていた。大きさは手の平の上に乗る程度で、俺の背中を競い合つよう登つてくる。おびただしい数のトカゲの首には胴体に釣り合つサイズの醜い人間の顔がついていた。ギョロリと虚ろな眼、うつすら禿げ上がつた丸い頭、二タニタと口元には薄気味悪い笑みを浮かべて俺に群がるそれらに、気が動転しそうになりながら振り払おうと手を伸ばす。しかし、どんなに手を伸ばしても執拗にまとわりついて剥がすことができない。

「うおっ、うおっ！ 気持ちわりい！ 離れろ、どつか行きやがれ！」

「『めんなさい』『めんなさい！ 許してください！』

近くから口々に叫ぶ声が聞こえるが、それを確認する余裕はなかった。膨れ上がつた闇が迫つてくるのが視界の隅に入つたのだ。

先端が鋭く尖つた闇が俺たち3人を串刺しにせんとばかりに迫る。なんとか応戦しようと取り落としたブロードソードに手を伸ばすが、指先にかすめるだけで掴むことができない。群がる人面のトカゲが今度は口の中に入つてこようと顔にへばりついてきたからだ。

地べたに倒れ込んで足をばたつかせながら顔から引き剥がそうとするがどうしようもできない。呼吸も苦しい。「助けてくれ！」「そう叫びたいのにもはや声を出すこともできない。

(ヨワツタ心二ハ)

目の前が白濁した景色に変わつてゆく。人面のトカゲが我先にと、もぞもぞ身をくねらせながら俺の口の中へと入つてくる。そのトカゲたちの隙間から迫つてくる闇の尖端が見えた。

ついさつき、最後まで諦めないと心に誓つたはずなのに、こんなところで俺は死んでしまうのか。武器を取り落としてしまつてもう戦うことができないのか。できないのだから仕方がない、耳元で誰

かが囁く。

「じょうがねえことだぜ」テイール。おめーも俺もよ、最後までよく頑張つたじゃねえか。」「いらへんが潮時かもしんなーなあ？」

「頑張つたじゃねえか。」「いらへんが潮時かもしんなーなあ？」

「冒険者なんてやつてたらいつかは死んじまつんだしよ。あんまり苦しまねーで死にたいとは思わねーか？　俺はそっち派だぜ。今ならこりゃ以上苦しむ必要なんてないんだからよ」「ふう！」

「なにを言つてるんだジン、バカなこと言つなー！」

「いいんじや、ない」

「レミー？！」

「この間に隣にきていたのか、レミーが囁く。

「もう疲れた、よ。終わりに、じょひよ」「みゆ」

「忘れたのか？！」　闇バラサイトイビルに憑かれた者”のせいでブヨッフュに住むたくさんの人たちが死んでしまったんだぞ！　やつを許せないって、レミーも言つていただじやないか！」

俺はレミーの肩を掴もうとしたが、レミーはさつと身をかわして、「もう、ここよ。所詮倒せるわけ、ないから。あればこくら倒しても、きりが、ない存在。私たちには、どうあることもできない」「倒してもきりがないだつて？！　どうこつことなんだレミー」レミーは答えずに背を向ける。

(ヨロシタ心二ハ闇ガヨクニアウ)

すると足音が近づいてくる。

「クラッセ……。もしかしておまえもおかしくなつてしまつたのか？」

「いらへんが」

「クラッセ？」

「なんだつて？」

「……いいんですよ

「みんな殺されてしまえばいいんですよ。結局僕には無理だつたんです、兄さんのようなファイターになることなんて。だいたい、僕

俺の田の前にきた金髪の少年はうつむいたままだ。

がこんなに体が弱いのはきっと兄さんのせいなんだ。いつまでも僕の世話を焼いたりするから……余計なお世話なのに！」

顔を上げたクラッセに俺はギョッとした。怒りの形相に顔を歪めたクラッセが怒鳴る。

「こんな世界なんて滅んでしまえばいいんだ！ 僕がなにもかもぶち壊してやる！ ディールさんも手伝ってくれますよね？！ ああ、邪魔をするつて言つならディールさんから殺してあげますから」

そう言つたクラッセは怒りの形相のまま、俺の喉にショートソードの切つ先を向ける。俺はクラッセの変わり様に愕然とした。一見すると弱弱しい少年で、戦いには向いていないような優しい心を持つているクラッセがあんな恐ろしい顔で人に剣を向けている。

ジンだってそうだ。いつも軽口を叩くような男だけども、彼は誰よりも命の尊さを知つてゐるはずだ。自分の弟分が死んでしまつたことを今でも忘れられず心の奥底にそつとしまつてゐるような男なのだ。俺の中のジンならば、どんな逆境に立たされたつて起きるということを放棄したりしないはずなのだ。

「ばかじやないのディールったら。ねえ、あたしたちがどうしてこんなに苦しみながら戦わないといけないの？ それは街の人たちを守ろうとしているからだわ。ふふ……ブユッフェの街の人たちなんてみんな他人じやない。どうして赤の他人のあたしたちが守らないといけないわけ？！ もう全部忘れてしまいましょうよ、ねつ？」

「違う……」

「なにが違うつているのよ。全て他人事だわ、守る義理なんてないのあたしたちには。もうちょっとディールも賢くなりなさいよ。あの方に付いた方が幸せになれるわ。そ、あの方こそあたしたちの本当の主だもの。あたしたちを真の闇へと導いてくださるのよ？」

リベルが下品な笑みを浮かべたままそつと俺の肩に手を置こうとする。俺は、さつとその手を振り払う。

「ディール？ どうしたつていうの？ わあ、一緒に墮ちましよう？」

？

「違う！ こんなのは俺の仲間たちじゃない！ 誰だおまえは、なぜ俺の仲間たちのふりをするんだ！」

後ろ手に指先を地面に這わす。俺は田の前にいる4人を睨みつけた。

「こんなのが俺の仲間たちであるはずがない。レミはどうでも物静かで言葉少ななところがあるけれど、傷ついた見ず知らずの兵士を想つて怒ることのできる心をもっている。……倒せるわけがないから諦めるだって？ あのレミがそんな簡単に諦めるわけがない。」

「ど、どうしたのよディールつたら。急に大声出したりして」

白々しい台詞を吐くリベルに似た者から田を離さず、俺は地面を探り続けた。

「あの方っていうのは何者だ。おまえたちが本物じゃないことはもうわかつてることなんだ！ リベルもジンもレミもクラッセも、そんな馬鹿げたことなんて言わない。おまえたちなんて全部、幻だ！」手に固い何かが触れた。それをギュッと握りしめる。

「……本当に馬鹿ねディール。墮ちてしまつた方が本当の苦しみを味合わずに済むのに」

リベルに似た何者かの顔がぐにゃりと歪む。それは飴細工を加工するときのようで、見る間にリベルの原型が失われていく。

「なにが本当の苦しみだ！ おまえたちのよつた闇の者には絶対に負けない！」

ブロードソードを握る手の平がまた熱くなる。田の前の視界が急に拓け、眼前に迫る闇が見えた。

俺は張り裂けんばかりの声を出してブロードソードを振るつ。その時、今度は目の前が真っ赤に染まつた。

ジン、リベル、クラッセ、レミの4人の偽者の姿がかき消える。そして迫っていた闇すらもブロードソードは切り裂いた。

「ジン！ クラッセ！」

傍で倒れている2人に駆け寄る。幻はなくなり、闇もブロードソードに引き裂かれて消え去つた後には、ジンとクラッセが倒れてい

た。

「しつかりしる！ リベルとレミ、ジグザールさんは無事なのか？」

！」

ジンとクラッセの息があることを確認して胸を撫で下ろすと、俺はリベルたちがいた方へと視線を向けた。

「ディール！ どうしたの急に苦しみだしたりして」「気を、抜かないで。まだ何かの、気配が、する」リベルとレミ、そしてジグザールがこちらへ向かってくるところだった。

「ジグザールさん、あんた大丈夫なのか動いたりして？」

「魔力が尽きたとはいえ、足手まといにはならん」

顔をしかめたジグザールが答える。

「幻を見せられていたんだ。リベル、魔法はすぐに使えそうか？ やつはまだ倒せていない。それに……」

「それに？」

聞き返すリベルに俺は偽者のレミやリベルが言ったことを思い出す。そしてひとつつの仮説を打ち立てた。

「『闇に憑かれた者』っていうのはきっと……」

俺が言いかけたとき、どこかで囁くような声がした。

(ドコマデモワフレノ邪魔ヲスルレンチュウダ)

(ワタシノ魔法ヲモツテシテモ意識ヲタモツティラレルトハオモイモヨラヌコト……)

(オソラクシユクフクノ魔法ガカケラレテイルノダロウ)

(イマイマシイ！)

(ステニワレラノナカデモ強イチカラヲモツモノガフタリモヤラレテシマツタ)

(モハヤナリフリカマツテハイラレヌワ！)

(カクナルウエハイタシカタアリマスマイ……)

(コノヨヲ混沌ヘトカエスタメ)

(スベテノセイアルモノニ、死ヲ)

いくつかの囁き声が重なったとき、闇が夜空に散らばった。

「また黒い蝶だわ！」

リベルが夜空を見上げて叫んだ。空を舞う黒い蝶は不気味に羽ばたいている。

「いまさらモンスターを召喚しようともいつのか？！」

俺たちの持つ魔法がかかつた武器にかかる、並のモンスターなら相手にならないだろ？ということは向こうももうわかっているはずではないのか？ とはいえ、すでに多くの兵士たちも傷つき倒れ、俺たちだって無傷とはいえない。今の状態でモンスターをたくさん召喚されてしまえば苦しい戦いになることは確かだ。それでも、「貴様たちには、さきほどの囁き声が聞こえたか？」闇に憑かれら者も相当の痛手を受けているのはまず間違いないと思つていいだろう。おそらくこれが最後の攻撃になるはずだ。それをただ普通のモンスターを召喚してくるだけということはありえない、なにか考えがあるはずなのだ。最後まで気を許すな

苦しそうな表情のジグザールに言われ、俺とリベルとレミは頷く。

「あんたに言わねなくてもわかるつづーの」

「ジン！」

倒れていたジンは立ち上がり、相変わらずの軽口を叩いて唇の端を上げて見せる。「頭いてー」、頭をさすりながらジンが言つ。

「ディールさんに感謝しなくちゃですね、ジンさん」

「クラッセ！ 大丈夫なの？！」

「やっぱりあれは幻だったんですね。あやつく自分が自分じゃなくなるところでした。でも、ディールさんが幻が見せる悪夢の中に現れて……全部消し去ってくれたんです。ちょうどその剣を持つて。

僕、ずっと思つてたんですけど、その剣は僕たちの持つている武器とちがうと違つて、なにか特別なもののような気がするんですね。うまく言えないんですけど

そう言うクラッセに見つめられ、俺は自分の持つブロードソードに視線を向ける。確かに、持つていると急に手の平が熱くなったり、“闇に憑かれた者”の影の魔法を切り裂いたりはしたが、クラッセたちの持つ武器とは違うだなんて考えたこともない。

「そういうやその剣、さつき赤く光つてたよな？　でもそりゃあ魔法がかけられているからってことなんじゃねーのか？」

ジンに言われて思い出す。あの時はただみんなを守りたい、だからここで諦めるわけにはいかないと強く想つたんだ。

「シギルの剣、かもね」

俺たちは一斉にレミを見た。レミは黒いフードを田深にかぶり直して続ける。

「シギル、とは古代語で”太陽”の意。デュランドー・シギルは”太陽の勇者”の、名を持っているん、だよ。　”小さき太陽”といふ場所、デュランドー・シギルを知つてゐる、ゼンさん。あの宝物庫に、シギルの剣があつても、おかしくは、ないと、思うけど」

レミの説明にジンとジグザールが同時に眉を動かす。

「おじおじレミちゃんよお、いくらなんでもそりゃ話ができるてるつてもんだぜ。だいたい、それがあのシギルの剣だつてゆーんなら、あのバーサンが知らないわきやねーだろ。なんたつてあのシギルの剣だぜ？　伝説中の伝説の剣だらーが！　それをこの、レベルがたつたの？　しかないディールが持つてゐるなんて、ありえねーことだぜ」

ジンが一気にまくしたてる。レベルが2しかないところは……しかし全くその通りなので反論はしない。

「自分だってレベル1じゃないですか……。僕はレベル0ですけどクラッセがフォローにならないフォローを入れる。そこになおも口を開こうとするジンを目だけで制してジグザールが前に出る。

「”小さき太陽”だと？！ 貴様たち、なぜそれを。……あの要塞へ行つたのか？！ あれを知つてゐる者は今では数えるほどしかいないはずだぞ！」

血相を変えて詰め寄るジグザールの真意は、今の俺たちに計れるはずもなかつた。

「見て！ 蝶たちの様子が変だわ！」

リベルの叫びに俺たちは一斉に空を仰ぐ。モンスターを召喚するかと思つた黒い蝶たちだが、リベルの言つようによれば、様子がおかしい。「どこかへ向かつてゐるみたいですね」

「なんか……なにかの形を作つてゐるみたいじゃねーか？」

クラッセの言葉通り、空を舞う黒い蝶たちはそれぞれが目的を持つてゐるかのように、迷いもなく移動をしていた。そしてそれはジンの言つように夜空に形を描いてゐる様にも見える。

(ジグザー……ル)

今にも消え入りそうな声。一番早くその声の主を見つけたのはリベルだつた。

「だ、誰？！ なによあなたは！」

俺たちは見た、闇を纏いながらひたひたと足音を立てて姿を現す色黒の男を。その男は憤怒の表情を湛え、そして右腕を高らかに掲げて、なにかを持つていた。

「あの男は！」

叫び声を上げたのはジグザールだ。その視線は色黒の男が掲げる右腕に向けられている。

「あなたの知り合いかよ？！」

「名前はダーレス。顔は一度見たことがあるくらいだ。禁断の魔法の研究をしていて、ギルドから追放されたはずだ。それもつい数日前にな。それが一体なぜ……」

色黒の男が首を掴んで持ち上げている男、ダーレスを見ながら、

ジグザールはうめくように言つた。ダーレスは息も絶え絶えの様子で虚ろな視線を宙に這わせている。

(ワレラハアノカタニヒラバレスシモノ！ ョワキニンゲンハフヨウダ！)

色黒の男が叫んで右腕を前に突き出した。

(ギヤアアアアアアアアアアアア！ タスケツ……タスケテクレエ！)

ダーレスという男が悲痛の叫び声を上げる。だが、色黒の男は無言でダーレスの首を掴む右手を離した。次の光景に俺たちは絶句した。

闇から外へと放り出されたダーレス。その体がミシミシと音を立てる。

(死ニタクナイ、マダ死ニタクナイ！)

ダーレスは自分の顔を両手で覆う。その顔に亀裂が入った。

(ナゼダ！ ナゼオレガコンナメニアワナキヤナラナインダ！ オレヲオボエティルカ、ジグザール！ オマエガアノコトニキヅカナケレバ、コンナコトニハナラナカッタ！)

顔の上半分が砂のように崩れしていく。

(禁断ノ魔法ヲツカツテナニガワルイ！ 死者ヲヨミガエラセルコトノナニガワルインダ！ オマエニオレノナニガワカル！ アイスルヒトヲシナイトオモウコトハウリコトナノカ！)

すでにダーレスの姿はほとんど崩れさつていった。俺が崩れさるダーレスから目を離せないと、

「死んだ人間を蘇らせていいわけがあるか……。人は必ず死ぬ。だからこそ精一杯生きるものなのだ」

ジグザールの喰きはおそらく俺以外には届いていないだろうと思えるほど小さなものだつた。

(コノマチノニングンスベテヲ滅ボシテヤル！ アイスルヒトヲイキカエラセルコトヲ邪魔シタジグザール、オマエモミチヅレ……ソレナノニマダ死ニタクナイ！)

正直言うと俺にはダーレスという男の気持ちがわかる。俺だって故郷の村をモンスターに襲われて両親や親しい人たちを失ったからだ。大切な人を失うのはとてもつらい。それが愛した人であればなおさらだろう。それでも、失った命が戻るなんてことはない。つらくて、悲しくて、枯れるまで涙を流して、自分を失いかけたとしてもいつかは立ち直らなくてはならない。そして今度こそは守りたい人を守れるようになろうと思つて、必死に今を生きていかなくてはいけないんだ。

ダーレスの気持ちは痛いほどわかるけれど、彼は歩く道を踏み外してしまったのだ。死んでしまった人間を蘇らそうとして、それをジグザールに邪魔されたからといって、逆恨みしてブユッフェに住むなんの関係もない人たちを巻き込んでいいはずがない。

「もう随分と前の話だがな、街のはずれにある墓地から死者が動き出すという報告が入つたのだ。そうして私たちが調査した結果、あのダーレスという男の仕業だということがわかつた。一度しか会つたことはなくてな、その時はなにかに取り憑かれたようにげつそりとした顔をしていたのを覚えている。事故で伴侶を失うまでは聰明で優秀な魔道師だったらしいがな」

鎮痛な面持ちでジグザールが言った。

「これが闇に墮ちた人間の末路なの……」

顔を背けてリベルが呟く。

ただ愛する人を失いたくないと禁断の魔法に手を染めてしまったダーレスという男の姿は、ついに跡形もなく砂のように崩れたり、それは夜風に流されていった。

ほんの少し前までダーレスといつ名前で呼ばれていた砂。それらが風にさらわれていく。

それはとても悲しいことのよつにも思えたけれど、彼のやつてきたことを考えれば仕方のないことかもしれない。愛する者を蘇らせるのを邪魔したからといって逆恨みして、何の罪もない人々を恐怖と混乱に陥れたのだ。そんな男に俺はとても同情することはできないはずだ。それなのに、

「どうして闇に墮ちたからといって、あんな死に方をしなくならないんだ」

どんな罪を背負ったとしても最後くらいは人として死んでいってほしかった。犯した罪は決して消えることはないだろう。それでも、砂のように崩れ果てて骨すらも残らないなんて悲しきがる。

「人として、しては、いけないことをして、しまったから」「レミ……」

俺は静かに目の前を見つめる小柄な少女を見る。その表情は見えない。だけど、もしかしたら彼女も同じようなことを考えているのかもしねえ。ダーレスがいた場所をずっと見つめている小さな背中がそう語っているようだった。

(クズガキエタクライデ心ミダサレルカ)

低く喉の奥から搾り出しているようなしわがれた声に、俺たちは顔を上げた。すると色黒の男はみるみるうちに姿が滲んでいき、その場には建物の影だけが残つた。

「どこに消えやがった！　姿を見せやがれ！」
ジンが大慌てで辺りを見回す。

(スグニコノマチゴト消エテシマイマスノニ)

甲高い女性の声。まだ若い女性のものだらう、張りのある声がクスクスとどこからともなく聞こえる。

(ダガ、邪魔モノハケシテオクニカギル！)

色黒の男の声がした。その時、レミとジグザールが空同時に見て「あっ」と叫んだ。

「どうした2人共」

「ばかな！ まさかあの蝶であんなものを描こうとこうのか？！」
「不可能……ではないけど、街ひとつを、囲めるほど、のものを、描くなんて」

言葉を失つたまま立ち尽くす2人に、

「なんだってんだよ！ 僕らにもわかるよう」に説明しやがれ！」

なんのことかわからないジンがジグザールの胸倉を掴む。その間に黒い蝶は螺旋を空に描き、さらに統制のとれた動きで紋様のようなものを描いていった。

その様子を見ていたリベルは、まるで信じられないというような口ぶりでつぶやいた。

「あれって……ひょっとして魔法陣？」

俺には魔法のことはよくわからないが、言われてみれば池のほとりでゼンさんが張ってくれた魔法の結界を思い出すと、その魔法陣によく似ていた。

「魔法陣って、あんな蝶で描いたりできるのもなんですか？！」

クラッセが問い合わせると、ジグザールは苦々しい表情で首を振る。
「普通の魔法陣というものは、そう簡単なものではない。それも街を覆うほどの規模のものとなると、いち魔法使いが描けるものではないが」

「ゼンさんが張った、結界の魔法陣は、きっと、”ティダリア小さき太陽”に
もともと備わっている、機能、だつたんじやないかな。だけど」
続けてレミが言うと、ジグザールは神妙な顔つきで頷き、
「やつらの特異性を考えればありえん話ではない。おそらく”闇”に
サイトイビル憑かれた者”とは、何人の闇に魅入られた魔法使いたちの集合体
なのだ。1人の魔法使いでは持ちきれないほどの魔力を秘めている
と言つても過言ではないだろ」

だからこそブコッフHの街を覆うほどの魔法陣をあんな黒い蝶を使って空に描くことも可能なのだ。そうジグザールは俺たちに説明した。

「じゃ、じゃあこのまんま黙つてみてたらやべーじゃねーか！ 早いところとかしねーとよ」

慌てるジンに、「言われなくてもわかつていの」、ジグザールは苦い表情のまま答える。

きつとこのままだと、ジンの言つように「やばい」のだろう。そのためには”闇に憑かれた者”を倒してしまうほかはないのではないか。ただ、俺は何か欣然としない気分になつた。あの魔法陣を使つた魔法が街全体を滅ぼしてしまえるほどのものなのかどうか、俺にはわからない。だが、なぜやつらは最初からこうしてしまわなかつたのだろうか。それほど魔力があるのならば、俺たちの相手などせずにそうしてしまえば彼らにとつて都合が良かつたのではないか。そうしない理由がなにかあつたのだろうか……。

「ディール、なにぼさつとしてるのよ！ あそこを見て！」

俺は思考を中断して前を見た。ほの暗い何かがある一点に集まつていいくのが見えた。そしてそれはすぐに緑色と紫色、茶色の3つの色に変わり、交じり合つようにして膨れ上がつていく。

それらは形をえていくと、両手足を作り、それだけでも5メートルはありそうな巨大な足は、石でできたゴーレムのような硬度を持つているようだ。木造りの家などものともしない、運悪くもすぐそばにあつた民家がメキメキと悲鳴を上げながらひしゃげていった。池のほとりで俺たちの行く手を阻んだゴーレムが巨大化したようなものだろうか。大の大人が両手でやつと抱えられるくらいのサイズの茶色の石がびつしりと隙間なく繋がつて全身が構成されているらしく、その継ぎ目からは次々と紫色の毛が生えていた。

あつという間に紫色の巨大な毛むくじやらモンスターのような風体になつたゴーレムの頭の部分からは緑色の蛇が一斉に生えた。そして、顔の部分が裂けると、あの悪意に満ちた視線を俺たちに向け

ていた白い田玉が2つ、ギョロリと覗いた。

白い田玉に魂が宿つたように怪しく瞬くと、ちゅうひの口にある部分が上下に大きく裂けて、ナイフの先端のように鋭い牙がずらりと並んでむき出しになる。

「イキテイルコトノ絶望ヲオシエテヤロウカ」

その口が二タリと歪んだ。

黄昏の空を思わせるような紫色の毛並み、ちょっとした民家であればまるで泥の塊でも握り潰すように破壊してしまえるほどの大人。ギョロリとした大きな目玉がおぞましくも悪意に満ちた双眸。それが、針山のような牙が並んだ口元に笑みを貼り付けて俺たちを見下ろす。

「やれやれ、効くわきやねーけど、こんなもんでも武器を持つてねーと落ち着かねーぜ」

ため息と共にジンが胸元からダガーを取り出す。高く売れると言つていた豪華な装飾が施されたダガーだ。もちろん彼としては後で売つてしまおうと思っていたのだろうが、さすがにこの状況にあつて、武器として使つのがもつたいないなどと言つてはいられないだろ？

「あのでかいのは、わざとまで声が聞こえていた魔法使いたちなんか……？」

見上げて呟く。

しわがれた老人のような声、甲高い女性の声、そして少しの間だけ俺たちの前に姿を現していた色黒の男。紫色の巨人から聞こえた声は、そのどれにも似ていて混じりあつているようだつた。

「きっとそうなんでしょうね。人を幸せにしたり助けたりするために魔法使いになつたはずなのに、どうして他人を苦しめたりするのよ。あんなの間違つてるわ」

リベルの握り締めた杖が悔しさで、ふるふると震えている。彼女にしてみれば、自分よりもはるかに優れた技量を持つ魔法使いたちが揃つて街を襲うということが信じられないのだろう。そして、そんな者たちが闇に身を捧げてしまつたといつとも。

「闇は私たちが思つてゐるよりもすぐ近くに潜んでゐるのだ。より強い力を持つ者ならば、なおさら己を律することができねばならぬ

のだがな……」

そう言つて押し黙つたジグザールは、紫色の巨人を睨みつける。その間にも紫色の巨人は崩れかけの民家の屋根をまるでそこにあるのが邪魔だと言わんばかりに握り潰して捨てる。

「んで？ どうするよ。ジグザールのとつあんはもうヘットヘトに疲れちまつて魔法が使えねーんだろ？ そんじゅーリベルに頼らざるをえねえつてことになるけど、もつにっちょ魔法をふつぱなす余裕はあんのかよ？」

「その呼び方はよさんか！」

この状況でも人をおちょくることを忘れないジンに肩をすくめつゝ、俺はリベルを見た。リベルは少し考えた様子だったが、すぐに決意を瞳に宿した顔を上げて、

「やつてみるわ。あまり自信はないけど、なにもしないでやられちゃうよりはずっとマシだものね」

杖を胸の前で握り直して頷く。

そうだ、なにもしないで脅えているだけで道が拓けるはずがない。言葉を変えれば、何かを成すためには失敗を恐れずに入えて立ち向かう勇気が必要なんだ。決意を秘めたりベルのまなざしに、俺は自分の中で芽生えたなにかにそつと手を添えた。

「よつしゃ、レミは武器もねーし、なんだつたらあのおつかねーやつが魔法でも使いそうになつたら大声で叫んでくれや。そんぐ俺らは」

「僕とジンさんとティールさんで、リベルさんが魔法を使うまでの時間稼ぎですね」

「そゆこと」

「モンスターじゃ、なくとも、きつと魔法以外にも、弱点はあるはず。探してみる、よ」

「そうしてくれりや助かるぜ。おつと、そろそろやつしそんも調子が出てきたみたいだぜ。腕をぶんぶん回してらあ。あの調子で一本くらい腕がもげる勢いでぶん回せばいいのよ」

「私も魔力が回復し次第、援護しよう」

「助かります！ ジグザールさん」

「期待しねーで待つてら」

「ちょっと！ 集中するんだから黙つてなさいっ、ばかジン！ いい加減に少しさは成長してよね！」

リベルが眉を吊り上げて怒鳴ると、ジンは「へいへい、んじゃちよつくら逃げまわつてくつか」、わざとおどけたふりをしながら肩を回して、ダガーをひとつ素振りする。

軽口がつい口をついて出でてしまるのは、恐怖を紛らわすためでもあるのだろう。彼もわかっているのだ、いくらリベルの魔力があるとは言つても、さきほどの漆黒のワイバーンのように簡単に倒せる相手ではないだろうということだ。

なにせ、リベルの魔法と俺たちが力を合わせてようやく倒すことができた漆黒のワイバーンや、ジグザールを魔力の尽きるまでに疲弊させ、レミの杖の秘められた力でなんとか倒すことができた毒の炎を吐く大蛇ですら、やつらの様子からすると下つ端の扱いらしいのだ。だが、リベルもまだ、そう何度も魔法を使えるほど魔法の扱いには慣れてはいないし、レミの杖だって失われてしまった。ジグザールだって魔力がそんな簡単に回復するかどうかは俺たちにはわからない。

そして今度こそはやつらも本腰を入れて俺たちを打ちのめしにやつてくる。それもすでにわかっているだけでも3人以上の強い力を持つ魔法使いたちの成れの果てというか、きっとあれが闇の力を存分に奮うことのできる姿なのではないだろうか。そう思わせるような恐るべき変身を遂げたのが、今まさに俺たちの目の前にいる紫色の巨人だということだ。

そして俺も知っている。今から俺が試みようとしていることは、きっと無謀なことなのだろうと。だけど、きっと無駄ではないと思う。

人は時にそれを愚かな行為だと笑うかもしれない。失敗に終わつ

てしまえば、責められるかもしれない。無理に決まっているのだから、やるだけ無駄だと。それでも俺は試してみたい。

人はきっと、どんなに姿が変わり果ててしまつても、たとえ闇に墮ちてしまつたとしても、ほんの1パーセントでも心のどこかに大切なものが残つていいのだと。

誰か1人くらいは最後まで信じてみてもいいではないか。
「どんな姿になつたって、あれが人間であることには変わりはないんだ」

ブロードソードを鞘に納めて前に出る。

今までは、ただ自分たちの身を守ること、ブュッフェの街や街の人たちを救おうとするだけで精一杯だつた。今この瞬間だつてそのことには変わりはない。だけど、ただただ恐れるばかりで姿の見えなかつた”闇に憑かれた者”^{バラサイトイビル} だって、俺たちの前に現した姿は人間のものではなかつたか。あんな姿になつたつて、元は俺たちと同じ人間だつたのだ。

”闇に憑かれた者”の一部だつたダーレスという男は、俺たちの目の前で砂のように崩れて消えていった。たとえそれが闇に手を染めた代償だとしたつて、あんな紫色の巨人になつた姿が自ら人間であることを捨てた代償だとしても、ダーレスのように人間であつたことの証さえ残らずに消えていくだなんて、そんな悲しいことがあるだろうか。

「ディールさんつ、ど、どうしたんですか？！」

背中に焦るクラッセの声を受けても、俺は踏み出す歩みを止めはしない。

「おまえっ、剣もしまつちゃつて、なにするつもりなんだよー」「こんなこと、もうやめるように説得する

振り返らずに俺は答えた。

「はあつ？！ ば、ばか、おまえの言つことを聞くようなやつなら最初からこんなことしねーつて！ だいたいあのバケモンは街の人間をたくさん殺したんだぞ！」

「そうですよ！ そんな無防備に近づいたら殺されちゃいます、ティールさん！」

「そうなつたらそうなつたで、かまわないさ。それに闇の力に操られているのかかもしれない。だから呼びかけてみることで正気を取り戻させることができれば……。俺は彼らに人間の心が残っていると信じてみたい」

俺はジンたちに言った。

少しでも人間の心が残っているならば、少しでも奴に俺たちの心が届けば……。

するとジンはなにか言いかけて、ぐつ、と言葉の飲み込んだ。

「そうなつたらそつでもいいだなんて、そんなこと言わないでください！ これ以上、目の前で人が死ぬのなんて……。兄さんが死んで、その上、大切な仲間まで失うなんて僕はいやだよ！」

「クラッセ……すまん。 そうだったな、俺は死ぬ気なんてないさ」見るとクラッセは乱れた髪のままでうつむいていた。自分の命を軽々しく考えるなんて、我ながらバカなことを口走ってしまったものだ。バツの悪い気持ちでクラッセに歩み寄り肩に手を置く。

そこで黙つたままだったジンが口を開く。

「おい、奴に背中向けてんじゃねー！ ……俺あ、ディールみてーに紫の巨人が改心するよーなタマだなんて思っちゃいねーけどよ。正直、まともに戦つて倒せるとは思えねー。だからよ、ディールが奴を説得するつてんなら、それに賭けてやつてもいいぜ。それでダメなら戦うしかねえんだからな」

ジンは「試すだけならタダだからな」と付け足して唇の端を上げる。

乾いた笑い声が聞こえてきたのはその時だった。

「ギャッギャッギャッ、オモシロソウナハナシヲシテイルジャナイ力。ダレガダレヲセツトクスルンダツテ？！ モウココハ、モヌケノカラダトイウノニナア！」

紫の巨人は俺たちの話を聞いていたのか、さも可笑しそうに腹を

抱えてひとしきり笑つた後に、自分の胸に親指を突き立てた。

「もぬけの殻だと？ どういう意味だ？」

言つていることがわからず顔を見合させる俺たちを見て、満足

そうに紫の巨人は口の端を吊り上げる。

「ソノマンマノ意味ダヨ。バカナマドウシドモハ、チカラヲモトメ
ルアマリ、コノオレサマニ心ヲムシバマレテイクノニキヅカナカツ
タツテワケサ。ダカラセツトクナンテ無駄、無駄。オトナシクシタ
ホウガリコウツテモンサア」

暗黒の空が怪しく光つた。巨人と同じ色の紫色に光る魔法陣だ。
今にもこの街を飲み込んでしまいそうなほど禍々しさを感じて、
俺は思わず身震いをした。

「てめえ、なにもんだよ！ 魔道師連中の心を蝕んでいつたって？
あれが闇に憑かれた者の正体ってことなのかよ。おい、あてがはずれたなデイール。ありやあ説得なんてできるようなやつじゃない
ぜ」

ジンの言葉に俺は苦々しく頷く。悔しいが確かにそのようだ。あれの言つたことが本当なら、すでに人間ではない相手に説得など通じるものどうか。

「悪意と、憎悪を糧にして、誰にも気付かれない、うちに、心に侵入、していったって、こと？」

レミのつぶやきを聞き取ったのか、紫の巨人はいかにも上機嫌そ
うな笑みを貼り付けて口を開く。

「ギャハ！ オレサマハアノカタノチュウジツナルシモベ、黄昏ノ
王ケイオス。ナカナ力時間ガカカツタガ、ヨウヤクコノ世界ニテテ
クルコトガデキタツテワケサア。負ノ感情ヲモツニンゲンハカンタ
ンディイネエ、闇ノチカラヲワケテヤレバ、墮チルトコマテ墮チテ
クレルンダカラサア」

6・8（前書き）

ここから少し書き方を変えました。中途半端な一人称を辞め、三人称形式で続けます。

黄昏の王ケイオスはそう笑いながら言つて、静かに右の手の平を前に広げた。その手の平に暗い渦が巻き始める。『ディールたちの間に緊張が走つた。

「チイツ！」

ディールは鞘に収めたブロードソードを再び抜き放つ。あれがすでに人の心を持ち合わせていらないのならば戦う他はない。もしこの剣が本当にシギルの剣だとすれば、闇の者であるうケイオスにとつてはとてもなく脅威であるはずだ。幼い頃に読んだデュランドー・シギルの英雄譚によると、シギルの剣こそが唯一、闇の者を真の意味で打ち滅ぼすことができたといふ。

「リベルツ、おいリベル！ 魔法に集中するのは中止だ！ とんでもなく危険な感じがするぜありやあ。ひとまずあれを避けなきゃいけねえ！」

ディールの持つ剣ならばあれを防ぐことができるだらう。しかしさすがに全員を守りきれるかどうかといひ、ジンにはわからない。それほどまでにケイオスの右手にある闇の渦は大きく禍々しい感じがするのだ。そう感じとつたジンが慌ててリベルの肩を揺する。

だが精神を集中しているリベルは目を閉じたまま。まるで己の心中にいる何者かと向き合っているかのようだ。そう、ティダリ小さき太陽を目覚めさせた魔法を使ったあの時のように。

だがジンはそんなリベルの変化には気付かない。ジンと同様にクラッセやディールの額にもじわりと汗が滲む。

「オソイ……オソイネエ！」

ディールたちの様子を嘲笑うようにケイオスが手の平を大きく振り上げる。その瞬間、ディールは覺悟を決めた。例えどんな攻撃が来ようと、自分がこの剣で防いでみせる。これがシギルの剣であつたとしても、そうでないのだとしても、今はそれしか抵抗する手段

がないのだと。

ケイオスが右手を振り降ろす。手の平に集まっていた闇の渦が五本の指と同じ数の刃となつて襲い掛かる。その五つの闇の刃は、ひとつひとつがそれを放つたケイオス自身の腕よりも太く、ディールがいくら覚悟を決めて防ぐと決めたとしても結果は明らかだ。

闇の刃がケイオスの指を離れたとき、クラッセは自分の持つショートソードを固く握り締めていた。

兄のような立派なファイターになりたい。そして大切な人を守れるようになりたいと願つて目指した冒険者。それなのに自分は皆の足を引っ張るばかりではないか。こんなところで何もできずに死んでしまつては、それこそ尊敬する兄に顔向けできないではないか。

クラッセの持つ剣は、彼がそれを手にしたときから今まで持ち主を助けることはなかつた。それはクラッセの心の隅にどこか甘えがあつたからではないか。自分が失敗したとしても最後にはディールやジンらがなんとかしてくれる。自覚してはいないが……いや自覚していないからこそ、クラッセの剣は彼に力を貸すことがなかつたのではないだろうか。

闇がクラッセらに迫り、ディールの持つ剣だけでは闇の刃を全て防ぎようもないことがクラッセの目にもはつきりとわかつた。ジンだって成す術もなく、迫りくる闇をただ凝視するしか他にない。杖を失つたレミはもとより、魔力の尽きたジグザールや頼みの綱のリベルでさえもよほど魔法に集中しているのか、目を閉じたまま己に身の危険が迫つていてことに気付いてすらいない。

この時ほどクラッセは自分が情けなく思つたことはない。守りたい人たちを守ることもできないのか、それほど自分は無力なのか。

クラッセが己の無力に打ちひしがれたとき、同時に彼は仲間たちを守る力がほしいと、心の底から願つた。

「ギャーッ、ギャーッ、ギャーッ、ギャーッ！ 死ネ！ 死ネ！ シネエエエエ
エツ！」

狂つたような黄昏の王の声が次の瞬間に凍りつく。

それはまるでクラッセの仲間を守りたいという心からの強い想いに彼の持つ剣が応えたかのようだつた。彼らを切り刻まんと迫つていた闇の刃は消えてなくなつていた。

だが、その表現は正確ではない。実際は消えたのは闇の刃ではなく、ディールたちの方なのだから。

その証拠に闇の刃はしつかりとディールたちの元いた場所の地面に深い傷跡を残していたのだが、ディールたちには闇の刃が消えたかのように見えただろう。それは辺りが依然として深い夜から醒めず暗闇に包まれており、周りの景色が変わつたことがすぐにはわからなかつたことと、ディールたちもケイオスも予想のできない速さでディールたちがその場からいなくなつたからだ。

ディールたちはちよつとした山ほどもある巨体のケイオスを見下ろす位置で浮かんでいた。

この現象を引き起こした張本人であるクラッセは、自分の持つ剣の刀身が澄んだ湖の水のように透き通つていてことに気付いた。

「その剣の力なのか……？」

いち早くクラッセの剣の変化を察したジグザールが喉の奥から声を搾り出す。

「僕にも……僕にもみんなを守ることができたんだ」

ディールたちが闇の刃から難を逃れることができたのは、クラッセの仲間を守りたいという気持ちに彼の剣が応えた結果だつた。クラッセの剣には飛翔の効果を持つ魔法がかけられていたのだ。

「こりやーたまげたぜ。まさかあのバケモンも俺らが自分の頭の上で浮かんでるなんて思いもよらねえだろうよ」

地に足が着かないことに若干の居心地の悪さを感じつつも、ジンは感心した面持ちでクラッセを見る。

「奴^{やつこ}さん、俺らを見失つてキヨロキヨロしてやがる。攻撃すんなら今がチャンスだぜ」

そう言つてジンが全員を見渡すと、ディールはクラッセに顔を向けて、

「クラッセ、俺をやつの所に飛ばすことなんてできるか？ もしこの剣がシギルの剣だといつなら、直接攻撃することで致命傷を『えられるかもしない』

ディールが提案すると、ジンは「確かにそつかもしんねえな」と言い、クラッセは「できるかどうかわからなければ、やってみます」と自分の剣を見つめる。

「さつき、ケイオスが、私たちを攻撃、しようとしたとき、眉間に辺りに、魔力が集まつていくような、気がしたよ」

ふと、それまで黙つていたレミが言い、ケイオスへ指を差した。そんなレミにジンが不思議そうな顔を向ける。

「おめえ、魔力なんて感じたりすんのかよ？」

ジンの言い分はもつとも、レミはレベルやジグザールのように魔法が使えるわけではないのだ。

「私には魔力が集まつていることなどわからなかつたが……」

目を閉じたまま集中しているリベルの代わりではないが、魔法を使えるジグザールがおずおずと言つた。

2人に言われ、レミは「なんとなく、だから」と小ちい声をさらにおさくして言つたが、

「いやジン。どっちみち、どこを攻撃すればいいかなってわからないんだ。レミがそう言つんなら俺はそれを信じて剣を振り下ろすだけだ。クラッセ、やつの脛間の辺りに俺を飛ばしてくれ。やつが俺たちに気付く前に仕掛ける」

クラッセは「では、いきます！」、持つていてる飛翔の剣に意識を集中した。確信などなくとも、もとより多くの選択肢など持ち合わせてはいないのだ。仲間を信じることだけが彼らの持つ最後の武器ではないか。それ以上言葉を交わさなくともそれがわかっているからこそ、ジンもこれ以上は反論しない。クラッセもレミやディールを信じて自分にできることをするだけなのだ。

クラッセは飛翔の剣に念じる。風のように速く、ケイオスの頭に留まらぬスピードでディールがケイオスの頭上へ飛べるようだ。

するとクラッセの念に応えるように飛翔の剣が微かに光を帯び、同様にディールの全身を光が覆う。フツ、とディールがクラッセたちから離れ、ケイオスの方へゆっくり動いたかと思うと、一気に加速を始めた。

6・8（後書き）

連載開始からここまでで約10ヶ月もかかってしまいました、当初の予定とは随分と違ってしまいました。

初めの頃は一人称で書いていこうとしていたのですが、一人称にしてはあまりにも書きづらく、このままでは続けていくことができないと思うようになりました。

それは私の筆力の足りなさゆえなのですが、なんとしても完結するまでは続けていきたいとの想いから、悩んだ末に書き方を変えることにしました。

私の稚拙な文章を読んでくださる方、最後まで目を通してください方がおられるのであれば、途中で書き方を変えてしまい、申し訳ない気持ちで一杯です。

しかし、ディールたちの姿を見失ったと思われていたケイオスだが、そうではなかつた。

ディールたちの誰もが、クラッセの持つ飛翔の剣で空に浮かんだ自分たちのそのまた上空にケイオスの目があることを忘れていたのだ。この時、ディールたちの誰か一人だけでももう少し早くそのことに気付いていれば状況は変わつていたのだろうか。否、もし誰かがそれに気付いたとしてもすでにディールたちの居場所を捉えているケイオスが先に仕掛けたに違いない。ケイオスがそうとしなかつたのは、自分がディールたちの姿を見失つているように見せかけて、彼らを一網打尽にしようと謀つたからである。

と、轟く雷鳴がその場にいた者たちの鼓膜を揺らし、稲光がケイオスの口元を白光の元にさらした。その口元が二タリと歪む。

「……ッ！　だめ、ディール！」

叫んだのはレミ。ジンが眉根を寄せた。

漆黒の空に浮かぶ魔法陣を見上げたレミは、ふと思い出したのだ。黒い蝶を通してケイオスに自分たちの姿が見られているという可能性を。

初めて黒蝶を通して得体の知れない存在を感じたあの森での出来事から、ケイオスが闇の魔道師たちにとつて変わる今に至るまで、彼らは黒蝶を通して見られていたというのに。

さらに恐ろしきことは、レミたちがディールに注視しているその瞬間だった。彼女らを一網打尽にすべくケイオスがとつた手段は、その死角からの攻撃である。

最もレミの視線が集中する瞬間といえば、もちろんディールがケイオスへの決死の突撃を試み、そしてケイオスの反撃を受けて無残な死を遂げた瞬間であろう。その時はきっと背後への警戒が薄れるに違いない。

すでにケイオスはディールたちをたかが冒険者風情などとは考えてはいなかつた。ただの冒険者が闇の魔力を得た者相手にここまで渡り合えるとはすがない。特にファイターの男が持つ剣など見ているだけでも気分が悪くなつてくるではないか。

それならば全靈を持つて仕留めるべきではあつたが、目の前にあるご馳走も捨てがたかつた。邪惡の化身たるケイオスにとつては人間の恐怖や死に際の後悔といった感情は、悪意や憎悪と並んで極上の馳走である。そのためにわざとディールたちの姿を見失つたふりをしていたのだ。

異変に気付いたレミが二の句を次ぐよりも早く、飛翔の剣の力を借りたディールが猛スピードでケイオスに迫り、思い切り両腕を振りかぶる。

ピシリ。

ディールがケイオスの頭上に到達した時、彼は薪が爆ぜるときのような音を聞いた。

不自然な音にディールがいぶかしむ暇もなく、突然ケイオスの紫色の体毛は背中から滅茶苦茶に破けた。剥き出しになつた茶色の岩肌に亀裂が入る。

ディールが目を見張つた時には大粒の岩石がもう、彼目がけて放たれていた。

飛翔の剣を持つクラッセが岩石からディールを回避させようとする余裕などない。

岩石をまともに受けたディールは激痛の中で、なんとか手放すまいと痺れる両手に力を振り絞つて剣を握り締める。彼が岩石をしたたかに受けて耐えることが叶つたのは、ひとえに彼の持つ剣の力が防御膜を張り、衝撃を僅かでも和らげてくれたおかげだろう。

気を失いそうになりながらも意識を保てたディールの視界に入つたもの。それは二つの刃が螺旋に絡まり合つた槍の切つ先だつた。

大量の岩石を放出し、大きな空洞のできたケイオスの背中から現れた螺旋の槍。それが、まるで死神が持つ断頭の鎌を喉首に突きつ

けられたかのように「ディールを錯覚させた。

「コ、ココ、コレテ終ワリダ！ ギヤーッギヤッギヤッギヤッ！」

自らの勝利を確信する黄昏の王の雄叫び。螺旋の槍がディールの胸元を抉らんとしたその時、

（仲間を信じる。剣を振り下ろすんだ！）

どこから聞こえたのかはわからない。自分の心の叫びにも思えるし、別の誰かのようにも思える。ただ、ディールにとつてはそのどちらでも違はずなかつた。「仲間を信じる」、この一点において彼は疑うべきではないように思えたのだ。

「終わるのは貴様だ！ 間へ還れッ！」

ディールが叫んだとき、彼らを包み込む景色の明暗が反転した。頬がひりつくような熱氣。夜そのものを燃やし尽くしてしまいうなほどの灼熱。

ディールの振り下ろした剣の刀身すら見えなくなるほど炎が周囲の闇」と螺旋の槍を飲み込んだ。

「リベル、おまえ……」

全員がその光景に目が釘付けになつてゐる中、ジンは赤髪の少女を見た。

それまで目を閉じたままだつたリベルがしつかりと杖を握り締め、眼光は眼下の敵へと据えられていた。

その表情は彼が今まで見たこともないほど別人のように大人びていで、赤橙の灯りを受けて美しささえ感じさせた。

リベルは唇を一言一言、まるで何者かと対話しているように動かすと、次には再び静寂を取り戻さんとする夜闇を裂いて力強く叫んだ。

「真紅の名において命ずる！ 今こそその真の姿を現し、太陽の名を以つて闇を滅せよ！」

彼女の力ある言葉を受けて、ディールの持つ剣は実に幾年もの眠りから覚めた喜びを表しているかのように輝きを深めた。代わりに炎は次第に剣からケイオスの全身へと燃え移つていき、炎の中から

現れた刀身は太陽を象った紋様が描かれていた。

「本当にシギルの剣だつたとは……信じられん」

目を細めてジグザールが呟く。

だが、彼が感慨にふけるよりも早く、野獣のような咆哮がジグザールの思考を中断させた。

灼熱の業火に焼かれて苦悶の声を上げるケイオス。全身を包み込む炎はケイオスの身体を作る岩石を徐々に溶す。それでもまだケイオスに致命傷を負わせたわけではない。もしディールがシギルの剣を真に使いこなしていたなら、また、シギルの剣の目覚めがもう少し早かつたなら、あるいは今の一撃で終わっていたかもしれない。

全身を焼かれながらケイオスは、大きな目玉をギョロギョロと回した後、ジンらの方向を見定める。

当初の狙い ファイターの男を返り討ちにし、それに気を取られた仲間の隙をつくは計算通りにいかなかつたものの、憎き冒険者どもの注意は都合良くこちらに集まっている。ケイオスは瞬時にそう判断した。

「グギギ……マヌケナヤツラメ

「まぬけ？ 一体なんのこと……ハツ、ディールさん！」

ケイオスの声は小さなものだったがその言葉に反応したクラッセは、その狙いが自分たちにあるとは知らず、すぐにディールを避難させようと飛翔の剣に念じた。クラッセの位置からディールが気を失っているように見えたのだ。

事実、ディールは僅かな間だったが気を失っていた。度重なる連戦による疲れと、シギルの剣の威力によつて意識が飛んでいたのだ。反対にケイオスは黒蝶を通してジンらを見ていたため、クラッセの叫び声を聞いて目玉をグリンと動かす。

『マトメテ死ネ』

ディールを確認したケイオスがそう言つたげに口の端を吊り上げる。

それを見たジン。あの時感じた違和感はこれだつたのだ。
点と点が繋がつた瞬間、彼は叫んだ。

「とつあん！」

一瞬怪訝な顔をしたジグザールの視線がジンに往く。

「後ろおおおおおおおおお！」

日常的に戦いとは無縁の者であれば、名前を呼ばれて「後ろ！」だけでは、たとえ何が起こつてもおかしくないような怪物と相対しているこの状況でも、すぐに反応することは難しかつただろう。

瞬でも疑問が湧き上がってくるのが普通で、その一瞬の疑問が生死を分かつことは戦場では往々にしてよくある。まさに今こそ、そのほんの一秒一秒が致命的な遅れとなりうる状況だった。

だが、ジグザールとて若い頃は現役の冒険者として慣らした生糸のメイジだ。たとえ敵の姿が見えなくとも、危険が迫っていることを感じとった仲間の一声で窮地を脱したことも少なくない。

そういうた過去の経験則からジンの叫び声の意味を肌で感じ取つた彼は、思考するよりも先に呪文を唱えていた。

声の限りに叫んだジンが後ろを振り返つて見たものは、指先が互い違いに絡まりあってジンらに向けられている巨大な手の平。

ジンが感じた違和感の正体。いつの間に魔力を蓄えていたのかと思つてしまふほどにケイオスの手から凄まじい電撃がほとばしった。それを見たのはジン一人。それほどの瞬きの間。

「光よッ！」

叫んだジグザールは電撃すら見ずに両手を広げた。

衝撃！

ぐにゃり、捻れる景色。そこに見えた天が地に変わつた。

直前、ジグザールの唱えた魔法によつて光の膜に覆われていたジンたち。

光に包まれた彼らが電撃の奔流に包み流された後、ケイオスの巨体が立つ背後の直下には大きく窪んだ大地が生まれていた。

そして 狂つたように笑い声を上げる黄昏の王の姿を瞳に映す者は、そこにはいなかつたのである。

まるで隕石でも落ちたかのように深々と口を開けた大地。

周囲にあつたはずの民家は跡形もなく消え去り、その代わりとばかりに、電撃の降り注いだ跡からしばらく離れた場所で、無残に砕け散つた元は民家を成していた木片たちの物言わぬ姿があつた。

ブュッフェの街並を大きく変えるほどの規模ではなかつたが、これを元の姿に戻すには相当の手間がかかるだろう。

ただ、そんな心配は必要ないのかもしない。なぜなら、このままでこの街」と消えてなくなってしまうからだ。

ひとしきり笑い終えた破壊者は、なおも湧き上がつてきそうな笑いを噛み殺し、原形の面影すら残つていらない街並みを見下ろした。致命傷の一撃を喰らわすために飛翔の剣で飛んでくる「ディール」の勢いを殺すため、岩石を体から大量に放出したせいで、背中は大きく空洞ができてしまっている。また、シギルの剣の炎で残つた体も随分と溶かされてしまった。

それでもまだケイオスを全て溶かすには至らなかつた。シギルの剣の炎はその使い手が意識を失つてしまつたためか、ケイオスを全て飲み込む前に鎮火してしまつたのだ。

闇の力の塊であるケイオスであれば、多少のダメージならばすぐ修復することが可能であつたが、シギルの剣から受けたダメージだけはどうも容易には治らないようだつた。

しかし、

「グギヤツグギヤツ、邪魔モノハスベテコノオレサマノマエニヒレフシタ！ コノママ世界ノスベテヲ闇ヘトカエシテヤロウ！」

肝心のシギルの剣を持つ男は自分が放つた最大級の電撃によつて跡形もなく吹き飛んだのだ。忌々しい剣の邪魔がなければもはや自分の中の邪魔をする者などいない。

すぐに体を修復することが叶わるのはしゃくだが、時間が経てばどうとでもなる。

ただ、それでも若干の懸念をケイオスは感じていた。

一つは、その忌々しい剣を持つ男の死に様を確認することができなかつたこと。

もちろんあれほどの電撃を受けたのだから、跡形もないほどバラバラに飛び散つたからとしてもおかしくはない。

とはいへ、あんな禍々しい力を放つ剣を持つ男が果たして本当に

今の攻撃で何の抵抗もなく倒すことができたのだろうか。たとえ持ち主が気を失っていたとしても、特別な力を持つ武器が持ち主を守る場合だつてあるのだ。

そして一つ目に、宙に浮いていた連中の一人が、ケイオスによる死角からの攻撃に気付いた素振りを見せていたことだ。

あくまで奴らは自分の狙いには気付いてはいなかつたはずなのだ。仲間の窮地にやつらの目はファイターの男に釘付けになつていたはずである。

ましてやこの闇夜では、闇の化身であるケイオスであれば別だが、ただの人間ごときの目があの異変に気付けたはずもないのだ。

そこまで考えを巡らせたケイオスは、やがてそれがどうでもいい無意味な考え方でことに気付いた。

もしもあの禍々しい剣が特別な力を発揮していたとしても、そして宙に浮いていた連中の一人が自分の攻撃を直前に察したとしても、結果として眼下の光景には誰一人として忌々しい冒険者たちの姿は残つていない。

つまりは全ての邪魔者たちは、自分の放つた電撃の前に破れ去つたのだ。

満足げに頷いたケイオスは空を仰ぎ見た。

黒き蝶による魔法陣にも魔力が十分に満ちていくのが見て取れた。心地よい、恨みや妬み、憎悪と惡意に満ちた魔法陣の光がケイオスを恍惚へと誘つた。

闇に墮ちた愚かな人間の魔道師たちだが、それはそれで役には立つた。

黒蝶の視界を使った邪魔者たちの意表をつけた攻撃で、やつらを一掃することにも成功したし、置き土産の魔法陣を使つてこれからどうしてくれようか、とケイオスは一つ思案した。

街の人間どもを存分に恐れさせ、死に怯える声を堪能した後、一瞬で街ごと消し去つてやるものいい。もしかしたら街に残つている人間はもういないかもしぬれないが、それでもいい。次の街へ行つて、

また殺戮に興じて楽しめばいいだけのことだ。

なにせ闇の者であるケイオスにとって時間は、文字通り腐るほどあるのだ。邪魔な冒険者どもとの戦いではあったが、それも余興の一つと考えれば、なかなか楽しめたというものの。

まずはどれほどの人間が残っているのか、どれ、黒蝶の目を使って確認してやろう。

そう思つたケイオスが黒蝶の視界に意識を合わせた時。

「グ……ギギ？ ナンデダ？」

異変が生じた。

本来ならば、ブヨッフュの街の全貌を見渡せるはずの黒蝶の視界が、全くケイオスに伝わる気配がない。

「オ、オカシイ」

疑問に思ひながらも、それはそれでいい、と彼は考えるのをやめた。

どちらにせよ、この街」と灰に変えてやればいいのだ。単純明快な答えだが、誰も彼に異を唱える者はいない。ならば魔法陣の魔力を解き放つのみ！

「アノカタモ、オヨロコビニナルダロウ」

ケイオスは己に酔つた。

自分の力を持つてすれば、人間など塵に等しいのだと。世界を無に還した時こそ、全ての願いが叶うのだと。力を解き放つための呪文を唱える。

その場に人間がいたならば、怨念と狂氣をはらんだケイオスの呪詛に、精神が崩壊してしまってもおかしくはない。

ただ、それを聞いているのが普通の人間だったならば。彼はもっと早くに気付くべきだつたのだ。

黒蝶の視界が失われたのは、ただの偶然などではない。明らかに目的を持つて行われた、人為的な行為なのだと。

「グガツ？！ 魔力ガヘツティク……」

異変に気付き、ただでさえ醜いケイオスの顔がさらに醜く歪む。街をまるごと消し飛ばしてしまえたはずの強大な魔力が、刻々とその力を減じていくではないか。

さらに解せぬのは、周囲にピリピリと張り詰めて感じる空気。おかしい、おかしい。

異常事態に他ならないのは、彼も思い至るが、その理由がわから

ない。

邪魔な冒険者どもは確実に排除したはず。それなのに、なぜ？
ケイオスは、かつて人間だった闇の魔術師たちの記憶も受け継いでいた。

その記憶によれば、この街の近くには、彼の脅威となリうる存在などなかつたはず。

それなのに、なぜ？！

予想だにせぬ事態に、身を硬直させる。

その時だつた。

「地より深き獄から這い出し者は、決して光を浴びること叶わし者己の領分を守り、再び闇へと戻れ！」

途端、ケイオスは自分の身にまとわりつくものを感じた。はたから見ていれば、紫色した巨人が鎖でぐるぐる巻きにされているように映つただろう。

白光を伴い鎖の型を成した魔力の塊が、ケイオスを締め付けていた。

「あんたみたいな下つ端にくれてやるほど、あの子たちの命は安くないんだよ！」

しづがれた声が、淀んだ空気を裂いて響き渡る。

「 NANDA貴様ハアツ？！」

「バアバの名前は、あんたみたいなバケモノになんて、教えてやんない！」

すかさず聞こえた返事に、ケイオスの視線が宙を彷徨う。
ちろちろと、小さな光が己の周囲にある。

「コノ蠅ハ、 NANDAア？！」

「失礼ね！ あたしは妖精よ！」

ブンブンと頬を膨らませた、非常に小さな生物が目の前にいる。
ケイオスは大きな口を開いてそれを飲み込もうとしたが、すんでのところで逃げられた。

「そのへんにしどきな、リンリン。こんなやつと会話なんてしてた

ら、そりやああたしも吐き気がしてくるからね

しばし離れた中空に浮かぶ老婆が、なんとも憎たらしい口を叩くではないか。

巨人は怒りに目を血走らせる。

「不味ソウナ肉ヲヒキチギッテ、骨マテ噉ミ碎イテヤロウカ！」

いきんで叫ぶ巨人を前に、老婆がつまらなさそうに手を振る。

それも仕方のないことだ。

いくら虚勢を張つても、拘束されて身動き一つ取れないケイオスにとつては、それが最大限の威嚇である。

もちろんそれを見抜いているからこそ、老婆の態度も冷ややかだ。

「大口を叩くねえ。まあ、最期くらいは文句くらい聞いてやろうじやないのさ」

余裕のある態度で老婆が笑んだ。

「あははっ、人間たちの言葉で、これが負け犬の遠吠えってやつ？」

リンリンが手を叩いて喜ぶ。

老婆は、手に持つ杖を握りなおした。

眼光鋭く、老いによる衰えは感じさせない佇まい。

みなぎるような魔力は、邪惡の化身たるケイオスをも圧倒していた。

傍でひらひらと飛んでいる小さな少女は、彼女の連れになつてもう何年にもなる妖精。

そしてこの不敵な笑みを浮かべる老婆こそが、真紅の魔術師であつた師の後継、レンゼン・ファスターその人であつた。

「オノレツ……オノレツ……オノレエエエエエー！」

巨人が咆哮を上げる。

それまでの優位はどこへやら、一転して劣勢に立たされてしまい、腹立たしいことこの上ないといった様子。

「アノ方ガ復活シタラ、オイボレヲ真ツ先ニ始末シテヤル！」

ケイオスが吠えた。

この言葉で老婆は恐れおののき、悲鳴を上げて逃げ出すだろうと

考えての発言だ。

しかし、普通に考えれば、ケイオスの言つ“あの方”とはどのような人物を差しているのか分かりかねるところ。そこに至らないところが、巨人の狼狽ぶりをよく表していた。

「あの方とは、誰だい？」

スッと、目を細めてゼンが聞いた。その声は冷静そのものだった。
「誰、ダトオオオ？！ アノ方ハ……」

「この世界そのもの、かい？ それとも別の存在なのかい？ さあ
答えな！」

問い合わせるように彼女は声を張り上げる。

言葉に詰まつたようにケイオスが沈黙する。

「どちらにせよ、あんたのようなただの尖兵が、人間様の領域を侵
しちゃいけないのさ！」

一喝。

すぐに巨人は、ただでさえ大きな目玉をさらに大きく見開く。

「ムシケラガアアアア！ 今スグニテモ塵ト化シテヤルワアアア
！」

「ふんつ、あたしの方にばかりかまつていて、いいのかい？」
その台詞でケイオスは我に返つた。だが、時すでに遅し！

咄嗟に周囲へ意識を巡らせたケイオスの眼に、三日月の光が入る。しかし、それ以外には特に変わったこともない。

これは老婆が、自分を惑わせるためについた嘘なのか。ケイオスの気がよそにいつている隙を狙つて、仕掛けっこよつという腹なのだ。

だが、それにしても老婆の吐いた言葉と表情には、真に迫るものがあった。

なにかしらの意図があるのは明白。……にしても解せぬ。（ナニガ目的ダアツ？！）

自分を見つめる老婆は、不敵な笑みを浮かべたままで、全く動こうとする気配すらない。

このままジッとして、己の身を縛る魔法が解けるのを待つが良策か。

そこまで考えを巡らせるまでに経た時間は、ほんの一秒か二秒。それがケイオスの命取りとなつた。

微かな風を切る音。

そしてその現象は、黄昏の王が危機を感じ取る暇もなく、起つた。

浮かんでいた三日月が落下してくる。

本来、空にあって、地平線に消えていくことはあっても、月が落ちてくることなどあるはずもない。

それもよくよく考えてみれば、暗雲立ち込める漆黒の空において、月が見えるというのもおかしな話だ。ただ、思考がそこに行きつく余裕はなかつた。

「あああああああ　ツ！」

三日月と共に降つてくる雄叫び。

いや、それは月などではない。ケイオスにとっては禍々しい、し

かし闇の者である彼を除いては神々しさすら感じじる一筋の光。

はち切れんばかりに見開かれる巨人の双眸。その狭間に生まれる光の柱。

シギルの剣は、闇の者に断末魔の叫びを発する事すら許さなかつた。ケイオスは再び聖なる炎に覆われ、その巨躯は右と左に別れて二度と繋がる事はなかつた。

「ふん、よくやつたじゃないか。上出来だよ」

巨大な岩の塊が二つ生まれる。少し前まで優越に漫つていた悪意の塊だ。

始まりは街全体を震撼させ、多くの人々を恐怖の渦に陥れたというのに、終わりはなんともあつけない。得てして嵐の過ぎ去つた後というのは、こういうものなのか。

家々の崩れた残骸、大小の穴がちらほら開いているのが見られる大通り。瓦礫に下敷きにされた人もいる。

恐慌はとつくの昔に収まり、人気のなくなつたブュッフェの街並みは閑散としていた。

「やつは……滅んだのか？」

立ち尽くす人影から、いまだ不安を拭いきれないつぶやきが洩れだ。

天を見上げれば、空を覆いつくしていた黒蝶の影形すら見つけられない。邪悪な魔力を漂わせていた魔法陣も消え去つてゐる。

「そうさね。やつは闇の彼方へと還つていつたのさ」

ゼンは、剣を杖代わりにしてかるうじて立つてゐるディールの背中に、脅威が取り除かれたことを告げた。

「ごらん、塵になつていく。あれはやつの体を造つてゐた魔道師たちの成れの果て、闇に組してゐた者がこの世に遺すものなど、ないのさ」

「終わり……か。長かつた夜も」
岩肌がぼろぼろと崩れしていく。

その様子は、ケイオスと名乗つてゐた魔神の周りだけが、急速に

時間の流れを早めていっているかのようだつた。剥がれ落ちた岩盤が地に着く前に風化し、塵となつて虚空へ消えていく。

「もともとは人間だつたのに、どうしてあんな……」

俯き肩を落とすディール。

本当に彼らを闇から救う方法はなかつたのだろうか、たとえ一度闇に堕ちたとしてもやり直すことはできなかつたのだろうか。彼の胸中に、闇に墮ちた彼らを人間としてこの世に遺せてやれなかつたことに対する、自責の念が渦巻く。

「人間は大概のことは立ち直れる、己次第で自分を変えることだってできるけどね。闇に取り込まれてしまつた人間には、魔物として生きるか全てを失うか、選択肢はそれしか残されていないんだよ」ゼンはディールの心中を察したように言葉をかけた。

彼らのような年端のいかない若者たちには、たとえ異形に成り果てたものとしても、元は人間だつたものが塵になつていくのを見るのは苦しいことだらう。そう思つての彼女の気遣いだつた。

「たくさんの人間を殺したんだ、やつは。んなやつのことを気にしても仕方ねーだろ。俺らは胸張つて生きてりやいーんだよ」

「そうですよ。ディールさんは何も悪くありません、悪いのは闇に手を染めてしまつた人たちなんですから」

ディールはハツとして面を上げた。

「ジン、クラッセ！」

引きつった笑みを浮かべて登場したジン。クラッセがその後を走り、駆け寄つてくる。

「おそらく、自分たちが得た力を見せつけたかつたんだろうね。負の感情に支配された人間の考え方そつな話さ」

「どういう意味ですか？」

クラッセが三人を代表して尋ねる。

だが、ディールはゼンの答えを待たずして、彼女の言葉の意味を理解した。彼女が言つるのは、闇の魔道師たちがどうしてブュッフェの街を早めに壊滅させなかつたのか、ということだらう。

それはデイールも怪訝に感じていたことだ。それだけの力をやつらは持っていたはず。

「闇に墮ちるには、それなりの理由があるって意味さ。己の欲望を満たそうとする者、願いを叶えるためにあえて闇に手を染める者、劣等感に侵されてただ力を求める者。理由は様々だけれど、どれにも共通しているのは、闇に墮ちた連中はいずれ最初の目的を忘れて、自分の力に酔いしれるようになってしまつ。それは今も昔も変わらないことさね」

三人は黙つて風に運ばれていく塵を見送つた。

「あつ、そういうればリベルやレミは？」
ふと思いつ出してディールが尋ねる。

「一人とも休憩中つーか、とつあんの面倒みてるつーかよ。
そろそろ来てもいいとは思うけどな」

「魔法を使いすぎてジグザールさん、立つのも辛そうだったんですけど
だからジンとクラッセだけで様子を見にきたのだと彼らは言つた。」

「ジグザールって言つたかい？」

「あん？ バーサンの知り合いか？」

ジンがゼンに顔を向ける。彼女は無言で返した。

「あつ、三人がやつてきましたよ」

「なんだなんだ、おんぶされてんのはリベルの方じやねーか」

ジンやクラッセの声にディールも同じ方を向く。戦闘のあおりを
受けて崩れかけた建物の陰から疲弊したジグザールの姿が見える。
その背には瞼をつむつたりベルの姿があつた。足をひきする魔道師
から遅れて黒フードのレミも現れる。

「どつちが面倒みられてんだかよ？」

肩をすくめて笑うジンに、ディールも笑い返す。

「仕方ないですよ。リベルさんも凄い魔法を使つたんですから」

「ジグザールさん、大丈夫か？」

ようやく彼らのもとへ辿り着き、少女をそつと降ろした魔道師に
ディールが声をかけるなり「重い！」、ジグザールはどかっと地面
に座り込んで叫ぶ。

「よわつちいなーおい。女一人おんぶしだけでそのご様子たあ、
運動不足なんじゃねーのとつあん」

ジンがにやにやしながら彼を見下ろす。

「黙れ！ どれだけ魔法を連発したのだと思つてゐるのだ。この娘、

いきなり氣絶しあつてからに……。しかし、よくやつの狙いに氣付いたな」

相変わらず不機嫌さを隠そとしないジグザールだつたが、ふと軽口を叩く男を見上げた。咄嗟の防御魔法でケイオスの攻撃を防いだときのことを探しているのだと、ジンはすぐに気付く。

「ああ、ディールが突っ込んだときにな、空が一瞬だけ光つたろ？ そんときにな、妙な違和感を感じたんだよ。あれは確かにディールの剣で攻撃する前だつた……野郎の腕が消えてなくなつちまつてたんだ。 そこに気付いたのは攻撃が来る直前だつたけどな」

ジンの説明にジグザールは心中で感嘆の息を洩らした。誰もがディールの攻撃に目が釘付けになつていて、まさか背後からケイオスの手が迫つているなど考えもしなかつた。その状況であくまで冷静に周囲に目を向け、脅威の存在を察知するとは、なかなかどうして冷静な男ではないか。

「なるほどな。ただの口が悪いだけのシーフだと思っていたが、少しばは役に立つこともあつたらしい」

「素直に褒めてもらひーんだぜ？」

「ふん！」

そろそろお馴染みになつてきたやり取りをディールとクラッセは顔を見合させて笑つた。リベルともそうだが、すぐ人に悪態をつきあいながらも、ここぞというときには頼りがいのあるジンという男の存在を想つての笑顔だ。

だが、天を仰いだディールのそんな笑みも自然と消えていた。闇の化身であるケイオスも滅び、いい加減に夜も明けていいはずなのに、依然として暗雲渦巻く空に一抹の不安を覚えたのだ。

「不甲斐ないねえ！」

ディールは見上げていた顔をゼンに向ける。

「どーしたんだよバーサン、急に怒り出したりして。……なに固まつてんだとつあん？」

「顔色悪いですよ？」

クラッセは、腰に両手をあてているゼンと青ざめて硬直しているジグザールとを交互に見比べる。

「ぐおっ？！ れ、レンゼン様がどうしてここに……」

「どうして、じゃないよ。あんたがついていながら、闇の者に大層おおきな顔をさせていたじゃないか、ええ？ なんのために破邪の魔法を伝授したと思ってるんだい。さては大して役に立たない魔法だと思って、修行をサボっていたね？！」

「そ、それは……」

ジグザールが言葉に詰まつて肩をすぼめる。

「威張り散らしていた魔道師様もバーサンの前じゃ形無しだな」面白そうに一人の様子を見ているのはジンだ。

「ねえ、ディール」

「レミ」

気付けば隣に立つていた少女に視線を移したディールは、すぐに彼女の言いたいことが理解できた。なぜなら彼も同じことを考えていたからだ。

「いつになつたら夜が明けるんだ？」

ゼンならその答えを知っているかもしれない。そう思い老婆に声をかけようとしたとき

「動くよ」

ジグザールへの叱責を中断したゼンが空を見上げた。彼女につられて夜空を仰いだディールとジンは眉根を寄せ、レミやクラッセは呆然と立ち尽くす。老婆に叱られていたはずの魔道師の顔には驚愕の表情が浮かんでいた。

「モン、スター……？」

一人つぶやいた少女の黒フードが後ろにずり落ちる。ふわりと柔らかそうな銀髪が腰に届くほどに垂れ下がるが、手早くすくい上げ首の後ろに押し込むと、彼女は再びフードをかぶりなおす。薔薇人形のように整った顔立ちも、闇の空を凝視する彼らの誰の目にも留まることはなかった。

「まさか、あれはデビルフライ なのか？」

「なんだって？！あの黒い翼のような形になつていてるのがそうだつていうのか、ジグザールさん！」

一面に墨をぶちまけたかのように黒色に染まつている夜。星の一つや二つくらい瞬いていてもよさそうなはずなのに、他の色が全て黒に塗りつぶされているような闇夜だった。暗雲すら見えない。まるで本来あつたものをそこにあるなにかが覆い隠しているようだ。

「ムググッ……」「こら、放せ！」

「落ち着けつてディール」

ジグザールの胸倉を掴んだディールを慌ててジンが引き離しにかかつた。放つておけば、気絶するまで首を絞めてしまいそうなほどの勢いだつたのだ。

「邪魔をするなジン！ デビルフライは……やつは！ 僕の故郷を滅ぼしたモンスターなんだ！ 父さんも母さんも、仲の良かつた幼馴染だつて、みんなみんなやつに殺されたんだ！ 落ち着くなんてできるかっ！」

「ディールさん……ジンさん！」

さすがはファイターというべきか、いくら身のこなしや体力に自信のあつたジンであつても、冷静さをなくしたディールを取り押さえるのは容易ではない。彼の変わり様に面食らつていたのはクラッセだが、これはジンに加勢をと一歩踏み出したところで「待ちな」、ゼンの制止でピタリと止まる。

「あなたの村を襲つたデビルフライとは恐らく別物だよディール。姿形が似ていることと、その凶暴さから同じ名前をつけられただけのモンスターさ。もちろんそつとも、並みの冒険者じや歯が立たないのは事実だけね」

そうしてゼンは再び頭上に目を向ける。いよいよなつて夜空において、黒よりも深く濃い、真の闇が輪郭を顕わにしていった。

「あれが……世界の終焉に現れるといつ……ええいつ、いい加減に放さんか！」

「す、すまないジグザールさん」

ハツとして手を放すと、ジンもやれやれといった顔で“ディールの体から離れる。ようやく一息ついたところで解放された魔道師と空とを見比べた彼は、

「まるで巨大な怪鳥だな。ヒツあんはあれが何か知つてんのか？」

「つむ」

問われたジグザールは、腕を組むと「おどき話かと思つていたが」と口を閉じる。

尖端は何本もの剣先を合わせたような鋭さをもつて羽ばたいた。その一振りごとに突風ではなく、背筋の凍るような気配が“ディール”たちにまとわりつく。

それに首はなかつた。翼だけが黒を背景にして幾度も上下する。上半身は去り往く闇と同化して姿を成していなかつた。

「あつ……」

「眩しいつ。た、太陽？！」

「デビルフライが……去つていいくのか」

闇の怪鳥が羽ばたき、西の空へ飛び去つていいくと、天に切れ目が入つたように眩い光が飛び込んできた。それは実に突然の出来事だった。

「まるで黒いカーテンを引いたみたいだな」

素直な感想をジンが洩らす。

「襲つてこないのか……？」

「おいおい、いやなこと言つてくれなさんなつて“ディール”よ。や

つの気が変わつて引き返してきたらどーしてくれんだつつの」

「それはまずいですよ！ いくらゼンさんが応援にきててくれたからつて、あんなの倒せるものなんですか？」

うんざりした顔のジンの腕をクラッセが困り果てた表情でつかむ。“心配ないよ、デビルフライはモンスターじゃない。現象だからね”

「現象？」

ゼンは、口を揃えた面々を順番に見渡す。

「ま、詳しい話は一休みした後にしようじゃないか。当面の危機は去ったわけだからね」

「やうですな」

とにかく皆疲労困憊だ。そう察したゼンの意図を感じ取ったジグザールが同意しかけたとき、

「あ、ああ、そうそう……ジン」

「な、なんだよ？」

振り返ったジンは、ディールの顔を一皿見るなり嫌な予感がして後ずさつた。

「おまえ、体力には……自信があるよな？ すまん……頼む」「はあああっ？！ て、てめえっ！ もしかして気絶するつもりじやねーだろーな！」

彼の目に映ったファイターはすでに瞼も半開き、いまにも深い眠りに落ちてしまいそうな表情だったからだ。

「世話をかけるな……」

「まさか背負って宿まで運べって あつ、おこにコラッタ…」

もたれかかる『ティール』を避けきれなかつたジンは、「ぐわっ」アヒルの鳴くような声で『ティール』もるとも後ろに倒れる。

「リベルのやつだつているんだぜえ？！ 一人も面倒みれるかよ…」

「あはははっ、ジンジン頑張つてえー」

それまでゼンの肩にいた妖精がジンの周りをくるくる飛んだ。それを片手でつかまえようとするが、さすがに尻餅をついたままの格好では上手くいかない。歯噛みするジンは、せりに近づいてきた姿にギョッとした。

「ぼ、僕もお願ひしますジンさん……ははは……」

「おつ、おめーも？！ ジょ、『冗談じやねえぞー』

パタリと倒れたのはクラッセだ。ジンの悲鳴が辺りにこだました。

「彼らに魔法の武器を受けたのはあなただったので、レンゼン

様。どうりで強いわけだ」

歩みを止めたジグザールがゼンに顔を向ける。喚くシーフの姿が目に入り、苦笑する。

「魔法の武器のおかげで強くなつたつていうのかい？ まったく教えたことが身になつてないねえ。武器を持つから強いんじやない、強い心を持っているから闇に立ち向かうことができるんだよ」

改めて説教が始まることを恐れたのか、ジグザールは首を縮めて愛想笑いを返す。

「……ごもつともです。ですが、その強い心を持つていても武器がなければ戦えない。そうありますよ？」

「口だけは達者だね」

「世俗を捨てたあなたとは違つて、コレがなければ世の中渡つていけないものですから」

そう言つてジグザールは体を曲げて地面にあつたものを手にする。それは彼自身がへし折つてしまつた杖だつた。

「彼らの武器には破邪の魔法もかけられているのですな。普段そいつた力を使い慣れていなければ、張つていた気を緩めた途端に氣絶するのも当然」

ジグザールが言つのは、リベルを始めとするディールやクラッセらのことだ。といつても、彼が声をかけたはずの老婆はすでに空へ田をやつしていたので、聞こえていないようだつたが。

「ついに動き出しね。止まつていた時間が……世界が。師匠、あんたはこうなることをずっと昔からわかつていたつていうのかい？ だとしたら、どうしてあたしには本当のことを話してくれなかつたんだ。あたしは師匠のことを……あたしを置いてどつかに行つちまつたあんたたちのことを憎んで」

昇つてくる朝日が眩しくて、ゼンは目を細めた。

彼女の独り言は誰の耳にも届かなかつたが、自分の師匠であつた女性だけはゼンがそう眩くことを知つていた気がしてならなかつた。そしてもうひとり

「どうしたことだ……？」

掌にあるものを不思議そうに見つめるジグザールの怪訝な声も、待ち侘びた太陽を喜ぶ鳥たちの歌にかき消された。

7・呪氷の底へ

「夢……でも見てたのか?」「

目覚めるとそこは、ベッドの上だった。

天井はいつもより少し高い。半身を起こすと、落ち着いた色合いの壁紙が飛び込んできた。

「そんなわけ、ないな。体がギシギシする」

痛む腕をさすりながら呟いた。目線を下げるときちんと小さなテーブルがあり、赤と黄色の花びらが花瓶から顔を覗かせている。そういうえば見慣れた部屋とは雰囲気が違う、そう気付き顔を横に向ける。

「ジン」

ベッドは等間隔で三つ並べてあり、ちょうど隣にはジンが左肩をして背を見せるように眠っていた。それでようやく思い出す、自分は戦い疲れて気絶してしまったのだと。

くせつ毛の黒髪をくしゃくしゃにして、規則正しい寝息を立てるシーツを見る。彼もまたテイールをここへ運ぶなり、倒れるように眠ってしまったのだろう。着ている服もそのままだ。

(ここはどこだらう?)

確かに自分たちはブュッフの片隅にある安宿に寝泊りしていたはずだ。そのわりにはベッドと小さなテーブルに花瓶とランプと、どちらも安宿にあるような使い古されたものではない。簡素ながらも綺麗な室内だ。第一、見覚えがない。

「そういえばクラッセは? 先に起きてどこかに行ってしまったのか?」

ジンを挟んで反対側のベッドには金髪の少年の姿がなかつた。毛布だけが無造作に置かれている。ともあれ、ここにこうしていても何がわかるわけでもない。ジンが起きるのを待つて尋ねねば答えが返ってくるのかもしれないが、ぐっすり眠ってしまったせいか目も冴えてしまった。彼が目覚めるまで待つのもすることがなくて暇だ。

(ちょっと外に出てみよう)

どれくらい眠っていたのか知りたいところだし、外の様子も気にかかる。恐ろしい化け物から相当の打撃を受けたはずで、いまが一休どんな状況なのか早急に把握したい。

できるだけジンを起こさないようにゆっくり床に足をつけた。ティールは、部屋の片隅に立てかけてあった剣を見つけて歩み寄る。

「これが……シギルの剣、か」

わかつてはいたけれど、やはり夢ではなかつたのだ。勇者と称えられた男が持つていたはずの伝説の剣が自分の掌の内にある。にわかに信じ難いことだ。

「きつとりベルとレミは隣の部屋にでもいるのかもしれないな。だけど、ゼンさんとジグザールさんはどうしたんだろうか。きつとゼンさんに聞いてみれば、この剣が本当にそうなのかもはっきりするんだろうな。それに……」

氣を失う前までの記憶が、共に戦つたシギルの剣を手にして鮮やかに蘇る。

自分たちは冒険者になつたばかりで、酒場の主人を通して仕事をもらつて出発したのだった。ただ儀式用に使うための道具の材料を採取してくるだけの依頼だつたはずだ。それなのに、いつからか得体の知れない連中から付け狙われるようになり、彼にしてみれば雲の上の存在に等しいデュランダー・シギルという勇者と関わりを持つ魔道師の老婆と出会いうことになった。

老婆はゼンと名乗り、彼らに調べ物をしてほしいと頼んだ。その代わりに魔法を武器を貸し与えてくれたのだ。それがその時にはまだ普通の剣だと思っていた、このシギルの剣だ。

ディールたちが身を寄せているブュッフェの街が、何者かに襲われているとわかり、彼らは街へと急いだ。レミが手にした杖は邪悪を感じする魔法の杖だった。

杖に導かれるまま邪悪を追ううちにジグザールと出会い、“闇に憑かれた者”と呼ばれる、闇の道へ墮ちてしまつた魔道師たちの集

合体と対峙することとなつた。

五人は力を合わせて戦い、闇の魔道師たちはケイオスという巨大な化け物へと変わつていった。その戦いの中で、リベルの魔法によつてシギルの剣が本来の力を發揮し、クラッセとジンの協力もあつて、ようやく闇の遣いたる巨人を討ち倒すことができたのだ。

「とても長い夜だつたな……」

このまま夜明けが来ないのではないかと思えてしまえるほど、苦しい戦いだつた。これで全てが済んでしまえばよかつたのに。心からそう願うが、どうもそういうわけにはいかないようだつた。ディールの意識が空白に沈む前に見上げた空は、新たな朝を迎える直前まで、禍々しい気配を漂わせていた。それを見つめるゼンの表情は、終わりではなく始まりなのだと物語ついていた。

「デビルフライ　か。よし、行こう」

これ以上考えたところで、自分にできるのは想像だけだ。それよりも今はまず現状の把握を優先するべき。かぶりを振つてドアノブに手をかけたとき、ディールは思わず笑つた。

「いたのか、クラッセ。寝相が悪いなあ」

向けた顔の先には、ベッドとベッドの間で手足を広げていびきをかき始めた少年の姿があつた。

そつと扉を閉める。左右に回廊が延びていた。

円形の建物の一室なのだろうか。少し離れた両隣にも、今自分が出てきたようなドアがあつた。どちらからにするか迷つた後に、意味がないと気付き右手に回ることにした。いなればいないで、反対側を確認すればいいだけだ。

軽くノックする　返事がない。勝手に開けるのも気が引けたが、意を決して静かにドアノブをひねつて覗いてみる。しかし当てが外れた。ベッドは三つ並んであるものの、人のいた気配すらない。

それならともう一方の部屋を当たつてみたが、やはりノックに反

応するものはなかつた。

「おかしいな、リベルたちはどこにいるんだろう？」

いきなり肩すかしを食わされた気分になつて、念のためにドアを開けてみると「おっ？」、誰かがいたようベッドの上で丁寧にたままれてある毛布が一枚、隣のベッドでは起きたそのままの様子でさらに一人分あつた。

「一人とも起きてどこかに行つたのかな。声でもかけてくれればよかつたのに」

そう思つたが、疲れて熟睡している自分たちに遠慮したのかもしない。自分もジンたちを起こしてしまふのも悪いと思って一人で出てきたのだと思い直し、扉をゆっくりと閉めた。

しばらく無言で回廊をひた進む。風が頬を撫でた。

「外だ！」

逸る気持ちで小走りで駆けてきたディールを迎えてくれたのは、

雲ひとつない青空だ。

「ここは城の中だつたんだな。一階の客室かなにかだろ？」「

空まで吹き抜けになつてゐる広場があり、一階の手すりから見下ろすと慌しく通り過ぎていく兵士たちの姿が目に入る。そういうば自分たちもあそこを通つていつたのだった……無実の罪で捕らえられた苦い思い出だが。

遠い過去のことのように思いながらも、ディールはようやく現実に引き戻された気がした。やはり街は大きな被害を受けてゐるのだ。意識すると同時に城中の喧騒がディールにも伝わってきた。

「俺たちにできることは少ないだらうけど、早いところリベルたちと合流して、ゼンさんのところへ行かないといふ？」

いても立つてもいられない気持ちになつて、その場で地団太を踏みそうになつたところで、ディールはやや離れた場所にポツンと一人で立つてゐる女性に目が留まる。

手すりに両手を乗せて行き交う兵士たちを見下ろす姿は、まるで彼女の周りだけがゆっくりと時間が流れているようだつた。

長い髪を腰下で束ねており、肌は雪のように白い。線の細いシルエットと憂いを秘めた眼差しはどこぞの令嬢のようだが、着ているものはいたつて平凡だ。しかし、だからこそ余計に女性の美しさが際立っている。

「あの」

他を寄せ付けない雰囲気に声をかけるのもためらわれたが、デイールは心を決めて女性に歩み寄る。ひょっとしたら城内の地理に明るい人物かもしないし、今が一体どういう状況なのかも尋ねておきたいと思つたのだ。

静かに女性が振り向く。そこで彼女の腰に剣が差されていることに気付く。とすると、城の人間ではないのかもしれない。

「あつ、キミも冒険者なの」

「無駄なのに」

女性が声を洩らした。不意を食つてデイールは口を開いたまま固まる。

「無駄なのだ……残された我らだけではもうどうしようもない。再び動き出した闇はいずれ世界を覆いつくすであらう。足りぬのか……」

彼女はディールを見た。

「冒険者よ。帰る場所があるのなら、せめて今だけは大切な人との時間を大事になさい。その時間を与えてくれたことこそが、最後の慈悲なのだから」

そしてきびすを返す。彼女の静かな迫力に圧され、ディールは口を開くことができなかつた。

部屋の前へ戻ると、ちょうどジンとクラッセがドアを開いて出でくるところだつた。

「おっ? ようやく目覚めたわりにや、元気そうじゃねーか

「ようやくつて……?」

ジンの口ぶりから察するに、あれからじょろく経つているようだが。

「僕とディールさん、リベルさんの三人は丸一日間も眠つていたそうですよ」

クラッセが言い、ジンは「バーサンが言つには魔力を極度に消耗したせいなんだつてよ」と補足する。

「大変だつたぜ、おまえらが眠つてる間、こき使われっぱなしでよ

ー

彼が言つには、怪我人を病院に運んだり、モンスターの襲撃に備えて外壁や門の修繕に充てられていたらしく、ディールは素直にジンへ労いの言葉をかけた。

「レミさんたちはもうジグザールさんのところへ行つているらしいですよ」

ディールが領き、彼ら三人は足早にその場を後にした。

「リベル、レミー。」

謁見の間に通された三人は、すぐに連れの赤毛と黒フードを発見し、声を上げた。

「二人とももう大丈夫なの？」

リベルが尋ねる。

「一日も眠つていた実感がないほど体力が充実しているよ」「リベルさんこそ大丈夫なんですか？」

返すクラッセに、リベルは黙つて微笑む。

「俺のことは気遣つてくんねーのかよ」、ジンが口を尖らせるので、代わりにクラッセが彼に労いの言葉をかけてはそっぽを向かっていた。

「全員揃つたようだな」

聞き覚えのある声がして、五人揃つて声の主を見る。

「都は甚大な被害を受けていてな。いや、ここブュッフェだけではない。闇の手が各地に伸びているようだ。さつそくで悪いが貴様たちにやつてもらいたいことがある」

ジグザールがいい終えるや否や、

「いきなりだな、とつあん。で、なんだよ？ やつてもらいたいことつづ一のは」

「俺たちにできることなら、やらせてもらひよ」

話が早い、とばかりに首を縦に振ると、ジグザールが告げた。

「貴様たちの手にしているシギルの剣、蒼月の杖と並ぶ、神器を入手してきてもらいたい」

「蒼月の杖つて……これのこと？」

手にした杖をまじまじと眺めてリベルが問う。

「そうだ。そして、それ以外に三つの神器なる特別な武器が存在するのだ。神器とは、かつて闇の侵食から世界の崩壊を食い止めた魔

道士たちが、それぞれの半生をかけて生み出した魔力の込められた

武器。神器なくしては闇に立ち向かうのは困難を極めるだろ？

「でも……三つも揃えるなんて、僕たちには無理なんじゃ……」

至極もつともな意見をクラッセが述べると、

「探してきてもひづのは一つだけでいい。残りの一ひとつにあるのでな」

そう言つてジグザールは自分の手にしていた槍を見せる。

「なんでとつあんがそんなの持つてんだよ！」

「家宝として封印されてあつたのを解いてきたのだ。まさかこれが神器などと、レンゼン様に指摘されるまで気付かなんだ。そしてもう一つは……そろそろやつてくるころだな」

「ジグザールさんの家宝が神器つていうことは

いまかいまかと待ち侘びるジグザールにティールが呟く。

「そう。ゴート・ジグザールは私の祖父にあたる」

ジンは変な顔になつた。

「祖父にあたる……って、んな名前すらしらねーっての」

「つぐづぐ失礼な男だな貴様は。いいか、太陽の勇者デュランダー・シギル、真紅のメイローズ、神子の再来イミレナと、我が祖父は肩を並べて十字の光と呼ばれていたのだ」

苛立ちながらジグザールは続ける。

「中心にいたのは勇者デュランダーだ。彼を補佐するように当時最高の腕を持っていた魔道士が四人、東西南北に陣取り闇の封印を試みたという

「それで、うまくいったの？」

リベルが横から声を挟む。

神妙な顔になつたジグザールは「いや」と首を振る。

「原因は明らかにされてはいないが、どうやら失敗したそうだ。そのあたりはレンゼン様が来られたら詳しく説明を聞くのがいいだろう」

全員がそこで口を閉ざすと、それまで押し黙っていたレミが「も

う、一人は？」、小首をかしげる。

「そうだぜ、今のとつとあんの話じゃ四人しかいねーじゃねーか」ジンがレミに同調すると「そろそろだが」、勇者の孫であるはずの彼が扉に目をやつた。

ギイ

唐突に開かれた扉にディールが目をやると、見慣れた顔が覗いた。

「ゼンさん」

「なんだよ、もう一人つてバーサンのことかあ？！」

もつたいつけやがつて、そんな表情でジンが言ひつ。

「」挨拶だね、あたしじゃないよ。わ、」ちらく

彼女のあとに続く女性に、ディールは驚いた。

「さつきの……」

部屋を出たところで出会った、不思議な雰囲気の女性だった。

「うひょー、美人じやねーかよ！……つてて、なにすんだよ」

鼻の下を伸ばしかけたジンが自分の腕をさする。リベルが無言でつねつたのだ。

「でも本当に綺麗な方ですね」

クラッセが正直な感想を洩らし、ディールもそうだと返事する。

「」のお方が新緑の英知ササラ様だよ。くれぐれも失礼のないよう

にね

「様だよつてか。ずいぶんかしこまつてんなバーサン」

さつそく横柄な態度をとるジンの髪をジグザールがつかんで、頭をぐわんぐわん揺らした。

（の方はエルフなのだ、ああみえてレンゼン様より長く生きてらつしやる！）

耳打ちで怒鳴られて、口の悪いシーフが顔を歪める。

「確かにデュランダーさんとメイローズさんは行方不明になつてしまつたんですね？」うづん、それよりもすごい昔の話らしいですか

ら

「十字の光とかいう五人の、最後の生き残り……つてことになるわ

ね

耳打ちするクラッセにリベルが返事をする。

「つまり、事の顛末は彼女のみぞ知るつてことか」

それは闇を封じるための一戦の。

「人の近くにいたディールが神妙な顔になる。ササラは「無駄だ」と言っていた。彼女が過去に闇と対峙したのだと知った今となれば、その言葉は重要な意味を持つことになる。

「チャーフ坊から話は聞いたね？」

「チャーフ坊？」

唐突に放られた言葉に一同は首をかしげた。

「レンゼン様！ そのような呼び方は……もう私は子供ではないのです！」

「それってとつあんのことかよ。ぎやははっ！」

ジグザールは「うるさいっ」、ジンを一喝し、法衣の乱れをそつと直す。彼はチャゴス・ジグザールと名乗つた。

「あんたたちに探してきてもらいたいのは、イミレナの神器である、零星の腕輪だよ」

ゼンは静かに語つた。

かつて神の子を呼ばれた存在があつた。その者はあらゆる難病を癒し、時の流れさえもその瞳に映したのだといつ。その神子の再来といわれる魔道師がイミレナという名なのだとついた。

ゼンの師であるメイローズと共に闇の封印に赴いた彼女は、封印の失敗と同時に姿を消した。チャゴスの祖父であるゴート・ジグザールはほどなくして戦いの傷から床に伏し、デュランドー・シギルとメイローズの二人もあとを追つようにして行方をくらましてしまつたのだ。

「イミレナは时空の狭間に吸い込まれてしまったのだ」

それまで無言を貫いていたササラがふいに声を発した。

封印の失敗がどのような理由によるものなのかは、彼女にははつきりとわからなかつた。ただ、イミレナの周辺に渦巻いていた闇が

膨張した瞬間、その神子と呼ばれた少女の姿は跡形もなくなっていたのだと話した。

「持ち主を失った神器は眠りにつく。もともとがその者のためだけにつくられた存在なのだ、主なくしては力を発揮すること叶わぬゆえ」

「零星の腕輪は眠りにつくなり、自分の周囲に氷の結界を張ったのです。そして今も主であるイミレナの帰りを待っている。その封印をあんたたちに解いてもらいたいんだよ」

ゼンはそこで言葉を区切る。

「どうして……俺たちに？」

全員の視線がディールに集まつた。

「そ、そうですよ。僕たちはゼンさんは知らないかもしれないけれど、まだ冒険者になつたばかりで、その……神器なんでものを集めたりできるような強さなんてなくて……」

ここにきてクラッセの張り詰めていた緊張が一気に弾けた。一人がそうなると不安が伝染するのは早かつた。

「あ、あたしだってまだ魔法もうまく扱えないわ！ そりやおばあちゃんから借りた杖のおかげでここまでなんとかなつたけど、これ以上は無理よつ！」

「そうだよな。なー、バーサン。俺たちや歴戦のファイターだつたり、大魔道士なんてつわものぞろいのパーティーじゃねーんだよ。俺らにや、ちつと荷が重すぎらあ」

リベルに同調したジンが、他を当たつてくれと言わんばかりに片手を挙げて振る。

「だから、無駄だと言つた

「ぱつり、ササラがつぶやいた。

「レンゼンよ、この者たちでは闇の侵食を食い止めることすら叶わぬ。我らですら成しえなかつたこと、他の何者にも代わりは務まらぬ

見込み違ひだつたのだ。彼女の表情はそう語つていた。

「私は」

再び空気が静寂に包まれそうになつたとき、レミが言葉を発した。

「なんだよおめー、もう満場一致で結論は出で」

「私は……記憶が、ない」

「……ああ？」

いぶかしがるジンを見上げ、彼女は一言ひとこと、ゆっくりと話しだした。

「ほんの、少し前まで。冒険者になつたのは、自分の、記憶を探す、ため。記憶を失つた状態で、立つていた、んだ。みんなと、出会つほんの、少し前、まで。

短い間、だつたけど……最初は、なにもわからなかつた、けど。仲間……ができた。ブュッフェで出会つて、四人とも大切な仲間、だよ。もし、この世界が終わつてしまつなら、せっかくみんなと出会えた世界が消えてしまつなら……」

そこでレミは口を閉ざす。

ディールは自分の持つ剣を見つめた。

(守りたいものがあるなら戦え、か。俺にそれができるのだろうか)亡き父と交わした言葉が熱く蘇る。たとえば、このまま闇の侵攻に抗うことを放棄したとして、一体それがなにならになるというのだろう。ただただ、自分たち以外に立ち上がる者の出現を待つか?

「そんなんじゃない」

他人をあてにして何もしようとななければ、これから起つるどんな困難からも同様に逃げ出してしまう。そんな自分はいやだ。

「そう……ですよね。レミさんやリベルさん、ディールさん、ジンさん、大切な人たちと出合つことができ、せつかくこれからなに……僕、いやですよ」

「おいおい、だからって俺らになにができるんだよ　いてつ！」

「往生際が悪いわね！　もうみんなわかつてんのよ。うん、決めた！」

リベルに小突かれたジンは「しゃーねーなー」と頭をぼりぼりか

く。

「やうひー。俺たちの世界は、俺たちで守らなきゃならないんだ！」
決意を新たにした五人を見つめていたササラ。その表情の変化に

気付いたジグザールが声をかけた。

「どうかされたので？」

「彼らを見ていると……いや、いい。それより、魔力の高ぶりを感じる。この感覚は　あの少女か？」

ジグザールはその視線の先を追つた。

「ユミとかいう……あの少女に魔法の素養は感じられなかつたはずですが。しかし」

彼は折れた杖を持ち出してきて、ササラにそれを見せる。

「これはレンゼン様のもとからあの少女が手にしてきたもの。魔力の込めてあるような代物ではなかつたはずですが、彼女は魔法に似た不思議な力を使つたのです」

「どこか懐かしい魔力だ」

ジグザールの言葉など耳に入つていなかのようヒササラはつぶやいた。

「んじや、ヒトとヒツノヒツノヒツを封印しようぜ！　バーサン、その神器つづーのはじこにいきや手に入るんだ？」

「まったく変わり身の早い人ね」

そこが良いところでもある。呆れた様子のリベルの顔にはそんな心情が多分に含まれている。

「この街から北にいつたところだよ。といつても地図は必要ないさ、あたしとササラ様とでそこまで空間転移の魔法で送つてあげるからね。あくまで大まかな位置までだけだね」

「いけばわかる」

そしてゼンとササラに促されるままに広間の中央へティールたちが集まる。一人は同時に呪文を唱えはじめた。

「よろしく頼むよ。くれぐれも無理はしないようにね」

「すでに十分、無理難題を押し付けてるってわかんねーかなあ」

「ばかジン！ 少しは黙つてなさい」

「へいへい」

「わあっ、光が……」

「体が浮く」

閃光が場内を埋め尽くす。

ディールたちの姿が瞬く間に焼き消えた。

「いつてしましましたな」

「あの子たちなら、きっと成し遂げられるとあたしは信じてこるさ。なにせ、師匠が未来を託した子たちだからねえ」

眩しそうに五人の消えたあたりを眺めたままで、ゼンはつぶやいた。

「ぶええええっくしょっ！」

氷山が目の前に鎮座していた。

「ううつ、冷えるな」

「いつたいどこまで飛ばしやがったんだよ

「さすがに雪までは降つていなければ……あの山に轟るんだとしたら、この格好じや厳しいわね

身震いしてリベル。

「でも、あそこで間違い、なさそうだね」

「いつたらわかるつつたつてよー」

お手上げだ、ジンが言つた。

「どうしましょうか

「とにかくあの山にいきましょ？」

「げげつ、いやだぜ。凍えちまわあ

わいのわいのやつている四人を眺めながら、ディールはふと妙な感覚がして手にしたものを見た。

「シギルの剣が……」

体が熱い。そして刀身がほのかに暖色の光を帯びている。

「わあっ！」

突然、剣が発光し、光の筋がある方向へ放たれる。

「ディールさん、それって」

「行つたらわかるつて、このことかあ？」

「ここに眠つてる神器に反応しているの……？」

「そうだろう、ディールは頷いてみせた。

「山の上じゃなく、わずかに地面の下を指していますね」

「地下への入口がどつかにあるつてことか？」

見たところでは、近くに入口らしきものはない。探せといつことなのだろうか。

「いこう、神器が、待つてゐる」

レミが光線の先に歩きだす。

「ああ、いこう。だけど待つてくれみんな

「あん？」

「どうしたの？」

立ち止まるレミと、ジン、リベル、クラッセを見渡して、ディールは口を開いた。

「きっとまたあのケイオスとかいうやつみたいな化け物と戦うこともあると思う。全員で力を合わせてようやく倒せたようなやつだ、それも今度もしここで現れたとしたら、ゼンさんの助けを借りることはできない。俺だけシギルの剣をちゃんと扱えるわけじゃないし、きっと苦しい戦いになると思うんだ」

だから、とディールは続ける。

「俺はもしさんな化け物が出てきたとしても、勝てるかと聞かれればわからないとしか答えようがない。でも……ジンもリベルもレミもクラッセも、絶対に守つてみせる。みんな大切な仲間だから」

決意を込めたまなざしで四人を見つめる。ともすれば不安に押しつぶされそうになる心を言葉にすることで奮い立たせているのだ。

「んな」

ジンが頭をかきながら口を開いた。

「んな、あつたりめーの」と言つなつてんだ。おめーはファイターなんだからよ。そんなの当然だろがよ。俺だってできることがありやあ、やるつづーの」

ふん、と言い捨てるジンにリベルが「素直じゃないわね」と言ひ。「言靈、みたいなもの、だね」

「なんですかそれ？」

レミの言つ耳慣れない言葉にクラッセが首を傾げる。

「言つたことが現実になるつてあれね。いいわ、それならあたしも約束する。あたしはまだ自分の意思で自由に魔法を使えたりしないけど、でも、みんなを危険な目に遭わそうとするモンスターがいたら、絶対に倒すわ！ そしてみんなを守るのー。」

「じゃあ僕も言いますよ。って、できることなんてあまりないですけど……」

「クラッセには勇氣がある。街を出て初めに遭ったモンスターがいただろ。あれに誰よりも早く向かつていつたじゃないか」

「結果は無残なもんだつたけどな うぐつ」

茶化すジンに、女性一人からの肘鉄が入る。

「みんながくじけそうになつたとき、クラッセの勇氣がきつと支えになる」

「……あはは、じゃあそれにします！ 四人のために僕ができる」とならなんでもしますよ！」

「ふん、俺の番かよ？」

視線が自分に集中していくことに気付き、

「俺がシーフだつてこと、おめーら忘れてんじゃねーだろな？ シーフのやるこいつつたら危険感知に限るだろ。どんな罠だらうが敵だらうが、真っ先に見つけてやるよ」

そう言って胸を張る。

「レミの知識は今までにも助けられてきたよな」

「やうですねえ、レミさん抜きじやブコッフェでのモンスター退治はきつかったと思いますよ」

ディールとクラッセが口を揃えると、

「ううん。それだけじゃないと思うの」

意外な発言に、一同はリベルに注目する。

「レミって、本当に魔法は使えないの？　お城の中にいるときから、不思議な感覚がするのよ。それは城を出てからも付きまとっているわ」

「魔法なんて、使ったこと、ないよ」

「そりやー、さすがにないんじゃねーの」

否定する一人に「そんなことない」と真っ向から反論する。

「いつかレミにあたしたちは助けられると想う。そんな予感がするわ」

「なんだなんだつ？」

「まさか予知能力でもついたんですか？」

言い合いをはじめそうな彼らを見ながら、ディールはなぜカリベルの言葉に妙な説得力を感じていた。

（これは……神器を手にしている俺とリベルだけが感じていることなのか？　確かに俺もそんな気がしていた。彼女にはなにか隠されている力があるような……）

だが、シギルの剣はなにも語つてはくれない。あくまで気のせいとでもいうのだろうか。

「ま、レミにやあ、いざつついときにその不思議な力を發揮してもらうとするかい」

「過剰な期待、ちょっと困る、ね」

と言いつつ、口元に笑みが。

「俺たちは一人ひとりが四人のために、持てる力の限りを尽くして戦う。きっと、そうすればどんなに闇の力がすごかろうと乗り越えることができるさ！」

一人は四人のために。

「絶対に生きて帰つてこよう！」

高らかに宣言する。最後まで希望を失わないと。

彼らの戦いはまだ始まつたばかりだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4327d/>

One For Four Traveler

2010年10月8日13時23分発行